長岡京市文化財調査報告書

第 12 冊

長岡京市教育委員会
長岡京跡発掘調査研究所

長岡京市文化財調査報告書

第 12 冊

長岡京市教育委員会
長岡京跡発掘調査研究所

序　　文

かつて幻の都といわれた長岡京は，その発掘調査により，朱雀大路，西一坊・二坊大路，東二坊大路，五条大路の発見など京域内での造営状況が解明され，現の都となってきました。同時に，縄文時代から今日まで連綿と続いた先人の生活址も明らかになりつつあり，郷土の歴史に限りないロマンを与えてくれるとともに，これらの文化遺産を後世の人々に継承する私たちの任務の重要さをあらためて痛感させられます。

今回報告する内容は，昭和52年度から昭和55年度までに行った調査のうち，主に今里地区を中心として勝竜寺・奥海印寺・調子地区における発掘調査の成果をまとめたものです。

本市において今里地区は，奈良時代の古寺で郡名寺院として知られる乙訓寺，弥生時代から平安時代までの集落址である今里遺跡など数多くの文化遺産を有するところで，本市のみならず乙訓地域の歴史を解明するうえで欠くことのできない地区であります。特にここで報告するものは，長岡京の条坊制・今里遺跡の集落の分布状況・乙訓寺出土瓦などに関する発掘調査報告と乙訓郡西部の条里に関する論考などです。

これらの発掘成果を基に，今後郷土の歴史を解明していく資料として広く市民に活用していただき，本市の歴史を理解する一助になれば幸いと考えております。

最後に，この報告書を刊行するにあたり，困難な体制の中でご尽力いただいた長岡京跡発掘調査研究所をはじめ，㈶長岡京市埋蔵文化財センター，㈶京都府埋蔵文化財調査研究センターなど関係者の方々には，多大な御協力と御支援を賜りました。ここに厚く感謝し，お礼を申し上げます。

昭和59年３月31日

長岡京市教育委員会

教育長　湯　浅　成　治

刊行にあたって

いつの時でもそうであるが，筆をとろうとして，まず頭に浮ぶことは，学者の方々の学恩，役所関係の方々のご苦心，原因者負担に応じて下さった方々のご理解，発掘に参加して下さった方々のご苦労である。また発掘場所の側を通る度に，優しい声援を与えて下さった人々のお励ましも忘れることができない。そのご恩に報いるため微力を尽してきた積りであるが，発掘成果の報告を，掘った年または次の年次に報告できなかった分が多い。

今度は長岡京市今里地区を中心とし，一部奥海印寺地区・勝竜寺地区・調子地区における発掘調査の概要をとりまとめることにした。

そもそも嵯峨野地区を，山城地方の飛鳥に比定すれば，乙訓地区は山城地方の三輪・桜井地区に比べることができる。それぞれが山城・大和の古墳文化またはそれ以前の文化の卓越したところであるからである。三輪・桜井地区は遺構遺物もさることながら，記紀をはじめ万葉集などの文字による資料も多い。乙訓地区は全国600に近い郡の中では記録による資料が少ない方だとは言わないが，埋蔵されている遺構・遺物の割には，記録が少ないことは確かである。それを補うものは発掘による成果以外にはない。今里地区は井ノ内と共に，古代乙訓の中心地であった。その発掘成果の一部をここで報告したい。

なお乙訓郡の条里については，1940年の吉田敬市博士の論文以来，貴重な考察や報告も少なくない。今度は過去の研究の成果を踏まえて，それに発掘の結果を取り入れて，乙訓の西部地域の条里について，所員百瀬ちどりが報告することにした。西部地区は東部に比べて地形に起伏があるから，これをまとめるには苦心が必要であった。それを克明に，しかも明快に取りまとめた百瀬の論文は読みごたえのあるものであると信ずる。

終りにあたって公務を持ちながら，報告書の作成に没頭していただいた執筆者ならびにその便宜をお与え下さった所属団体のご理解に対しても，心からお礼を申し上げる次第である。

昭和59年３月31日

長岡京跡発掘調査研究所

所長　中　山　修　一

凡　　例

1．本冊は，昭和52年度より長岡京市教育委員会が主体となり，長岡京跡発掘調査研究所に委託して実施した発掘調査，試掘調査，立会調査の概要報告である。このうち本冊には長岡京市今里・勝竜寺・奥海印寺・調子の各地区で実施した調査の概要報告を収めた。

2．本冊には昭和52～55年度において長岡京市教育委員会が主体となって実施した発掘調査・立会調査の概要報告を合わせて収録した。

3．本冊に収録した調査は付表１，および付表６のとおりである。その位置は第１図および第105図に示した。

4．各調査地の次数は長岡京跡右京・左京毎に通し番号を付したものである。また調査地区名は高橋美久二「長岡宮跡昭和51年度発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1977)』昭和52年）にしたがった。

5．長岡京の条坊名については，山中章他「第126図　長岡京条坊図」（向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書第８集』1982年）による呼称にしたがった。

7．各調査報告の執筆は，それぞれのはじめに記した。

8．本文中の調査担当者・調査補助員等の職務・所属については当時のものを記した。

なお，職務・所属の異動のあった調査担当者，及び編集・執筆者について，現在の職務・所属は次のとおりである。

久保哲正　京都府教育庁指導部文化財保護課・技師

竹井治雄　㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター　調査員

山本輝雄　㈶長岡京市埋蔵文化財センター　調査員

中尾秀正　長岡京市教育委員会社会教育課　主事

岩崎　誠　㈶長岡京市埋蔵文化財センター　調査員

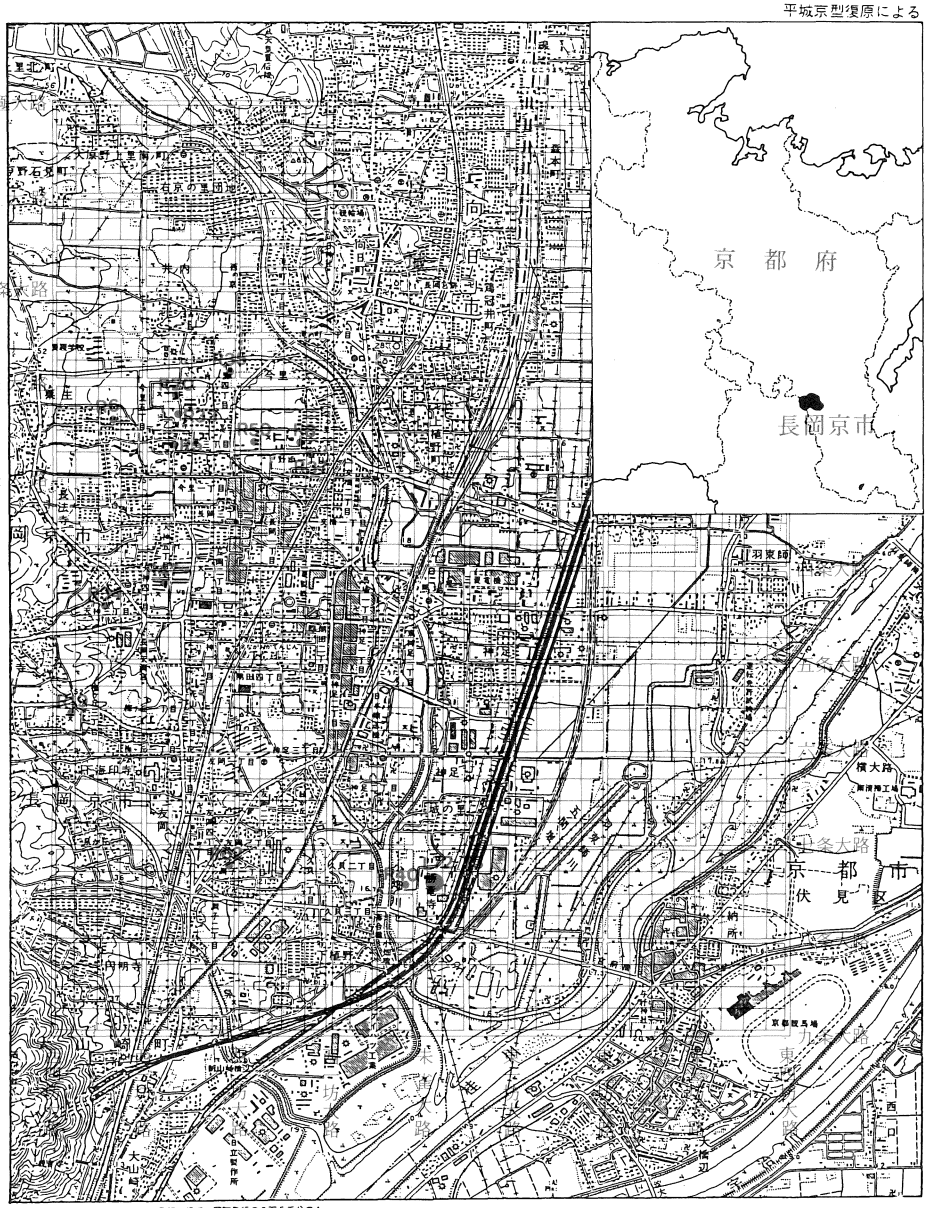
吉岡博之　舞鶴市教育委員会社会教育課　主事

9．本冊の作成にあたっては㈶長岡京市埋蔵文化財センター，京都府教育委員会，㈶京都府埋蔵文化財調査研究センターの御協力を得た。特に㈶長岡京市埋蔵文化財センターには整理作業にあたって多大な御支援をいただいた。ここに記して御礼を申し上げたい。

10．本冊の編集は長岡京市教育委員会中尾秀正・長岡京跡発掘調査研究所百瀬ちどりが行った。また全般にわたって鈴木芙美子氏の協力を得た。

付表１　本書報告調査地一覧表

調査次数	地区名	所在地	原因者	調査期間	調査面積
右京第５次	7ANINC	長岡京市今里西ノ口27	㈶療道協会	1977. 8. 1 ～1977. 8. 7	36㎡
右京第６次	7ANIHY	長岡京市今里彦林15	㈱山朝商事	1977, 9.17 ～1977. 9.23	80㎡
右京第８次	7ANISB	長岡京市今里三ノ坪5-3	㈱せいわ工房	1977.12.21 ～1978. 1.12	140㎡
右京第19次	7ANPSJ	長岡京市下海印寺東山1	長岡京市	1979. 1.10 ～1979. 1.12	27㎡
右京第20次	7ANIKU	長岡京市今里五丁目20-1	長岡京市	1979. 1.15 ～1979. 1.19	36㎡
右京第33次	7ANIKU-2	長岡京市今里五丁目21-5	㈱山中商事	1980. 2.25 ～1980. 2.29	36㎡
右京第34次	7ANPHO	長岡京市天神三丁目17	グンゼ産業㈱	1980. 2.25 ～1980. 2.29	37㎡
右京第35次	7ANITT-2	長岡京市今里四丁目26-1, 27	㈱山中商事	1980. 2.26 ～1980. 3.26	72㎡
右京第37次	7ANINE	長岡京市野添一丁目44-1	㈱伏見信用金庫	1980. 4.28 ～1980. 5.28	133㎡
右京第40次	7ANQNT	長岡京市勝竜寺二ノ坪22	沼田秋丸	1980. 5.26	18㎡
右京第47次	7ANIUS	長岡京市天神四丁目5-1	長岡京市	1980. 8.26 ～1980. 9. 5	60㎡
右京第50次	7ANIKC-2	長岡京市今里北ノ町4他	大栄建設興業㈱	1980.10. 8 ～1980.11.22	250㎡
右京第62次	7ANROW	長岡京市調子一丁目12	鷹野運送㈱	1981. 1. 8 ～1981. 2. 7	40㎡
左京第72次	7ANQCK	長岡京市勝竜寺近竹5-1	千代田紙業㈱	1981. 3.15 ～1981. 3.31	340㎡
左京第73次	7ANQCK-2	長岡京市勝竜寺近竹5-1	千代田紙業㈱	1981. 4. 1 ～1981. 4.22	50㎡



第１図　　本書報告調査位置図

目　　次

序　　文…… i
刊行にあたって…… ii
凡　　例…… iii

1．右京第５次（７ＡＮＩＮＣ地区）調査概要…… 1
2．右京第６次（７ＡＮＩＨＹ地区）調査概要…… 11
3．右京第８次（７ＡＮＩＳＢ地区）調査概要…… 15
4．右京第19次（７ＡＮＰＳＪ地区）調査概要…… 30
5．右京第20次（７ＡＮＩＫＵ地区）調査概要…… 33
6．右京第33次（７ＡＮＩＫＵ－２地区）調査概要…… 37
7．右京第34次（７ＡＮＰＨＯ地区）調査概要…… 39
8．右京第35次（７ＡＮＩＴＴ－２地区）調査概要…… 41
9．右京第37次（７ＡＮＩＮＥ地区）調査概要…… 47
10．右京第40次（７ＡＮＱＮＴ地区）調査概要…… 61
11．右京第47次（７ＡＮＩＵＳ地区）調査概要…… 65
12．右京第50次（７ＡＮＩＫＣ－２地区）調査概要…… 69
13．右京第62次（７ＡＮＲＯＷ地区）調査概要…… 77
14．左京第72・73次（７ＡＮＱＣＫ－１・２地区）調査概要…… 81
15．昭和52～55年度長岡京市内遺跡立会調査概要…… 85
16．まとめ…… 119
付載－１　今里地区の略史…… 144
付載－２　乙訓郡条里についての一考察―乙訓郡西部の条里をめぐって―…… 149

図 版 目 次

右京第５次（７ＡＮＩＮＣ地区）

図版１　(1)１トレンチ全景（東から）　(2)２トレンチ全景（西から）

図版２　(1)竪穴住居址ＳＨ0502（南から）　(2)柱穴群と土壙ＳＫ0501（北から）

図版３　(1)土壙ＳＫ0501（東から）　(2)柱穴群と土壙ＳＫ0503（北から）

(3)土壙ＳＫ0503（南から）　(4)土壙ＳＫ0503土器出土状況

図版４　(1)弥生土器　(2)古墳時代以降の土器

右京第８次（７ＡＮＩＳＢ地区）

図版５　(1)調査地遠景（西から）　(2)調査地全景（南から）

図版６　(1)Ａトレンチ全景（南から）　(2)Ｂトレンチ全景（北から）

図版７　(1)溝ＳＤ0803とＳＤ0804（北から）　(2)掘立柱建物ＳＢ0802（東から）

図版８　(1)Ａトレンチ樋検出状況　(2)Ｂトレンチ柱根検出状況

(3)溝ＳＤ0804土器出土状況　(4)溝状落ち込みＳＸ0801柄杓取り上げ状況

図版９　出土遺物

右京第19次（７ＡＮＰＳＪ地区）

図版10　(1)調査地全景（東から）　(2)第１グリッド（Ｇ１・東から）

(3)第２グリッド（Ｇ２・東から）　(4)第３グリッド（Ｇ３・東から）

右京第20次（７ＡＮＩＫＵ－１地区）

図版11　(1)第１グリッド（Ｇ１・西から）　(2)第２グリッド（Ｇ２・東から）

(3)第３グリッド（Ｇ３・北から）　(4)第４グリッド（Ｇ４・東から）

右京第33次（７ＡＮＩＫＵ－２地区）

図版12　(1)調査風景（東から）　(2)調査地全景（南から）

右京第35次（７ＡＮＩＴＴ－２地区）

図版13　(1)調査地全景（西から）　(2)調査地全景（東から）

図版14　(1)土壙ＳＫ3514（北から）　(2)竪穴住居址ＳＨ3512（西から）

右京第37次（７ＡＮＩＮＥ地区）
図版15　(1)調査風景（南から）　(2)調査地全景（南から）
図版16　(1)掘立柱建物ＳＢ3702（東から）　(2)掘立柱建物ＳＢ3702（西から）
図版17　(1)溝ＳＤ3703（西から）　(2)溝ＳＤ3704・溝ＳＤ3705（西から）
図版18　(1)溝ＳＤ3703の側板検出状況（北から）　(2)溝ＳＤ3703側板残欠出土状況
(3)ピットＰ3706（西から）　(4)ピットＰ3706円座出土状況（南から）
図版19　花粉の顕微鏡写真(1)
図版20　花粉の顕微鏡写真(2)
図版21　出土遺物

右京第47次（７ＡＮＩＵＳ地区）
図版22　(1)１トレンチ全景（西から）　(2)２トレンチ全景（東から）

右京第50次（７ＡＮＩＫＣ地区）
図版23　(1)調査地全景（東から）　(2)調査地全景（西から）
図版24　(1)弥生土器出土状況　(2)弥生土器出土状況
(3)弥生土器出土状況　(4)弥生土器出土状況
図版25　(1)旧河道ＳＤ5001出土弥生土器(1)　(2)旧河道ＳＤ5001出土弥生土器(2)
図版26　(1)旧河道ＳＤ5001出土弥生土器(3)　(2)旧河道ＳＤ5001出土弥生土器(4)

右京第62次（７ＡＮＲＯＷ地区）
図版27　(1)調査地全景（北から）　(2)調査地全景（南から）
図版28　(1)竪穴住居址ＳＨ6201（西から）　(2)竪穴住居址ＳＨ6201かまど（南から）

左京第72・73次（７ＡＮＱＣＫ１・２地区）
図版29　(1)トレンチ全景（東から）　(2)トレンチ全景（北から）
(3)トレンチ全景（北から）　(4)調査地土層

立会調査
図版30　(1)調査地全景（南西から）　(2)Ｊ断面（右・土壙ＳＫ770401）
(3)Ｆ断面（溝ＳＤ770402）
図版31　(1)調査地全景　(2)調査地土層
(3)遺物出土状況

図版32　調査出土遺物
図版33　(1)調査地全景（南東から）　(2)調査地土層（ＷＩ・東から）
(3)調査地土層（ＮＩ・南から）
図版34　(1)調査地遠景（南から）　(2)調査地全景（南から）
(3)調査地全景　(4)調査地土層
図版35　出土遺物
図版36　出土遺物(1)
図版37　出土遺物(2)
図版38　出土遺物(3)
図版39　出土遺物(4)
図版40　今里地区航空写真

挿　図　目　次

第１図　本書報告調査地位置図 …… v

右京第５次（７ＡＮＩＮＣ地区）
第２図　調査地位置図 …… 1
第３図　調査地周辺図 …… 2
第４図　立会調査風景 …… 3
第５図　検出遺構図 …… 4
第６図　出土遺物実測図(1) …… 7
第７図　出土遺物実測図(2) …… 8

右京第６次（７ＡＮＩＨＹ地区）
第８図　調査地位置図 …… 11
第９図　調査地周辺図 …… 12
第10図　調査地全景 …… 13
第11図　調査地土層図 …… 13
第12図　出土遺物実測図 …… 14

右京第８次（７ＡＮＩＳＢ地区）

第13図　調査地位置図 …… 15
第14図　調査地周辺図 …… 16
第15図　Ａトレンチ検出遺構図 …… 18
第16図　Ｂトレンチ検出遺構図 …… 19
第17図　Ｂトレンチ土層図 …… 19
第18図　掘立柱建物ＳＢ0802実測図 …… 20
第19図　柄杓出土状況 …… 20
第20図　柱根検出状況 …… 21
第21図　出土遺物実測図(1) …… 24
第22図　出土遺物実測図(2) …… 25
第23図　出土遺物実測図(3) …… 25
第24図　出土遺物実測図(4) …… 26

右京第19次（７ＡＮＰＳＪ地区）

第25図　調査地位置図 …… 30
第26図　調査地周辺図 …… 31
第27図　グリッド土層図 …… 32
第28図　出土遺物実測図 …… 32

右京第20次（７ＡＮＩＫＵ－１地区）

第29図　調査地位置図 …… 33
第30図　調査地周辺図 …… 34
第31図　グリッド土層図 …… 35
第32図　出土遺物実測図 …… 36
第33図　出土遺物写真 …… 36

右京第33次（７ＡＮＩＫＵ－２地区）

第34図　検出遺構図 …… 37
第35図　調査地土層図 …… 38

右京第34次（７ＡＮＰＨＯ地区）

第36図　調査地位置図 …… 39

第37図　調査地全景（北から） …… 40
第38図　調査断面写真（東から） …… 40

右京第35次（７ＡＮＩＴＴ－２地区）
第39図　調査地位置図 …… 41
第40図　検出遺構図 …… 43
第41図　溝ＳＤ3501出土遺物実測図 …… 45

右京第37次（７ＡＮＩＮＥ地区）
第42図　調査地位置図 …… 47
第43図　検出遺構図 …… 48
第44図　溝ＳＤ3703実測図 …… 49
第45図　掘立柱建物ＳＢ3702実測図 …… 50
第46図　ピットＰ3706出土円座実測図 …… 51
第47図　溝ＳＤ3703出土遺物実測図 …… 52
第48図　溝ＳＤ3704出土遺物実測図 …… 53
第49図　包含層出土遺物実測図 …… 53

右京第40次（７ＡＮＱＮＴ地区）
第50図　調査地位置図 …… 61
第51図　調査地周辺図 …… 62
第52図　調査断面写真（北から） …… 63
第53図　調査地土層図 …… 63

右京第47次（７ＡＮＩＵＳ地区）
第54図　調査地位置図 …… 65
第55図　調査地周辺図 …… 66
第56図　検出遺構図 …… 67
第57図　調査地土層図 …… 68

右京第50次（７ＡＮＩＫＣ地区）
第58図　調査地位置図 …… 69
第59図　検出遺構図 …… 71

第60図　調査地東壁土層図 …… 71
第61図　旧河道ＳＤ5001出土弥生土器実測図(1) …… 73
第62図　旧河道ＳＤ5001出土弥生土器実測図(2) …… 74
第63図　弥生時代流路復原図 …… 76

右京第62次（７ＡＮＲＯＷ地区）
第64図　調査地位置図 …… 77
第65図　検出遺構図 …… 78
第66図　竪穴住居址ＳＨ6201かまど実測図 …… 79
第67図　出土遺物実測図 …… 80

左京第72・73次（７ＡＮＱＣＫ－１・２地区）
第68図　調査地位置図 …… 81
第69図　調査地周辺図 …… 82
第70図　調査地土層図 …… 88
第71図　出土遺物実測図 …… 84

立会調査
第72図　第7704次調査地位置図 …… 86
第73図　第7704次調査位置 …… 87
第74図　第7704次調査地土層図 …… 87
第75図　第7706次調査地位置図 …… 89
第76図　第7706次調査出土遺物実測図 …… 90
第77図　第7709次調査地位置図 …… 91
第78図　第7709次調査地土層図 …… 92
第79図　第7709次出土遺物実測図 …… 93
第80図　第7813次調査地位置図 …… 94
第81図　第7813次調査地周辺図 …… 94
第82図　第7813次調査地土層図 …… 95
第83図　第7813次出土遺物実測図 …… 96
第84図　第7814次調査地位置図 …… 97
第85図　第7814次検出遺構図・調査地土層図 …… 98
第86図　第7814次調査地全景 …… 99

第87図　第7814次検出柱穴土層 …… 99
第88図　第7817次調査地位置図 ……100
第89図　第7817次調査地周辺図 ……100
第90図　第7817次調査地土層図 ……101
第91図　第7817次出土遺物実測図 ……101
第92図　第7822次・8001次調査地位置図 ……102
第93図　第7822次出土遺物実測図 ……103
第94図　第8001次調査地周辺図 ……104
第95図　第8001次調査風景 ……105
第96図　土壙ＳＫ800101検出状況 ……105
第97図　土壙ＳＫ800101土層図 ……105
第98図　土壙ＳＫ800101出土瓦拓影(1) ……106
第99図　土壙ＳＫ800101出土瓦拓影(2) ……107
第100図　土壙ＳＫ800101出土瓦拓影(3) ……108
第101図　土壙ＳＫ800101出土瓦拓影(4) ……109
第102図　第8017次調査地位置図 ……113
第103図　第8017次調査平面図・柱状土層図 ……114
第104図　第8017次調査風景（北から） ……114
第105図　昭和52～55年度長岡京市内立会調査位置図……117
第106図　今里地区の地形……120・121
第107図　今里地区における遺跡の分布と調査位置……120・121
第108図　検出遺構一覧図(1) ……124
第109図　検出遺構一覧図(2) ……125
第110図　検出遺構と条里概念図 ……134
第111図　検出遺構（長岡京時代）と条坊概念図 ……135
第112図　今里村乙訓寺惣指図 ……136
第113図　乙訓寺と周辺条里 ……137
第114図　樫原廃寺と周辺条里 ……139
第115図　廣隆寺と周辺条里 ……139
第116図　右京第１次調査検出講堂跡 ……144
第117図　角宮神社 ……146
第118図　乙訓郡条里復原図……152・153
第119図　京都市南区久世・久我地区の里（坪）界線分布状況 ……153

第120図　小字統廃合以前の条里地名の残存状況(1)(2) ……155
第121図　乙訓郡大山崎町大山崎・円明寺地区の条里……160・161
第122図　長岡京市開田・今里・神足地区の条里……160・161
第123図　京都市西京区大原野灰方・石見・上里地区の条里……162・163
第124図　乙訓郡西部主要条里と長岡京条坊(1)(2) ……164

付表

付表1　本書報告調査地一覧表 ……iv
付表2　右京第8次調査出土遺物観察表 ……28・29
付表3　花粉分析結果表(1) ……59
付表4　花粉分析結果表(2) ……60
付表5　第8001次出土平・丸瓦類凸面の叩目分類表 ……110
付表6　昭和52～55年度長岡京市内遺跡立会調査一覧表 ……115
付表7　検出遺構一覧表（弥生～奈良時代） ……121
付表8　検出遺構一覧表（乙訓寺とその周辺） ……132
付表9　年表 ……145
付表10　乙訓郡条里関係資料〈絵図・古図〉 ……154
付表11　乙訓郡条里地名一覧表……154・155
付表12　乙訓郡条里名一覧表 ……158
付表13　今里地区調査一覧表 ……170

1．右京第５次（７ANINC地区）調査概要

1．は　じ　め　に

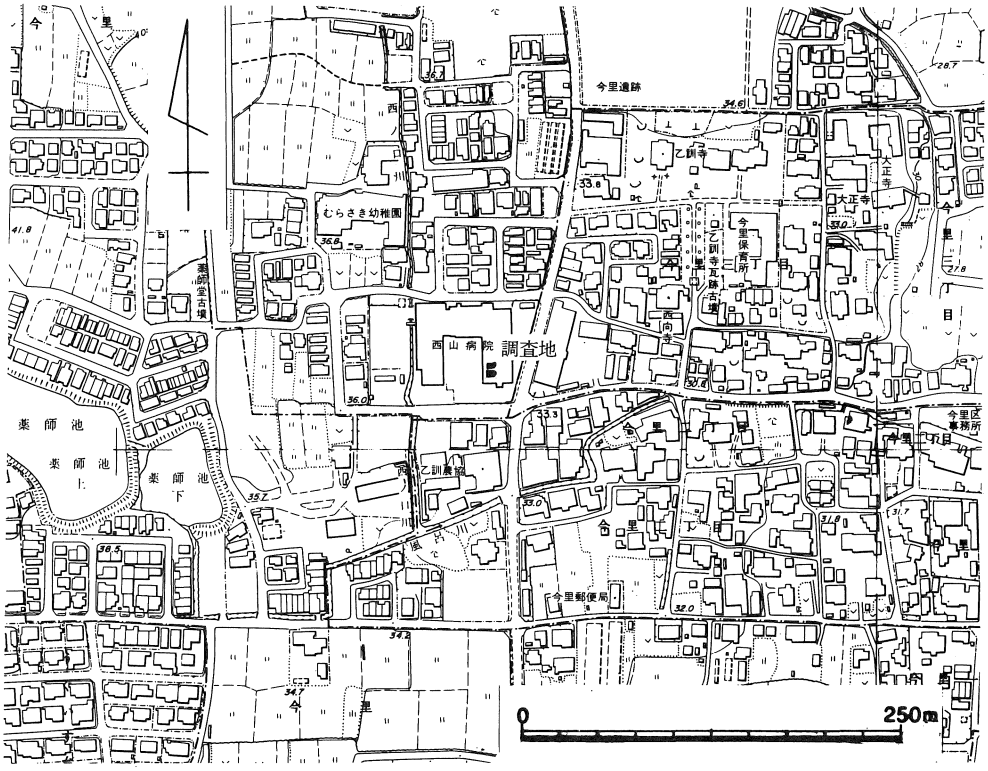
1．本報告は，長岡京市今里西ノ口27番地において，1977年７月７日から７月21日まで実施した第7701次立会調査と，同年８月１日から８月７日まで実施した右京三条三坊十一町及び今里遺跡に関する発掘調査の概要報告である。

2．当調査は，財団法人療道協会西山病院の病棟改築工事に伴うもので，190㎡を調査した。

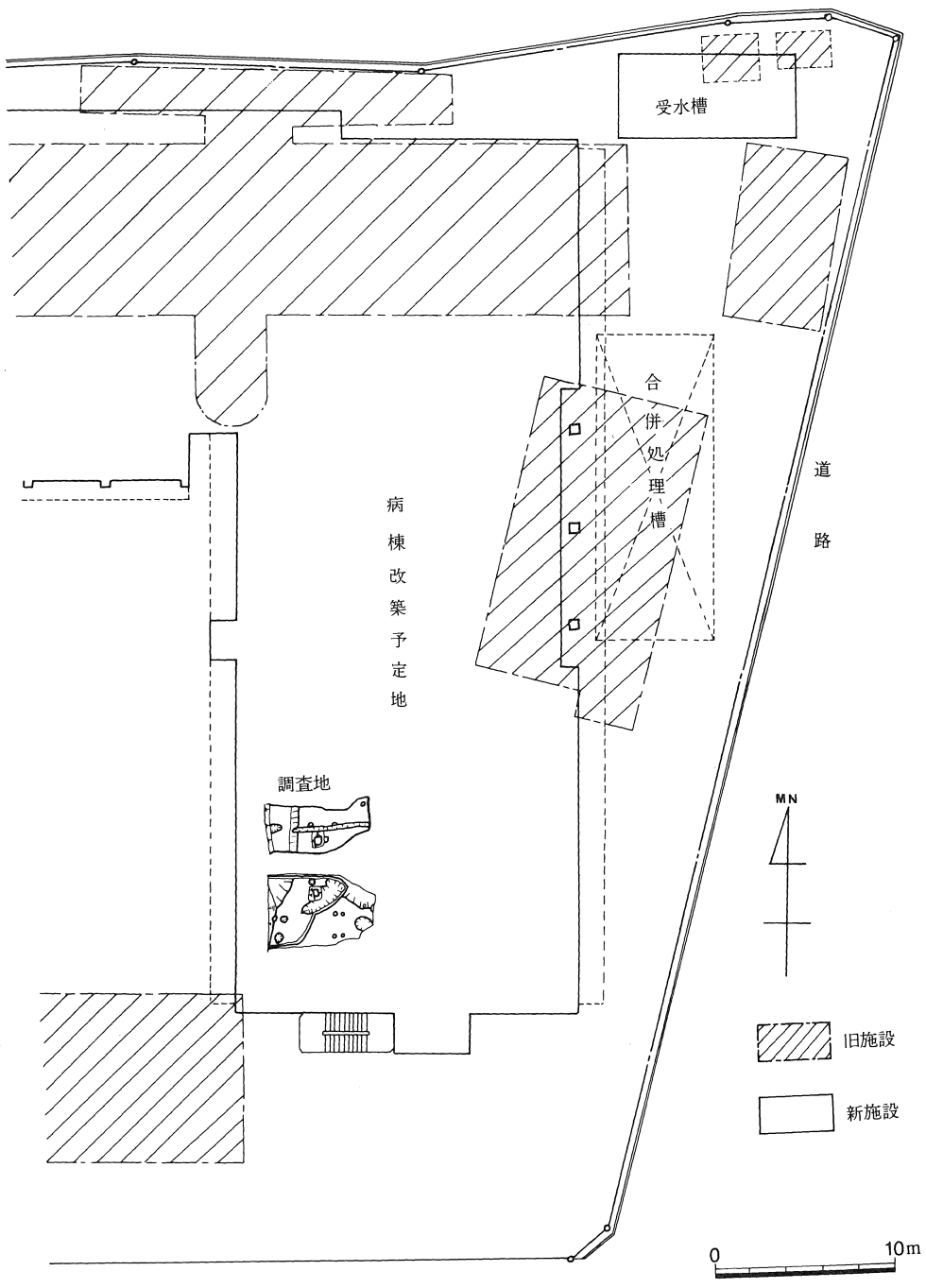
3．調査は，長岡京市教育委員会が主体となり，長岡京跡発掘調査団（現長岡京跡発掘調査研究所）に委託して実施された。現地調査は，同調査員中尾秀正が担当し，調査補助員として長谷川浩一，中辻宣之，調査作業員として藤田伊和，吉田角太郎の各氏の参加があった。

4．調査後の遺物整理・図面整理・実測・トレースは，主に中尾秀正・吉岡博之・中辻宣之・白川成明・丸山美子・西村益子・西川裕子が行った。

5．本報告の編集，執筆は中尾秀正が行った。



第２図　　調査地位置図



第3図　　調査地周辺図

6．調査期間中及び調査後の整理にあたって，高橋美久二京都府教育庁指導部文化財保護課技師から多くのご教示をいただいた。また，調査を快諾された土地所有者の財団法人療道協会西山病院のご協力を得た。記して感謝したい。

2．調　査　経　過

当調査地は，西山丘陵の東に広がる，西から東へゆるやかに傾斜する洪積段丘の東端部の標高約35mの地点にある。当地の北東約100mには，奈良時代前期から平安時代の瓦を出土する郡名寺院である乙訓寺がある。

当地は，長岡京条坊復原図によれば右京三条三坊十一町にあたり，また弥生時代から古墳時代の集落遺跡である今里遺跡の南西部にあたる。

工事は，老朽化した病棟の改築工事と受水槽・合併処理槽の設置工事であった。調査は，協議の結果，まず受水槽・合併処理槽の立会調査を行い，その結果をみて，病棟建設予定地の調査方法を検討することとなった。

受水槽・合併処理槽の立会調査の結果，黄褐色砂礫層の地山の上面で，古墳時代～弥生時代の遺物包含層が検出されたため，病棟建設予定地の発掘調査をすることとなった。ところが，発掘調査開始時点で，すでに病棟建設予定地の建物基礎掘削工事は開始されていた。そのため発掘調査は，基礎掘りの未掘削地で，しかも工事用の足場が組まれた中で行われた。トレンチは，病棟建設予定地のほぼ中央南西部に3×6mのものを南北に2本設定した。北側のものを第1トレンチ，南側のものを第2トレンチと名付けた。なお，発掘調査に伴う地区割りは，国土座標は用いず，工事用図面をもちいて，磁北を基準にして任意にポイントを設定し，3mごとの地区割りを行った。また標高は，西山病院南の道路上にP1をもうけ，これを基準にした。

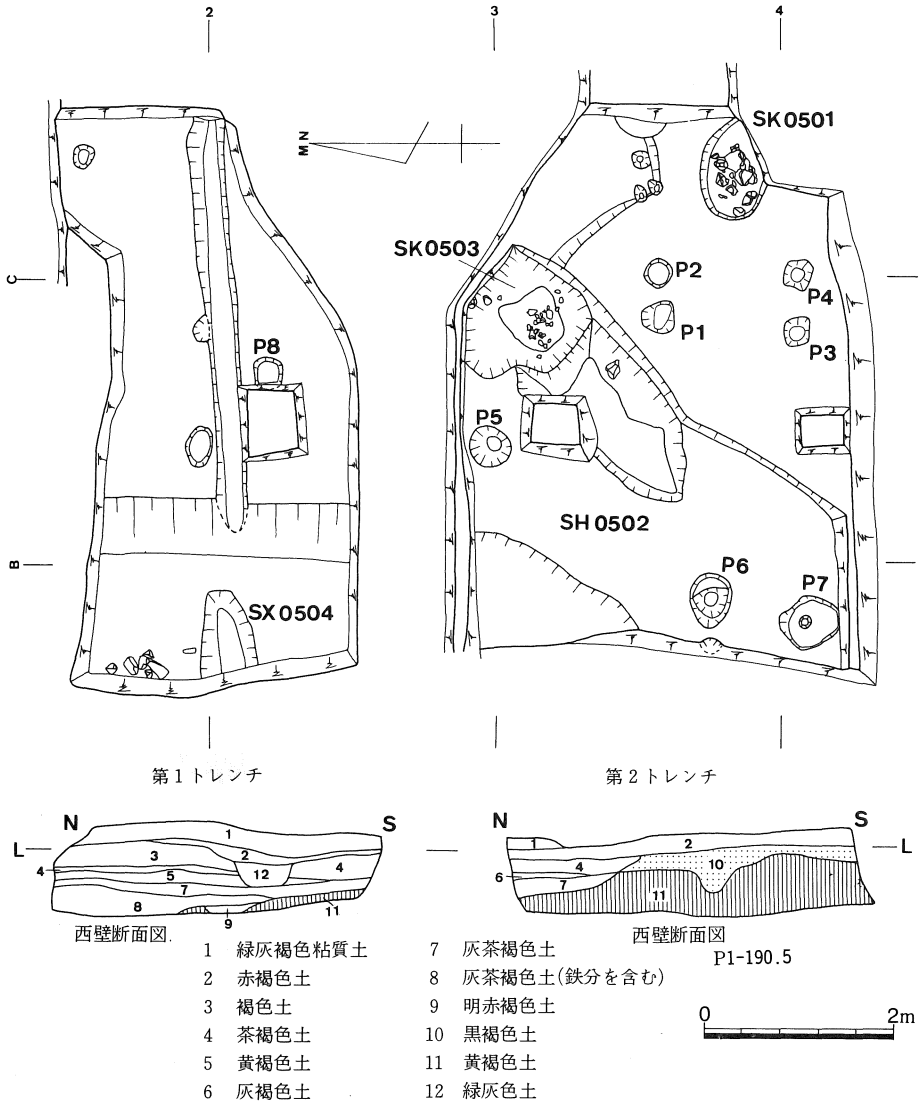
3．検　出　遺　構

(1)受水槽・合併処理槽設置部分の立会調査

調査は，病院敷地の北東隅に設置される東西10m・南北4.5mの受水槽とその南に設置される東西6.5m・南北17mの合併処理槽の基礎部分の掘削工事に伴って行われた。その基本層位は，地表下50～80cmまで旧病棟基礎工事等による撹乱層，その下に厚さ20～25cmの暗褐色土層(砂礫を含む)，さらにその下に土師

第4図　　立会調査風景

器・炭片を含む厚さ20～40cmの暗褐色土層が堆積し，その下は黄褐色土又は黄褐色砂礫層の地山になっている。遺構は受水槽部分において検出した土壙２基である。これら土壙は，いずれも地山面を掘り込んで作られた径1.2mの円形のものである。その埋土は，暗褐色土層(砂礫含む）で，上層にはこぶし大の石が面的に並んでいた。遺物は，弥生土器・須恵器・土師器・瓦器などが出土している。これらの土壙は北東方向に並び，その間隔は約３ｍを計測する。付近で遺構検出に努めたが確認できなかった。そのため，これらの遺構の性格については断定できなかった。おそらく，中世以降の建物の基礎の根石部分ではないかと思われる。



第５図　　検出遺構図

（２）右京第５次調査

調査地の基本的層位は，第１トレンチでは緑灰褐色粘質土（第１層），赤褐色土（第２層），褐色土（第３層）の順に堆積し，地表下約40cmから下は黄褐色土（第５層）の地山となっている。第３層には弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶器・瓦などの弥生時代から近・現代までの遺物が包含されていた。遺構は，トレンチ中央にある南北溝を除いて，すべて第５層の地山面で検出した。一方，第２トレンチでは，赤褐色土（第２層）の下に黒褐色土，黄褐色土（第５層）の地山の順に堆積している。黒褐色土には，弥生土器・須恵器が包含されていた。遺構は，すべて第５層の地山面で検出した。

以上のように，今回の調査で検出した遺構は大半が地山面であり，その内容は，土壙２基，竪穴住居址１基以上，溝状の落ち込み１条のほかに柱穴群がある。以下，主な遺構について説明する。

土壙ＳＫ0501　第２トレンチ東端で検出した土壙で，長辺１m短辺0.6mの楕円形を呈し，深さは25cmである。埋土は黒褐色土で，弥生土器の大型壺と甕の破片が出土している。弥生時代中期の土壙と思われる。

竪穴住居址ＳＨ0502　第２トレンチ南部で検出した竪穴住居址の東南部と思われる遺構である。この遺構は北西部分で，のちに述べる中世の溝状のおちこみＳＸ0504によって，又東北隅をＳＫ0503によってそれぞれ削平を受けている。規模は，１辺４m以上他辺２m以上の方形のものと思われる。検出面から床面まで深さは約10cmで，壁溝は検出できなかった。埋土は，黒褐色土で，土師器・須恵器・弥生土器・砥石の弥生時代から古墳時代までの遺物が出土した。また，この遺構の床面からは，Ｐ５～Ｐ７の三基の円形の柱穴を検出した。これらの柱穴の規模は，径40～60cm，深さ18cmで主柱穴と思われる。埋土はいずれも黒褐色土で，Ｐ６の底から石包丁の破片１点が出土した。

土壙ＳＫ0503　ＳＨ0502の北東隅で検出された長辺３m短辺1.4m深さ10cmの不整形な土壙である。埋土は黒褐色土で，なかから古墳・奈良時代の土師器・須恵器・砥石等が出土した。この土壙は，ＳＨ0502を切り込んでいることから竪穴住居址ＳＨ0502より新しい。

柱穴Ｐ１～Ｐ４　第２トレンチ中央で検出した柱穴群である。いずれも径30cmの円形で，深さ30cmである。埋土は黒褐色土で，Ｐ２とＰ３から弥生土器の小片が数点とＰ４から土師器の小片が数点出土した。これらの柱穴の性格はわからないが，Ｐ１とＰ２，Ｐ２とＰ４，Ｐ１とＰ３，Ｐ３とＰ４のそれぞれの柱穴の心々間の距離は，50cm，150cm，140cm，60cmを計測する。

溝状の落ち込みＳＸ0504　第１トレンチの南から第２トレンチ北西隅で検出した溝状の遺構で，検出長は東西約２m，南北5.5m，深さは0.5m以上を計測する。埋土は４層に分かれ，溝の底部からは土師器・瓦器の小片数点と拳大から人頭大の石が出土した。性格については，

わからないが，遺物から中世の遺構と思われる。

4．出　土　遺　物

出土した遺物は，弥生時代～現代の各時代のものがある。弥生時代の壺・甕・高坏・蓋・石器・サヌカイト剥片，古墳時代の土師器・須恵器，奈良～平安時代の土師器・須恵器・瓦片等や中世の土師器・瓦器や近世の陶磁器などがある。遺物の総量は，遺物整理用コンテナ３箱に満たない量である。

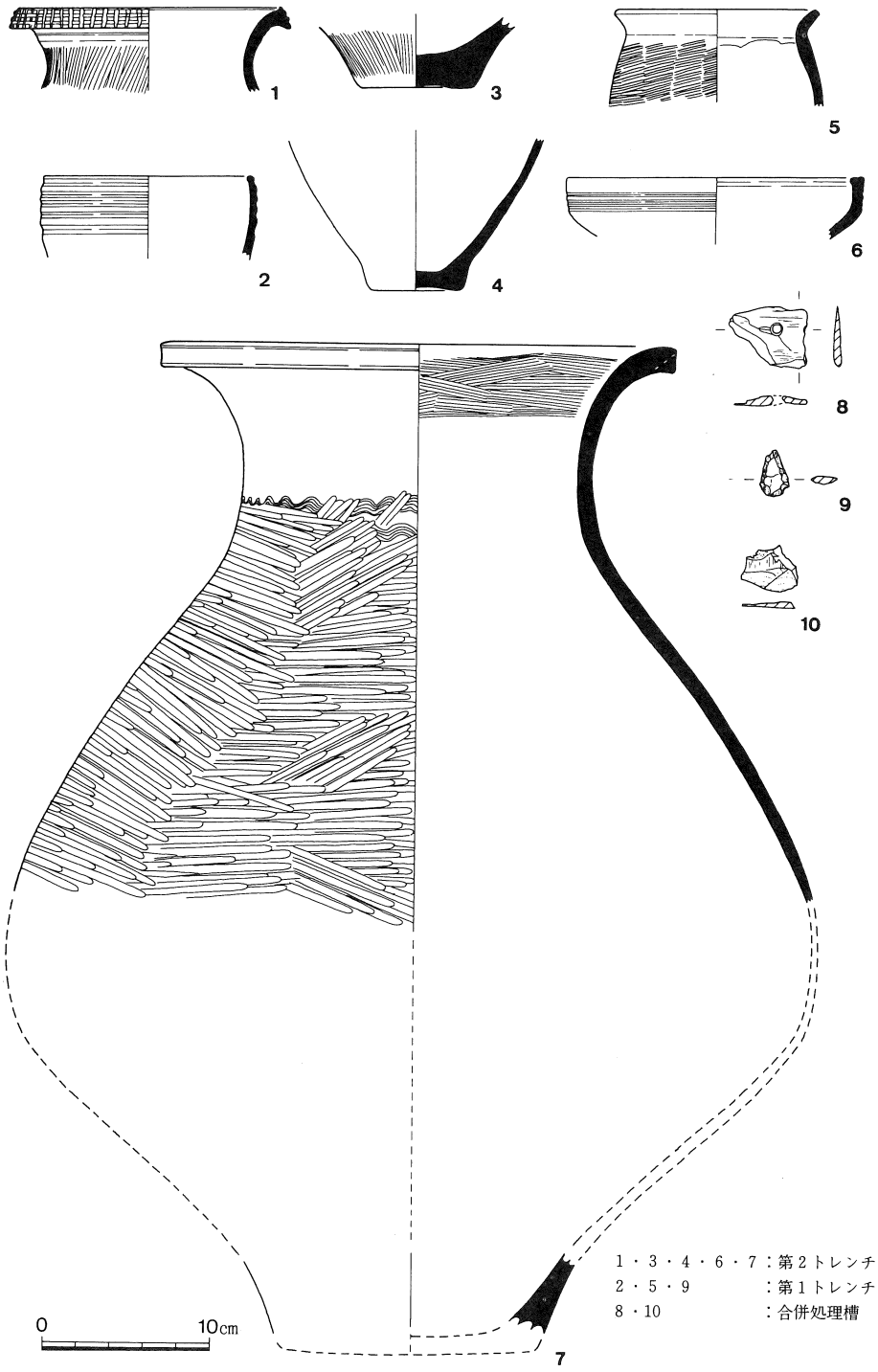
（１）弥生時代の遺物（第６図）

弥生時代の遺物は，土壙ＳＫ0501と包含層等から出土した土器類と石器などを図化し得たのみである。

ＳＫ0501出土遺物　弥生土器の壺（７）と甕がある。壺（７）は，口径31cm，高さ約60cmに復原される大型のものである。外面は，口縁部にナデ，体部にヨコ方向のミガキを施し，頸部に２，３条の波状文を施したのちヨコ方向のミガキを施している。内面は，口縁部端部にハケ調整ののち，ヨコ方向のミガキを施し，頸部から体部にかけてハケの後ナデている。色調は，上半部は黒褐色，下半部は暗黄褐色を呈し，黒斑がついている。胎土は砂粒を含み，焼成はややあまい。甕は口縁部の破片で，体部外面にタタキを施している。

遺物包含層等出土遺物　遺物包含層等から出土した土器には，壺（１・３・４），長頸壺（２），甕（５），高坏（６）と図化できない蓋片等がある。石器は石包丁（８），石鏃（９）とサヌカイト剥片（10）がある。

壺（１）は口縁部の破片で，短く外反する口縁部の端部を肥厚させ，平坦面をもつ。この面に３条の凹線文を施したのち刻目を施す。口縁部端部から頸部までナデ，頸部から体部にかけてハケ目を施す。内面はナデている。色調は淡い赤褐色で，砂粒まじりで雲母を含んでいる。畿内第Ⅳ様式の土器である。壺（３・４）はいずれも底部片である。（３）は外面をたて方向刷毛調整を行うが，内面は剥離がいちじるしく調整は不明である。（４）は逆に外面の調整は不明で，内面をナデている。長頸壺（２）は筒状の頸部が直口となる長頸壺の口縁部の破片で，外面に五条の凹線を施す。畿内第Ⅳ様式の土器である。甕（５）は口縁部から体部にかけての破片で，口縁部の内外面ともナデ，体部外面はタタキ目を施している。畿内第Ⅴ様式の土器である。高坏（６）は口径18cmの坏部の破片で，口縁部はまっすぐ直上し，端部内側に肥厚させ，端部上面に平坦面をもち，一条の沈線文を施している。口縁部外面は３条の凹線文を施しヘラミガキしている。内面はナデ調整している。色調は，外面黒色で内面黄灰色である。胎土は細かい砂粒と黒・金雲母を含み，焼成は良好である。蓋は体部からつまみ部にかけての小片で，笠形の壺用蓋と思われる。外面はつまみ部から放射状のハケ目を施し，内面はナデている。畿



第6図　　出土遺物実測図(1)

内第Ⅳ様式と思われる。

石包丁（8）は粘板岩製のもので，石鏃（9）はサヌカイト製である。ほかにサヌカイト剥片（10）が出土している。

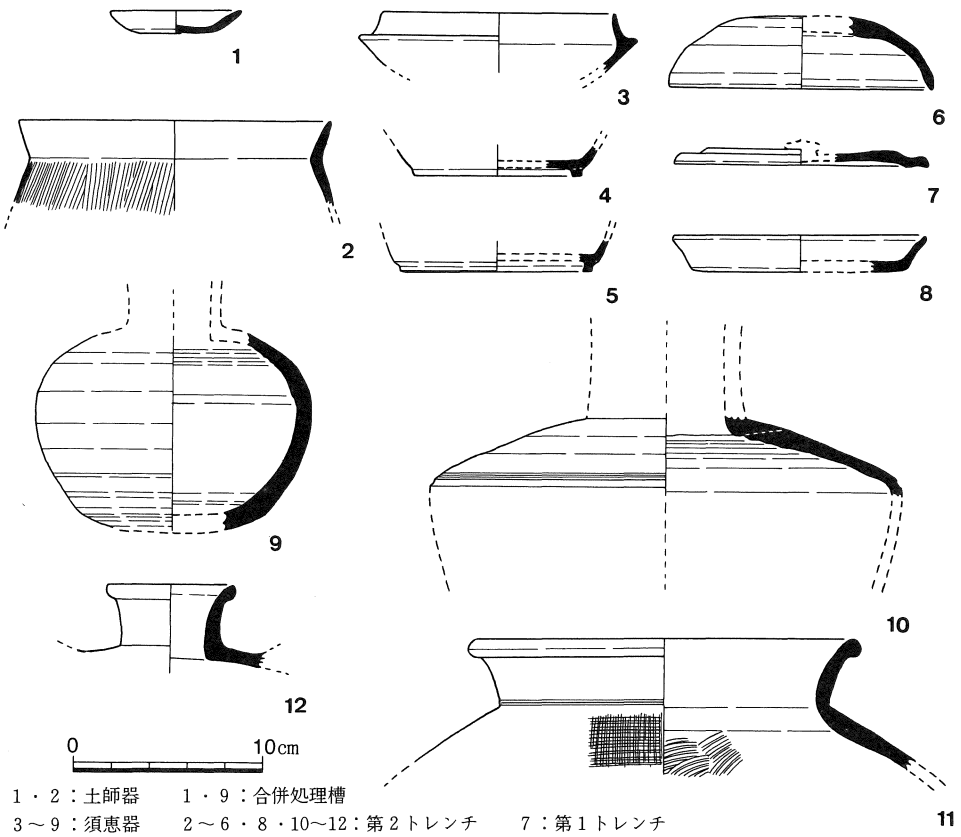
（2）古墳時代の遺物（第7図）

古墳時代の遺物は，竪穴住居址ＳＨ0502と包含層等から出土した土器類を図化し得たのみである。

ＳＨ0502出土遺物　須恵器の坏身（3），提瓶（12）のほか須恵器の壺・蓋，土師器の甕，砥石がある。（3）は，口径6.1cmに復原される蓋受けをもつ器形で，口縁端部は，内傾しながら立ちあがる。(12)は，提瓶の口縁部から肩部の把手にかかる部分の破片である。これらの土器は，中村浩氏(注1)編年Ⅱ型式3・4段階（6世紀後葉）に位置づけられると考える。

遺物包含層等出土遺物　遺物包含層から出土した土器には，土師器甕（2）と須恵器坏蓋（6）・長頸壺（9）などがある。

（3）奈良～平安時代の遺物（第7図）



1・2：土師器　1・9：合併処理槽
3～9：須恵器　2～6・8・10～12：第2トレンチ　7：第1トレンチ

第7図　出土遺物実測図(2)

この時代の遺物は，土壙ＳＫ0503と包含層等から出土した土器類を図化し得た。

ＳＫ0503出土遺物　須恵器の壺（10），甕（11）のほか図化できなかった坩，砥石がある。（10）は長頸壺の肩部である。中村浩氏編年Ⅳ型式第１段階（８世紀前葉）と考える。（11）は，口径20cmの甕の口縁部から体部にかけての破片である。体部外面は格子目のタタキで，内面は青海波のタタキである。

遺物包含層等出土遺物には須恵器の坏Ａ（４・５）・坏蓋（７）・皿（８）と布目瓦がある。その他に中世以降の遺物は，中世の土師器の皿（１）以外には図示できなかったが，瓦器の埦・羽釜，近世陶磁器の碗・摺鉢などがあった。

５．ま　と　め

今回の調査は，工事中の困難な条件下で行われたが貴重な成果をあげることができた。まず今里遺跡に関してみると，弥生時代と古墳時代の遺構を検出した。弥生時代では，中期（畿内第Ⅳ様式）の土壙ＳＫ0501を検出した。当調査地の北東約200mの洪積台地上で行われた右京第２次調査[注2]では，同時期の方形周溝墓が検出されている。また，出土遺物では，弥生時代後期（畿内第Ⅴ様式）の土器をわずかに含んでいるが全体的には，弥生時代中期（畿内第Ⅳ様式）のものが多く出土している。このように今里遺跡の南部にあたる当地付近では，弥生時代中期の集落があったと推定される。なお，今里遺跡の弥生時代の集落の分布状況については，山本輝雄氏がすでに右京第53・54次調査の報告で考察されている[注3]ように，中期には今里の集落の中心が今里地区の南部にあったものと思われる。

古墳時代では，６世紀後葉の竪穴住居址と思われるＳＨ0502を検出した。当調査地の北東約400mの同遺跡内で行われた右京第７・12次調査においても弥生時代後期から古墳時代の17基の住居址群を検出している。とくに古墳時代の住居址をみると布留式段階１基，古式須恵器段階（５世紀後半～６世紀前半）３基，６世紀中葉段階４基，６世紀後半～７世紀初段階５基の竪穴住居址13基と７世紀前半段階の掘立柱建物３基を検出している。これらの遺構は，洪積台地の西方の小畑川の西岸氾濫原との間の西から東へ緩やかに傾斜する傾斜変換線に沿う地域に立地している。しかし，今回検出したＳＨ0502は，右京第７・12次と異なり，西方の洪積台地上に立地している。この地域での住居址の検出は，従来から住居址群がひろがっていたと推定されていたにもかかわらず，今回検出した竪穴住居址ＳＨ0502が初めてである。この地域は住宅が密集しており，これまで調査が十分行われてきたとはいい難く，今後の調査の進展の中でさらに資料の追加が期待される。

次に奈良時代以降については，８世紀前葉の土壙ＳＫ0503を検出した。これは，比較的多くの土器を含んでいる土器だまりで，ゴミ捨て場的なものであろう。長岡京時代以降の遺構は検

出されなかったが，長岡京時代以降の遺物は出土しており，乙訓寺の西側に近接する当地の状況を知る一つの資料となるものである。

注１） 中村浩『陶邑Ⅲ』（『大阪府文化財調査報告書第30輯』1978年）

２） 浪貝毅「第Ⅲ部発掘と調査」（『日本考古学年報21・22・23』1968～1970年度版）

３） 山本輝雄他「長岡京跡右京第53･54次調査概要」（長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書第９冊』1982年）

2．右京第６次（７ANIHY地区）調査概要

1．は　じ　め　に

1．本報告は，1977年９月17日から９月23日まで，長岡京市今里彦林15他において実施した右京三条四坊七町に関する発掘調査の概要報告である。

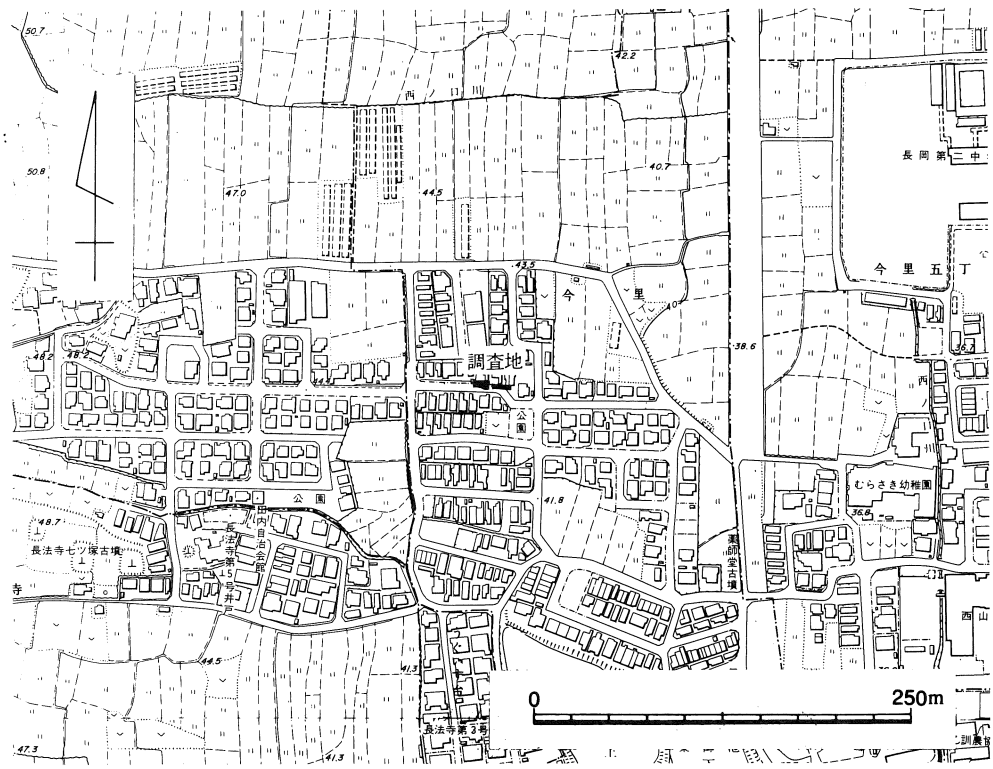
2．当調査は，民間の宅地造成に伴って行ったものであり，南北５m×東西11mと南北２m×東西12mの２つのトレンチを設定して実施した。

3．調査は，長岡京市教育委員会が主体となり，長岡京跡発掘調査団（現長岡京跡発掘調査研究所）に委託して実施された。現地調査は，同調査員中尾秀正が担当した。補助員として長谷川浩一，中辻宣之，二階堂和信氏等の参加があった。

4．遺物の実測，トレースは青谷尚美が行った。

5．本報告の編集，執筆は中尾秀正が行った。

6．調査期間中及び調査後の整理にあたって，高橋美久二氏から多くのご教示をいただいた。



第８図　　調査地位置図

また，調査を快諾された土地所有者の(株)山朝商事のご協力を得た。記して感謝したい。

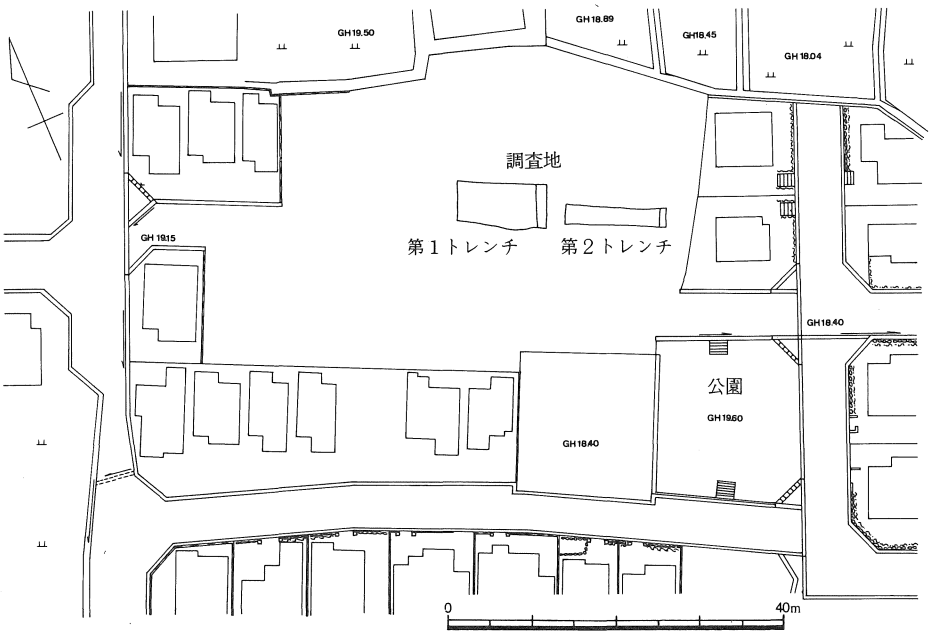
2．調　査　経　過

当調査地は，大阪層群によって形成された粟生・長法寺西の西山丘陵の麓から東南方向に広がる開析扇状地上にあり，標高は約40mである。調査地の西南方には長法寺七ツ塚古墳群，北方には弥生時代の井ノ内遺跡，東方には弥生時代の今里遺跡があり，調査地の四周は遺跡に囲まれている。また，長岡京の条坊復原によれば右京三条四坊七町に該当するところである。

調査地は，現水田面に0.7mの盛土をして造成される部分と，すでに盛土整地が行われた部分とがあった。調査は，現水田部分の防火水槽建設予定地を中心に，東西に幅５m，長さ11mのトレンチ（第１トレンチ）と，その東に幅２m，長さ12mのトレンチ（第２トレンチ）の２本を設定して行った。厚さ0.2mの耕作土，0.1mの床土を重機で除去し，その後，遺構を検出するために黄褐色砂礫土層（地山）の上面まで人力によって精査し，遺構検出に努めた。

3．調　査　概　要

調査地の層位は，第１トレンチでは耕作土，床土，黄褐色砂礫土層（0.4m～0.5m），褐色砂

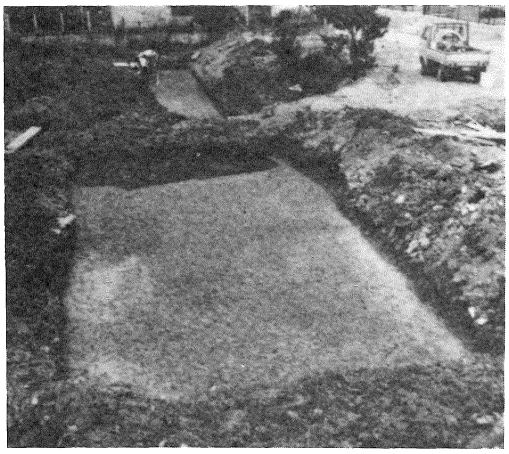


第９図　　調査地周辺図

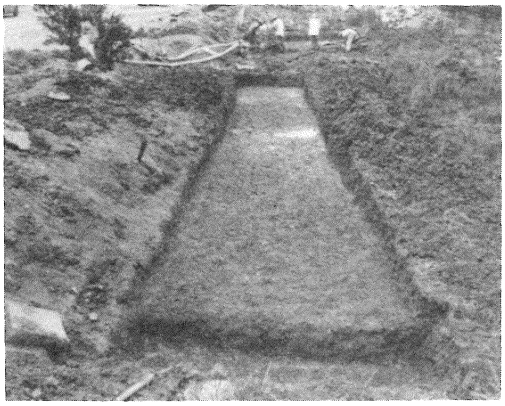
礫層（0.7m），黄褐色土層（0.2m以上）と続く。第2トレンチ西部では耕作土，褐色土層（0.1～0.2m）の床土，黄褐色砂礫土層（0.2m以上）と続いており，東部では耕作土，黄褐色砂礫土層（0.4m以上）となっている。

出土遺物としては，須恵器の坏B，高坏などの破片がある（第12図）。第1トレンチの床土下層からの出土である。しかし，遺構は検出できなかった。これは，当地の層位が耕作土又は床土の直下で地山となり，しかも，すぐ北にある水田面と高低差をもっていることから，元来ゆるやかな傾斜地であった当地が，水田耕作のための平坦化の際に削平されたためと思われる。

今回の調査では古墳・奈良時代の遺物を検出したのみであるが，1978年3月に，当調査地の北西約120mにある今里大西の水田で農業用排水管埋設工事の際，地表下0.7mの暗褐色土層から長岡京時代前後の須恵器片が多数出土している。このことから，当地付近にも

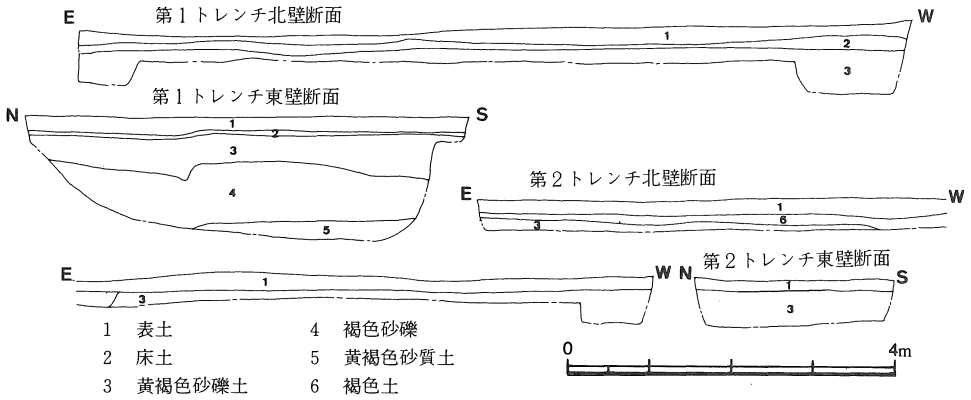


第1トレンチ全景（西から）

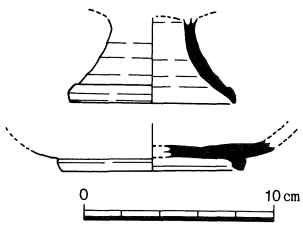


第2トレンチ全景（東から）

第10図　　調査地全景



第11図　　調査地土層図



遺構が分布していたことがうかがわれ，今後周辺での調査が期待される。

第12図　　出土遺物実測図

3．右京第８次（７ANISB地区）調査概要

1．は　じ　め　に

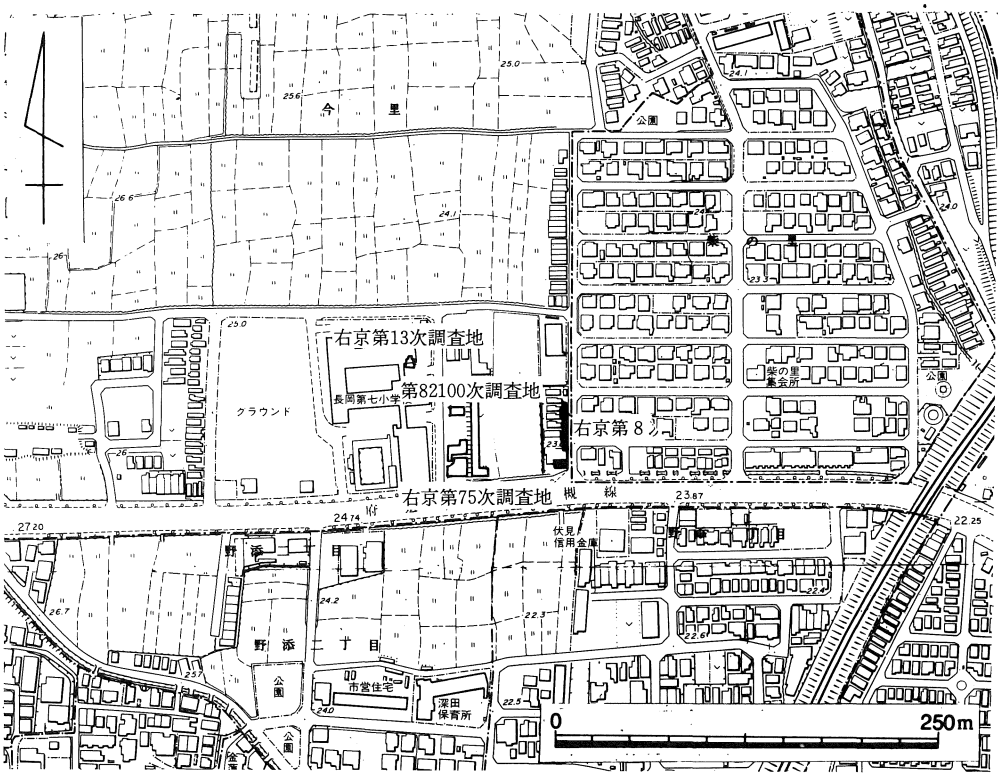
1．本報告は，1977年12月21日から1978年１月12日まで，長岡京市今里三ノ坪５－３において実施した右京三条二坊六町に関する発掘調査の概要報告である。

2．本調査は，長岡京市教育委員会が主体となり，長岡京跡発掘調査団（現長岡京跡発掘調査研究所）に委託して実施された。同調査員中尾秀正が現地調査を担当した。調査にあたっては，地元住民の有志の方々及び，立命館大学，竜谷大学等の学生諸氏の参加協力があった。

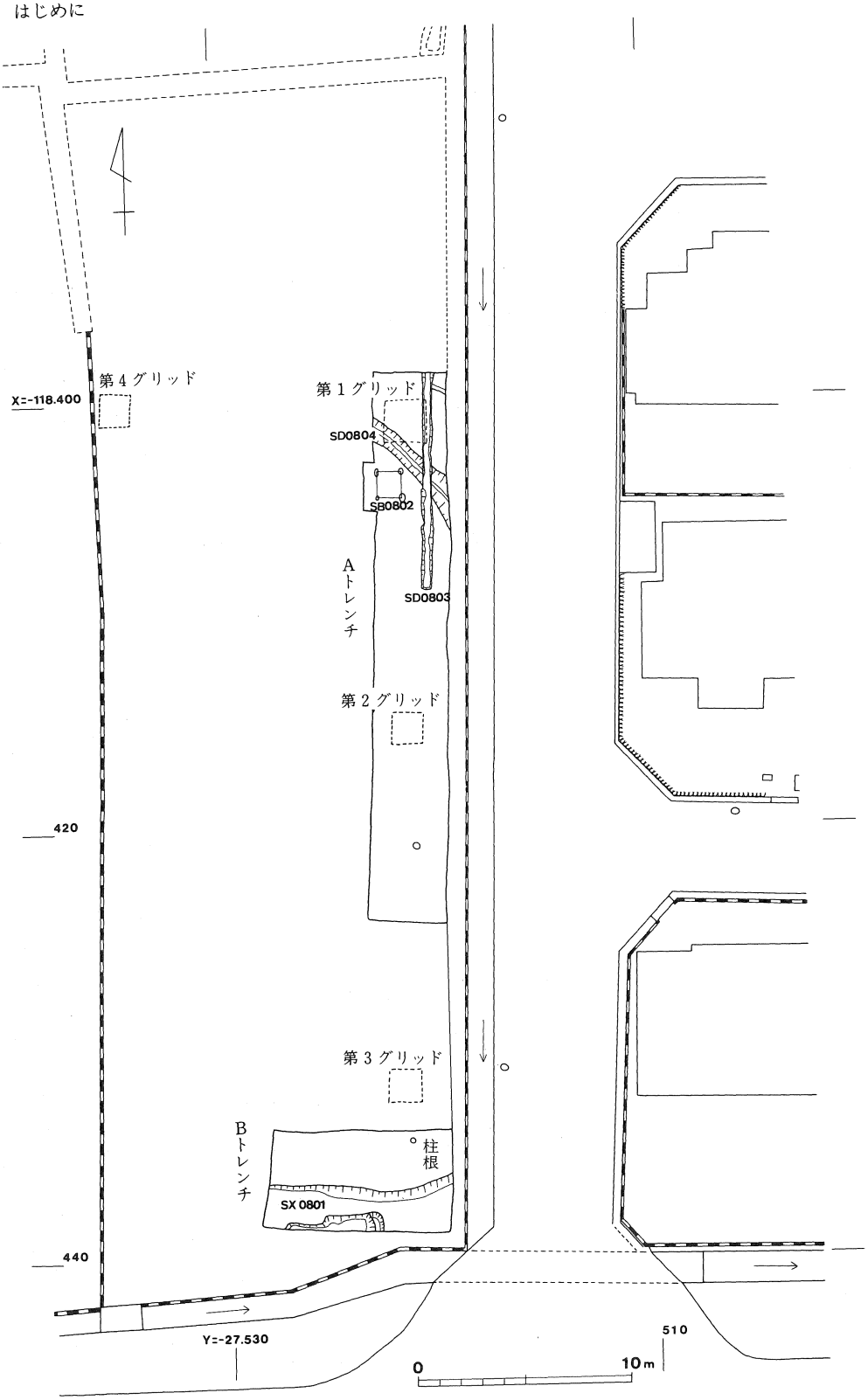
3．調査後の遺物整理，図面整理は，主に中尾秀正，安井直子，西村良子が行った。

4．写真撮影については，高橋美久二（京都府教育庁指導部文化財保護課技師），中尾秀正が行った。

5．本報告の編集は，中尾秀正が行い，執筆は１・２・３・５を中尾秀正，４を安井直子が行った。



第13図　　調査地位置図


第４グリッド
X=-118.400
第１グリッド
SD0804
SB0802
SD0803
Aトレンチ
第２グリッド
420
第３グリッド
Bトレンチ
柱根
SX 0801
440
Y=-27.530
510
0
10m

第14図　　調査地周辺図

6．調査期間中及び整理にあたって，高橋美久二氏から多くのご教示をいただいた。また，調査にあたっては，原因者の(株)せいわ工房や近隣の方々には各種の御便宜を計っていただいた。記して感謝したい。

7．なお，本報告は，現地調査後約6年余りを経ており，近年当地周辺で右京第75次（7ANIKC－3地区）・右京第117次（7ANISB－2地区）などの調査が行われている。したがって，本報告では，それらの成果をふまえながら執筆していきたい。

2．調　査　経　過

本調査地は，標高約23mの小畑川の氾濫原にあたる水田である。当地の字名は「三ノ坪」で，乙訓地域に施行された条里制の坪名がそのまま地名として残り，乙訓郡西部の条里を復原する上で重要な地区である。本調査地の南を流れる水路は，乙訓郡八条の南から二番目の坪界線にあたる。また，当地は長岡京の条坊では右京三条二坊六町にあたり，すぐ東側を西二坊第一小路が通ると推定される。

調査は，まず土層を確認するために開発敷地内に2m四方のグリッドを4ヶ所入れ，その後トレンチ設定を行った。トレンチは，敷地の東側に東西3.2m・南北25.5mのAトレンチ，南側に東西9m・南北5mのBトレンチをそれぞれ設定した。重機によって耕作土や床土などを除去した後，人手で精査し，灰褐色粘質土層上面で遺構の検出に努めた。

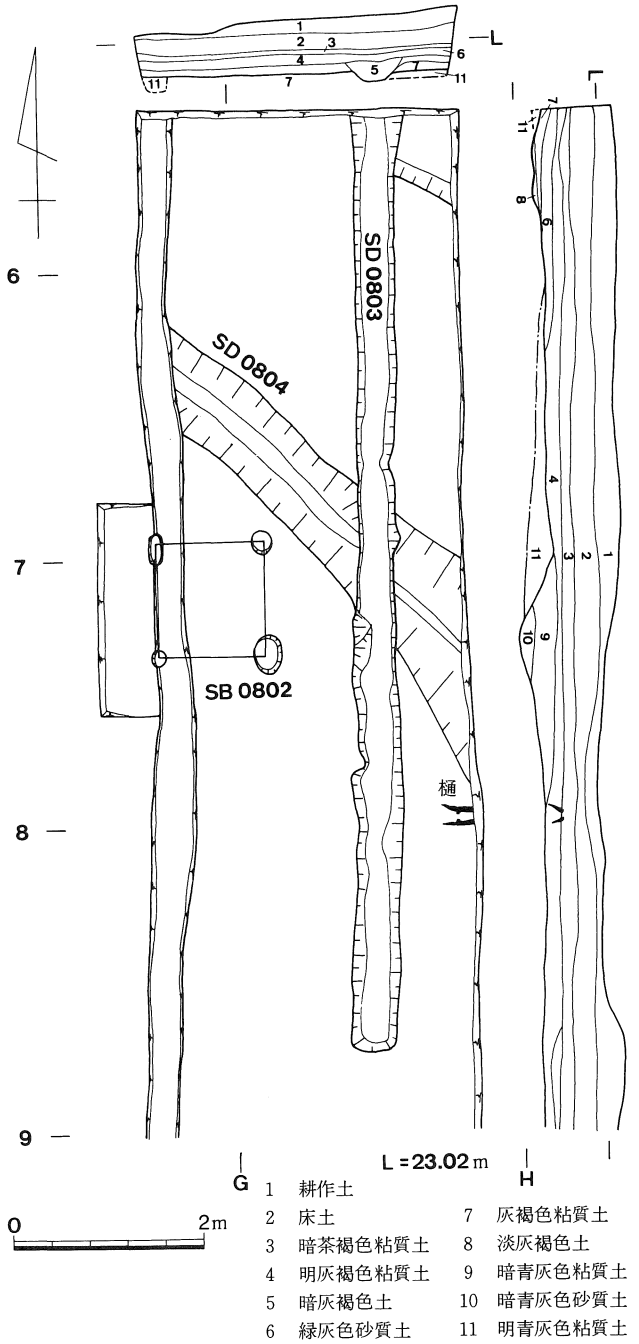
精査が進むにつれて，Aトレンチの北部の西側壁面で，柱穴2個を検出したため，トレンチを西に東西1m・南北5m拡張した。

調査地の地区割は，まだ国土座標による地区割が実施されていなかったため，磁北を基準にして行った。まず，調査地の南に東西に通る府道樫原高槻線（外環状線）の北側の歩道上にP1，敷地内にP2・P3を設置し，これを基点にして3mごとに地区割を行った。南北ラインを1，2，3……の順で北から付し，東西ラインをA，B，C……の順で西から付し，P2－1E，P3－1Gとした。トレンチ割付け名称は，北西割付けポイントの名称を用い，たとえば6G地区は6Gポイントの南東に接する3m四方の地区を示すことにした。なお，地区割設定を行う前に行った荒掘り段階では，Aトレンチを北から北部，中部，南部と三地区に分けて遺物の取り上げを行った。

3．検　出　遺　構

調査地の層位は，A・Bトレンチで若干異なるが，Aトレンチでは，耕土・床土・暗茶褐色粘質土・明灰褐色粘質土・灰褐色粘質土・明青灰色粘質土（地山）となり，Bトレンチでは，Aトレンチで確認した床土と灰褐色粘質土の間が異なり，床土・淡灰色粘質土・灰褐色粘質土

となっている。遺構は，Aトレンチでは明灰褐色粘質土上面で樋を検出し，その下層の灰褐色粘質土又は，明青灰色粘質土（地山）上面で掘立柱建物ＳＢ0802・溝ＳＤ0803・溝ＳＤ0804を検出した。Bトレンチにおいては,灰褐色土上面を切り込んでいる溝状の落ち込みＳＸ0801・柱根を確認した。



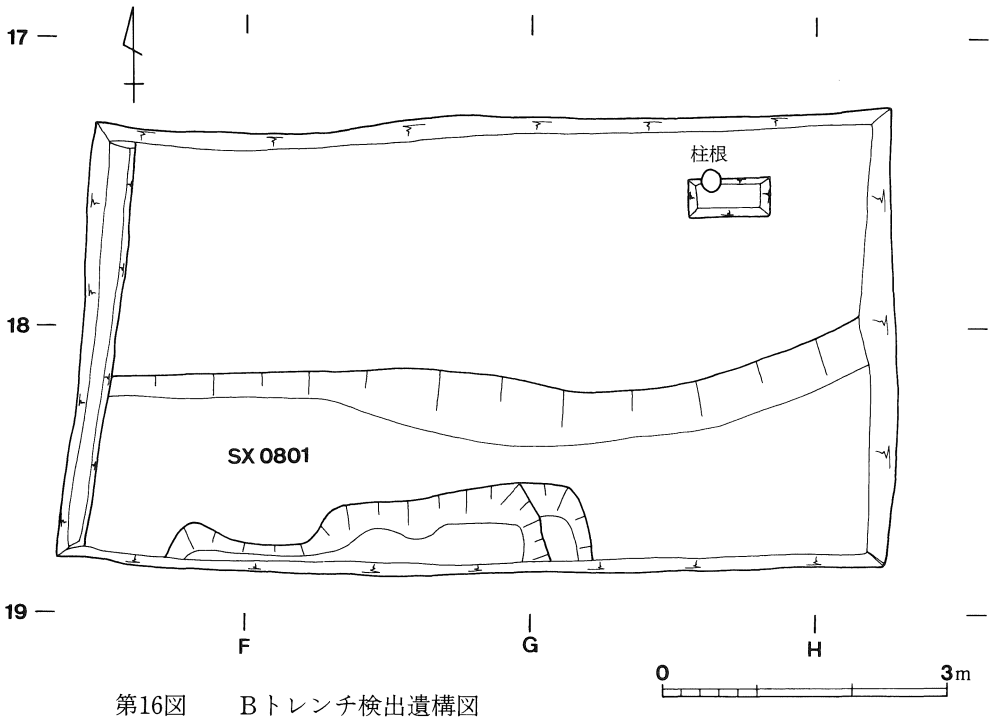
第15図　　Aトレンチ検出遺構図

樋（第15図）　　7地区の東壁において検出した東西方向の樋である。樋は，幅25cm・検出長約50cmで，さらに東へ延びる。樋は，一辺50cm以上，幅約20cm，厚さ約2cmの板材を交互に重ね合わせ，合わせ口を板材の杭でとめている。検出面は明灰褐色粘質土層上面である。遺物などを含んでいないため時期決定は困難であるが，層位的に溝ＳＤ0804の検出面より一層上面で検出していることから溝ＳＤ0804より新しい。また，性格についても明らかではないが，おそらく水田耕作にともなう取水，排水のためのものと思われる。

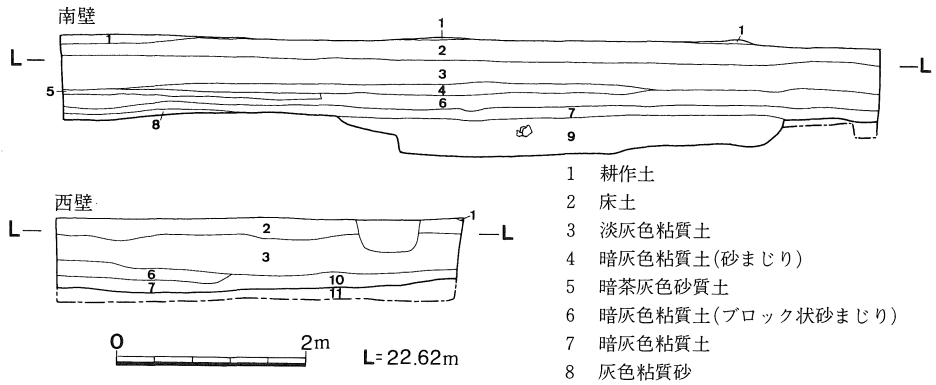
掘立柱建物ＳＢ0802（第18図）　　7地区で検出した東西1間（115cm）×南北1間（120cm）の掘立柱建物である。掘方は一定していないが，径20～35cmの円形又は楕円形を呈する。棟方向はほぼ磁北をとる。出土遺物がないため，時期は断

定できないが，遺構検出面が明青灰色粘質土層で溝ＳＤ0803・ＳＤ0804とほぼ同じ時期と考えられる。

溝ＳＤ0803（第15図）　Ａトレンチの北部の中央で検出した南北方向の溝である。溝は9ライン付近で急に浅くなり跡切れる。溝は，幅約40cm，深さ10～20cm，検出長９ｍで，方向は磁北に対して南北方向である。埋土は暗灰褐色土で，なかから遺物は出土しなかった。遺構検出面は明青灰色粘質土層で，ＳＢ0802・ＳＤ0804と同検出面であり，それらとほぼ同一時期と

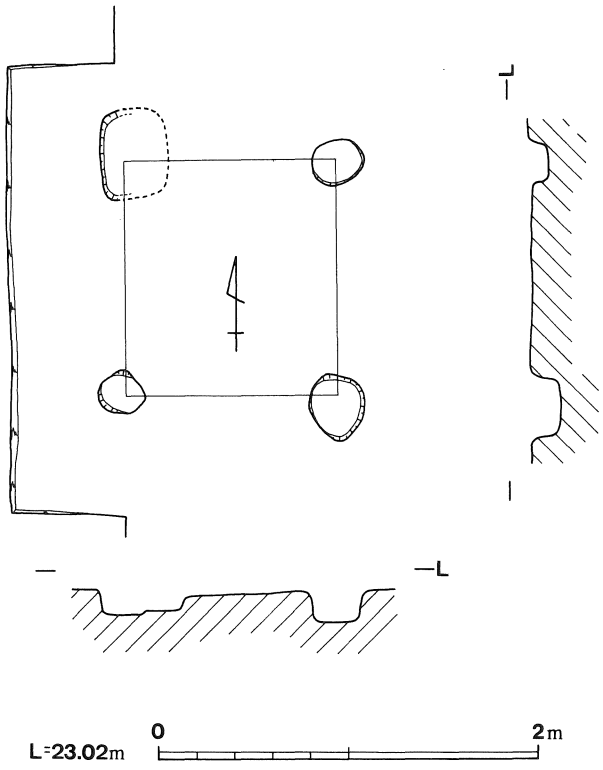


第16図　Ｂトレンチ検出遺構図



1　耕作土
2　床土
3　淡灰色粘質土
4　暗灰色粘質土(砂まじり)
5　暗茶灰色砂質土
6　暗灰色粘質土(ブロック状砂まじり)
7　暗灰色粘質土
8　灰色粘質砂
9　暗灰色粘土
10　灰褐色粘質土
11　明青灰色粘質土

第17図　Ｂトレンチ土層図

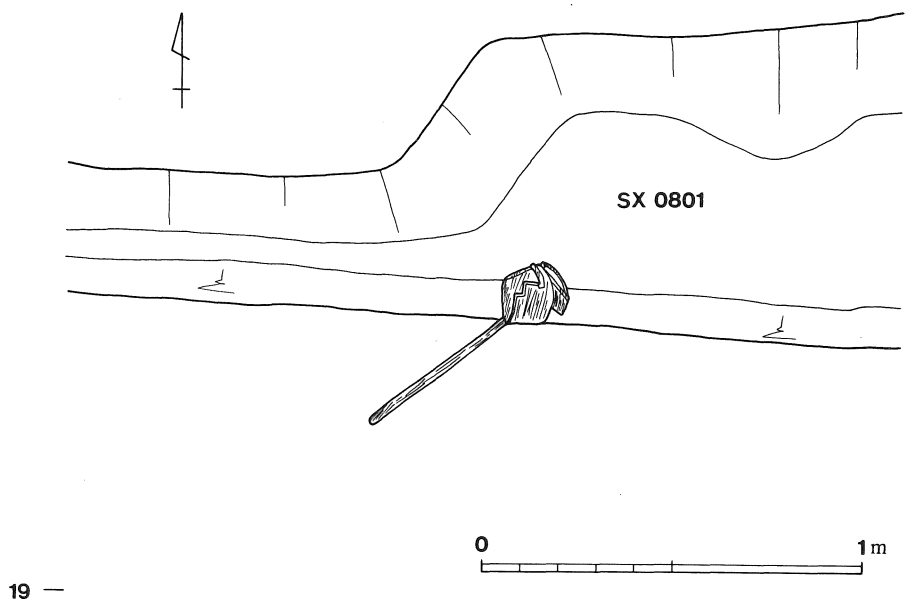


第18図　　掘立柱建物ＳＢ0802実測図

考えられるが，切り合い関係からＳＤ0804より少し新しいと考えられる。

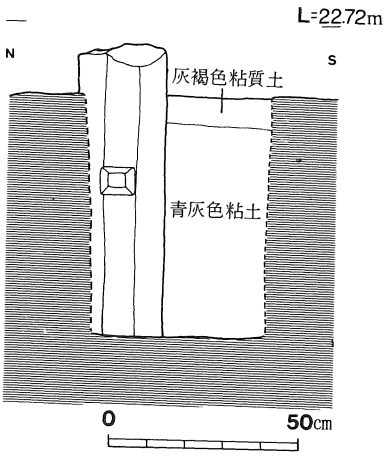
溝ＳＤ0804（第15図）　　6～7地区で検出した北西から南東方向に流れる溝である。溝は，幅約80cm，深さ40cm，検出長4.1mである。埋土は，上層が暗青灰色粘質土，下層が暗青灰色砂質土の2層からなる。遺物は上層から土師器の埦Ａ6個体分がまとまった状態で出土した。出土遺物から長岡京時代と考えられる。

溝状の落ち込みＳＸ0801（第16図）　　Ｂトレンチの18地区で検出した北から南に落ち込む



第19図　　柄杓出土状況

溝状の遺構で中央部にさらに一段深くなるくぼみがある。深さは30～40cmで，中央部のくぼみの部分ではさらに40cm深くなる。埋土はくぼみの部分（下層）とそれより上の部分（上層）に大別できる。上層はさらに暗褐色粘質土（砂まじり）・暗灰色粘質土（ブロック状に砂まじり）・暗灰色粘質土の3層に細かく分層できる。下層は暗灰色粘質土の一層からなる。上層からは土師器・須恵器・製塩土器？・瓦器が出土し，下層からは土師器・須恵器および柄杓が出土している。堆積状況からみて，中世の旧河道のよどみの様なものと思われる。



第20図　　柱根検出状況

その他の遺構　　Bトレンチの17G地区において上部が腐蝕している柱根を灰褐色粘質土層の上面で検出した。この柱根は，残存高70cm，直径25cm，6面取したもので，柱底部から45cm上でたて8cmよこ9cmの方形の穴を深さ15cm程度までえぐっているが貫通していない。掘方の検出に努めたが，掘方らしきものは検出できなかった。

なお，Aトレンチ南部の二ヶ所においても，径25cm・15cmの柱根をBトレンチで検出した柱根と同一面になる明灰褐色粘質土層の上面で検出した。これらの柱根は，層位的に長岡京時代より新しいものと考えられる。

4．出土遺物（第21～24図）

今回の調査で出土した遺物を，（1）遺構に伴う出土遺物　（2）包含層からの出土遺物　（3）その他に分けて記述していく。

出土した遺物には，須恵器，土師器，瓦，瓦器，緑釉陶器，磁器，木製品などがある。コンテナ数にして約6箱と，遺物は少なかった。

（1）遺構に伴う出土遺物

SD0804　この溝からは，土師器のみが出土している。いずれも土師器の埦（28～33）で溝の上層部から出土した。

埦は，丸底に近い小さな底と，内彎する弧を描いて斜め上に開く口縁部とから成る。端部は，そのまま丸くおさめられる。全個体ともc手法で調整されている。(29，30)は完形品。他のものは，残存率が⅓～⅙である。(31)は，口縁部に火を受けた痕跡がある。

SX0801　　上層から，須恵器，土師器，製塩土器？，瓦器等が出土した。下層からは，須恵器甕，土師器が出土した。又，杓形の曲物も出土している。

瓦器の埦（43・44・46・47）は内彎する口縁部と，断面三角形を呈する低い高台を有する。

高台の形態は，貼り付け高台。内面には暗文を施す。(46) は見込み部に螺旋状の暗文を施す。しかし，いずれも小片である。

土師器の甕 (41) は口縁部の内・外面に粗いハケ目を施し，端部は，内側に折り返して稜を成す。木製品の柄杓は，直径15cmの曲物の杓に長さ45cm，太さ2.5cmの柄がついたものである。

ＳＢ0802・ＳＤ0803からの出土遺物はない。

（２）包含層からの出土遺物

試掘坑や各トレンチの荒掘り，精査中に包含層などから出土したものを述べていく。なお，遺物の多くは，Ａトレンチでは，暗茶褐色粘質土・明灰褐色粘質土，Ｂトレンチでは，淡灰色粘質土からそれぞれ出土した。

まず，試掘坑第１グリッドからは，瓦片と土師器の鉢 (36) の完形品が出土している。(36) は浅い丸底の底部に，外反する短い口縁をつける小型の器。体部外面にケズリ痕を見，指頭痕を残す。内面はハケ目，その後ナデを行う。外面と内面口縁部に化粧土を施したと考えられる。第２グリッドでは，床土直下の暗褐色砂層から，土師器，須恵器，瓦，瓦器を出土しているが，小片のため図化できるものはなかった。

次に，トレンチの区域ごとに，出土した遺物について述べていくことにする。

Ａトレンチ　Ａトレンチは，北部，中部，南部の３区域に分けて報告する。全体的な出土状況は，中部に土器の出土が集中しているようである。さらに出土層位の面から見ると，暗茶褐色粘質土から無釉陶器埦 (14)，須恵器坏 (７・10・11)・蓋 (1・5・6)・壺 (20～22・26・27)・甕 (17～19)・鉢 (24・25)，土師器皿 (34・35)・甕 (39)，瓦器鍋 (51)，青磁 (52)，白磁 (53) などがあり，中世の包含層と思われ，明灰褐色粘質土から須恵器坏 (８・９・12)・甕 (15・16)，土師器鉢 (36)・甕 (38・40) が出土していることから長岡京前後の遺物包含層と考えられる。

（北部）　ここで出土した遺物は，須恵器の坏，土師器の甕，磁器では青磁・白磁がある。

須恵器の坏Ｂ (７) は，底部外面にケズリを施し，高台を貼りつける。

土師器の甕 (38) は，口縁部を「く」字状に曲げ，内・外面に粗いハケ目調整を行う。端部は，内側に巻き込み稜を成す。

磁器は，青磁 (52) と白磁 (53) が出土した。いずれも細片であるため器形・手法の詳細はわからない。(52)は，小さな底部に斜め上方に延びる口縁部をつけるものと思われる。高台部の形態は，ケズリ出し輪高台である。全体に淡暗緑色の釉をかけるが，高台の外縁には釉がまわっていない。素地は灰白色硬質である。(53) は，口縁部の小片。ロクロ水uきで成形し，口縁端部は外側に折り返し肥厚させる。素地は白色，硬質である。乳白色の釉をかける。

その他は小片で，須恵器の壺・甕，土師器の坏，瓦器，瓦，弥生土器等が出土した。

（中部）　前にも述べたが，出土遺物が一番多く，須恵器，無釉陶器，土師器，瓦がある。

須恵器には坏・蓋・皿・壺・甕がある。

坏は，坏Ａと坏Ｂがある。坏Ａ（12）は，内面の口縁部から体部にかけて自然釉がかかる。坏Ｂ（８・９・10）のは全て貼り付け高台。貼り付け部を強くナデる。底部の外端部は丸くおさめられている。（９）はわずかに内彎する浅い口縁部である。（23）は，坏と思われるが，小片のためどの部分かわからない。３～４㎜しか痕跡がないが，墨書が入る。判読不能。

蓋（１・５・６）は，扁平な頂部を持ち，縁部端部は短く屈曲する。頂部は，ヘラ切りの後はナデる。（６）には，端部外面に重ね焼きの痕跡がある。自然釉が縁部にかかる。粗い砂粒を含む。（５・６）の内面に墨痕が残ることから硯に使用されていたのではないかと考えられる。

壺は，長岡京時代に多く出土する壺Ｇ（20・27）で，長い頸部に平底の底部をつける。（20）は口縁部の小片で，（27）は，ここでは壺Ｇに分類したが，壺Ｌの底部とも考えられる。ロクロ水uきで成形。底部外面に顕著な糸切り痕を残す。

甕片は多数出土したが，図化しえたものは，第21図に載せた５個体（15～19）だけである。口縁部のみを図化しえた。口縁部は外反し，端部の断面は方形を成す。（15･16）は端部をヨコナデし拡張している。

鉢（24・25）は，口縁端部と底部とを欠失しているため，口径は不明。断面がとれただけである。肩のはる体部と外反する口縁部を持つ。内面はナデ。（24）は，口縁部外面下方にヘラケズリを行う。（25）は外面もナデ。

無釉陶器には皿の高台がある（14）。高台の形態は，蛇の目高台で，中心に向ってわずかに内傾する。高台を除く内・外面にヘラミガキを施している。底部と，体部を残すのみで，口縁部の詳細は，わからない。

土師器は皿と甕がある。

甕（39）は，外面と内面の口縁部下方にナデを行い，口縁部端部付近は，ハケ目を施す。端部は内側に折り返される。

小皿（34・35）は，口縁部が薄くわずかに外反するもの（35）と厚く内彎しながら丸くおさめられるもの（34）とがある。口縁部の内・外面を横ナデするだけで底部外面の調整は行っていない。（35）の内面口縁部下部は，器壁が厚い。

瓦器の鍋（51）は，口縁が水平方向に短く屈曲した後，斜め上方にのびる。外面には炭素の付着がみえる。口縁部しか残存していないため体部の詳細はわからない。

その他に瓦片がある。

（南部）　出土した遺物は，須恵器の坏，蓋，壺がある。土師器も出土したが，図化できるようなものがなかった。

坏（11）は，底部が欠失しているため，詳しい分類はできなかった。内・外面にナデを施す。口縁部はやや内彎気味に開く。

蓋（2・3）は，平らな頂部から短かく屈曲する縁部からなる。端部は（2）がややW り気味に，（3）がやや丸くおさめる。頂部はヘラ起こし。砂粒を多く含む。（3）に重ね焼きの痕跡がある。

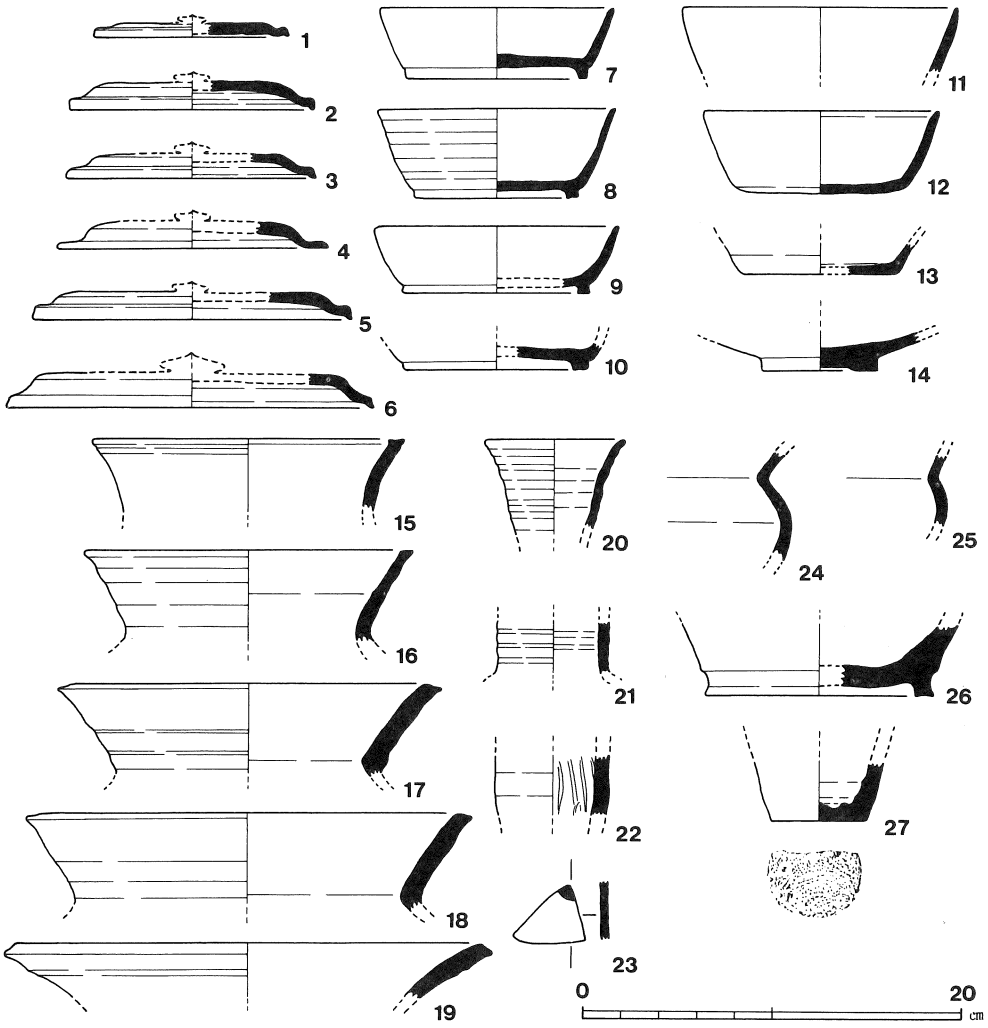
壺（26）は，底部の小片である。高台を有する。表面剝離が激しく，よくわからないが，底部外面をケズリ，内面はナデ調整，砂粒を多く含んでいる。

壺G（21･22）は，縦長の器体に長い口頸を持つ器。いずれも小片。（22）は，内面にしぼり痕がある。ロクロ水uきで成形。

Bトレンチ

須恵器，土師器，瓦器を出土した。

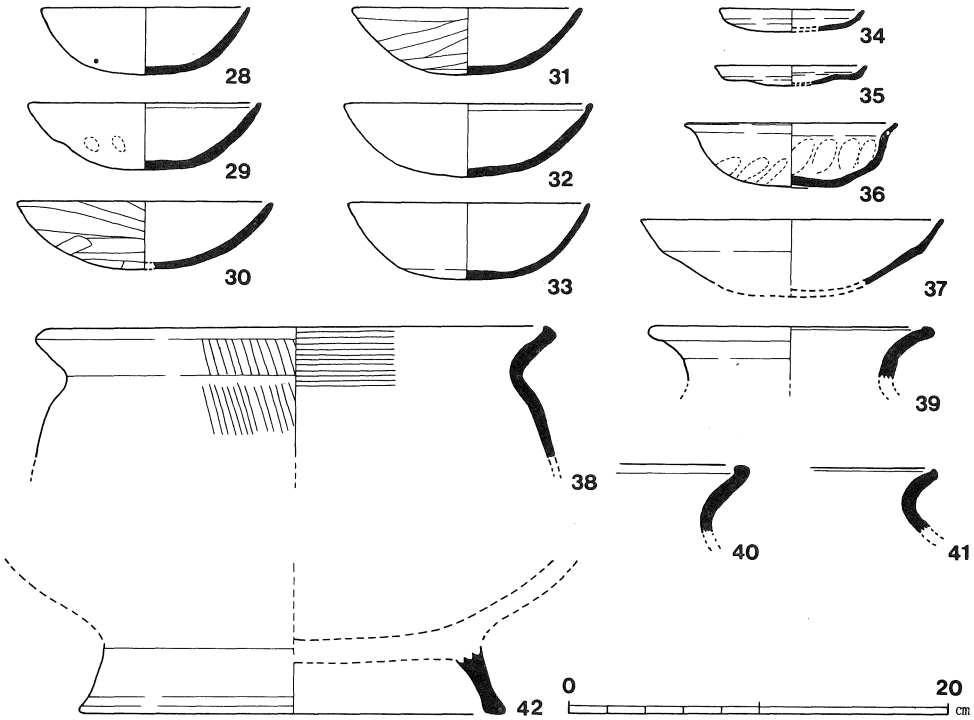
須恵器の坏は，坏A（13）である。ヘラ切りの跡を残す。内・外面にナデ。外面は自然釉を



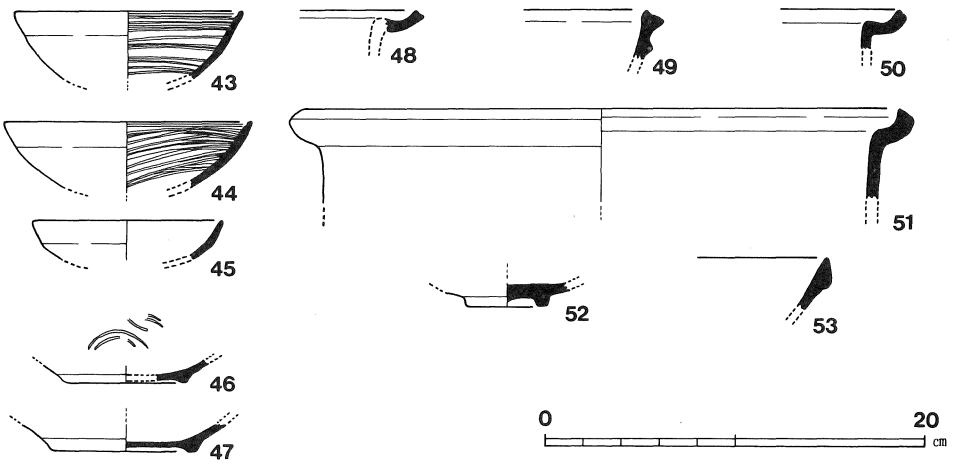
第21図　　出土遺物実測図(1)

かぶる。

蓋（４）は，他で出土したものとは端部が少し異なる。垂直な端部ではなく，ゆるやかに斜下方に延び，そのまま丸くおさめられる小片である。内面には墨跡があり，硯に転用したものと思われる。



第22図　　出土遺物実測図(2)



第23図　　出土遺物実測図(3)

土師器の埦（37）は，口縁部は，やや内彎する。口縁端部付近はミガキを施した痕跡がある。底部は未調整か。内面も磨いている。

瓦器の鍋（48～50）のうち，（48･50）は，口縁が水平方向に短く屈曲した後，斜め上方にのびる。（49）は端部を内側に肥厚させ，口縁部に稜が入る。いずれも表面に炭素が付着する。

その他瓦片も出土している。

（3）その他表面採集等

調査中に開発予定地西側で行われた擁壁工事に伴う立会調査の際に出土したものをここで報告する。なお，瓦についてはほとんどが立会調査に伴って採集したものである。

（42）は，緑釉陶器の火舎である。脚部のみを残存する。やや内彎気味で，端部外面は肥厚する。外面にかけられた緑釉が濃斑点を示すのは，釉の混合が悪いためである。

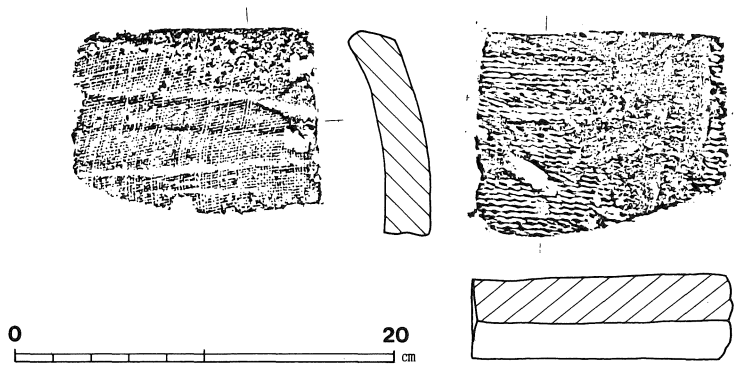
（45）の瓦器埦は内・外面横ナデを施す。暗文は，はじめからなかったのか，磨滅したのか，観察できない。

その他に平瓦を多数出土したが，破片がほとんどで，全形を知るものはない。Aトレンチ中部から出土したものを図化した（第24図）。端面，側面を面取りする。凸面は縄目，凹面は布目である。残存する長さ13.4cm，幅10.6cm，厚み2.3cmのものである。

5．ま　と　め

Aトレンチで検出した樋およびBトレンチで検出した溝状の落ち込みＳＸ0801については，遺物から中世の遺構と考えられる。とくにＳＸ0801の性格について考察していく。

西方40mのところで行われた右京第117次調査（注1）において，北西から南東方向の溝状の落ち込みＳＸ11709や中世の河道の肩となると思われるＳＸ11710などを検出していることから，これらと同じ性格をもつものと考えられる。これらの遺構は，調査地のすぐ南側を西から東に流れる水路の旧河道になるものである。この水路は，乙訓郡条里八条（九里）の二坪と三坪の坪界線に沿って流れる。



第24図　　出土遺物実測図(4)

また，長岡京時代の遺構は，遺物を含むものとして溝ＳＤ0804がある。ほかに，溝ＳＤ0803および掘立柱建物ＳＢ0802についても層位的に同時代前後のものと考えられる。これらの性格については不詳であるが，南北方向に流れる溝ＳＤ0803と当地のすぐ東側を走ると推定される長岡京跡西二坊第一小路との関係について検討してみよう。溝ＳＤ0803は，大極殿南北中軸線（朱雀大路中軸線）との距離679.81m(注2)となる。当地の東方で行われた右京第７・26次調査において検出した西二坊大路の造営尺0.2976m(注3)を用いて計算すると2284尺になる。平城京型で条坊地割を行った時の朱雀大路中軸線と，西二坊第一小路の中軸線との距離は2250尺となり，ＳＤ0803の溝との差が34尺になる。この溝を西側溝とした場合，道路幅（両側溝心々間）は68尺（約20m）となり，朱雀大路の振れ角を考慮してもいままで検出されている小路幅より広くなる。またＳＤ0803を西二坊第一小路の西側溝とし，小路の道路幅を40尺として計算して中軸線をもとめると造営尺は0.2995mとなり，いままでの調査成果よりやや長くなる。また，溝ＳＤ0803は前述のとおり溝が途中で跡切れるなどの問題を含んでいる。いずれにしても，条坊地割との関係については今後の付近での調査成果を待たざるを得ない。

一方，今回の調査において，比較的多くの平瓦を採集している。また，西方50mのところで行われた右京第75次調査(注4)においても，奈良時代の建物跡を検出するなどの成果をおさめている。これらのことから，当地周辺では奈良～長岡京時代ごろに建物が建っていたことが明らかとなった。。

なお，右京第75･117次調査において確認された弥生～古墳時代の旧流路などの遺構は，検出できなかった。

注１）小田桐淳「右京117次（７ＡＮＩＳＢ－２地区）調査概報」（㈶長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報　昭和57年度』1983年）

２）溝ＳＤ0803の国土座標値は，右京第117次調査の平板図（250分の１）をもとに算出した。

Ｘ＝－118,404.00　　Ｙ＝－27,520.20

３）高橋美久二他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1980－２）』1980年）

４）山本輝雄「長岡京跡右京第75次（７ＡＮＩＫＣ－３地区）調査概要」（長岡京市教育委員会『長岡京市文化財報告書第９冊』1982年）

付表2　右京第8次調査出土遺物観察表（番号は第21図～第23図に対応）

器種	器形	法量 口径(底径)	法量 器高	番号	器形の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色調
須恵器	蓋A	10.2	0.8	1	○平らな頂部を形成する ○口縁端部，ゆるやかに下方に向う(4)の他は，下方に短く屈曲する。 ○端部内部はわずかに肉をつける。 ○転用硯の可能性がある(2,4,5,6)	○外面端部，内面はロクロナデ。 外面天井部，ヘラ切りの後ナデ。	緻密 3～6㎜の砂粒を含むものがある(4,6)	焼成－良好 灰白色 内面鉄分の付着がみえる (2,3,4)
		12.8	1.4	2				
		16.6	1.5	3				
		9.2	1.4	4				
		8.2	1.3	5				
		19.2	1.8	6				
	坏A	12.2	4.3	12	○平坦な底部を持つ。 ○ゆるやかに外反する口縁部を持ち稜を成す(12)ものもある。	○内外面はロクロナデ。 ○外面底部はヘラ切りの後，回転ヘラケズリを施す。(時計回り－12) ○口縁端部は強いナデ。	緻密 表面黒色粒子がみえる	焼成－良好(12) やや軟(13) 暗青灰色(12) 灰白色(13)
		(底径) 8.2	－	13				
	坏B	12.2	3.8	7	○平坦あるいは，少し上方に向う底部よりゆるやかに立ち上り，やや外反する口縁部をもつ。 ○高台を有する。	○内・外面ともにロクロナデ。 ○高台の貼り付け痕アリ。 ○外面底部，ヘラ切りの後粗くケズリを残し，その後ナデ。	緻密	焼成－良好 灰色
		12.4	4.7	8				
		12.8	3.5	9				
		9.6	－	10				
		14.2	－	11				
	坏？	－	－	23	○墨書入り？。字は不明	○内・外面ともにナデ	緻密	焼成－良好 灰色
	甕	16.2	－	15	○口縁部は，ゆるやかに外反し，端部は斜め上につまみ上げられている。 ○端部，内側にわずかに返りがつく(15,16) ○焼成時のひずみがみられる(19)	○内・外面ともにロクロナデ。	緻密	焼成－良好 明灰色(15,16) 茶灰色(17,18) 灰白色(19)
		17.2	－	16				
		23.3	－	17				
		20.0	－	18				
		24.6	－	19				
	壺G	7.4	－	20	○頸部より，ゆるやかに外反しながら口縁部に至る。 ○内部にしぼり痕を残す(22) ○顕著な糸切り痕がみられる(27)	○粘土水uき。	緻密	焼成－良好 暗青灰色(20,21) 灰白色(22,27)
		6.0	－	21				
		5.9	－	22				
		(底径) 5.0	－	27				
	壺(底部)	12.0	－	26	○高台を有する ○高台はやや外反する	○内・外面ともにロクロナデ。 ○高台貼り付け痕アリ。 ○底部ナデ。	○砂粒を含む。 ○黒色粒子がみえる。	焼成－良好 灰白色
	鉢	－	－	24	○肩部大きな丸味を持つ。 ○頸部はなめらかに立ち上る。	○内・外面ともにロクロナデ。	緻密	焼成－やや軟(24) 良好(25) 淡茶灰色(24) 灰色(25)
		－	－	25				
土師器	埦A	10.9	3.5	28	○外面の底部と体部の境に薄く稜を成し，ゆるやかに彎曲しながら口縁部へと続く。 ○口縁端部はそのまま丸くおさめる。	○内面・全面ナデを施す。 ○c手法。	緻密 クサリレキがみえる。	焼成－良好 淡褐色
		12.2	3.5	29				
		13.4	3.6	30				
		12.0	3.5	31				
		12.9	3.9	32				
		12.8	4.0	33				
		16.0	4.0	37				

器種	器形	法量 口径(底径)	法量 器高	番号	器形の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色調
土師器	皿	7.4	1.2	34	○底部中央から口縁部に向って，やや平坦に延び，底部と口縁部を分ける稜が顕著でその稜からゆるやかに上方に向き，端部はそのまま丸くおさめる。 ○底部に凸凹がある(35)	○内・外面ともに不定方向のナデ。 ○底部に指頭痕(34,35) ○ナデの後，外面口縁部にミガキを施す(37)	緻　密	焼成－良好 淡褐色
		8.0	1.1	35				
	鉢(墨書人面型)	6.2	3.2	36	○底部はやや平坦で，ゆるやかに口縁部に向う。 ○口縁部は頸部から大きく外反し，端部を丸くおさめる。	○内面，口縁部下方，ハケ目が残る。 ○外面，口縁部はナデ。 ○体部は指押えで成形。 ○底部，内面は調整不明，外面はケズリ。	緻　密	焼成－良好 淡褐色
	甕	27.2	－	38	○短く「く」字状に外反する口縁部を持ち，端部は明確な稜がみられる。 ○体部については，残っていないので不明。	○口縁部，内・外面にハケ目を施す。 ○端部は強いナデ。	○砂粒を多く含む。 ○クサリレキがみえる。	焼成－良好 淡褐色
		15.0	－	39				
		－	－	40				
		－	－	41				
無釉陶器	皿	(底径) 6.0	－	14	○蛇目高台を持つ。 ○高台は中心から径1.5cmの範囲で段を成してケズリ取られている。	○高台の貼り付け痕アリ。 ○底部は回転ヘラケズリ(反時計回り) ○内・外面ロクロナデ。	緻　密	焼成－良好 暗青灰色 内面鉄分の付着アリ。
緑釉陶器	火舎	(底径) 22.4	－	42	○脚部はやや内彎気味にのびる。 ○脚部端部，内側に向って上り，下方へこみがつく。	○内・外面，横ナデ調整。 ○緑釉の混ぜが悪い為濃緑の斑点が出ている。	砂粒を含む	焼成－軟 黄茶色
瓦器	埦	12.1	－	43	○体部は内彎気味に口縁部へ続く。 ○内面丁寧な暗文(43,44)あるいは見込み部に螺旋状暗文(46)を施す。 ○口縁端部はやや外反気味で内面に沈線がみられる。 ○断面三角形の細い高台を持つ	○口縁端部に向ってナデ上げた痕跡がある。 ○底部は小片のため詳細不明 ○高台貼り付け痕アリ。	良　質	焼成－並 黒灰色
		13.2	－	44				
		10.0	－	45				
		(底径) 6.2	－	46				
		(底径) 7.6	－	47				
	鍋	－	－	48	○口縁部，わずかに斜上方を向いて断面方形をしている。	○内・外面，ナデ調整	良　質	焼成－良好 黒灰色
		－	－	49				
		－	－	50				
		32.6	－	51				
磁器	碗(青磁)	(底径) 4.2	－	52	○ほぼ垂直に下りる高台を持つ	○水uきロクロ成形 ○底部・中心部には抜き取り痕がある。	良　質	焼成－良好 淡い青灰色の青磁釉を施す。
	碗(白磁)	－	－	53	○口縁端部，おり返す際の亀裂がみえる。	○水uきロクロ成形。その後ナデ調整。	良　質	焼成－良好 乳白色の白磁釉を施す。

4．右京第19次（7ANPSJ地区）調査概要

1．は　じ　め　に

1．本報告は，1979年1月10日から1月12日まで，長岡京市下海印寺東山1番地において実施した右京六条四坊十四町に関する試掘調査の概要報告である。

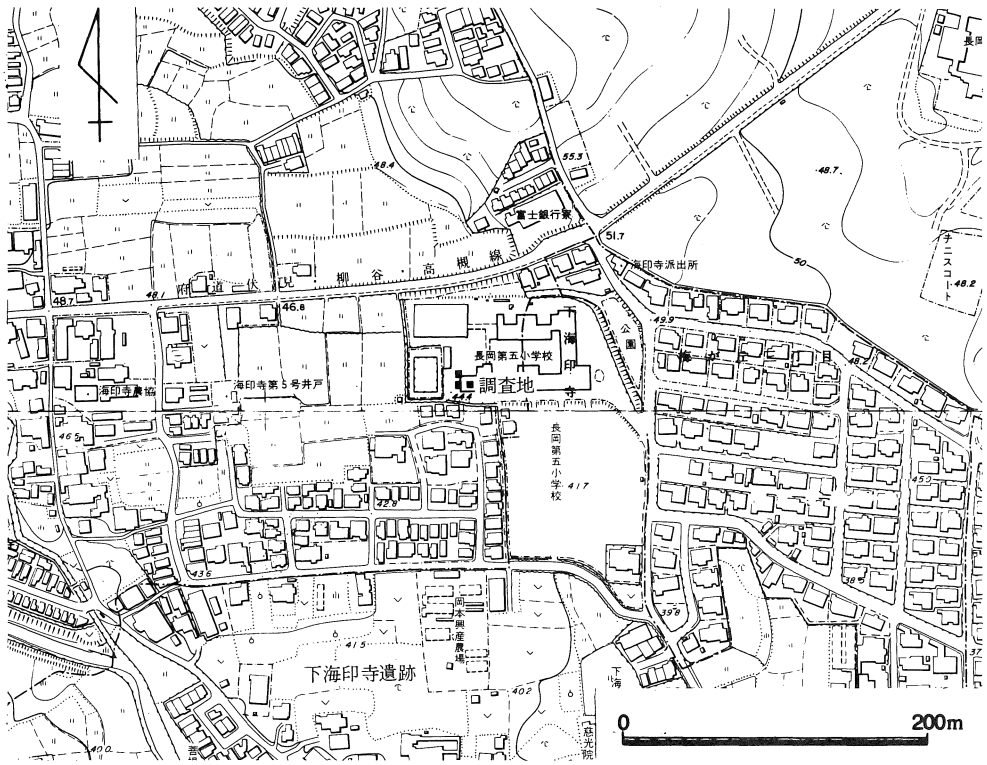
2．当調査は，長岡京市立長岡第五小学校校舎増築に伴い行ったものである。調査は，3m四方のグリッドを3ヶ所設定して行い、調査面積は合計27m²となった。

3．当調査は，長岡京市教育委員会が主体となり，長岡京跡発掘調査研究所に委託して行われた。現地調査は，長岡京市教育委員会社会教育課嘱託岩崎誠が担当し，橋本敏治，桜井春樹の両氏の協力を得て実施した。

4．遺構・遺物の整理，実測，トレースは，白川成明，辻林磨宏，西村益子の各氏が行った。

5．本書は，岩崎誠が編集・執筆した。

6．本報告書作成にあたり，財団法人長岡京市埋蔵文化財センターの協力があった。記して感謝したい。

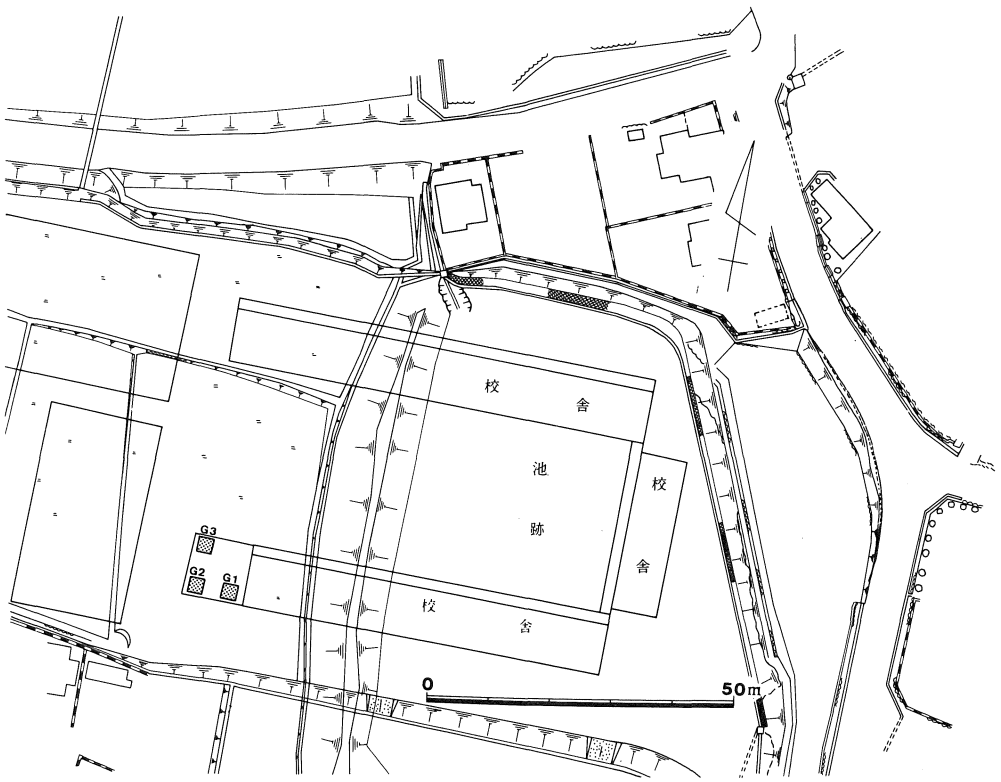


第25図　　調査地位置図

2．調査経過・調査概要

当調査地の南約100mの位置に，下海印寺遺跡がある。下海印寺遺跡では，先土器時代の遺物が表採されている他，4回にわたる範囲確認調査によって，縄文時代，弥生時代，古墳時代の遺物や，一部の遺構が確認されている。特に，古墳時代後期の住居址が発見され，しかも完形の製塩土器を伴っていたことで脚光を浴びた。また，当調査地は、長岡京跡右京六条四坊十四町に位置する。当地周辺では，現在まで長岡京に関する遺構は検出されていない。しかし，下海印寺遺跡における発掘調査によって長岡京時代の須恵器坏B，土師器埦A，土馬，布目瓦片等が出土している。このような周辺の発掘調査成果があるため，長岡京跡及び下海印寺遺跡に関する遺構・遺物の有無を明らかにするために試掘調査を行った。

調査は，3m四方のグリッドを，校舎増築予定地に3ヶ所設定した。堆積土層はいずれのグリッドも，基本的に変わるところがない。ただ第3グリッド（G3）においては，一部に堆積

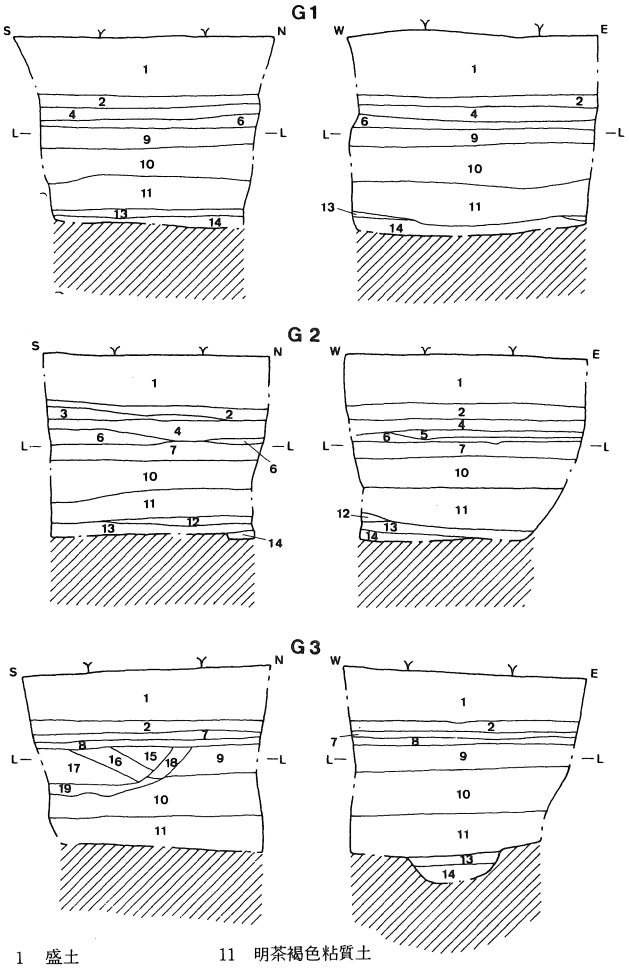


第26図　　調査地周辺図

の乱れが認められるが，他は全て水平堆積層である。第27図に示した第１層は盛土で，第２～８層は旧耕土と旧床土である。第９～14層は自然堆積土層である。遺物が出土するのは第２層から第10層までで，それ以下は無遺物層である。Ｇ３において認められた層の乱れは，第８，９層間の出来事であり，上下の層の出土遺物から，中世段階であることがわかる。

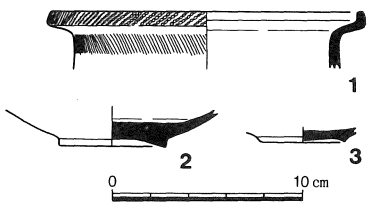
出土遺物（第28図）には，瓦器埦（３）や土師器の中世遺物，平安時代の須恵器埦（２），弥生時代の甕（１）などがある。いずれも小片である。

以上のように，遺構は検出されなかったものの，弥生時代，平安時代，鎌倉時代の各遺物片が出土した。これらの遺物は，全て，中世包含層（第２～10層）からの出土であり，良好な出土状況とはいいがたい。また，長岡京に関する資料を得ることもできなかった。しかし，当地周辺に弥生時代後期や平安時代，鎌倉時代の遺構が所在すると思われる。さらに細かい検討については，周辺地の調査を待ちたい。



1　盛土
2　暗灰青色粘質土
3　淡青緑灰色粘質土
4　淡緑青灰色砂質土
5　灰褐色砂質土
6　黄茶褐色砂礫土
7　淡灰褐色砂質土
8　黄褐色砂礫土
9　淡茶灰色砂質土
10　茶灰色砂質土
11　明茶褐色粘質土
12　淡黒褐色粘質土
13　黒褐色粘質土
14　明灰茶褐色砂礫土
15　黄茶灰色砂質土
16　黄灰色砂質土
17　黄褐色砂礫土
18　黄褐色砂質土
19　灰色砂質土

第27図　　グリッド土層図



第28図　　出土遺物実測図

5．右京第20次（7ANIKU地区）調査概要

1．は　じ　め　に

1．本報告は，1979年1月15日から1月19日まで，長岡京市今里5丁目20－1において実施した右京三条三坊九町と今里遺跡に関する試掘調査の概要報告である。

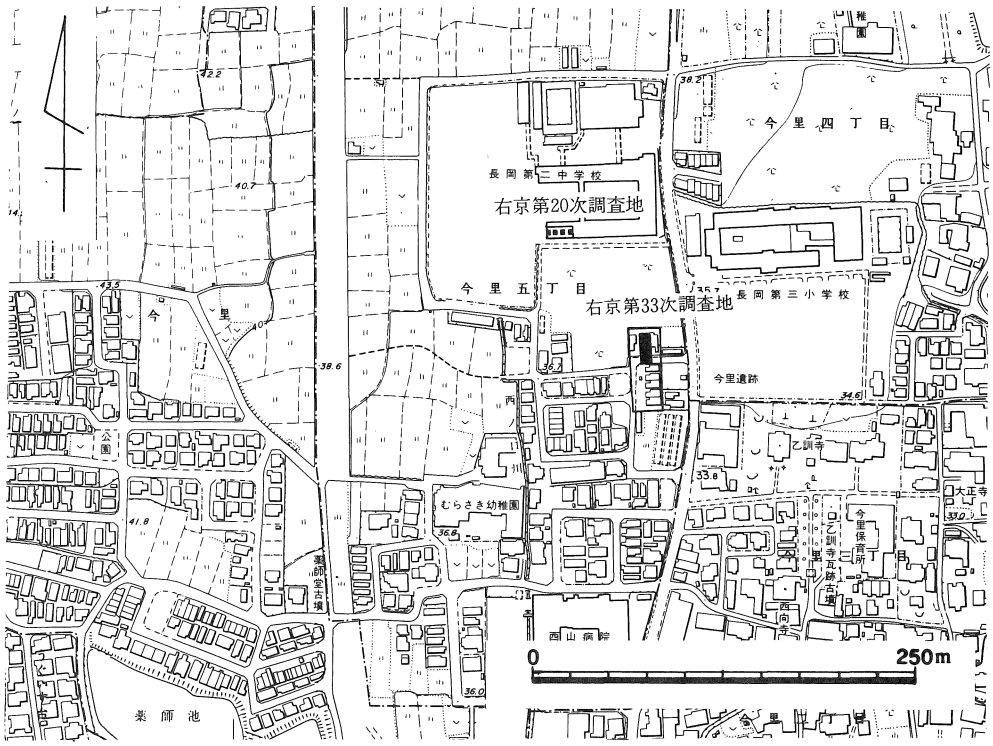
2．当調査は，長岡京市立長岡第二中学校校舎増築に伴い行ったものである。調査は，3m四方のグリッドを4ケ所設定し，総計36m²について行った。

3．当調査は，長岡京市教育委員会が主体となり，長岡京跡発掘調査研究所に委託して行われた。現地調査は，長岡京市教育委員会社会教育課嘱託岩崎誠が担当し，橋本敏治，田中明人，桜井春樹，原田滋夫氏の各氏の協力を得て行った。

4．遺構，遺物の実測・整理，トレースは，白川成明，辻林磨宏，西村益子，原田滋夫の各氏が行った。

5．本報告は，岩崎誠が執筆・編集した。

6．本書作成にあたり，財団法人長岡京市埋蔵文化財センターの関係諸氏から，多大な協力を得た。記して感謝したい。

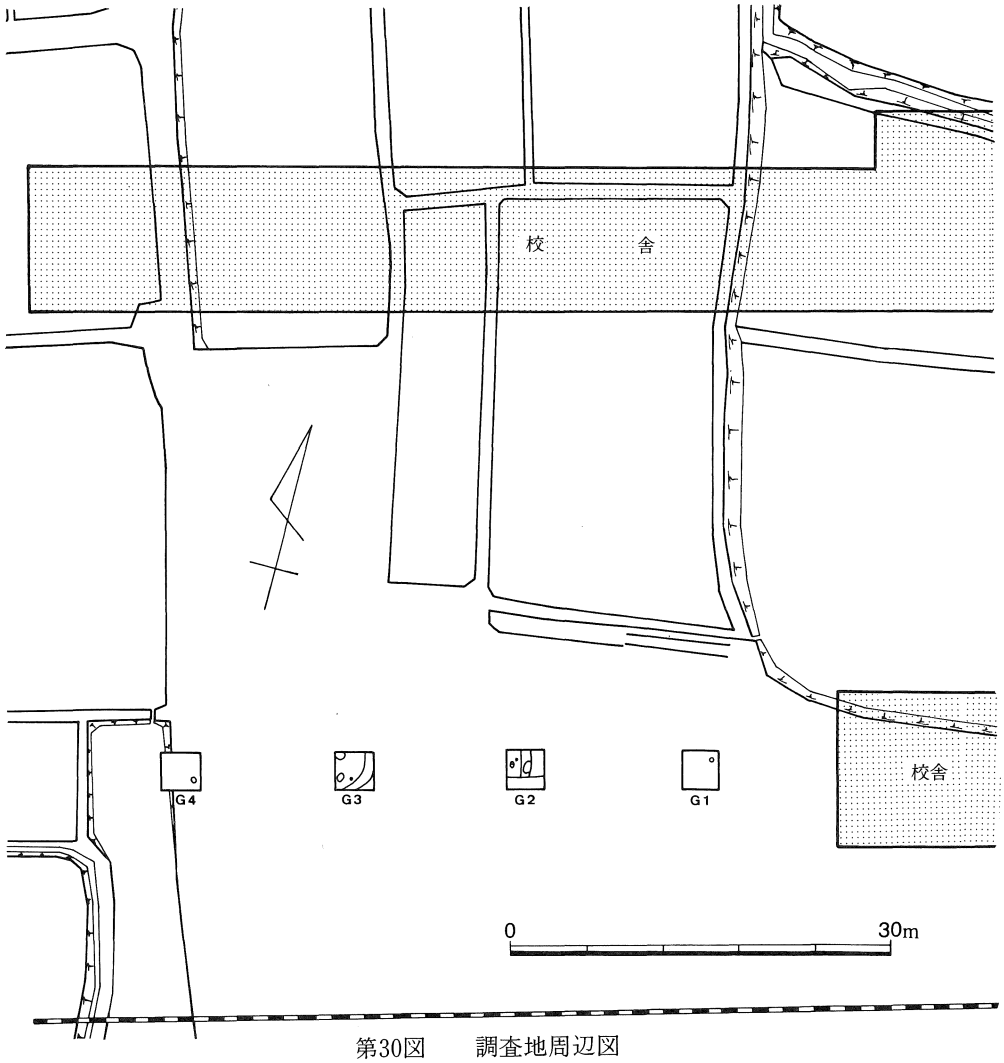


第29図　　調査地位置図

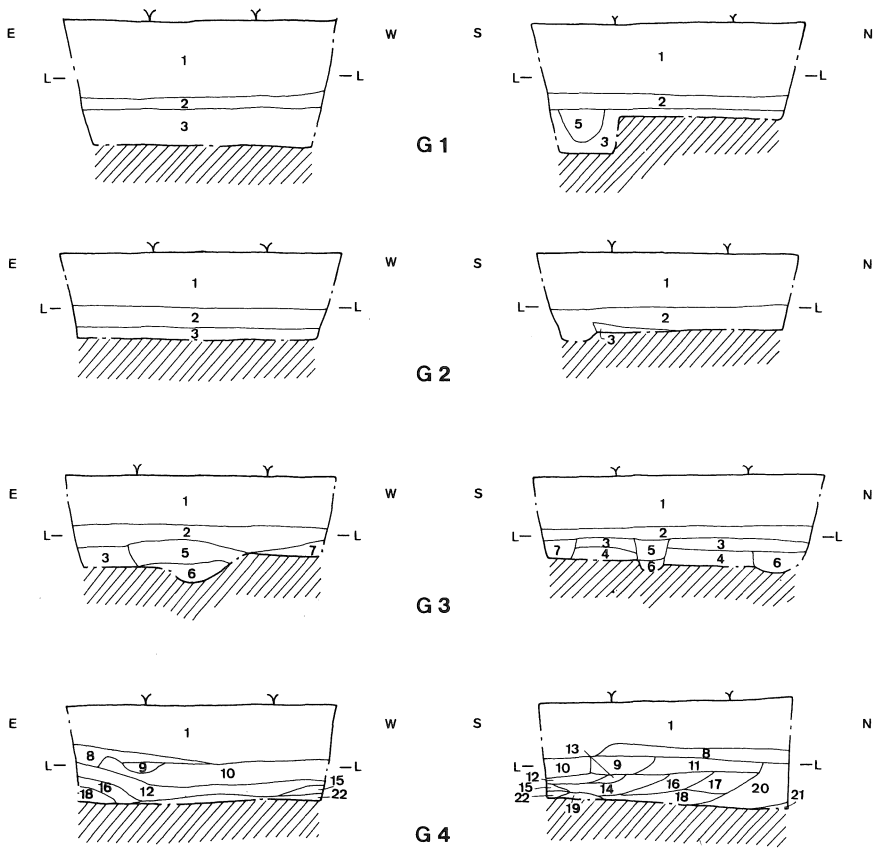
2．調査経過・検出遺構

当調査地は，長岡京右京三条三坊九町に推定されており，弥生時代から古墳時代の集落跡である今里遺跡にあたり，東南では乙訓寺，西北では井ノ内遺跡と近接している。したがって校舎増築部分に，３m四方のグリッドを４ケ所設定し，試掘調査を行った。調査は，重機により盛土，薮土を除去し，遺構検出作業にはいった。設定したグリッドは，東からＧ１，Ｇ２…と呼ぶ。

各グリッドから，土師器小片が出土したが，残存状況が悪く，全て薮土内からの出土であった。Ｇ１からＧ４の各グリッドで，ピット状遺構が確認されたが，遺構埋土は薮土であり，遺物は出土しなかった。Ｇ３，Ｇ２からは溝状遺構や土壙が検出されたが，埋土はやはり薮土であり，遺物は出土していない。



第30図　　調査地周辺図



1　盛土
2　灰色砂質土（旧耕土）
3　茶褐色粘質土（礫混り）
4　褐色砂礫土
5　黒褐色砂質土
6　黒褐色枯質土
7　淡黄褐色砂質土
8　灰茶褐色砂質土
9　暗茶褐色砂質土
10　褐色砂質土
11　茶褐色砂質土
12　褐色砂礫土
13　黄褐色砂礫土
14　褐色粗砂
15　暗黄灰色砂質土
16　褐色砂礫土
17　暗褐色砂質土
18　黒褐色砂礫土
19　淡黄色砂質土
20　暗褐色砂礫土
21　黄褐色砂質土
22　淡黄褐色砂礫土

第31図　　グリッド土層図

これらの遺構は，80～100cmの盛土，12～20cmの旧耕土（灰色砂質土）の下，地山層上面での検出である。G４では，旧耕土と地山層との間に灰茶褐色砂質土が堆積しており，薮土と思われる。このように，各グリッドの土層観察によって，竹薮が開削されて水田にされた後に，100cmの盛土がされ，現在の第二中学校が建設されたということがうかがえる。

3．出　土　遺　物

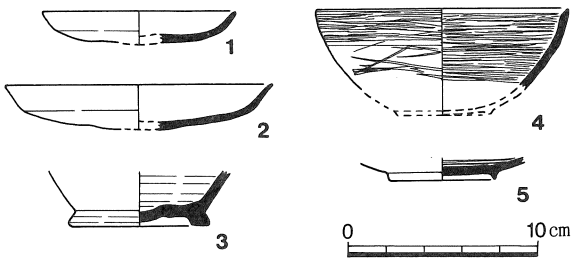
当調査では，薮土と旧耕土から瓦器，土師器，須恵器，サヌカイト剥片が採集された（第32・

33図)。(1・2)は土師器皿である。(1)は直径10.2cm，器高1.8cmを測る。底部は成形時の凹凸を残し，口縁部と内面には，横ナデを施している。(2)は直径14.2cm，器高2.3cmを測る。調整は(1)と同じ手法によっている。(4)は瓦器埦の口縁部で，復原口径13.2cmである。内面から口縁部外面にかけては，ナデ整形によっているが，体部外面は指圧痕を残す。ナデ整形を施した部分は，比較的細かい密なヘラ磨きを行っているが，体部外面は，粗いヘラ磨き調整を施している。口縁端部は内傾し，狭い面をつくりだしている。口縁端部内面には，わずかながら沈線を認めることができる。(5)は瓦器埦の底部片である。高台は，断面三角形を呈し，低く粗い作りである。内面は，ナデの後ヘラ磨きを行っている。(3)は須恵器壺の底部片である。貼り付け高台をもつロクロ成形の小片である。

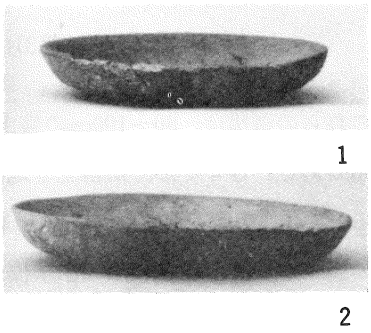
4．ま　と　め

今回の調査では，長岡京跡，今里遺跡，井ノ内遺跡，乙訓寺跡に関する遺構は検出されなかった。そのため，グリッドによる試掘調査にとどめざるを得なかった。各グリッドの土層観察から推して，当調査地は，竹藪開削の際に遺構がすでに破壊されたものと思われる。しかし，遺物は少量ながら出土しており，須恵器類のほとんどが長岡京跡に関係し，サヌカイト剥片は，弥生時代以前の遺跡の存在を意味し，瓦器，土師器類は，鎌倉時代の今里旧村落に関係するものであると思われる。乙訓寺跡に関しても，東接する長岡第三小学校内の発掘調査によって，乙訓寺の講堂や僧房と推定される建物が検出されており，当地は重要な位置にあたる。

以上のことから，今回の調査で遺構が検出されなかったものの，当地周辺は関係各遺跡の内容を明らかにする上で重要である。



第32図　　出土遺物実測図



第33図　　出土遺物写真

6．右京第33次（7ANIKU－2地区）調査概要

1．は　じ　め　に

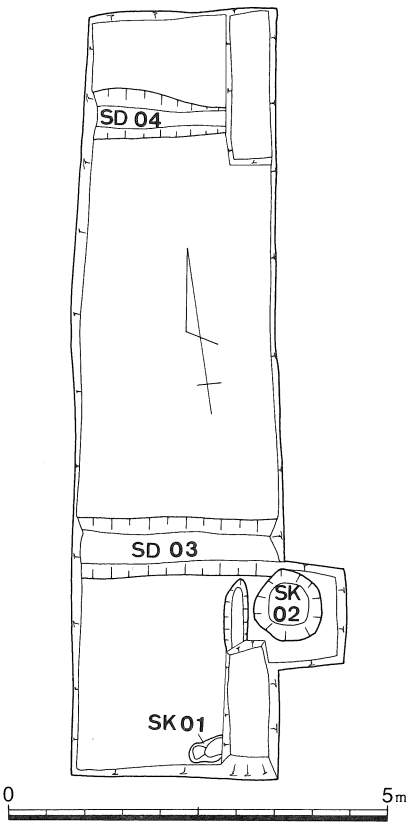
1．本報告は，1980年2月25日から2月29日まで，長岡京市今里五丁目（旧今里岸ノ上）において実施した長岡京跡右京三条三坊十町に関する発掘調査の概要報告である。

2．本調査は，宅地開発に伴うもので，約36㎡を調査した。

3．調査は，長岡京市教育委員会が主体となり，長岡京跡発掘調査研究所に委託して行われた。現地調査は，同研究所員竹井治雄が担当し，調査補助員として小国宏樹，波多野徹，橋本敏治の各氏の参加があった。

4．調査後の図面整理は丸山美子が担当し，本報告の執筆は竹井治雄が行った。

5．調査位置は第29図にあわせて記した。

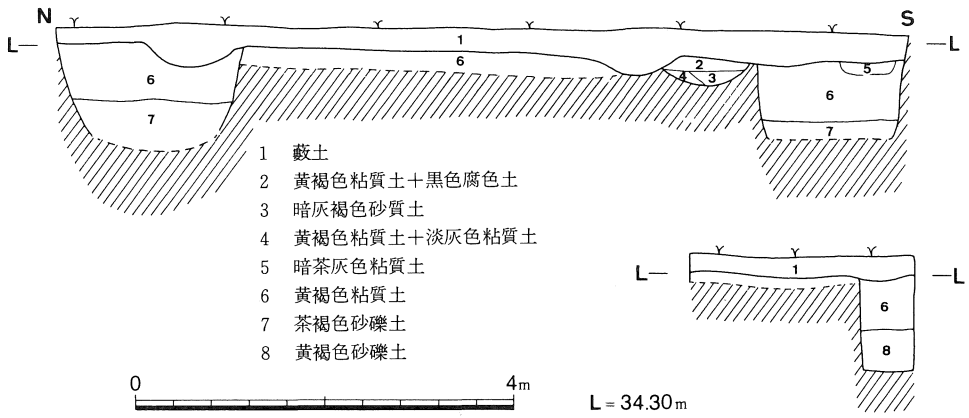


第34図　　検出遺構図

2．調　査　経　過

本調査地は，西山丘陵から東へ広がる，西から東へゆるやかに傾斜する低位段丘上の東端部に位置する標高34～35mの平坦地で，今日まで竹藪であった。調査地周辺には，弥生時代～古墳時代の集落址である今里遺跡と乙訓寺がある。当地北方の長岡第二中学校内で行われた右京第3・4次調査では，弥生土器や長岡京時代の建物1棟などが検出されている。一方，東側に隣接する長岡第三小学校の建設に伴って，推定乙訓寺の講堂，回廊等が検出され，また，それ以前のものと思われる掘立柱穴が多数でている。

こうした成果を踏まえ，本調査では今里遺跡および長岡京跡とくに当時の乙訓寺の様相を解明する資料が得られることを期待し，調査を実施した。調査対象地は，既に竹藪を開削し造成整地が完了しており，道路布設・宅地区画さらに一部で棟上げが行われていたが，工事による掘削は地山まで達しておらず，遺構，遺物が十分遺存していると判断した。このため，トレンチの設定につい



第35図　　調査地土層図

ては，敷地の北半部の制約を受け，調査面積も狭くなった。

3．調　査　概　要

トレンチで確認した層位は，竹藪の置土，黄褐色粘質土層，茶褐色砂礫層，黄褐色砂礫層の順に堆積しているが，竹藪の置土以外は南へゆるやかに傾斜している地山である。遺構は，置土直下の地山面を精査して検出された。なお，以上の層序は，先に本冊で報告されている右京第20次調査地の土層と類似する点が多いと考えられる。

検出された遺構は，土壙２基，溝２条である。

土壙ＳＫ01　　トレンチ南端部で柱穴状の遺構が２個切り合って検出された。いずれも直径30～35cm，深さ20cmを測り，断面は椀状を呈し，褐色腐植土が堆積している。

土壙ＳＫ02　　トレンチ南半部の東側で検出した径85cmの円形を呈する土壙である。断面は，壁面の立ち上がりの緩やかな皿状を呈し，深さ30cmを測る。上層では黄褐色粘質土に黒色腐植土が混り，下層では淡灰褐色粘質土が堆積している。土壙ＳＫ01・ＳＫ02はいずれも遺物を出土しなかった。

溝ＳＤ03　　トレンチ南半部で東西に走る幅70cm，深さ15cmの溝が検出された。断面は浅い皿状を呈し，竹藪の置土が堆積している。

溝ＳＤ04　　溝ＳＤ03の北方約６ｍで東西方向に走る幅60cm，深さ25cmの溝を検出した。断面は，椀状を呈している。溝ＳＤ03の埋土と同様に竹藪の置土が堆積している。

溝ＳＤ03と溝ＳＤ04は，埋土から竹藪の地境溝であると思われる。

他に，調査トレンチの南８ｍ地点で行われていた住宅建築の基礎掘り工事の立会調査の際に，弥生土器を数片出土した土壙状の落ち込みを検出した。　以上のように，今回の調査では，今里遺跡に関する弥生時代の土壙を検出したのみで，長岡京跡や乙訓寺に関する資料は得られなかった。

7．右京第34次（7ANPHO地区）調査概要

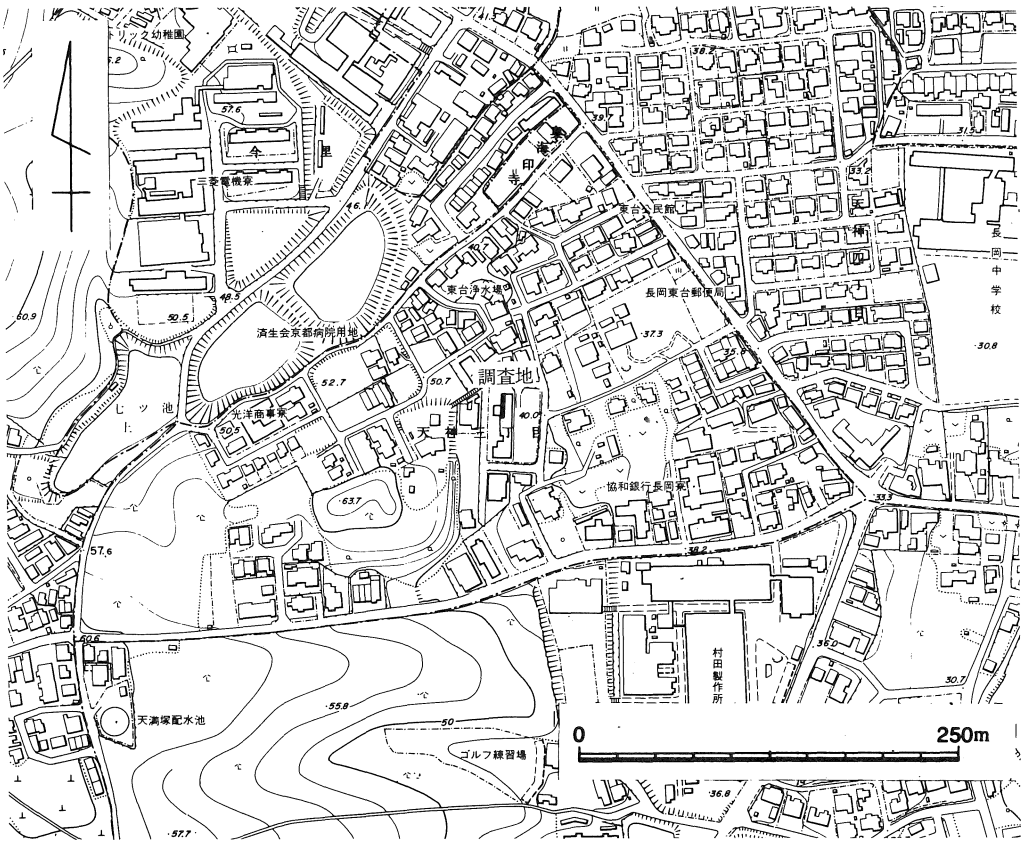
1．は　じ　め　に

1．本報告は，長岡京市天神三丁目17において，1980年2月25日から2月29日まで実施した，長岡京跡右京五条四坊七町に関する発掘調査の概要である。

2．今回の調査は，グンゼ産業（株）の長岡寮建設に伴う事前の調査であり，調査面積は約37㎡であった。

3．発掘調査は，長岡京市教育委員会が主体となり，長岡京跡発掘調査研究所に委託して実施された。現地調査は，教育委員会社会教育課嘱託山本輝雄が担当し，補助員として上山和宏，山田昌和，橋本敏治の各氏の参加・協力があった。

4．本報告の執筆ならびに編集は山本が行った。

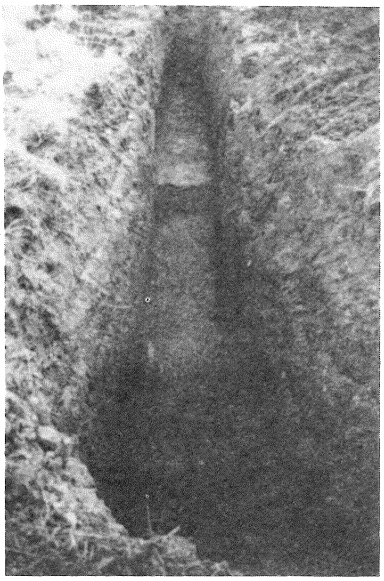


第36図　　調査地位置図

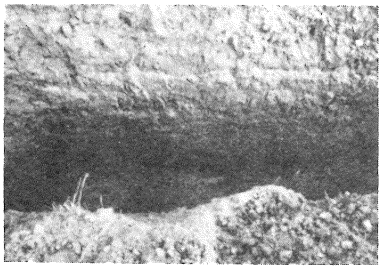
2．調　査　概　要

今回の調査地は，標高約45.5mの西から東にのびる丘陵の先端部に位置し，長岡京の条坊では右京五条四坊七町にあたるところである。この地域は丘陵部であり，条坊の存在が疑問視されているところであるが，遺構・遺物の有無を確認する目的で，南北に幅2.3m，長さ16.2mのトレンチを設定した。調査地は，すでに造成され，盛土が厚く施されており，その下には赤褐色粘質礫混り土，褐色粘質土が堆積し、淡赤褐色粘質土の地山面に至っている。二次的な堆積層である赤褐色粘質礫混り土から陶器の茶碗の破片が一点出土したのみで，その他の遺物はもとより遺構もまったく検出されなかった。

以上のように，当地はかなり削平を受け，盛土整地されていることが確認された。しかしながら，当地の近辺では太鼓山窯跡や南平尾古墳等も確認されており，今後とも丘陵地の充分な調査が期待される。



第37図　調査地全景(北から)



第38図　調査断面写真(東から)

8．右京第35次（7ANITT－2地区）調査概要

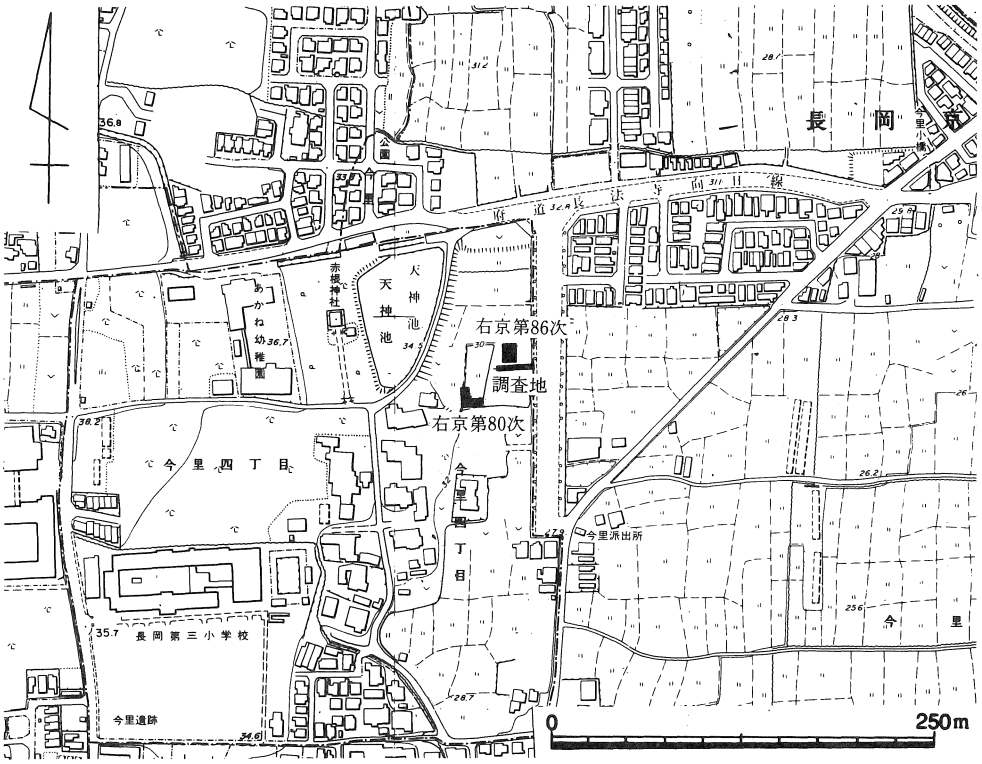
1．は　じ　め　に

1．本報告は，長岡京市今里四丁目26—1，27において1980年2月26日から3月26日まで実施した，長岡京跡右京二条三坊四町及び今里遺跡に関する発掘調査の概要報告である。

2．今回の調査は，㈱山中商事による宅地造成工事に伴う事前調査であり，発掘調査は，造成予定地の内，道路予定部分約72m²を対象として行った。

3．発掘調査は，長岡京市教育委員会が主体となり，長岡京跡発掘調査研究所に委託して行われた。現地調査は，長岡京市教育委員会社会教育課嘱託山本輝雄，京都府埋蔵文化財調査員久保哲正がそれぞれ担当した。現地発掘調査にあたっては，作業員として，能勢秀夫，小山由太郎，岩岸常太郎の各氏，補助員として，波多野徹，岡田義人，谷本進，加藤岳司，小川忠夫，上坂昇，木立雅朗の各氏それぞれより協力を得た。

4．調査後の遺物整理，整図は，主に西村良子，波多野徹，白川成明，小塩礼子，丸山美子が行った。



第39図　　調査地位置図

5．本書の執筆は，久保哲正が行い，編集は，百瀬ちどりが行った。

6．本報告を行うにあたり，現地調査及び報告作成全般にわたり指導助言を頂いた京都府教育庁指導部文化財保護課記念物係長堤圭三郎，同課技師高橋美久二の各氏，及び，現地調査に御便宜を頂いた㈱山中商事の方々に対し，ここに記して感謝の意を表したい。

2．調査経過・調査概要

本調査地は，長岡京域を西北から東南に向けて貫流する小畑川の西岸に位置し，その氾濫原が西方の洪積台地に接する傾斜変換線に沿った地点である。現状は，水田及び畑地であり，北西から南東に向かってゆるやかに傾斜するものの比較的平坦な地形を示している。今回の調査は，民間業者による宅地造成工事に伴う事前調査であるが，造成予定地の内，掘削対象となる道路面約72㎡を発掘調査することとした。この付近は，長岡京跡右京二条三坊四町に相当するとともに，旧石器時代から平安時代に至る遺構・遺物の存在で知られる今里遺跡の範囲にも含まれるところである。こうした関係から，この周辺については，昭和52年の右京第７次（７ＡＮＩＴＴ地区）調査(注1)を始めとして，これまでに多数の調査が行われてきている。中でも，今回の調査地のすぐ東側，京都府外環状線街路改良工事に伴う右京第７・12・26次調査の北方部地区においては，弥生時代の竪穴住居や古墳時代の竪穴住居，掘立柱建物等の集落跡をはじめとして，長岡京時代の条坊遺構や，平安時代の旧河道，掘立柱建物等が多数検出されている。また，本調査地の北及び南に隣接した地点の右京第76次（７ＡＮＩＴＴ－４地区(注2)），80次（ＩＴＴ－５地区(注3)），86次（ＩＴＴ－７地区(注4)）のそれぞれの調査地においても，弥生時代から平安時代にかけての集落遺構や遺物が検出確認されている。

こうしたことから，今回の調査においても，上記のような各時代の遺構の存在が予想されていたが，何分にも調査面積が狭少であったことと，調査地の東側の大半を占めた平安時代の旧河道によって，各時代の遺構検出という点では，当初の予想を下回る結果となった。しかし，検出された遺構や遺物は，他の調査地と同様に，弥生時代から平安時代にわたる長い歴史の足跡を示すものであった。

3．検　出　遺　構

(1) 土　層

調査地は，水田であり，耕作土が30㎝余りの層をなし，その耕作土・床土の下に，東側では灰褐色砂質土が，西側では褐色の砂まじり土が10～15㎝の厚さで堆積している。東側の灰褐色砂質土については，その下層で検出された川跡ＳＤ3501の影響によるものと思われる。褐色の砂まじり土中では，中世の瓦器，土師器片が検出されている。平安時代の溝と思えるＳＤ3502は，この下層より掘り込まれていた。この遺構下に暗褐色土や暗褐色砂質土といった古墳時代

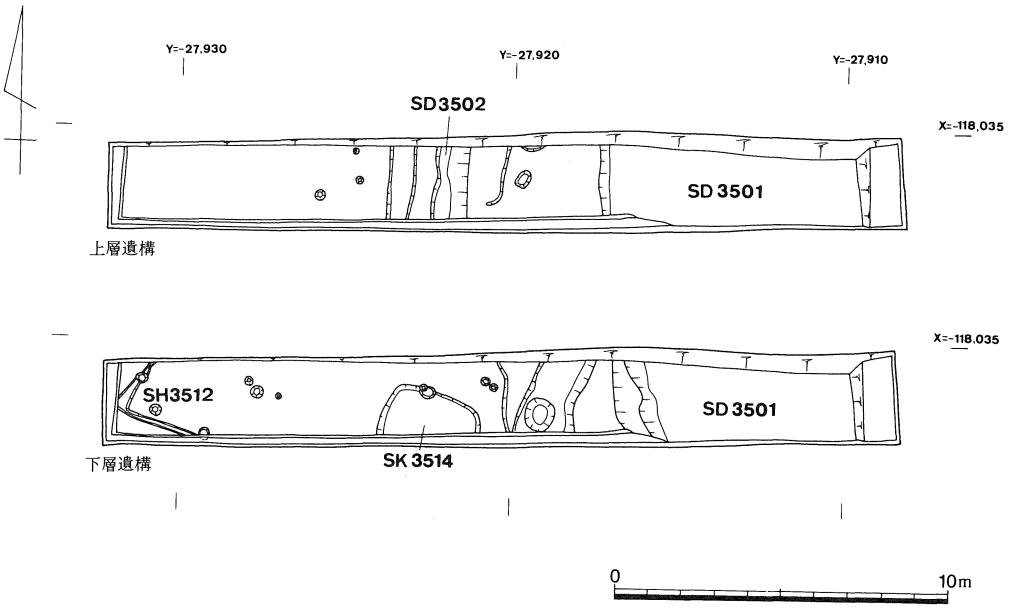
の遺物を包含する層が堆積し，暗青灰色粘土の地山に至るといった状況である。古墳時代の住居跡ＳＢ3512は暗褐色砂質土を切り込み，弥生時代の土壙ＳＫ3514は地山である暗青灰色粘土層に掘り込まれた状態であった。以下，各遺構についての概略を述べるが，いずれの地層面も似通った色調を示し，遺構の検出は困難を極めた。

(2)　**上層遺構**（図版13）

上層遺構としては，平安時代と思える旧河道及び，溝等が検出されているが，いずれも，灰褐色砂質土を掘り込む状況で検出されている。以下，主な遺構について説明を加える。

川跡ＳＤ3501　　この溝は，先にも述べた，右京第７次（７ＡＮＩＴＴ地区）調査で検出されたＳＤ0705[注5]に対応する川跡と思えるものである。その調査結果から，この川跡は，北西方向から南東に向けて流れていたものと推定されているが，今回の調査によって，その西肩を確認することができた。そして，この検出した川跡の西肩より西方には薄い砂層が広がる程度であり，流路としての機能は，このＳＤ3501西端を西限にしているものと考えられる。川幅については，ＳＤ0705のどの流路と対応するのか不明なため，確定し得ないが，深さは１ｍであった。遺構内に堆積した砂礫内からは，弥生時代から平安時代までの土器・瓦が層位，深度に関係なく混在していた。

溝ＳＤ3502　　調査地のほぼ中央部で検出された南北方向の溝である。全長２ｍ，幅2.4m，深さ0.35mを測る。この溝の北側延長部については，すぐ北に隣接した右京第86次調査地[注6]で検出されたＳＤ8606として確認されており，さらに南北走するものと思える。溝の形成状況もＳＤ8606と同様であり，東側が比較的直線のはっきりしたラインを示すのに対し，西側は，幾段



第40図　　検出遺構図

にも掘り込まれた状況であった。溝中からは，細片化した須恵器片，土師器片が出土しており，遺構の掘り込まれた土層等の状態も合わせて，この溝の掘削された時期は平安時代と推定される。

(3)　下層遺構

竪穴住居址ＳＨ3512（図版14）　　調査地西端で確認された竪立住居跡である。方形の住居跡の北西辺と南西辺が確認されたのみで，いずれも一辺の長さは確認できなかった。壁溝と思われる溝の一部が検出されただけで，周壁は削平されていた。壁溝と思える溝の幅は10～20cm，深さは４cm程であった。この溝内からは，古墳時代と思われる須恵器片や土師器片が出土しているが，いずれも細片のため，時期の確定には苦しむところである。

土壙ＳＫ3514（図版14）　　調査地中央，上層遺構ＳＤ3502の下層で確認されたものである。北側半分で一辺2.9m，深さ20cmが確認されているが南半分については不明である。遺構内より弥生土器の細片が出土しているが，細かな時期判定は難しい。遺構の性格としては，規模の点や，壁の立上り方が少し傾斜するといったことから確定はし難いが，住居跡としての可能性が大きいものと思える。

４．出　土　遺　物

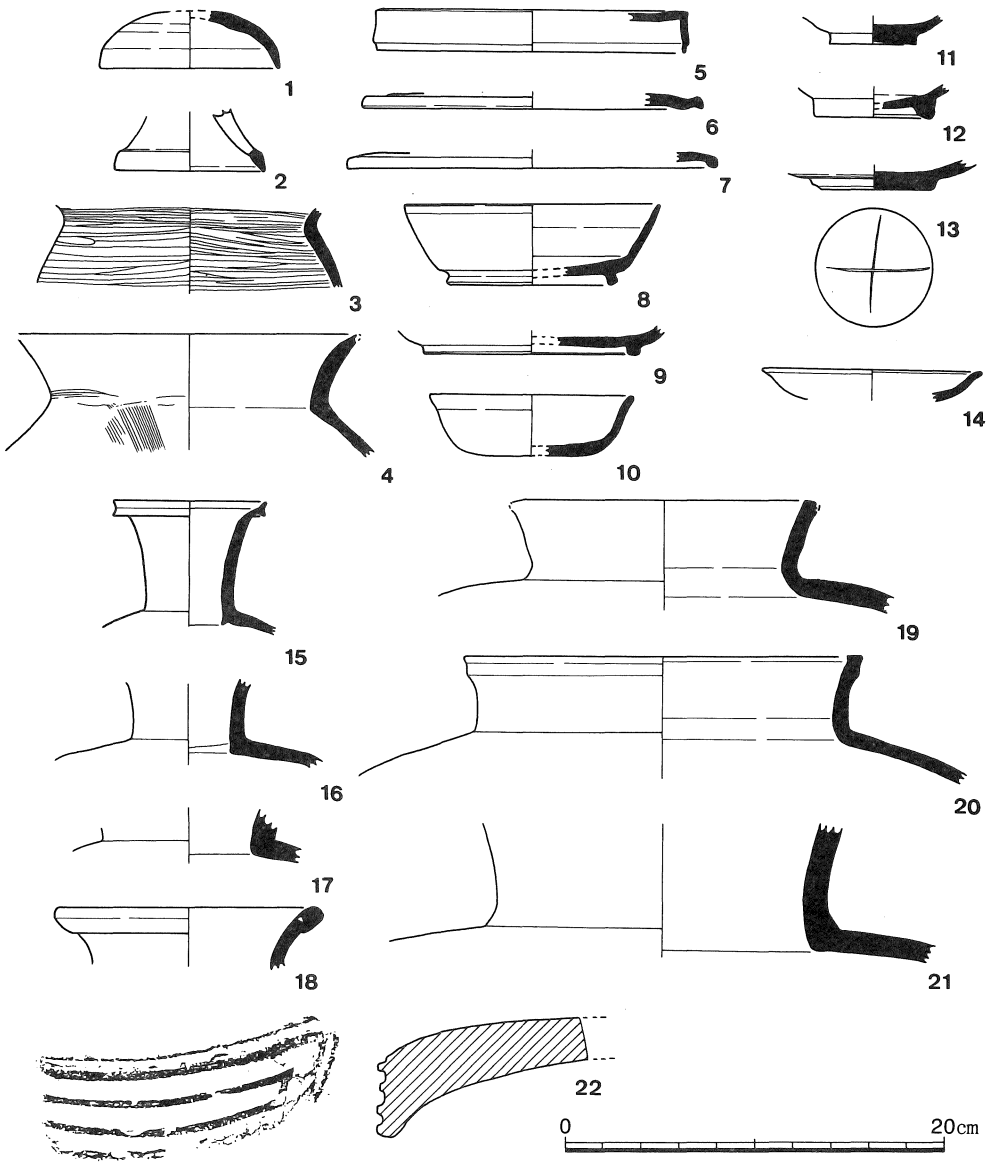
今回の調査によって出土した遺物のうち，実測が可能であったものは，全てＳＤ3501より出土したものである。遺物は，全て河川の流れによって，かなりの磨滅を受けていた。

川跡ＳＤ3501出土遺物（第41図）　　遺構埋土の中から，各時期の遺物が混在して出土している。古いものは弥生土器から，新しくは，平安時代までの各種土器片，瓦片が出土しているが，図示し得たのは，古墳時代以降のものである。須恵器坏蓋（1），須恵器坏脚部（２）が古墳時代のものと思われ，大阪府陶邑の編年[注7]Ⅱ型式でも後半に属すると考えられる。そのほかのものは歴史時代に属するものであり，３，４，14が土師器の甕，皿，22が瓦で，これ以外は全て須恵器である。須恵器は，壺の蓋（５），坏蓋（６，７），貼り付け高台の坏（８，９，12），埦（10），円盤高台の坏または埦（11，13），壺（15，16，17，18），甕（19，20，21）等である。(11)は，糸切の底部である。(13)の底部外面には，「十」字形のヘラ記号が付され，内面は，調整痕が消える程磨かれており，かすかなスス状の痕跡から，転用硯の可能性もある。(22)は，重画文軒平瓦であり，瓦当部は，平瓦部に比して，若干肥厚させている。焼成は良好であるが，川の流れを受けてかなり磨滅している。

５．ま　　と　　め

今回の調査によって検出された遺構は，弥生時代から平安時代にまたがる長い時代の生活の営なみを示すものであった。しかし，川跡ＳＤ3501が，今時調査地の大きな面積を占めたこと

からもわかるように，他の遺構や遺物については，若干乏しいものとなっている。調査面積が少なく，細長いものとなったため，各遺構の単位が把握できなかった点も残念なことであった。調査の結果としては，以上のようなことであったが，この地域については，近時，各機関によって，小面積単位ながらも調査が進んでおり，こうした調査の積み重ねによって今里遺跡の全



第41図　　溝ＳＤ3501出土遺物実測図

容が徐々にではあるが解明されていることは喜ばしいことであり，今回の調査もそうした全体の遺跡に関する調査研究の一助となれば幸いである。また，この地域については，今後とも開発行為に対して充分な対応が望まれるところである。

注１）高橋美久二他「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1979)』1979年）

２）山口博「長岡京跡右京第76次発掘調査概要（７ＡＮＩＴＴⅣ地区)」（財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報第３冊』1982年）

３）山本輝雄「長岡京跡右京第80・86次（７ＡＮＩＴＴ－５・７地区）調査概要」（長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書第９冊』1982年）

４）注３に同じ

５）注１に同じ

６）注３に同じ

７）田辺昭三『陶邑古窯址群１』（1966年）

9．右京第37次（7ANINE地区）調査概要

1．は　じ　め　に

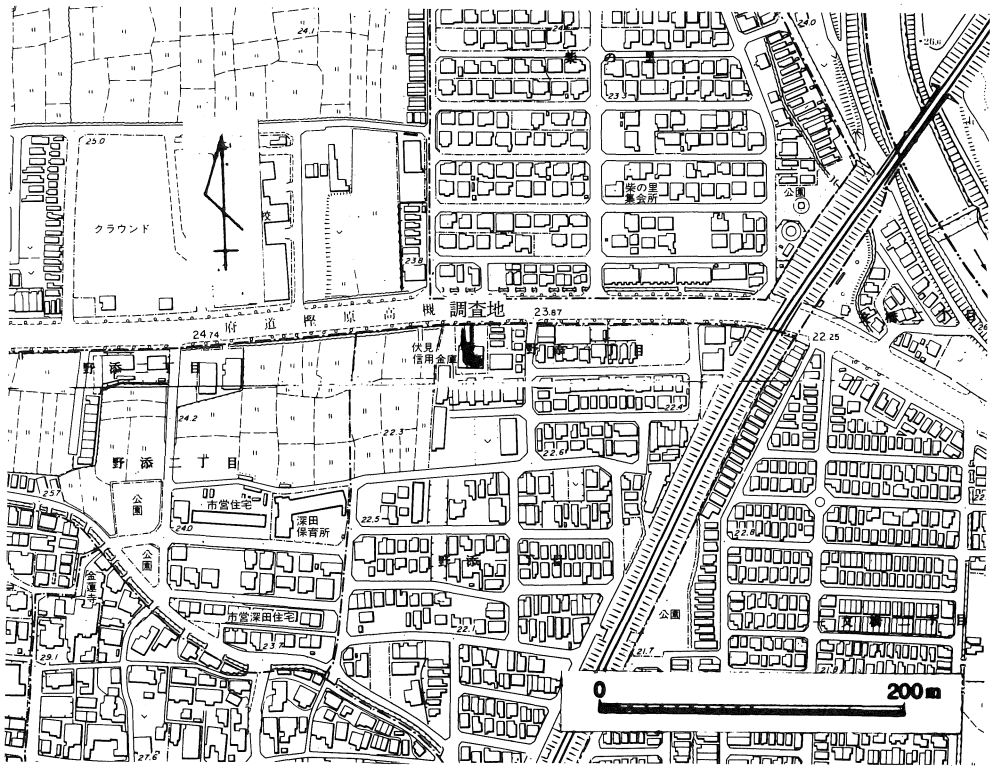
1．本書は，1980年4月28日から5月28日まで，長岡京市野添一丁目44—1において実施した右京三条二坊四町に関する発掘調査の概要報告である。

2．当調査は，（株）伏見信用金庫の店舗新築に伴うものである。646m²の開発面積に対し，残土置場の関係上，133m²のトレンチ調査を行った。

3．当調査は，長岡京市教育委員会が主体となり，長岡京跡発掘調査研究所に委託して行われた。現地調査は，長岡京市教育委員会社会教育課嘱託岩崎誠が担当し，地元住民の方々をはじめ，白川成明，辻林磨宏，滝本直人，常田博，小熊秀明，中村保彦の各氏の協力を得て実施した。

4．遺物整理，実測は見目とも子が，遺構図面整理，遺構・遺物トレースは，白川成明，西村益子，丸山美子，西川裕子が行った。

5．本書は，岩崎誠が編集し，1から3までを岩崎誠が，4を見目とも子が，5を伊辻忠司が、



第42図　　調査地位置図

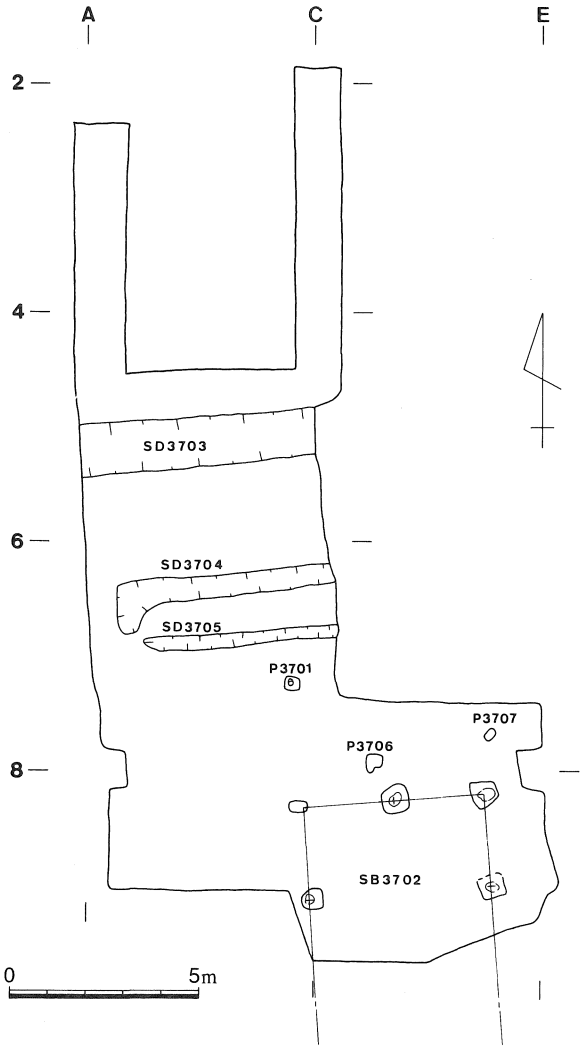
6を白川成明と岩崎誠が各々分担執筆した。

2．調　査　経　過

本調査は，付近の調査において，水田下約80cm以下で青色の粘土が確認されており，付近一帯が氾濫平野であったことが明らかとなっている。長岡京については，平城京型条坊復原によると，右京三条二坊四町の北辺に位置しており，調査地内に三条第二小路の南側溝が確認される可能性もあった。

当調査では，条坊遺構と宅地部分の遺構検出に主目的をおいた。したがって，トレンチも，南北方向に長いサブトレンチを2箇所設定した。しかし盛土が厚いため，残土置場に面積をとられたうえ，地盤が軟かい土層であるため，トレンチの壁が度々崩れ，調査参加者を苦しめ調査を困難にした。

当調査は，盛土と旧耕作土，床土を重機により除去し，灰色粘土層上面から人手による調査を開始した。灰色粘土層上面では遺構は検出されず，その下の青灰色粘土層上面で溝やピット等が検出された。灰色粘土層には，瓦器をはじめ，須恵器，土師器，瓦片等が出土し，中世包含層であることが明らかとなった。



第43図　　検出遺構図

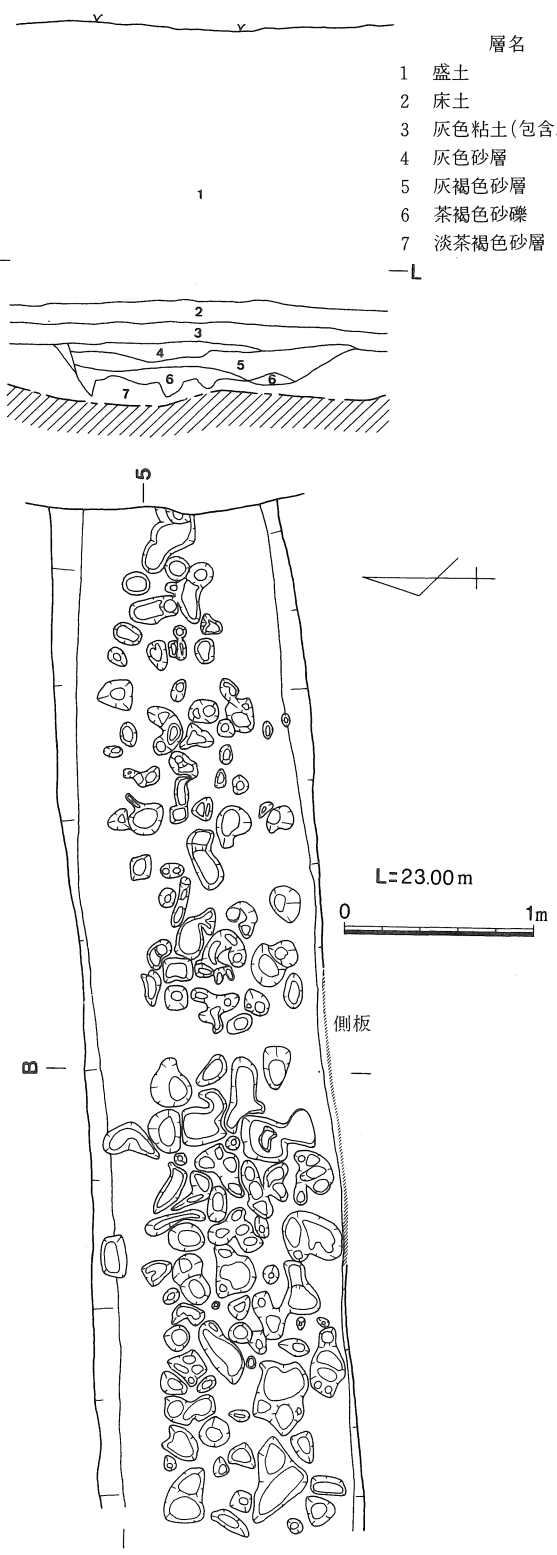
以下，青灰色粘土層上面で検出された遺構について述べる。

3．検　出　遺　構

溝ＳＤ3704　出土遺物が皆無であるため，時期不明である。Ａ６～Ｂ６区にまたがって検出された東西方向の溝状遺構である。Ａ６区では，Ｌ字状に南に折れ曲り，丸く終る。幅50cm，深さ８cmである。

溝ＳＤ3705　出土遺物がないため，時期不明。Ａ６～Ｂ６区で検出された。溝ＳＤ3704の南に，ほぼ平行して掘られた東西方向の溝である。Ａ６区で跡切れる。幅32cm，深さ３～５cmである。

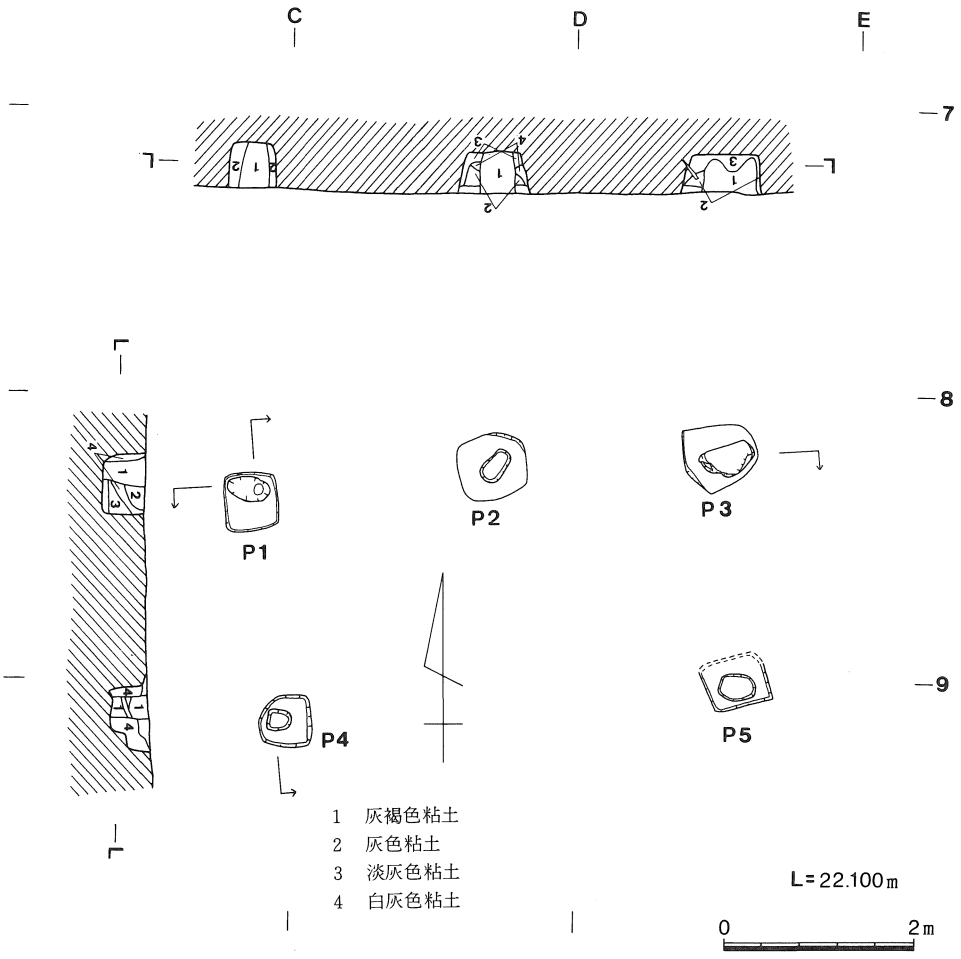
溝ＳＤ3703　長岡京時代の遺物を出土する。東西方向の溝で，４～５区にまたがって検出された。幅133cm，深さ20cmである。溝底は凹凸が著しい。溝の南肩には，板の痕跡が認められ，一部に板材の残片が貼り付いた状態で検出された。板材の残片の木目は，溝の方向と同じく東西方向にあり，当溝の側板残欠と考えられる。このような例は，左京第２次調査（ＳＤ51）等に良好な資料がある。国土座標を利用すると，やや西に振れ，検出範囲内ではＷ－0°45′50″－Ｓを示す。当溝は，三条第二小路南側溝推定位置にあたり，この可能性が高い。



第44図　溝ＳＤ3703実測図

掘立柱建物ＳＢ3702　柱掘方や柱痕からは，長岡京時代の遺物を出土する。南北棟の建物が想定でき，東西２間×南北２間以上である。１間は，東西・南北を問わず，240cm等間である。柱掘方は不揃いで，形と大きさは各々異なる。深さは全て40cm前後で統一されている。地盤となる土層が軟質の粘土層であるにもかかわらず，礎板等の施設はみられない。柱は，Ｐ３の柱痕の直径から径14～15cm前後と思われる。Ｐ１～Ｐ５には，柱抜取痕が認められる。

ピットＰ3701，3706　Ｐ3701は，Ｂ７区で検出された。掘方をもつ柱穴状遺構である。ＳＢ3702の西辺，Ｐ４－Ｐ１の延長上にある。掘方の中央部に，径７cmの柱根が検出された。Ｐ3706はＣ８区で検出された。掘方をもつ柱穴状遺構である。柱抜取穴から径約30cmの円座と径約15cmの石が出土した。

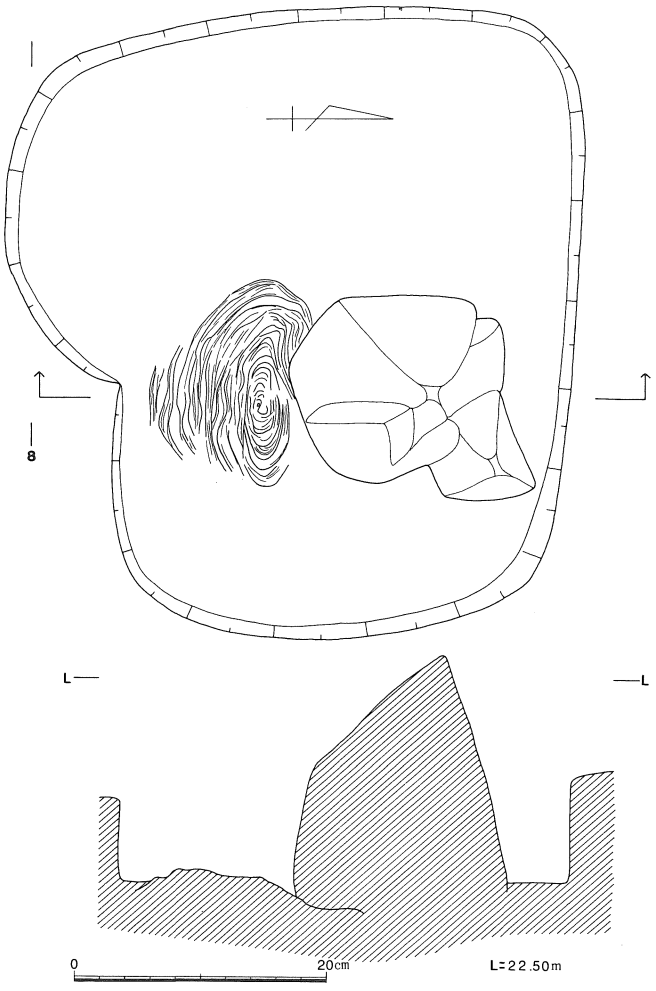


第45図　　掘立柱建物ＳＢ3702実測図

4．出　土　遺　物

溝ＳＤ3703出土遺物（第47図）　溝ＳＤ3703からは，須恵器・土師器・獣骨・木片・瓦などの遺物が出土している。

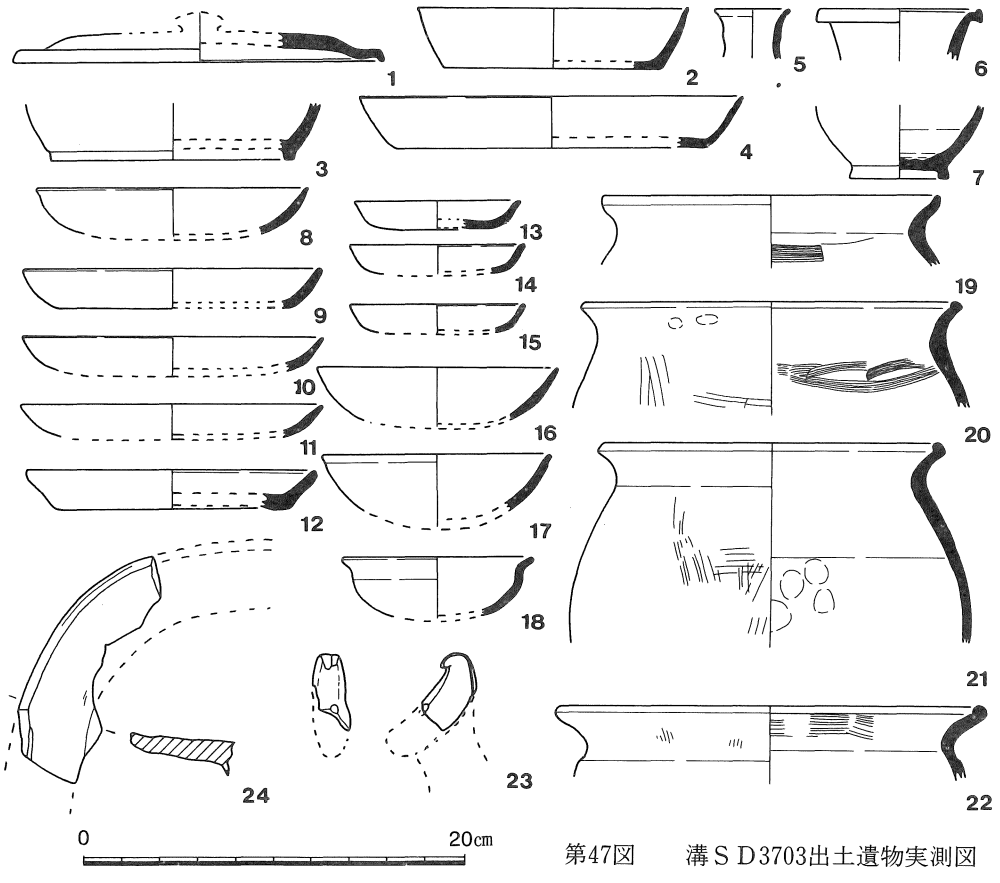
須恵器には坏Ａ・坏Ｂ・皿Ａ・蓋・壺Ｌ・甕などがある。坏Ａ（２）は，口径14.1cm，器高3.2cmである。調整は，底部外面にヘラ切り痕を残している。焼成が甘い上に磨滅が著しいので，他の部分は不明。坏Ｂ（３）は，底部に貼り付け高台をもつものである。高台は断面台形をなし，底部の外縁部につく。その他，坏口縁部小片と貼り付け高台の底部と体部がそれぞれ数片出土しているが，実測，復元はしえない。皿Ａ（４）は，器高2.7cm，口径20.0cmを測る高台のつかない器形である。平坦な底部よりやや丸味をもって外方へ立ち上がり，端部は丸くおさめている。全体にていねいにナデている。その他，体部片が出土している。蓋（１）は，天井部をヘラ切りをした後，ナデ調整を施したものである。口縁端部は屈曲させ，外面に自然釉がかかっている。その他，最大径2.3cmの扁平なつまみをもつものがある。径は約20cm前後のものがほとんどである。壺Ｂ・壺Ｇは小片であるために，実測図を載せるまでに至らなかった。壺Ｂは，平底で胎土は粗く砂粒を含む。焼成は甘く軟質。壺Ｇも焼成が甘く，口径５cm程度の小さいものである。口縁内面全体に自然釉がかかっており，全面がロクロナデ調整である。底部はいずれも糸切り痕を残し，凹凸が著しい。胎土は粗く，砂質である。壺Ｌ（５～７）は，球形の体部をもつ小型の瓶子形の壺である。口縁端部が外傾しつつ丸味をもって終



第46図　ピットＰ3706出土円座実測図

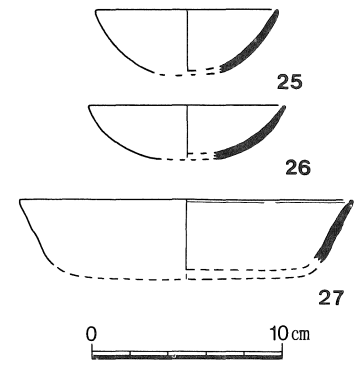
わるもの（5）と上下に拡張させて外傾する面をつくり出すもの（6）とがある。底部（7）は，底径5㎝の貼り付け高台をもつものであり，高台の断面が台形のものである。

土師器は，皿A・皿B・皿C・埦A・鉢・甕A・竈（かまど）があり，この他土製品も出土した。皿A（8～12）は，広く平坦な底部からゆるやかに広がって口縁部に至る器形である。口縁端部は，内側に巻き込み，内面に沈線が生ずるもの（9・12）と，丸味をもっておわるもの（8・10・11）とに大別できる。器壁が厚く平坦な底部から屈曲して口縁に至るもの（12）もある。これらは外面調整から，底部外面のみヘラケズリを施すb手法(11)，外面全体にヘラケズリをするc手法(8～10)，外面の口縁上半部のみをナデ，下半部及び底部を調整しないe手法(12)にわかれる。ただし（11）の場合，底部のみでなく，体部にまでヘラケズリが及んでいる。これらのうち，c手法が最も多い。法量は口径約16㎝前後，器高は約2～3㎝のものがほとんどである。胎土は赤色粒子，雲母を含む砂質で，淡黄灰色に発色しているものがほとんどである。この他，淡赤灰色をしたもの(8・11)，表面のみ赤灰色をしたもの(12)がある。皿C(13～15)は，口径が10㎝前後，器高が2㎝以内のものである。調整はe手法である。口縁端部は，ナデによってわずかではあるが内傾する面をもつ。埦A（16・17）は丸い底部で，内彎気味に外方に開く口縁部をもつ。調整はいずれもc手法である。鉢（18）は，口縁部が屈曲し，端部は



第47図　溝ＳＤ3703出土遺物実測図

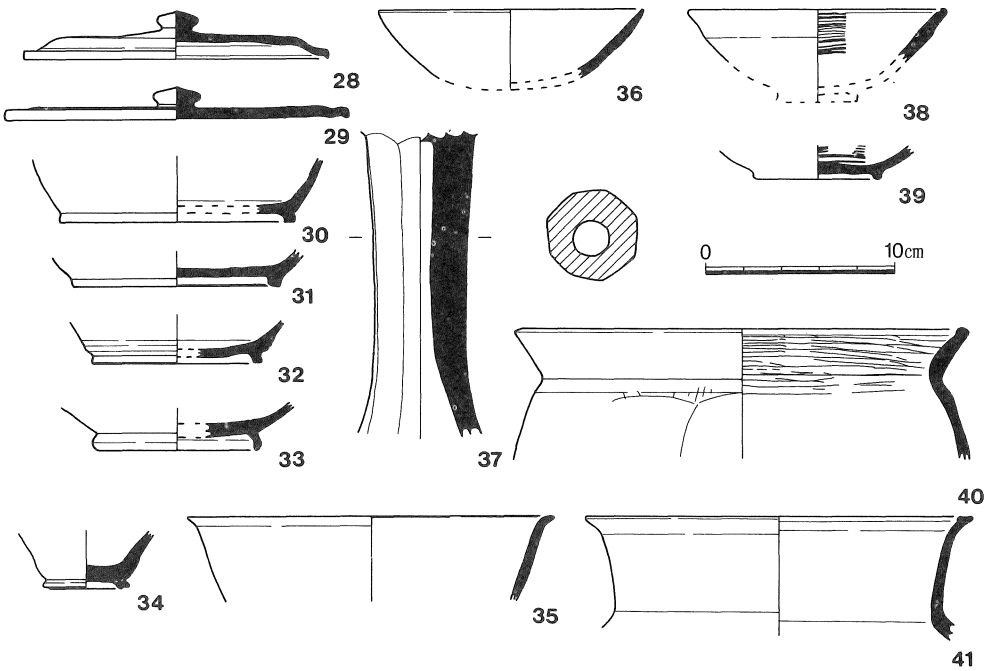
丸くおさめる。体部は扁球形をなす。外面調整は，体部下半部に指頭痕が見られ，未調整である。甕A（19～22）は，口径20cm前後のものがほとんどである。口縁部内面の調整は，ハケメを施した後，ナデをするもの（19･20･22）と，ナデを施すもの（21）とがある。体部外面は，全面に縦方向のハケメが施されるもの（20・22）と，一部に横方向のハケメが見られるもの（21）がある。口縁部には端部をつまみ上げるようにおさめるもの（19）と，内側に巻き込むもの（20～22）がある。体部内面は，横方向の細かいハケメが施されているもの（19・20）がある。口径は約20cm前後である。胎土はいずれも赤色粒子を含む砂質のもので，色調は明赤褐色，又は，明黄褐色である。竈は，移動式竈の廂（ひさし）の部分が出土している（24）。調整は，外面にハケメを施した後，ナデている。内面の一部に，煤の付着がみられる。



第48図　溝ＳＤ3704出土遺物実測図

土製品には，祭祀用遺物として土馬（23）がある。眼の位置は，ほぼ顔面の中央にあり，円形竹管文をもって表現されている。色調は明赤褐色で，胎土は赤色粒子を含む。他に，同一個体の足と思われるものも出土している。

瓦は，ごく小片で，実測図を載せるに至らなかった。軒平瓦も一片出土している。



第49図　　包含層出土遺物実測図

当遺構出土の遺物は，須恵器壺Ｌ・壺Ｇが出土していること，土師器の高台のない食器類にｃ手法が多いこと，等によって特徴づけられ，長岡京時代のものと思われる。この他，古墳時代後期のものと思われる須恵器坏の破片も混入している。

溝ＳＤ3704出土遺物（第48図）　溝ＳＤ3704から出土した遺物には，須恵器・土師器・瓦・瓦器・木片・炭片などがある。須恵器は，甕の体部片のみである。土師器は，埦Ａ・坏などがあり，いずれも破片である。埦Ａ（25・26）は，外面全体を削るｃ手法である。口径は約10cm前後である。坏（27）は，口縁部が外方に開き，端部は内側は巻き込む。調整は，磨滅が著しいので不明瞭。胎土は，赤色粒子など砂質のものである。瓦は，丸瓦の玉縁部１点のみ出土している。焼成が甘く，凹面に布目痕を残すだけで，他は不明瞭。胎土には，１～２㎜程の粗い砂質を含む。色調は，乳灰色である。瓦器は，埦の口縁部１片のみ出土している。口縁端部は，内側に一条の沈線が施されている。

包含層出土遺物（第49図）　遺構に伴う遺物の他に，灰色粘土層から，弥生土器・須恵器・土師器・灰釉陶器・獣骨・木片・瓦・瓦器・砥石などがある。

須恵器では，蓋Ａ・蓋Ｂ・坏Ａ・坏Ｂ・壺Ｌ・甕などがある。蓋Ａ（28・29）は，頂部は平坦であり，口縁端部は屈曲する。外面調整は，大別すると，ヘラ切りした後ロクロナデ調整をするもの（29）と，ナデをするもの（28）とがある。又，扁平なつまみをもち，最大径は2.2cmのものと，2.8cmのものとが出土している。蓋Ｂは平らな頂部からゆるやかな傾斜面をなし，端部に至る。頂部はヘラケズリをした後，ナデを施している。坏Ａは，ほとんどのものが，焼成が甘い。調整は，底部をヘラ切りした後，ナデているものが多い。坏Ｂ（30～32）は，広い平坦な面をもち，高台は断面台形を呈し，貼り付けされている。壺Ｌ（34）は，貼り付け高台を有するものである。その他，甕の口縁部２片（35・41）が出土している。口縁端部は，いずれも屈曲し，上方向にわずかな平面をもつものである。

土師器では，埦Ａ・蓋・坏・甕・高坏・ミニチュアカマドなどがある。埦Ａ（36）は，ｃ手法である。口縁端部に油煙の痕跡が残っているため，灯火器として使用していたことがわかる。蓋は，つまみ最大径1.65cmのもので，扁平なつまみがつく。しかし磨滅が著しいので，調整が不明瞭である。坏は，口縁部小片のため，不明瞭であるが口縁部内側に巻き込み，沈線が生じる。甕（40）は，「く」の字形に屈曲する頸部をもち，口縁端部は内側に折り曲げている。調整は内面頸部に，横方向のハケメが施され，体部は頸部付近に縦方向のハケメを施した後，ヘラケズリし，強いナデで仕上げられている。高坏は，脚部の成形法で２つに分類できる。脚部断面では８面取りされるものと，７面取りされるものとがある。高坏（37）は，棒状のものに巻きつけて成形したもので，断面８角形にされている。ミニチュアカマドは，廂部分小片であるために，実測・復元はしえない。

瓦は，量として遺物整理箱½程出土している。

灰釉陶器では，埦の底部が出土している(33)。高く屈曲した高台で貼り付けをしている。内面には，重ね焼き痕が環状に残り，淡黄緑色の釉が施されている。

瓦器は，埦の口縁部と底部が出土している。(38)は，外上方向へゆるやかに開く口縁部である。口縁端部には一条の沈線を有し，内面にはナデをした後，暗文が施される。体部外面は，口縁部ナデ，以下未調整である。内外面にヘラミガキがされているものもある。底部は，断面台形をなすもの（39）がある。

5．花　粉　分　析

(1)　はじめに

本報告は，昭和55年５月24日に長岡京跡右京第37次調査地において採取された堆積物についておこなった花粉分析の結果である。

分析に供した試料は，下記のとおりである。

①　第１層（旧耕作土）

②　第２層（旧耕作土下層の床土，推定：近世）

③　第３層（灰色粘土，包含層で鎌倉時代の遺物を含む）

④　第４層（黄灰色粘土，包含層の下層）

(2)　花粉分析

花粉分析の方法は，試料200gをピロ燐酸ナトリウム飽和溶液に24時間浸して泥化→傾斜沈殿法による水洗→沈泥振動法による植物質の濃縮→塩化亜鉛処理（塩化亜鉛飽和溶液を加え，毎分800回転で１時間遠心分離）→水洗→氷酢酸処理（脱水）→アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液を加え，80℃で１分間湯せん）→氷酢酸処理（脱水）→水洗→グリセリンゼリーで封入→検鏡の順におこなった。

(3)　分析結果および考察

検出された花粉は，ＡＰ（樹木花粉）・ＮＡＰ（草本花粉）ともに，それぞれの基数の百分率ならびに全花粉数を基数とする百分率で示した。各試料の分析結果は，付表３・４に示すとおりである。

①　中世の堆積物について

試料は，出土遺物から第３層が鎌倉時代頃，第４層がそれ以前の堆積物と考えられる。花粉の出現傾向は，第４層と第３層を比べて大きい変化がみられない。ＡＰでは，両層とも針葉樹で二葉マツ亜属が圧倒的に多く，次いでモミ属・ツガ属・スギ属等が続く。広葉樹では，コナラ亜属・アカガシ亜属が比較的多く，以下ブナ属・ケヤキ属・シイノキ属等が見られた。ＮＡＰでは，大型イネ科が両層とも80％以上の高出現率である。また，ソバは，第４層から第３層にかけて増加の傾向がみられる。その他，第４層でコオホネ属が，この種の花粉としては高率

でみられた。以上の結果から，遺跡周辺の山間部の植生環境は，二葉マツ亜属・モミ属・ツガ属・スギ属等の針葉樹に，落葉広葉樹のコナラ亜属・ブナ属・ケヤキ属，照葉樹のアカガシ亜属・シイノキ属を主とし，付表3に見られるような多くの樹木ＴＡＸＯＮが混交した山林が想像される。平野部の植生環境は，イネと思われる大型イネ科が多く，広く整備された水田が存在したと推定される。ただ，第4層では，沼地を好むコオホネ属が多く，水田が湿田の様相を示していた可能性が考えられる。また，第3層の大型イネ科花粉に，粒径60μ程度のコムギと思われる花粉が比較的多く，ソバが前時代より増加していることから，畑地性作物の栽培が推定される。これは，第4層の湿田が，第3層頃になると秋冬期に乾田化し，畑作栽培が可能になったためと思われる。

②　近世の堆積物について

中世の堆積物に比べ，ＡＰでは，二葉マツ亜属が若干増加するのに対し，モミ属・ツガ属が減少し，スギ属が全くみられない。ＮＡＰでは，ソバ・ガマ属に増加がみられる。その他のＴＡＸＯＮは，第4層・第3層と同じような出現傾向である。以上の結果，山間部での，建築用材となる，モミ属・ツガ属・スギ属等の減少は，人為的な山林の利用によると思われる。その他，ガマ属（ガマ・コガマ）の増加は，それらの生育する沼地が拡大したとは考えられず，おそらく水田灌漑のための用水池が遺跡周辺につくられたからではなかろうか。

③　近世末から現代の堆積物について

前時代の堆積物に比べ，ＡＰでは，二葉マツ亜属が急増する他，イボタノキ属の増加が著しい。ＮＡＰでは，ギシギシ属・ナデシコ科・セリ科等の雑草花粉が比較的多く残留していた。その他のＴＡＸＯＮは，ＡＰ・ＮＡＰともに減少する。上記の二葉マツ亜属の増加，他の樹木の減少については，山林の利用が以前よりも増して進行した結果と考えられる。また，イボタノキ属の増加は，園芸品種のネズミモチが調査地付近の民家の庭や畑地に植えられていたためと思われる。ＮＡＰのＴＡＸＯＮの消失が認められるが，これは，水田環境がよく整備され，雑草の生育できるような環境が減少したからと考えられよう。

(4)　まとめ

①　調査した全層は，水田にともなう堆積物と考えられる。

②　中世・近世において，植生環境の大きい変化は，認められない。

③　ソバは，中世・近世を通して栽培されていた。

6．ま　と　め

(1)　長岡京の条坊遺構について

長岡京の条坊は，昭和54年度の長岡京跡右京第26次調査(注1)の発掘調査成果をもとに，平城京型

であろうと考えられており，今日では，これをもとに長岡京の条坊復原が行われている。

当調査地で検出された溝ＳＤ3703は，出土遺物から長岡京の条坊に関係する東西溝と思われる。当溝検出位置を地図上に置き，前述した平城京型条坊を重ねるとほぼ三条第二小路の南側溝の推定位置にあたる。このことから，三条第二小路周辺の今日までの成果と比較，検討をしてみたい。

今日までに，三条第二小路に関係する遺構が検出されている調査地は，長岡京跡左京第２次調査(注2)（７ＡＮＦＮＴ地区）と長岡京跡右京第83次調査(注3)（７ＡＮＩＮＣ地区）がある。長岡京跡左京第２次調査では，三条大路の南北両側溝と三条第二小路の南北両側溝が検出され，三条大路の路面の幅は10.0m，北側溝ＳＤ52の幅は3.6m，南側溝ＳＤ54の幅は1.5mである。三条第二小路の路面の幅は4.3m，北側溝ＳＤ65の幅は1.2m，南側溝ＳＤ66の幅は2.4mである。又，三条大路の中軸から三条第二小路の中軸までの距離は128.9mである。当調査地の溝ＳＤ3703と長岡京跡左京第２次調査で検出されている三条第二小路の南側溝ＳＤ66の振れ角は，Ｗ－０°１′20″－Ｓであり，問題視すべき差ではなく，同じ溝と考えてよいであろう。

長岡京跡右京第83次調査では，三条第二小路の北側溝と推定される溝ＳＤ8355が検出され，この溝の幅は約1.0mであった。この溝と，当調査地で検出された三条第二小路の南側溝ＳＤ3703とを国土座標を用いて積算した場合，道路幅は約10mである。この数値は，長岡京跡左京第２次調査で検出された路面幅より5.7m広い。

次に，現在までに確認されている大路に目を転じてみることにする。長岡京跡左京第２次調査で検出された三条大路（ＳＤ52－ＳＤ54間）の中軸から，長岡京跡右京第96次調査（７ＡＮＫＵＴ－４地区(注4)）で検出されている五条大路（ＳＤ9601－ＳＤ9607間）の中軸までの距離は，1088.98mであり，三条第二小路から五条大路までの一町間は平均で135.3mとなる。三条第二小路中軸から三条大路中軸までの一町間は129mとなり，この差は，五条大路が推定位置より南へさがって検出されたためであり，これをどう理解するか問題である。

これらの結果から，長岡京では平城京とは違った変則的な条坊割り付けが行われていたことも考えられる。また，条里との関係も興味深い。今日までに五条大路と三条大路間の東西道路に関する資料が少なく今後の調査を待って比較，検討を加えていく必要がある。

(2)　長岡京時代以後

長岡京時代の遺構検出面は，前記したように，青灰色粘土層の上面であった。これより上層には，中世以降の遺物包含層が４層あり，このうち，盛土直下の層は現代まで耕作されていた土であり，この下の土層は，床土として敷かれたものである。灰色粘土層は，瓦器片を含み，鎌倉時代の遺物包含層である。この層からは，長岡京時代の遺物も多く出土し，鎌倉時代に層の撹乱がなされたと思われる。灰色粘土層の下面には，鉄分を多く含む部分があり，黄灰色粘土層として分層した。しかし，出土遺物から推定できる時期は，灰色粘土層と変わらない。

このように，長岡京時代以後の遺物包含層は確認されたが，遺構は検出されなかった。このため，長岡京廃都後の様相を考える手段として，花粉分析を行い自然環境の復元とともに，土地利用状況を復元しようとした。その結果、中世以来水田地であったろうと思われ，また自然への進出も各層ごとに増してゆく傾向がうかがえる。当地は乙訓郡八条（九里）二坪にあたり，条里遺構が検出されることも十分予想される。現在，当地周辺の水田は大略規格性があり，条里制の名残りと思われることからも，当地周辺地の調査が待たれる。

注１）高橋美久二他「長岡京跡右京第26次調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1980－２）』1980年）

２）高橋美久二他「長岡京跡左京三条二坊第１次発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1975）』1975年）

３）山口博「長岡京跡右京第83次（７ＡＮＩＮＣ地区）」（㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府埋蔵文化財情報第４号』1982年）

４）木村泰彦他「右京第96次（７ＡＮＫＵＴ－４地区）調査略報」（㈶長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報　昭和57年度』1983年）

付表　3　　花粉分析結果表(1)

樹木種（ＡＰ）

層準	第４層（中世）			第３層（中世）			第２層（近世）			第１層		
土層名	黄灰色粘土			灰色粘土			床土			旧耕作土		
TAXON　数値処理	検出数	ＡＰ%	全体%	検出数	ＡＰ%	全体%	検出数	ＡＰ%	全体%			
Ginkgo（イチョウ属）	1	＋	＋	2	0.1	＋						
Podocarpus（マキ属）	4	0.2	0.1	1	＋	＋						
Abies（モミ属）	178	6.9	4.1	134	6.3	2.9	44	2.7	1.6	3	0.5	0.4
Tsuga（ツガ属）	141	5.5	3.2	104	4.9	2.3	33	2.1	1.2	5	0.8	0.7
Picea（トウヒ属）	5	0.2	0.1	5	0.2	0.1	1	0.1	＋			
Larix（カラマツ属）				4	0.2	0.1	1	0.1	＋			
Pinus Diploxylon（二葉マツ亜属）	1135	44.0	26.0	874	41.3	19.2	825	51.4	30.4	561	90.0	74.5
Pinus Haploxylon（五葉マツ亜属）	4	0.2	0.1	4	0.2	0.1	2	0.1	0.1			
Sciadopitys（コウヤマキ属）	13	0.5	0.3	9	0.4	0.2	6	0.4	0.2			
Cryptomeria（スギ属）	65	2.5	1.5	31	1.5	0.7				7	1.1	0.9
Chamaecyparis（ヒノキ属）	2	0.1	＋	2	0.1	＋	5	0.3	0.2			
Salix（ヤナギ属）	2	0.1	＋	9	0.4	0.2	5	0.3	0.2			
Myrica（ヤマモモ属）	15	0.6	0.3	30	1.4	0.7	19	1.2	0.7			
Juglans（オニグルミ属）	11	0.4	0.3	10	0.5	0.2	5	0.3	0.2			
Carpinus（クマシデ属）	24	1.0	0.6	14	0.7	0.3	5	0.3	0.2			
Corylus（ハシバミ属）	30	1.2	0.7	40	1.9	0.9	62	3.9	2.3			
Betula（シラカンバ属）	10	0.4	0.2	18	0.9	0.4	6	0.4	0.2			
Alnus（ハンノキ属）	21	0.8	0.5	47	2.2	1.0	44	2.7	1.6	1	0.2	0.1
Fagus（ブナ属）	62	2.4	1.4	50	2.4	1.1	35	2.2	1.3	1	0.2	0.1
Lepidobalanus（コナラ亜属）	407	15.8	9.3	297	14.0	6.5	241	15.0	8.9	4	0.6	0.5
Cyclobalanopsis（アカガシ亜属）	236	9.2	5.4	178	8.4	3.9	125	7.8	4.6	1	0.2	0.1
Castanea（クリ属）	18	0.7	0.4	17	0.8	0.4	4	0.2	0.1			
Castanopsis（シイノキ属）	44	1.7	1.0	33	1.6	0.7	25	1.6	0.9			
Ulmus（ニレ属）	1	＋	＋	1	＋	＋	1	0.1	＋			
Zelkova（ケヤキ属）	37	1.4	0.8	48	2.3	1.1	25	1.6	0.9			
Celtis（エノキ属）	12	0.5	0.3	21	1.0	0.5	7	0.4	0.3			
Aphananthe（ムクノキ属）	11	0.4	0.3	7	0.3	0.2	4	0.2	0.1			
Magnolia（モクレン属）	20	0.8	0.5	44	2.1	1.0	21	1.3	0.8	4	0.6	0.5
Prunus（サクラ属）	11	0.4	0.3	8	0.4	0.2	5	0.3	0.2	2	0.5	0.3
Lespedeza（ハギ属）				1	＋	＋						
Phellendendron（キハダ属）							2	0.1	0.1			
Skimmia（ミヤマシキミア属）	7	0.3	0.2	14	0.7	0.3	4	0.2	0.1			
Melia（センダン属）				1	＋	＋						
Daphniphyllum（ユズリハ属）				2	0.1	＋						
Rhus（ウルシ属）				1	＋	＋	1	0.1	＋			
Ilex（モチノキ属）	2	0.1	＋	6	0.3	0.1	4	0.2	0.1			
Acea（カエデ属）	9	0.3	0.2	7	0.3	0.2	16	1.0	0.6	1	0.2	0.1
Aesculus（トチノキ属）	1	＋	＋									
Tilia（シナノキ属）				1	＋	＋						
Diospyros（カキ属）	16	0.6	0.4	21	1.0	0.5	6	0.4	0.2			
Symplocos（ハイノキ属）	2	0.1	＋	2	0.1	＋	1	0.1	＋			
Ligastrum（イボタノキ属）	5	0.2	0.1	3	0.1	0.1	6	0.4	0.2	31	5.0	4.1
Fraxinus（トネリコ属）	7	0.3	0.2	4	0.2	0.1	6	0.4	0.2	1	0.2	0.1
Lonicera（スイカズラ属）	1	＋	＋	4	0.2	0.1						
Saxifragaceae（ユキノシタ科）	2	0.1	＋									
Ericaceae（ツツジ科）	5	0.2	0.1	7	0.3	0.2	6	0.4	0.2	1	0.2	0.1
AP Total	2,577	100.1	58.9	2,116	99.8	46.4	1,606	100.3	58.9	623	100.3	82.5

（0.1%以下は＋記号で表示。）

付表 4 花粉分析結果表(2)

草木種（NAP）

層準	第4層（中世）			第3層（中世）			第2層（近世）			第1層		
土層名	黄灰色粘土			灰色粘土			床土			旧耕作土		
TAXON 数値処理	検出数	AP%	全体%	検出数	AP%	全体%	検出数	AP%	全体%			
Fagopyrum（ソバ）	7	0.4	0.2	47	1.9	1.0	45	4.1	1.7	1	0.8	0.1
Artemisia（ヨモギ属）	31	1.7	0.7	35	1.4	0.8	29	2.6	1.1	1	0.8	0.1
Petasites（フキ属）	1	0.1	+				1	0.1	+			
Xanthium（オナモミ属）										1	0.8	0.1
Plantago（オオバコ属）				7	0.3	0.2	2	0.2	0.1			
Haloragis（アリノトウグサ属）	2	0.1	+	4	0.2	0.1	5	0.5	0.2			
Epilobium（アカバナ科）	2	0.1	+	1	+	+	1	0.1	+			
Impatiens（ツリフネソウ属）	1	0.1	+	3	0.1	0.1	1	0.1	+			
Geranium（フウロソウ属）							1	0.1	+			
Phaseolus（アズキ属）	1	0.1	+	1	+	+						
Thalictrum（カラマツソウ属）	1	0.1	+	1	+	+						
Nelumbo（ハス属）							1	0.1	+			
Nuphar（コオホネ属）	120	6.7	2.8	23	0.9	0.5	2	0.2	0.1			
Rumex（ギシギシ属）							3	0.3	0.1	8	6.2	1.1
Persicaria（タデ属）	13	0.7	0.3	26	1.1	0.6	8	0.7	0.3	1	0.8	0.1
Eriocaulon（ホシクサ属）	1	0.1	+	3	0.1	0.1						
Sagittaria（オモダカ属）	11	0.6	0.3	7	0.3	0.3	1	0.1	+			
Typha（ガマ属）	15	0.8	0.3	14	0.3	0.3	36	3.3	1.3	1	0.8	0.1
Cichorioideae（タンポポ亜科）	1	0.1	+	3	0.1	0.1						
Carduoideae（キク亜科）	8	0.4	0.2	1	+	+	2	0.2	0.1			
Cuculbitaceae（ウリ科）	2	0.1	+	2	0.1	+						
Solanaceae（ナス科）				3	0.1	0.1	1	0.1	+			
Labiatae（シソ科）				3	0.1	0.1						
Umbelliferae（セリ科）	4	0.2	0.1	7	0.3	0.2	14	1.3	0.5	6	4.6	0.8
Cruciferae（アブラナ科）	9	0.5	0.2	11	0.5	0.2	4	0.4	0.1			
Ranunculaceae（キンポウゲ科）	3	0.2	0.1	3	0.1	0.1						
Caryophyllaceae（ナデシコ科）	14	0.8	0.3	10	0.4	0.2	3	0.3	0.1	5	3.8	0.7
Chenopodiaceae（アカザ科）	2	0.1	+	3	0.1	0.1	1	0.1	+	1	0.8	0.1
Cyperaceae（カヤツリグサ科）	1	0.1	+	1	+	+	2	0.2	0.1			
Gramineae イネ科(45μ以上)	1,447	81.2	33.2	2.126	87.4	46.7	884	79.9	32.6	96	73.8	12.7
Gramineae イネ科(45μ以下)	86	4.8	2.0	86	3.5	1.9	59	5.3	2.2	9	6.9	1.2
NAP Total	1,783	100.1	40.7	2,432	99.6	53.6	1,106	100.3	40.6	130	100.1	17.1
AP+NAP Total	4,360		99.6	4,548		100.0	2,712		99.5	753		99.6

（0.1%以下は＋記号で表示。）

10．右京第40次（７ANQNT地区）調査概要

１．は　じ　め　に

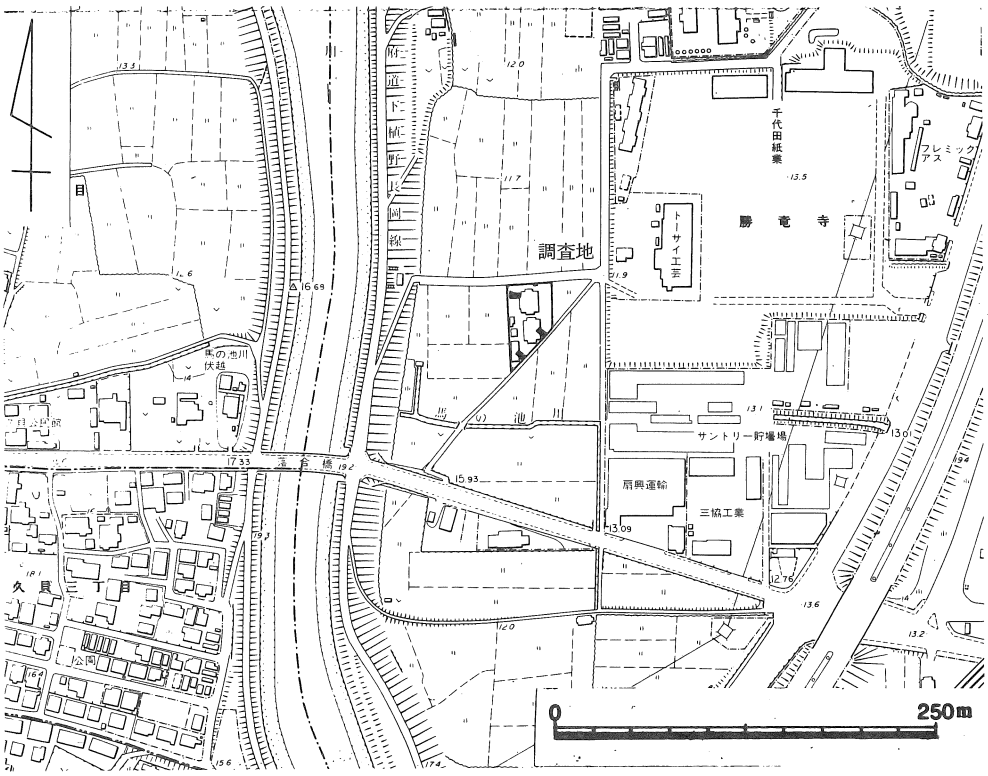
１．本報告は，1980年５月26日に長岡京市勝竜寺二ノ坪22において実施した長岡京跡右京八条一坊二・三町および朱雀大路・八条条間小路と久我畷に関する試掘調査の概要報告である。

２．調査は，長岡京市教育委員会が主体となり，長岡京跡発掘調査研究所に委託して行った。現地調査は中尾秀正（長岡京市教育委員会社会教育課職員），吉岡博之（長岡京跡発掘調査研究所調査員）が担当した。

３．調査は，新設の工場建設に伴うもので，約18㎡を調査した。

４．本報告は，中尾秀正が執筆・編集した。

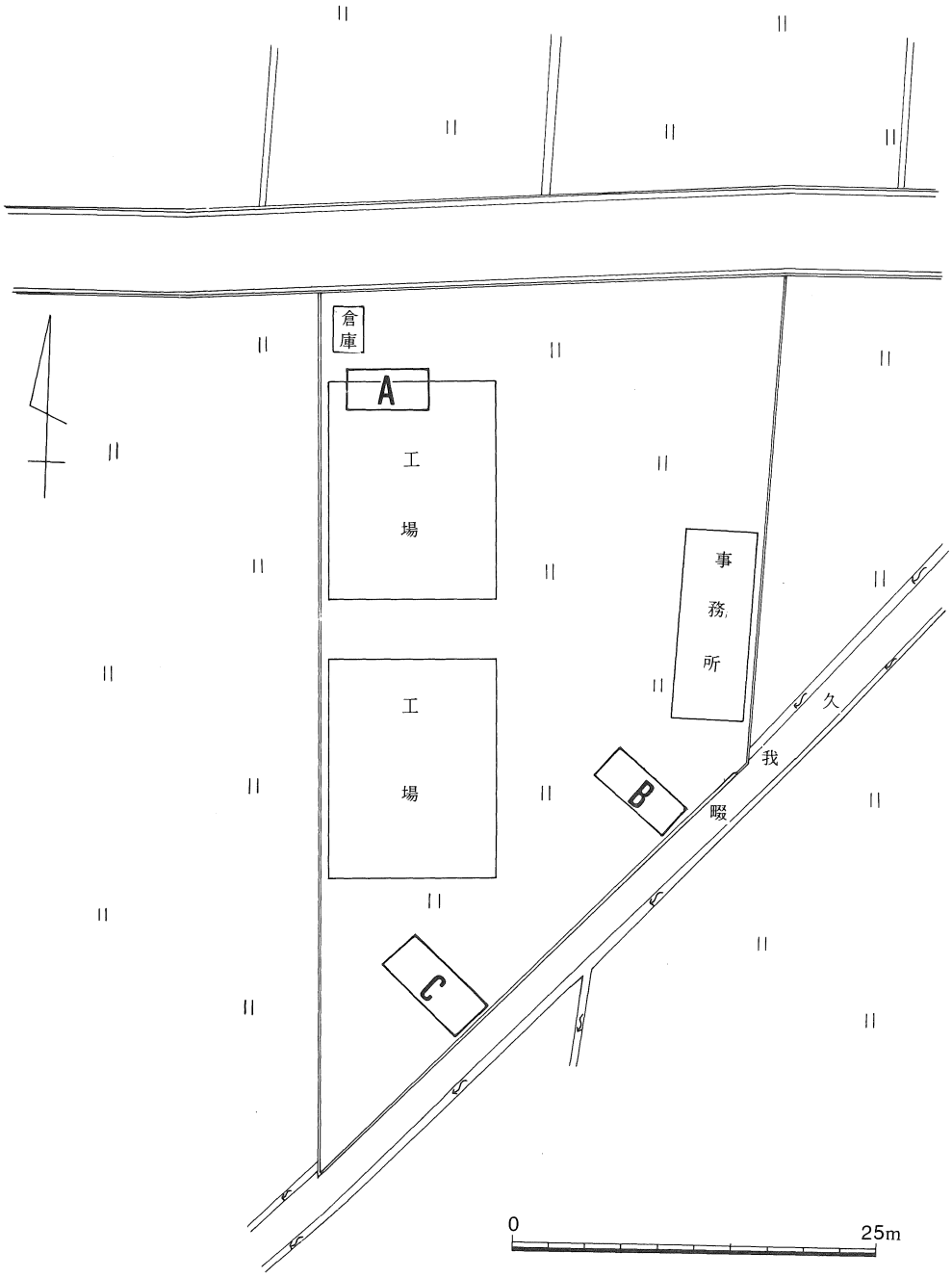
５．調査にあたっては，原因者の沼田秋丸氏には各種の御便宜を計っていただいた。記して感謝したい。



第50図　　調査地位置図

2．調　査　概　要

本調査地は，標高約11mの桂川の氾濫平野にあり，北西から南東にゆるやかに低くなる平坦な地形に立地し，水田として利用されていた。当地の西方約100mには，すぐ北方で犬川と合流



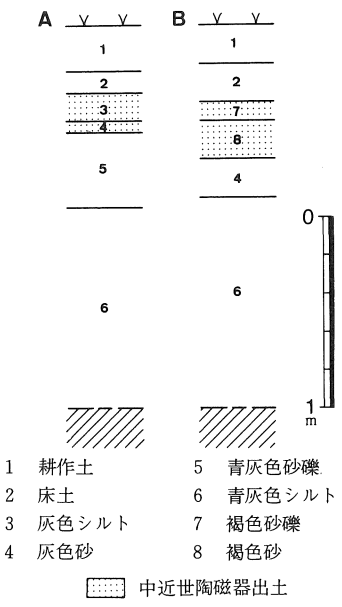
第51図　　調査地周辺図

した小畑川が南北に流れている。この川は，今日当地付近で天井川になっており，川の両側にある水田面とは，４～５ｍの高低差をもっている。しかし，これは小畑川の河川改修工事によって高く堤防が築かれたためで，かつて，当地は西方の犬川によって形成された北西から南東に緩やかに傾斜する緩扇状地の延長上にあり，小畑川・犬川の氾濫の影響を受けていた地域と思われる。また，当地は，北は五条神足里，南は三条平方里，東は四条川合里にかこまれた里名不詳の里の一画を占め，付近には，現存する条里地割と「二ノ坪」という小字名が遺存している。さらに，当建設予定地の南側には，久我畷が北東から南西に走る。久我畷は，鳥羽作り道から久我森の宮を経て直線で大山崎町下植野，山崎津へ至る道で，山崎津と平安京との連絡路であったとされている。

ところで，当地は長岡京条坊復原図によると，右京八条一坊二・三町および朱雀大路それに直交する八条条間小路にあたる。そのため，当地での調査は，長岡京とくに朱雀大路と久我畷に関する遺構の検出を目的に調査をはじめた。

調査は，まず土層を確認するため，建築予定地に幅１ｍでＬ字形にトレンチを入れる予定で開始した。ところが，地表下約２ｍまで掘削した結果，地表下約40～70㎝の褐色砂・砂礫層からローリングを受けた中世・近世の陶磁器片が数点出土したのみで，下層では砂層・シルト層になり，遺構・遺物は何ら検出されなかった。さらに多量の湧水によって掘削壁面がすぐに崩れる状態であった。このため，当初の調査方法を変更して図のように約２ｍ×３ｍのグリッドを３ケ所に入れて調査を実施した。

第52図　　調査断面写真（北から）



第53図　　調査地土層図

調査の結果，調査地の層位は，地表下約20cmまで耕作土，その下10～20cmまで床土，さらにその下はA地点とB・C地点では若干異なるが，地表下2m以上までシルト・砂・砂礫層となっている。遺物は，前述したとおり，Aグリッドでは灰色シルト層，灰色砂層，B・Cグリッドでは褐色砂礫層・褐色砂層からそれぞれ中・近世陶磁器のローリングを受けた細片が数点出土したのみである。遺構は何ら検出できなかったため，当初期待されていた長岡京跡・久我畷等を解明する資料は得られなかった。

このように，当地は，前述したような地形のため，小畑川・犬川のたび重なる氾濫を受けていたものと思われる。

11．右京第47次（７ANIUS地区）調査概要

１．は　じ　め　に

1．本報告は，1980年８月26日から９月5日まで，長岡京市天神四丁目５番１号において実施した右京五条三坊十六町，及び東代遺跡に関する概要報告である。

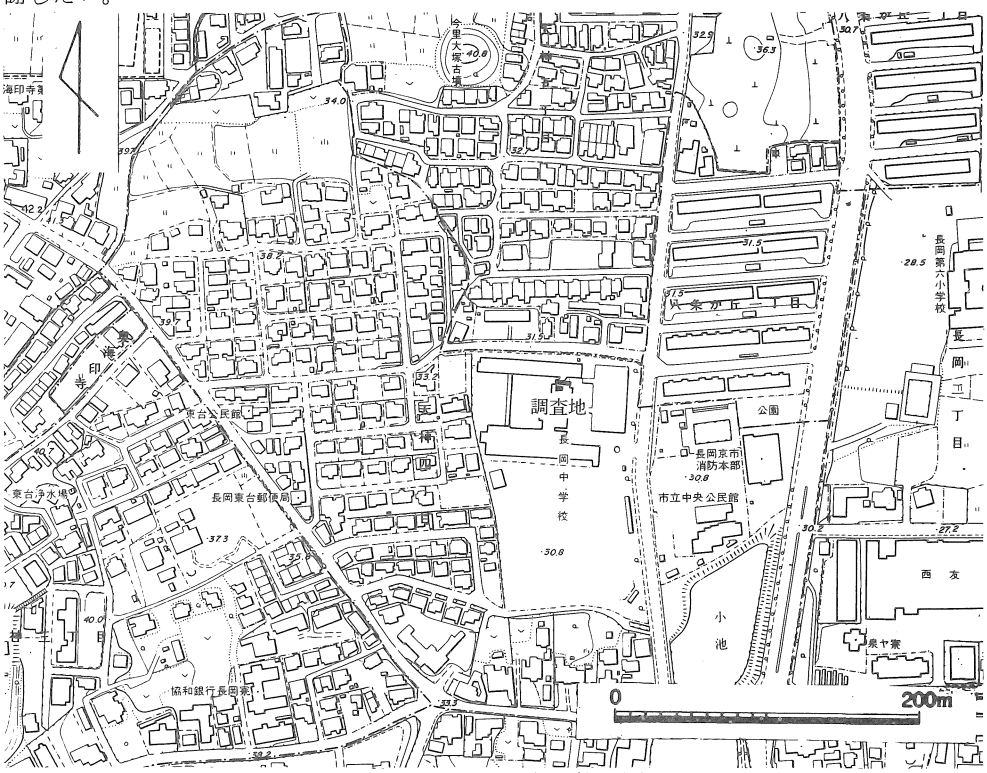
2．当調査は，長岡京市立長岡中学校校舎改築に伴い行ったものである。当初13m×３mの39㎡を調査し，溝状遺構が検出されたため，さらに７m×３mのトレンチを設定し，遺構の追求を行った。このため，総計60㎡の調査となった。

3．当調査は，長岡京市教育委員会が主体となって行った。現地調査は，長岡京市教育委員会社会教育課嘱託岩崎誠が担当し，補助員として，堤忠司，中小路孝浩，辻林磨宏，中村保彦の各氏の参加があった。

4　遺構図の整理，トレースは西村益子，白川成明が行った。

5．本書は，岩崎誠が編集，執筆した。

6．本報告書作成にあたり，財団法人長岡京市埋蔵文化財センターの協力があった。記して感謝したい。

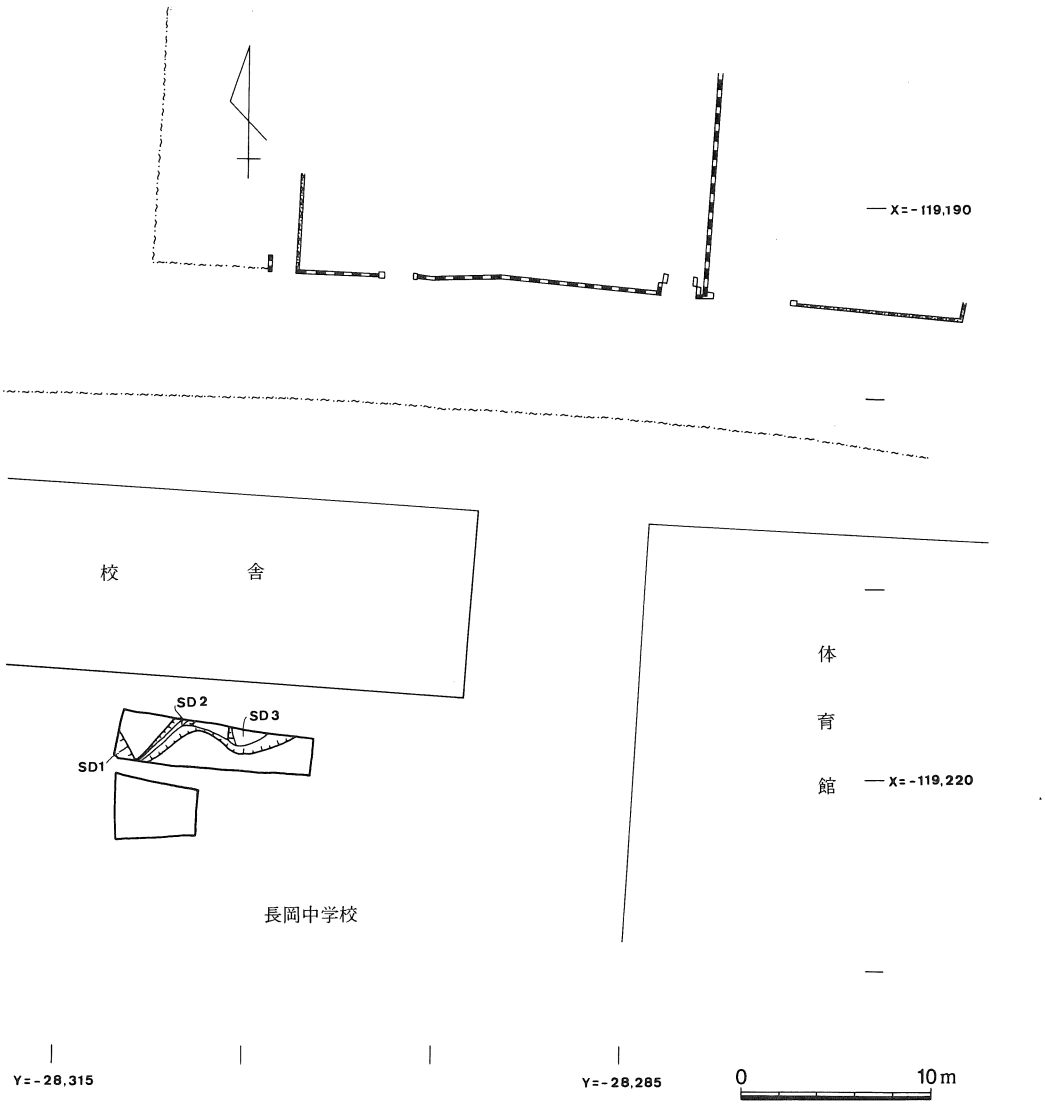


第54図　　調査地位置図

2．調査経過・調査概要

当調査地は，長岡京右京五条三坊十六町に位置する。このため，先にも述べたように，39㎡のトレンチを設定し調査を開始した。このトレンチでは，５層の盛土があり，その下に耕作土が確認された。この層から下は黄褐色粘質土又は黄色粘土が堆積しており，遺構はこの黄色系の土層上面で検出された。

検出遺構は，溝３条である。ＳＤ01は，北西―南東方向の溝である。幅は確認できなかった



第55図　　調査地周辺図

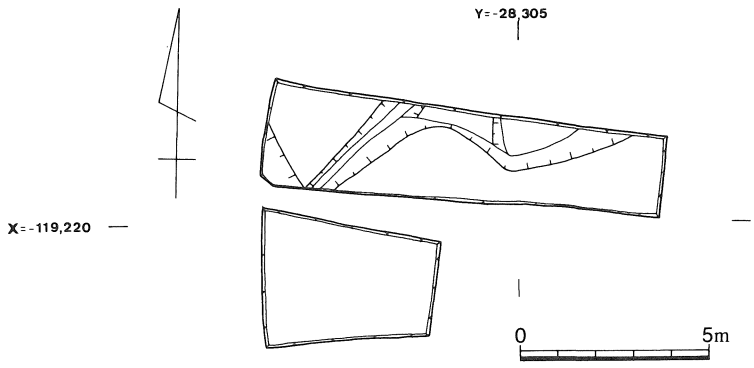
が，深さは60cmである。埋土は３層からなり，黒色粘土，暗黒色粘土，暗灰色砂質土礫混じりの順に堆積している。ＳＤ02は，北東―南西方向の溝で，最大幅130cmを測るが，南西に向かって細くなり，トレンチ南端では，幅60cmとなっている。深さは40cmで，断面Ｖ字形に掘られている。溝ＳＤ01と溝ＳＤ03を結ぶような形で検出された。溝ＳＤ01・03より古い。ＳＤ03は東西方向の溝で，溝ＳＤ02と一部重なる。溝ＳＤ02より新しい。幅は確認できなかったが，深さは40cmを測る。

これらの溝からは，弥生土器の細片が４点出土した。図化し得るものはないが，外面に平行タタキ手法がみられ，畿内第Ｖ様式の甕体部片と思われる。胎土には石英，チャート等の砂粒を含み，赤色粒子も多く含む。赤褐色から黄褐色の色調をしており，外面にススの付着するものもある。

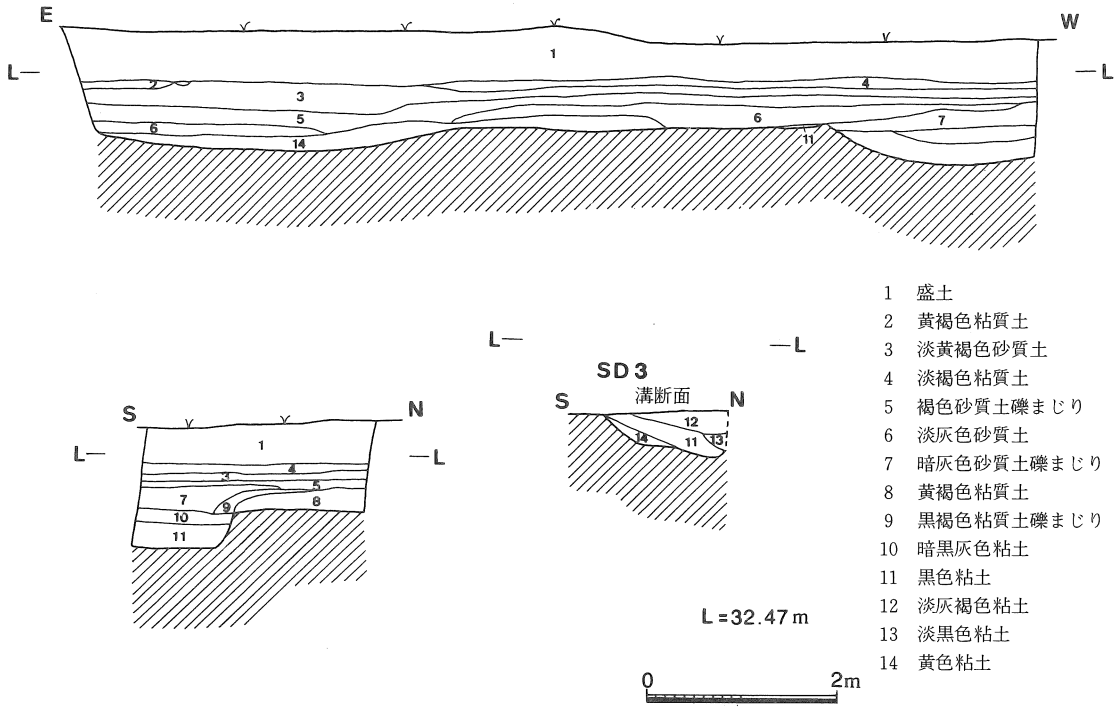
以上の成果から，溝ＳＤ01,，ＳＤ02のの性格を明らかにするため，当トレンチの南側に21m²のトレンチを設定し，調査を継続した。しかし，予想に反して，遺構・遺物は皆無であった。

３．ま　と　め

本調査によって，長岡京に関する遺構・遺物は検出されなかったものの，新たに弥生遺跡が発見された。長岡京市教育委員会は，この成果を評価し，当地周辺を「東代遺跡」と命名し，長岡京跡と重複する周知の遺跡とした。東代遺跡の概略を知る上で，当地周辺の調査が期待される。



第56図　　検出遺構図


E
W
L—
—L
S
N
SD3
溝断面
L=32.47m
0
2m
1　盛土
2　黄褐色粘質土
3　淡黄褐色砂質土
4　淡褐色粘質土
5　褐色砂質土礫まじり
6　淡灰色砂質土
7　暗灰色砂質土礫まじり
8　黄褐色粘質土
9　黒褐色粘質土礫まじり
10　暗黒灰色粘土
11　黒色粘土
12　淡灰褐色粘土
13　淡黒色粘土
14　黄色粘土

第57図　　調査地土層図

12．右京第50次（７ANIKC－２地区）調査概要

１．は　じ　め　に

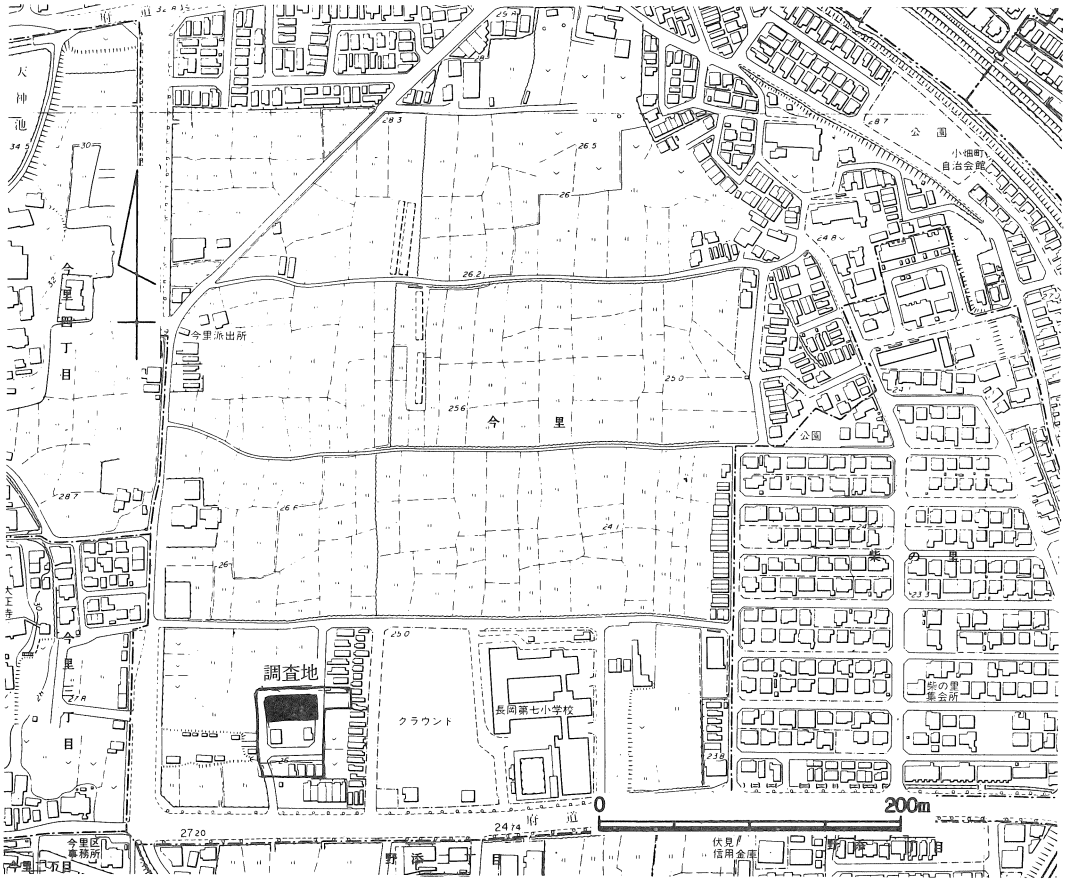
１．本報告は，1980年10月８日から11月22日まで，長岡京市今里北ノ町４他で実施した右京三条二坊十四町，及び今里遺跡に関する発掘調査の概要報告である。

２．調査は大栄建設興業（株）の住宅建設に伴って実施したもので，調査面積は250㎡である。

３．調査は長岡京市教育委員会が主体となり，長岡京跡発掘調査研究所に委託して行った。現地調査は吉岡博之（長岡京跡発掘調査研究所調査員）が担当した。調査にあたっては補助員として波多野徹・白川成明・滝本直人・辻林磨宏，作業員として五十棲春一・岩岸常太郎・大根清一・中小路徳造・能勢秀夫・橋本健一・古谷幸一各氏の参加を得た。

４．調査後の遺物整理・実測・トレースは，白川成明・小塩礼子・渡辺美智代・京都考古学研究会のメンバーが行った。

５．本報告の執筆は，１・２・３を吉岡博之が，４・５を山本輝雄が分担して行い，編集は百瀬ちどりが行った。



第58図　　調査地位置図

2．調　査　経　過

本調査地は，今里の集落が立地する洪積段丘の東部にひろがる，小畑川によって形成された氾濫原にあたり，調査直前まで水田であった。付近の地形を見ると，調査地の北側および南側の水田はやや高くなっており，東西方向に帯状の低地が観察できた。また調査地北西部には涌水によるため池が存在する。

調査地の周辺は，右京域でも調査例の多い地域である。段丘上の右京第１次・２次調査では奈良時代前期から平安時代の古代寺院乙訓寺の講堂跡や，弥生時代中期の今里遺跡の遺構が，また段丘を下ったところでは，右京第７次・12次・26次調査(注1)で，西二坊大路，三条条間小路の両側溝をはじめ，乙訓最大の古墳である恵解山古墳に先行する前方後円墳の今里車塚古墳や弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴住居址群が検出されていて，長岡京はもちろん，古代の乙訓地方の解明に大きな役割を果してきた。

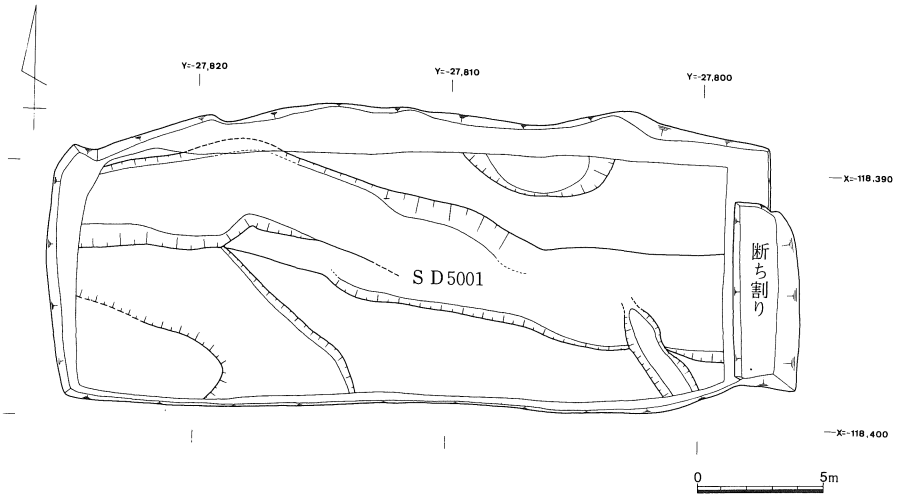
これらの調査成果をふまえ，東西25m，南北10mのトレンチを設定して調査を行った。地区割は東西をアルファベット，南北を数字とした。調査は，まず水田の耕作土を重機によって削除し，それから下層は人力によって掘り下げていったが，涌水が著しく作業は困難をきわめた。耕作土の下には水田床土とみられる茶灰色粘質土層があり，層中より中世の土師器片や瓦器片が出土した。この層より下層は，５cmまでの砂礫からなる，緑灰色砂礫層や褐色砂礫層等の砂礫層と有機物を含むシルト層が続く。つまり，トレンチ全面が，旧河道にあたり，その中を巾１～４mの流路がくり返し流れ，また埋没していった状態であった。そのうちでも，第59図に示した流路は弥生時代中期の遺物だけを含むもので、ＳＤ5001と呼ぶ。これらの流路はすべて西方から東方へ向って流れている。

また，トレンチの約25m南側で防火水槽埋設の工事に立会って土層を観察したが，この地点には該当する層は確認されなかった。

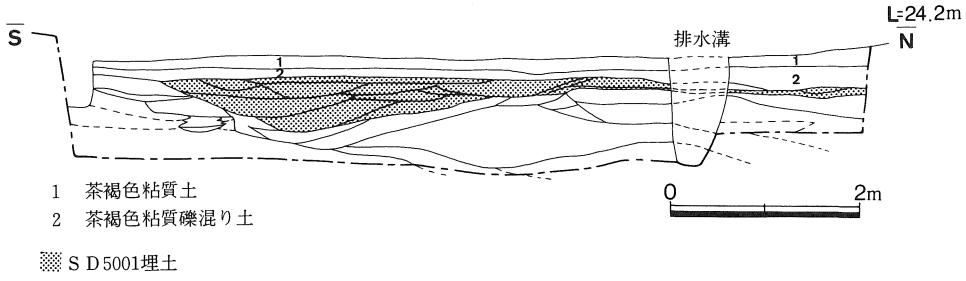
3．検　出　遺　構

調査の結果，調査地全体が自然の旧河道であることが明らかになったが，河道の堆積状況を観察すると，この河道を最後に埋めたのがＳＤ5001であり，砂礫に混じってかなりの弥生時代中期の土器が出土した。

旧河道ＳＤ5001　流路は幅３～４m，深いところで50cm余りをはかり，調査地を西北西から東南東へ流れている。その埋土は一様ではなく，砂礫，砂，シルト層が複雑に堆積している。このことは，このＳＤ5001がある程度の期間をもって埋没したことを示しているが，これらの層から出土する遺物が弥生時代中期のものに限定されることからみて，その時期とさほど隔たりをおかずに堆積したものと推定される。また，遺物の出土状況は一箇所にかたまることなく，ほぼ均等



第59図　　検出遺構図



第60図　　調査地東壁土層図

に出土しており，中には相当磨滅しているものもある。このことは，これらの遺物が砂礫と共に上流部より流されてきたためと考えられる。遺物には，土器のほかに打製石鏃が一点ある。

この旧河道は，暗灰色粘土層を切り込んで流れたものであるが，ＳＤ5001より下層では遺物はみられなかった。

4．出　土　遺　物

今回の調査で出土した遺物は，旧河道ＳＤ5001から出土した弥生土器と，茶灰色粘質土層に包含されていた中世の土師器，陶磁器などがある。後者の出土量は少ないため，ここでは前者を中心にその概要を述べることにする。

旧河道ＳＤ5001出土遺物　　先にも述べたように，遺物は旧河道内に堆積していた砂・礫・シルトの互層から出土したもので，微量の石器，木製品をのぞく大部分が弥生土器であった。弥生土器のいずれもが細片であり，しかも磨滅の著しいものもかなりあるため，全形を得るものはないが，壺，鉢，高坏，甕などがある。なお器形の分類等にあたっては，今里遺跡の報告

例[注2]に準拠することにする。

壺（第61図１～19）

壺Ａ（１～３）は，口頸部から口縁部にかけて漏斗状に大きく開く壺で，口縁端部をほとんど拡張させない。口縁部外面にハケメ調整を施し，内面には横ハケメ調整を行っている。

壺Ｃ（４～13）は，直立気味に外傾する頸部をもち，口縁部を水平に近くおり曲げている壺である。口縁端部は上下に拡張しており，端面には，細い凹線文を施すものが多いが，櫛描波状文を施すもの（６），櫛描孤状文を施すもの，無文のものなどがある。口縁部内面は，櫛描波状文（12）や刺突文（13）など施文するものは少なく，ほとんどが横ナデ調整を行うのみである。頸部から体部にかけての外面は，縦ハケメを施すものが多いが，櫛描の直線文，波状文，刺突文などを配したものの他，断面三角形の突帯文を貼り付けたもの（６）もある。

壺Ｄ（16・17）は，外方にひらく頸部から屈曲して上方に立つ口縁部をもつ器形で，丈高の器体になるものと考えられる。口縁端部は，内側に拡張するものが多く，頸部下端には，指頭およびハケ原体による圧痕を施した凸帯をめぐらしている。口縁部外面は無文のもの（16）の他，凹線文を施すもの(17)，山形文を施すもの，櫛描直線文を施すものなどがある。頸部から体部にかけて、縦ハケメ調整を行うものが多い。

壺Ｆ（14）は，外彎する口頸部から屈曲して短く内上方に立つ口縁部をもつ壺である。口縁部外面には劣鋭な櫛描波状文を施している。外面の調整は粗い縦ハケメを行った後，横ナデによって部分的に消しており，内面は横ナデ調整を行っている。

壺Ｇ（15）は，内彎気味に直立する筒状の口頸部をもつ，いわゆる細頸壺である。15のように口縁部外面は凹線文と櫛描文を組合せて施文する場合が多い。

壺Ｉ（18・19）は，無頸壺である。18は段状に突出させた口縁部に４条の凹線文を施した上，ヘラによる斜線文をくわえ，その下端には櫛描波状文を配している。19は，脚台部で，裾部に４条の凹線文をめぐらし，その上に円形の透し孔を穿っている。

鉢（第62図24・31）

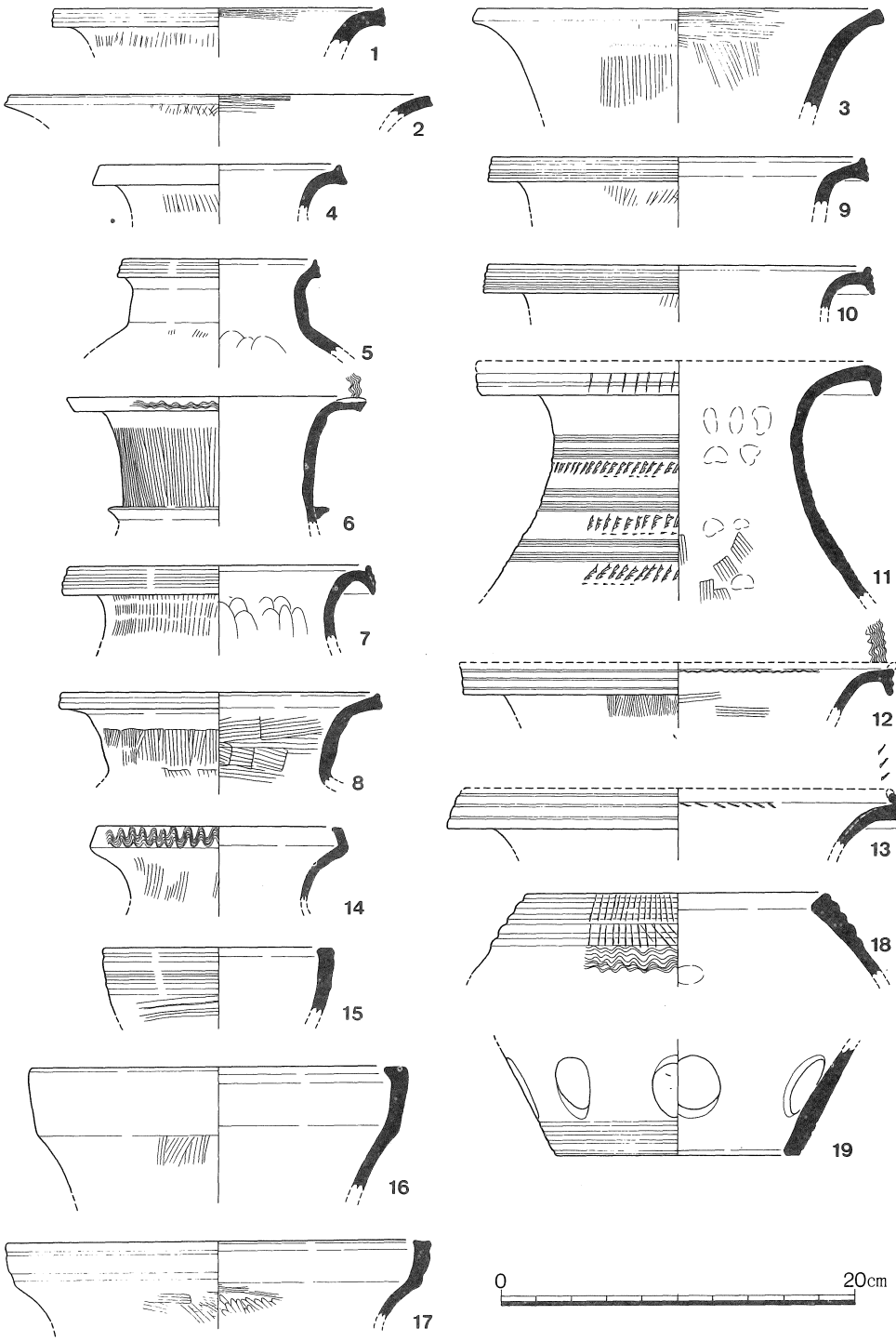
鉢Ａ（24）は内彎気味に直口する鉢で，口縁部に４条以上の凹線文を施している。

鉢Ｂ（31）は段状の口縁部をもつ大型の鉢である。口縁部をおり曲げて段をつくっており，端部を内側に拡張させている。外面は櫛描簾状文と刺突文をめぐらしているが，他に櫛描波状文と直線文を交互に配したものがある。

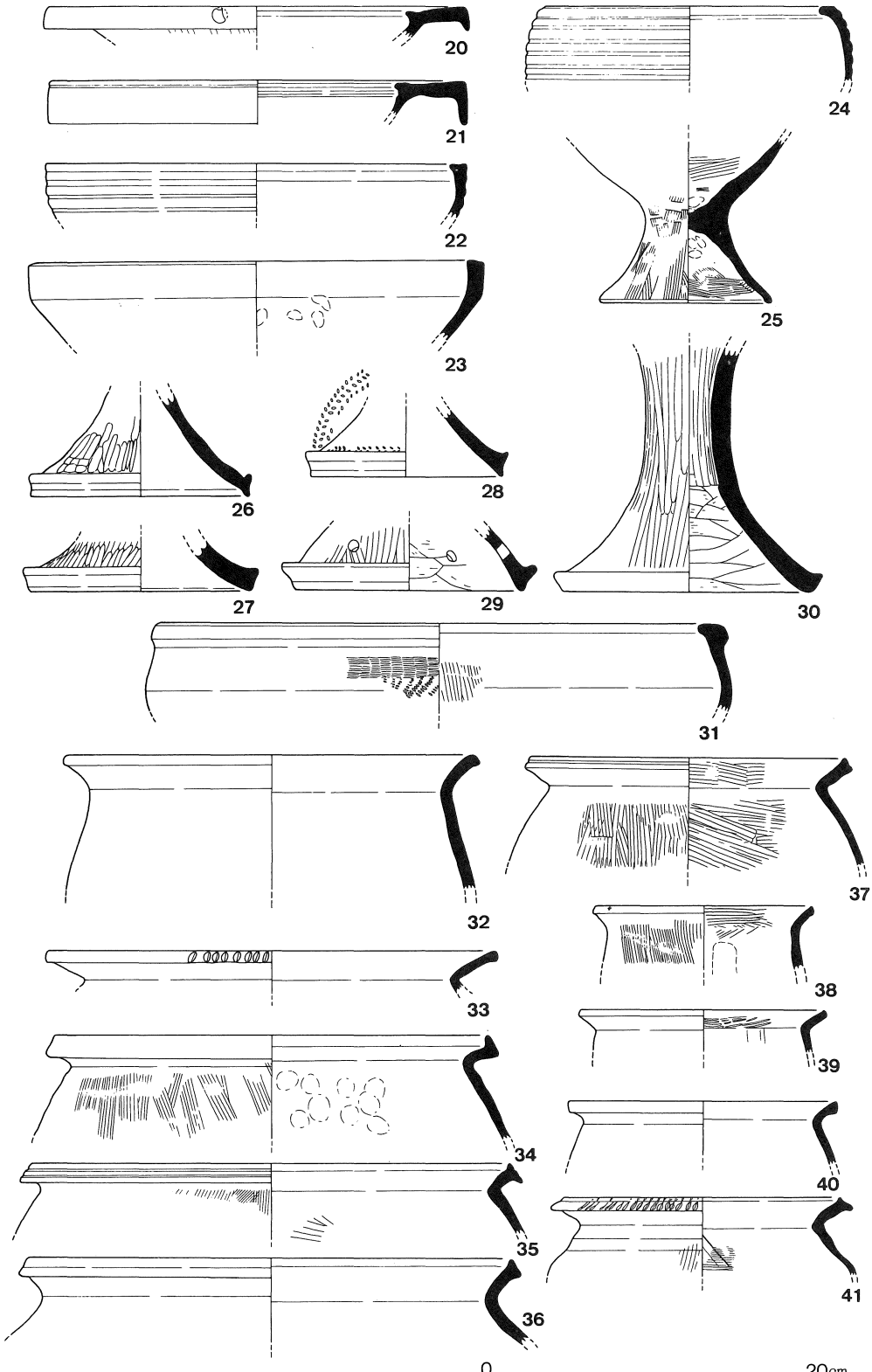
高坏（第62図20～23）

高坏Ａは，直口する坏部をもつもので，口縁端部を内方に拡張するもの(22)と，拡張しないもの（23）がある。口縁部外面を強く横ナデして，凹線文をめぐらすものの他，無文のものもある。

高坏Ｂは，水平方向に張り出した口縁部をもち，その内面に１条の凸帯をめぐらすもので，口縁端部を短く垂下させるもの（20），幅広く垂下させるもの（21）がある。口縁部を施文しな



第61図　　旧河道ＳＤ5001出土弥生土器実測図(1)



第62図　　旧河道ＳＤ5001出土弥生土器実測図(2)

いのが一般的であるが，(20)のように，円形浮文を貼り付けた例もある。口縁部内外面に横ナデ調整を行い，坏部の外面はヘラケズリの後ヘラミガキを施す。

脚台（第62図25～30）

高坏あるいは鉢の脚台と思われるものである。下方へ開く裾部をもち，端部を上外方へ拡張させて面をもつもの（26～30）と，まるくおさめるもの（25）がある。前者には，端面を強く横ナデして凹線状の凹みをつくるものが多い。裾部には，径6㎜ほどの小円孔を穿ったもの（29），列点文をめぐらすもの（28）などがある。内外面ともハケメを施す（25）を除いては，すべての外面を縦にヘラミガキ調整するが，内面は横方向にヘラケズリを行うものと横ナデを施すものとがある。

甕（第62図32～41）

甕A（32・38）は，ゆるやかに外反する口縁部をもつ甕で，体部の張りは少ないものと思われる。口縁端部をまるくおさめるもの（32）と，平坦面となるもの（38）があり，刻目文を施すものもある。内外面は，ハケメ調整を行っている。

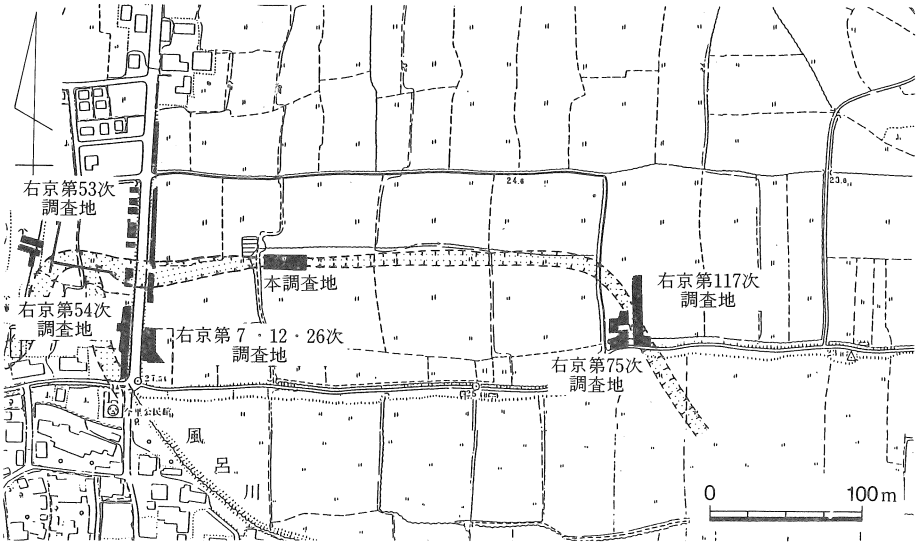
甕B（33・37・39・40）は，頸部が「く」の字状にくびれ，上外方へ短くひらく口縁部をもつ。(33)のように口縁端面に刻目文を施すものがかなりあるが，無文のものもある。外面の調整はハケメ調整を行うが，タタキの残っているものもある。

甕C（34～36･41）は，「く」の字状にくびれる頸部に，短く外反する口縁部をもち，口縁端部を上下に拡張するもので，口径25㎝以上の大型のものが多い。口縁端部に凹線文をめぐらすもの（35・36），刻目文を施すもの（41），無文のもの（34）などがある。口縁部のみを横ナデ調整し，体部内外面にはハケメ調整を行うものが多いが，体部外面にタタキの残るもの，櫛描直線文と波状文を施したものが１例ある。

以上の土器は，いずれも畿内第III・IV様式の範ちゅうに属するものである。

5．ま　と　め

今回の調査では，長岡京に関係する遺構，遺物はほとんど検出されなかったものの，旧河道ＳＤ5001が検出された。この旧河道は，調査地のほぼ全域をおおう規模のもので，西から東へ向って活発に流れを繰り返しつつ弥生時代中期に埋没したことが判明した。調査地の周辺では，こうした旧河道がこれまでの調査で数例確認されている。当地の西方では，右京第７次調査で検出されたＳＤ0732と右京第54次調査(注3)でのＳＤ5403が知られている。ＳＤ0732は，幅15m・深さ0.9mを測る旧河道で，西から東に向って流れており，砂礫と有機質を含む粘質土の埋土中からは弥生時代中期の土器が多量に出土した。ＳＤ5403はＳＤ0732のすぐ西側で検出した蛇行する旧河道で，幅7～13m・深さ0.8mを測るが，埋土，出土遺物はＳＤ0732とほとんど同様であったため，両者が同一の河道と考えられた。今回のＳＤ5001は，先の２両者と流れの方向，埋



第63図　　弥生時代流路復原図

土の状況，出土遺物の時期のどれをとってみても共通点が多く，こうしたことからみて，一連の河道であったことは想像に難くないであろう。一方，当地の東方で実施された右京第75次調査(注4)では，北北東から南南西に流れる旧河道ＳＤ7501・7506が検出されているが，これも一連の河道と考えることもあながち否定できない。この様な旧河道の確認は，当時の旧地形を復原する上での不可欠な資料であり，今後これら旧河道の追究とともに，周辺地域での弥生時代の様相を把握して行く必要があるものと思われる。

注１）高橋美久二他「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1979)』1979年）
高橋美久二他「長岡京跡右京第26次調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1980－２)』1980年）

２）注１に同じ

３）山本輝雄他「長岡京跡右京第53・54次（７ＡＮＩＳＴ－２・３地区）調査概要」（長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書第９冊』1982年）

４）山本輝雄「長岡京跡右京第75次（７ＡＮＩＫＣ－３地区）調査概要」（長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書第９冊』1982年）

13．右京第62次（７ANROW地区）調査概要

１．は　じ　め　に

１．本報告は，長岡京市調子一丁目12において，1981年１月８日から２月７日まで実施した，長岡京跡右京八条三坊二町に関する発掘調査の概要である。

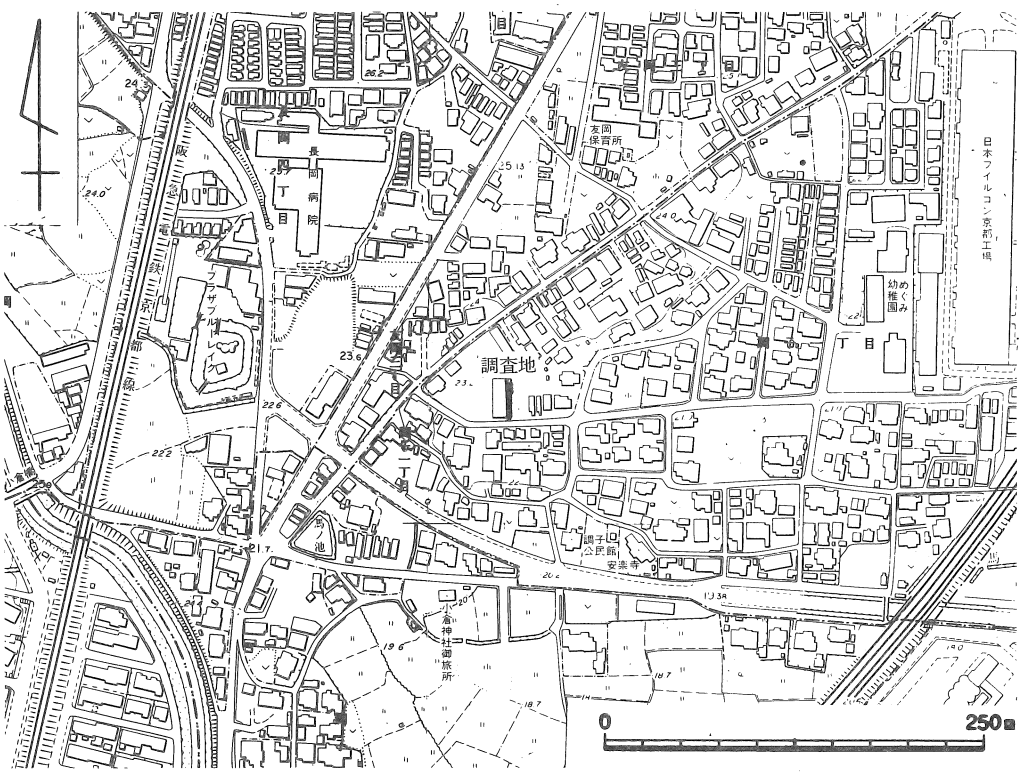
２．今回の調査は，鷹野運送（株）の駐車場建設に伴う事前の調査であり，調査面積は40㎡であった。

３．発掘調査は，長岡京市教育委員会が主体となり，長岡京跡発掘調査研究所に委託して実施された。現地調査は，長岡京市教育委員会社会教育課嘱託山本輝雄が担当し，補助員として辻林磨宏，横谷孝和，作業員として岩崎又男，田中寅吉の各氏の参加・協力があった。

４．調査後の遺物・図面等の整理には，主に吉田レイ子，片平智子氏の協力を得た。

５．本報告の編集，執筆は山本が行った。

６．鷹野運送（株）には，現地調査にあたって色々の御便宜を頂いた。ここに記して感謝の意を表したい。



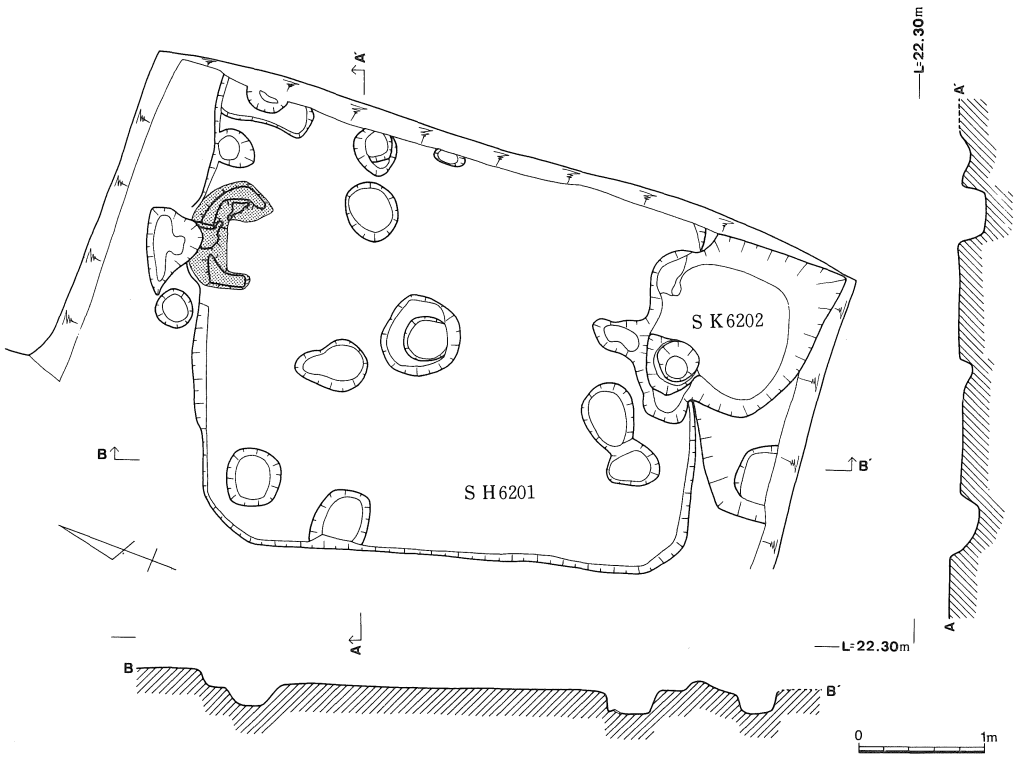
第64図　　調査地位置図

2．調　査　経　過

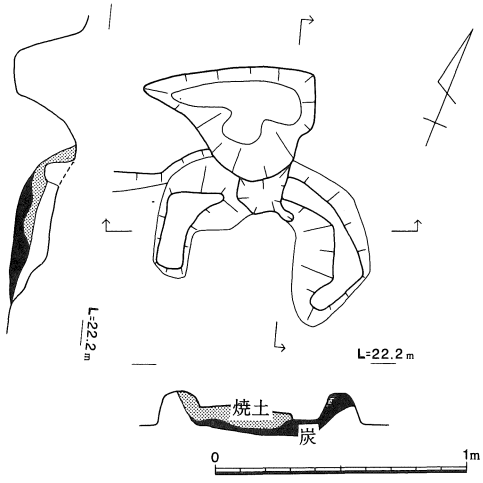
今回の調査地は，小畑川と小泉川とにはさまれた洪積段丘の縁辺付近に立地し，現在の標高は22.4m前後ある。長岡京の条坊では，右京八条三坊二町にあたり，当地のすぐ東には西二坊大路が想定されるところでもある。調査地の周辺では，これまでほとんど調査が行われていなかったため，土層の堆積状況や遺構・遺物の有無を確認する目的で，1981年１月８日から12日まで試掘調査を実施した。試掘では，幅１m，長さ26mのトレンチを設定して行った結果，トレンチ北端部において，竪穴住居址の一部を検出した。このため，1981年１月26日から２月７日までトレンチを拡張して竪立住居址の追求を試みたが，住居址の東辺部は，敷地外に所在することが判明し，残念ながら，住居址の全容を確認するまでには至らなかった。

3．検　出　遺　構

調査地は造成地であり，15cmほどの盛土がなされており，建物の基礎が存在した。この下には，旧耕作土，黄褐色砂質土が堆積し、明黄褐色の粘質土あるいは礫の地山に至っているが，トレンチの北寄りでは，地山の上に暗茶褐色粘質土が堆積している。遺構はすべて地山面で検



第65図　　検出遺構図



第66図　竪穴住居址ＳＨ6201かまど実測図

出した。

竪穴住居址ＳＨ6201　調査地北部で検出した隅丸方形の住居址。東辺部が調査地外へつづくため全容は不明であるが，南北４ｍ，東西2.75ｍ以上，残存の深さ約0.2ｍを測る。周壁溝は存在しないが，北辺部にかまどを備え付けている。かまどは馬蹄形を呈し，一部木の根によって攪乱を受けていたものの，遺存状況は比較的良好であった。その規模は東西幅85cm，南北幅63cm，残存高は21cmであるが，支脚は存在しなかった。床面は踏み固めが少なく不明瞭であったが，柱穴が検出された。

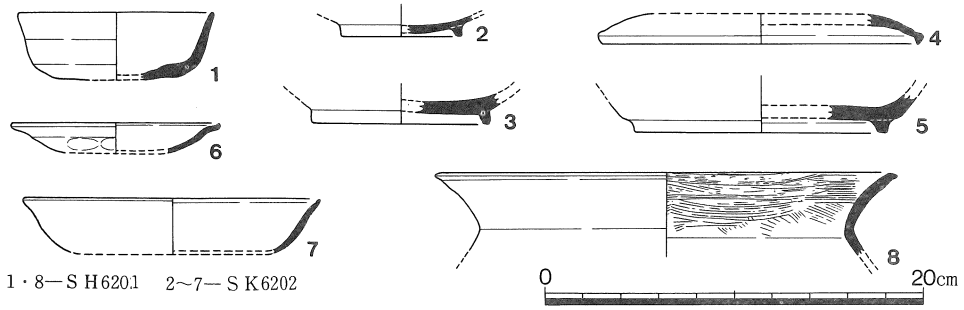
土壙ＳＫ6202　ＳＨ6201の南辺を切って掘り込まれた不整形の土壙であるが，南の調査地外へつづいており，段状に掘られ，深さは約40cmある。埋土は，暗褐色粘質土と炭混りの暗茶褐色粘質土に分けられ，須恵器，土師器，黒色土器，緑釉陶器などが出土している。これらの遺物から，平安時代前半の時期に属するものと考えられる。

４．出　土　遺　物

出土した遺物は，遺構に伴うものと，包含層から出土したものに分けられるが，いずれも細片で，しかも少量であった。ここでは図示できた遺構出土の遺物について報告する。

竪穴住居址ＳＨ6201出土遺物　須恵器坏身・甕，土師器甕がある。（１）は柱穴から出土したもので，外上方にひらく口縁部に，丸味をもった底部がつく。調整は，口縁部内外面をロクロナデし，底部外面をヘラオコシしている。色調は青灰色を呈し，胎土は３～４㎜大の砂粒を含む。（８）は埋土から出土した甕の口縁部で，「く」の字状に外反し，端部を水平に終らせている。口縁部内面には横方向のハケメを施している。その他，甕の体部片が柱穴内から出土している。

土壙ＳＫ6202出土遺物　土師器，須恵器，黒色土器，緑釉陶器，灰釉陶器などが出土しているが，全形の明らかなものは極めて少ない。土師器には皿・甕がある。皿（６）は，口縁部を外反させた後，端部を内側に肥厚させるもので，口縁部内外面を横ナデし，体部外面を未調整で終る。甕は体部の破片で，外面にハケメが施されている。須恵器には，坏Ｂ・蓋・甕・壺などがあり，（５）は，底部に高台のつく坏Ｂ，（４）は坏の蓋である。黒色土器には坏Ａ（７）と坏Ｂ（２）があり，いずれも内面を黒色化するＡ類で，内面に丁寧なヘラミガキを施している。（３）は緑釉陶器碗の高台で，ケズリによって作り出されており，器壁を丁寧にヘラミガキ



第67図　　出土遺物実測図

した後，淡い緑色の釉を施している。

5．ま　と　め

今回の調査は，小規模な調査であり，長岡京に関係する遺構・遺物は残念ながら確認されなかったものの，古墳時代後期の竪穴住居址と平安時代前期の土壙が検出され，古墳～平安時代の集落が存在する手がかりを得ることができた。このため，旧小字名をとって大縄遺跡と呼称することにした。ここでは，古墳時代の竪穴住居址について，周辺の調査例と比較検討し，まとめとしたい。

今回検出した竪穴住居址ＳＨ6201の年代は，その出土遺物からほぼ７世紀前半ごろに比定できるものと考えられる。京都盆地の西南部にあたる乙訓地域では，古墳時代に属する竪穴住居址の調査例が年々増加の傾向にあり，その分布状況や構造が次第に明らかにされつつある。それによると，住居址の大部分は５世紀から６世紀に属するものであり，中海道遺跡，今里遺跡，井ノ内遺跡，開田遺跡，新馬場遺跡、神足遺跡など，検出例は枚挙にいとまがないほどである。特に，今里遺跡では，７世紀前半に竪穴住居から掘立柱建物へ移行することが指摘されている(注１)。こうした例は，畿内において普遍的にみられる現象である。これに対して，今回のＳＨ6201のように７世紀前半にまで下る例は極めて少なく，同じ小泉川の流域では，当調査地の北西600mに位置する伊賀寺遺跡が知られている。ここでは７基の竪穴住居址が重複した状態で検出されているが，いずれも規模が小さく，造りつけのカマドをそなえている。またそのなかからは鉄器がまとまって出土しており，鉄器の普及度を知るうえで重要な調査例である。このように，調査例はいままだ少ないとはいえ，７世紀前半の乙訓地域においては，すでに掘立柱建物を採用している集落と，竪穴住居からなる集落が併存していたことを指摘できる。こうした集落構成の差異が何に起因しているかは，今後の課題となるであろう。

注１）高橋美久二他「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1979)』1979年）

14. 左京第72・73次（７ANQCK－１・２地区）調査概要

１．は　じ　め　に

1．本報告は，長岡京市勝竜寺近竹において，1981年３月15日から1981年４月22日まで実施した左京八条一坊二・七町と久我畷に関する試掘調査と発掘調査の概要報告である。

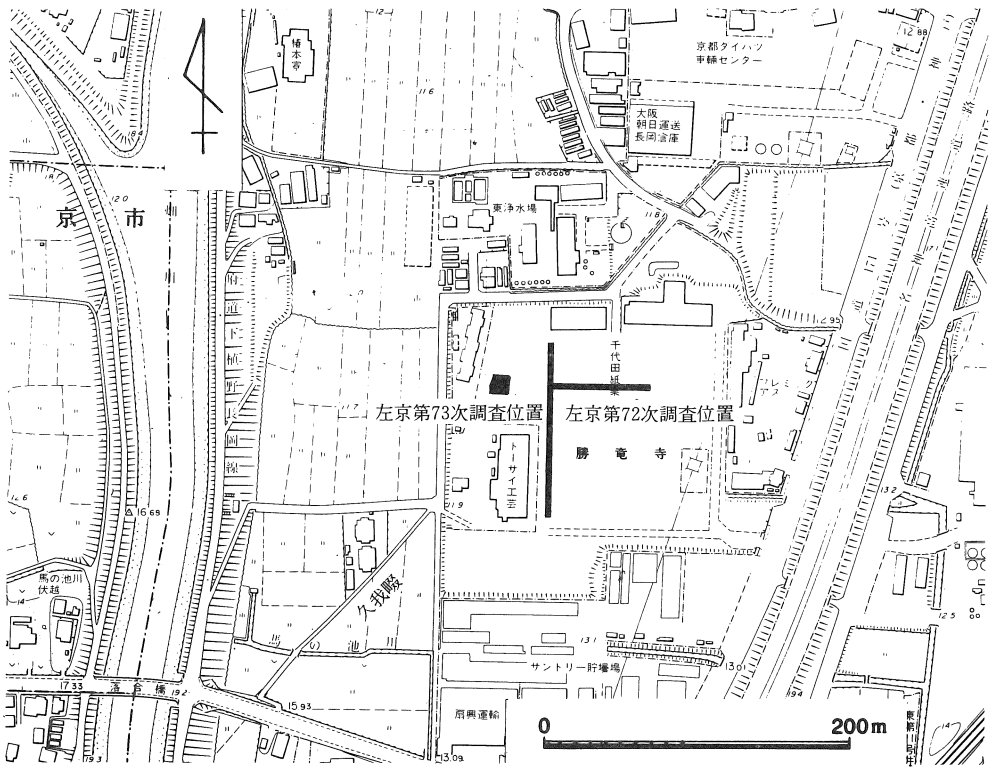
2．当調査は，千代田紙業株式会社建設に伴い行ったものである。調査は，左京第72次調査で溝掘り試掘を行い，左京第73次調査でその一部を広げて本調査に移行した。

3．調査は，長岡京市教育委員会が主体となり，長岡京跡発掘調査研究所が委託をうけて行った。現地調査は，長岡京市教育委員会社会教育課嘱託戸原和人，同岩崎誠が担当し，地元住民の方々や諸大学学生の協力を得て実施した。

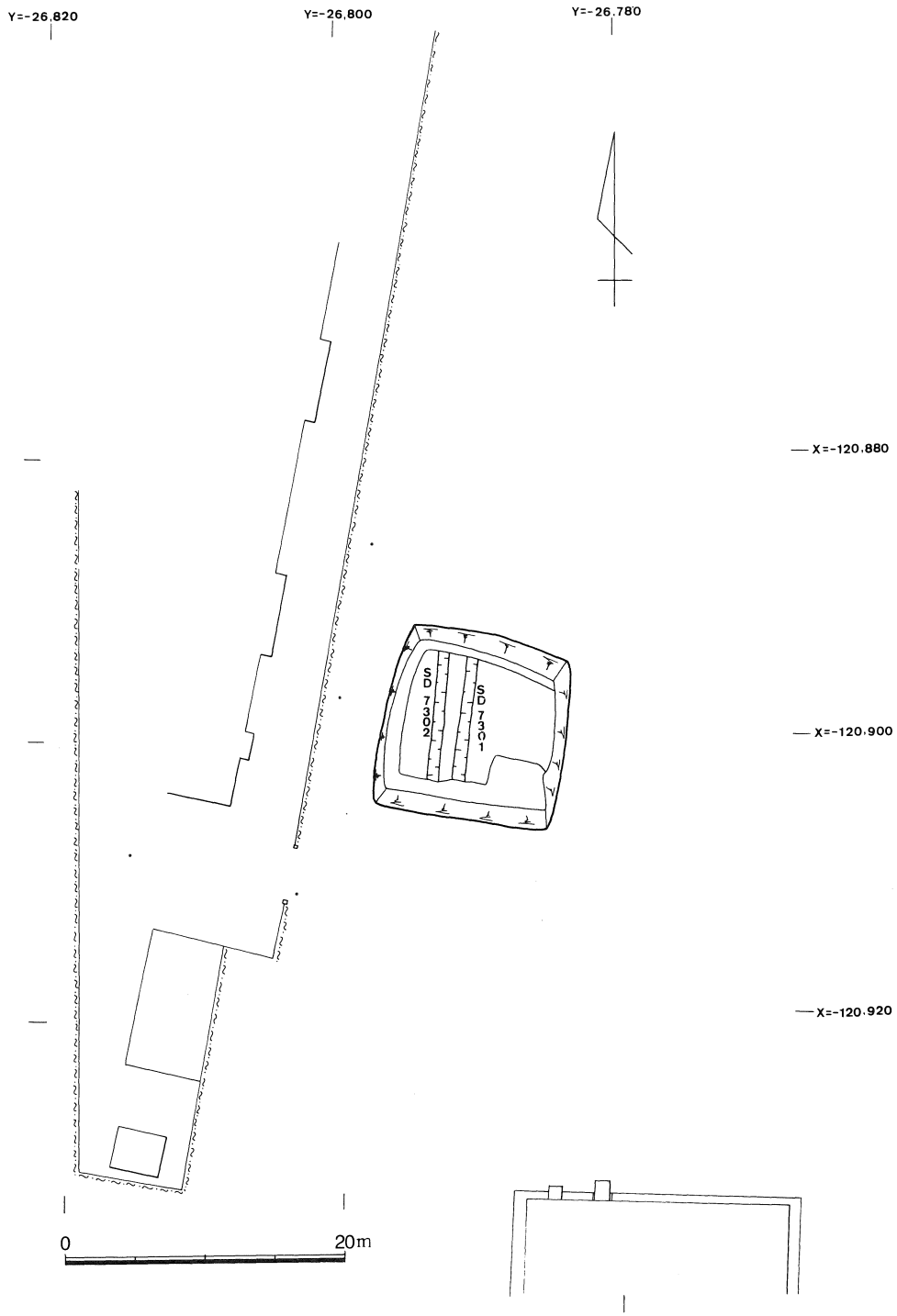
4．遺構等の図面整理，遺物実測，トレースは，主に，白川成明，広瀬繁明，江野直子が行った。

5．本書は，岩崎誠が執筆・編集した。

6．本書作成には，財団法人長岡京市埋蔵文化財センターの協力を得た。記して感謝したい。



第68図　　調査地位置図


Y=-26,820
Y=-26,800
Y=-26,780
X=-120,880
X=-120,900
X=-120,920
SD 7302
SD 7301
0
20m

第69図　　調査地周辺図

2．調　査　概　要

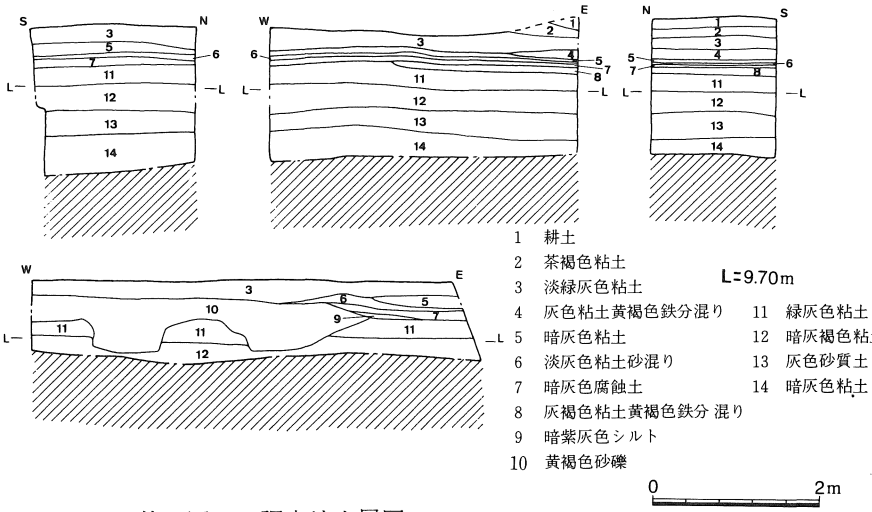
調査地は，(株)東海染工跡地であり，すでに盛土造成整備がされている土地であるが，旧地形は氾濫平野である。長岡京の条坊では，左京八条一坊二・七町に推定されているところである。

左京第72次調査では，幅２ｍの溝掘り試掘調査を実施した。総面積340㎡の調査となったが，湧水が多く，しかも，トレンチの深さが４ｍ前後という状況で，地盤がやわらかく，重機により掘りあげた土を観察する他ない部分も多かった。このため，当対象地の最重視地点を設定し，その部分を細かく調査することになった。

調査位置として，長岡京条坊復原に重要な朱雀大路東側溝と久我畷の推定地を選定し，左京第73次調査として実施した。調査は，12m四方の範囲内とし，四周に排水用の深掘り溝を設定した。まず，重機で３ｍの盛土を完全に除去し，その中に重機を入れ，10ｍ×５ｍを一層ごとに除去していく手順をとった。従って，調査面積は50㎡となった。

その結果，溝状遺構が，地表下約370㎝（旧耕土下約70㎝）のところで検出された。旧地表面から遺構検出面までは，第70図に示すように９層の堆積が認められた。このうち第１～第３層は10～20㎝の厚さで水平堆積しているが，第５～第９層までは第11層上面で検出した溝の東肩部分でなくなっている。

溝は，２本が平行して検出され，いずれも砂礫層の堆積が厚く，深さ約35㎝前後であった。遺物は，第71図（３）のねり鉢底部や須恵器小片の他，染付け（４）が出土した。しかし，いずれも磨滅が著しい。深掘り部分の断面観察によって溝検出面以下は，第11層から第14層まで確認した。これらの各層は，25㎝前後の厚さで水平堆積している。遺物の包含が認められたの



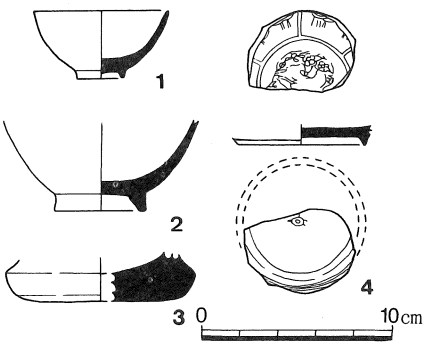
第70図　　調査地土層図

は第11層のみであり，以下の各層には認められなかった。溝が掘りこまれている粘土層第11層には青磁底部片（２）が包含されていることが確認できた。

以上のように，ＱＣＫ地区の左京第72，73次両調査においては，南北方向の近世溝や，小片少量の中世磁器を含む遺物包含層が確認されたにとどまり，長岡京に関する遺構等は，検出されなかった。しかし，当地の場合，盛土が厚く，しかも軟弱地盤の上，湧水が著しいという悪条件であったため，長岡京時代の遺構がもともとないのか，地下深くあるのか結論する資料は得られなかった。今後の，当地周辺に残る水田地における調査が待たれる。

久我畷の痕跡に関しても，検出できなかった。しかし，当対象地より北東と南西の位置に，現在の畦としての跡を残している。このことから，本来は当地にも通っていたことは確実である。この久我畷は，「太平記」と「山州名跡志」に見ることができる。また，長岡京廃都後につくられ，平安京への重要な交通路であったと考えられている。山陽道の一部とも伝えられており，新設時期や衰退時期に興味がもたれるが，今回の調査では，明らかにしえなかった。

このように，長岡京や久我畷に関する成果をあげることはできなかったが，粘土層から中世の遺物が出土したことにより，中世における当地周辺の立地が，湿潤地であったと思われる。また；本調査で検出された染付を含む近世の二条の溝は，埋土が砂礫層であり，当対象地の東に南流する小畑川の氾濫による埋没を物語っている。



第71図　　出土遺物実測図

15. 昭和52～55年度長岡京市内遺跡立会調査概要

例　　言

1．本報告は，昭和52年度から昭和55年度までに長岡京市内で実施した立会調査に関するものである。実施した立会調査は，計92件である。

2．調査は，長岡京市教育委員会が主体となり，長岡京跡発掘調査研究所および市教育委員会社会教育課の担当職員があたり，木村泰彦（竜谷大学生）・白川成明・辻林磨宏・橋本敏治（立命館大学生）等の協力を得た。

3．本報告に使用した地図は，長岡京市発行の1/10,000および1/2,500のものである。

4．調査一覧表の調査次数は，長岡京市内で実施された立会調査に通し番号をつけたものである。7701とは，1977年度の第１回目の調査ということである。なお，備考欄に※印のあるものは，本文中に調査概要を記載した。

5．本報告書の執筆は，中尾秀正（市教育委員会社会教育課職員）・岩崎誠（長岡京市埋蔵文化財センター職員）・竹井治雄（京都府埋蔵文化財調査研究センター職員）が行った。また，作成にあたり，小田桐淳・鈴木芙美子・辻林磨宏・前田明美・小塩礼子・西川裕子・西村益子・丸山美子・小畠絢子・西岸秀文等の各氏の協力を得た。

6．8001次調査出土瓦の整理にあたっては，木村捷三郎氏（財団法人京都市埋蔵文化財研究所資料部長）高橋美久二氏（京都府立山城郷土資料館資料課長）から御指導と御教示をいただいた。記して感謝したい。

はじめに

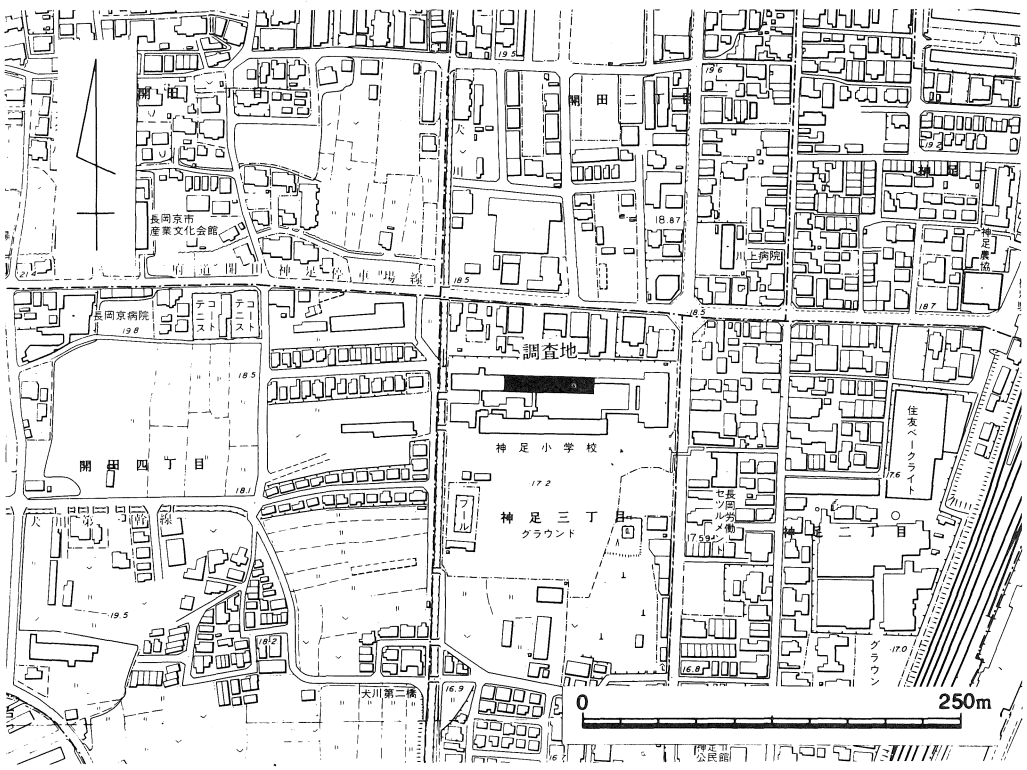
昭和52年度から昭和55年度までに実施した立会調査は，付表６，第105図のとおりである。立会調査はおもに，ガス・水道・下水道等の地下埋管工事や河川改修，道路拡幅，住宅・マンション建築の基礎工事などに伴うものである。これらの工事は掘削面積が狭少であり，掘削底面が浅いことなどから，ほとんどの調査が遺物採集と掘削断面精査による土層観察にとどまるものである。しかし，立会調査は，市内の遺跡の分布状況を明らかにしていく上ではきわめて有効的手段になり得る。とくに，近年はじまった下水道管の布設工事は，市内全体を網の目のように線掘り工事するもので，その地域の遺跡の分布・旧地形を把握する上で効果的な調査である。ただ，今日まだ，立会調査体制が不十分であり，立会調査を効果的に実施できないことは遺憾である。

本報告では，実施した立会調査のうち，成果を得た主な調査について概要を述べたい。

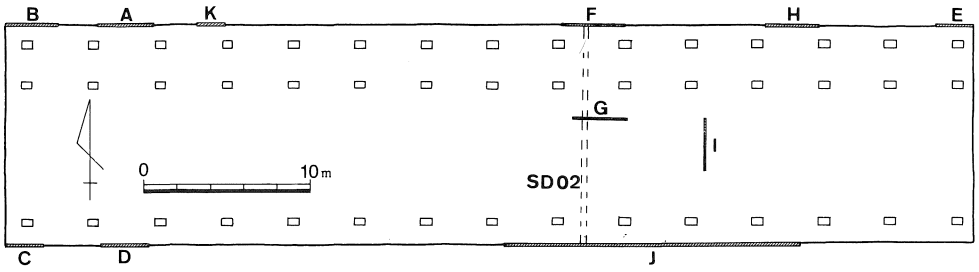
長岡京跡第7704次（７ANKKI地区）立会調査概要

本調査地は，長岡京跡右京六条二坊一町にあたり，北側に推定五条大路が通り，東方に西一坊大路が通るところである。また，この地域一帯は，弥生時代前期・古墳時代後期の開田遺跡にあたる。東方約50ｍのところで，昭和56年度の発掘調査によって，西一坊大路が検出され，同大路の東側溝ＳＤ7701からはコンテナ箱約50箱分の長岡京時代の土器が出土した。とくに，供膳形態の土器が多いことから，付近に官衙的性格をもつ施設があったと推定されている。また，同大路の西側溝ＳＤ7708の西方での立会調査において，黄褐色粘質土の地山面から切り込まれた４個の柱掘方を検出し，東西に廂の付く南北棟建物になると思われるＳＢ7712を検出している。(注1)

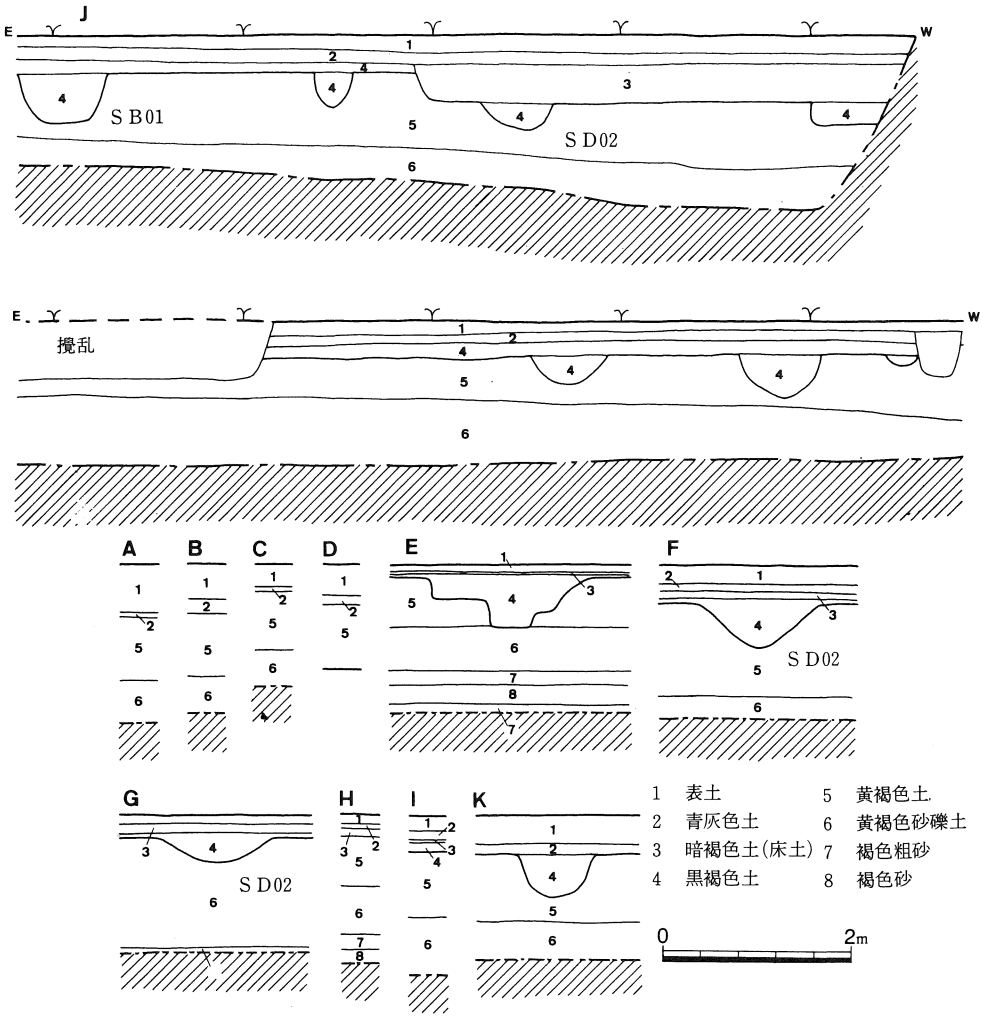
調査は，校舎改築工事に伴うものであり，工事はコンクリート杭を打ち込んだのち，校舎敷地全体を深さ約1.5ｍまで掘り下げるものであった。調査は，掘削断面の精査をして，断面観察によって行った。調査地の層位は，表土，青灰色土（耕作土），暗褐色土（床土）の順で，地表下約20㎝で，黒褐色土層が厚さ４～20㎝あり，その下は黄褐色砂礫土層（地山）となっている。



第72図　　第7704次調査地位置図



第73図　　第7704次調査位置



第74図　　第7704次調査地土層図

遺構は，南壁の東部断面において，南北方向の溝ＳＤ770402と東西方向に並ぶ３間分の柱列（ＳＢ770401）などを検出した。

なお，調査にあたっては，建物の柱部分の基礎に打たれたコンクリート杭からの距離を基準

に図面実測を行った。また，レベルは地表面を基準にして作図した。

掘立柱建物ＳＢ770401（第74図）　南壁の東部において東西方向に並ぶ４個の柱掘方を検出した。いずれも黄褐砂礫土の地山面から切り込まれている。柱痕跡が検出されていないので，正確な柱間を計測しえないが，西から2.8m（9.3尺），2.4m（８尺），2.4m（８尺）となる。これは，西の１間分がやや広いため問題は残るが，柱掘方の端の一部が検出されたものとすると東西３間の柱列となり，建物になる可能性がある。

溝ＳＤ770402（第74図）　南壁で検出した掘立柱建物ＳＢ770401の西２mで検出した溝で，Ｇ・Ｆ断面でも検出していることから南北方向の溝と思われる。溝の規模は，幅0.7～1.2m，深さ約0.3mで，埋土は黒褐色土である。西一坊大路の中軸との距離は約63mで，１尺を0.2957mとすると213尺となる。

これらの遺構からは，埋土の黒褐色土の中から土師器，須恵器の小片が出土しているのみである。歴史時代と思われるが，正確な時期決定はできない。

以上のような調査成果を得たが，立会調査という限られた条件の調査だったため，遺構の時期・性格を把握することは困難であった。今後，付近での発掘調査により，当調査成果が解明されることに期待したい。　（中尾　秀正）

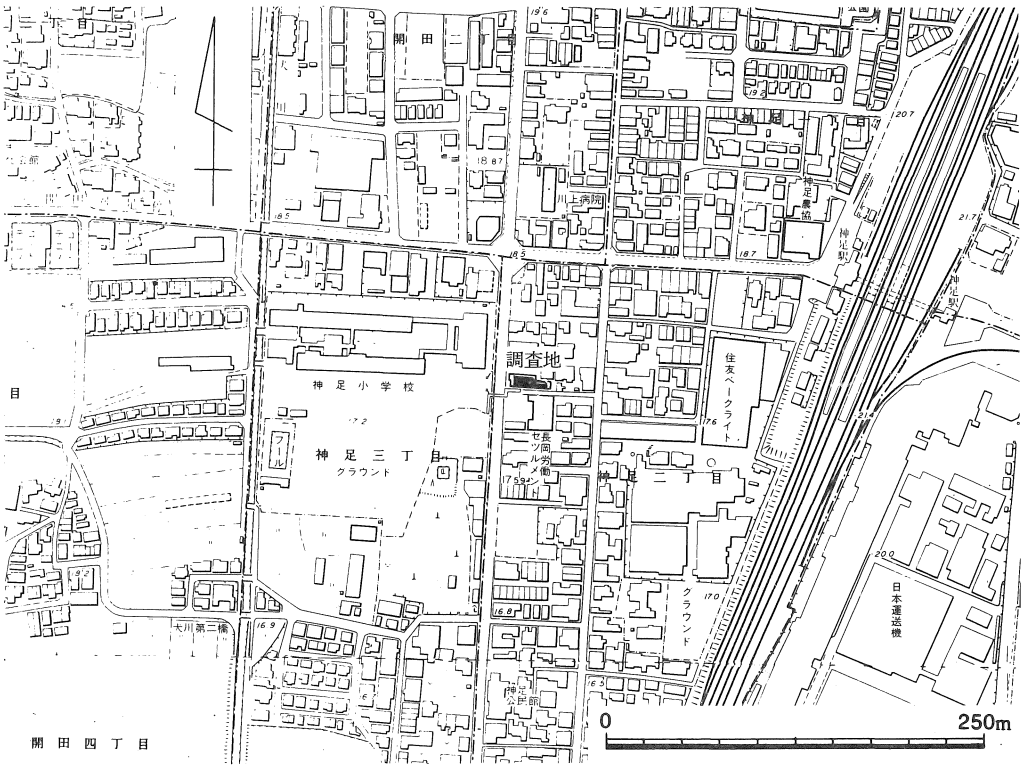
注1）山本輝雄　木村泰彦「長岡京跡右京第77次（７ＡＮＫＳＭ地区）調査概要」（長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書第９冊（1982）』昭和57年３月）

長岡京跡第7706次（７ＡＮＫＳＭ地区）立会調査概要

本調査は，個人のマンション建設工事に伴うものである。建物基礎部分の掘削工事は建築部分の全域を地表下1.5mまで掘り下げるものであった。そのため，調査は掘削断面の精査・観察を行うというものであった。

調査地は，洪積段丘上の標高18～19mの平坦な地形にある。また，長岡京条坊復原では右京六条一坊十六町にあたり，すぐ西側を西一坊大路が通る。また，東側には，西国街道がほぼ南北に走り，今日でも商店街として往時の姿をとどめている。

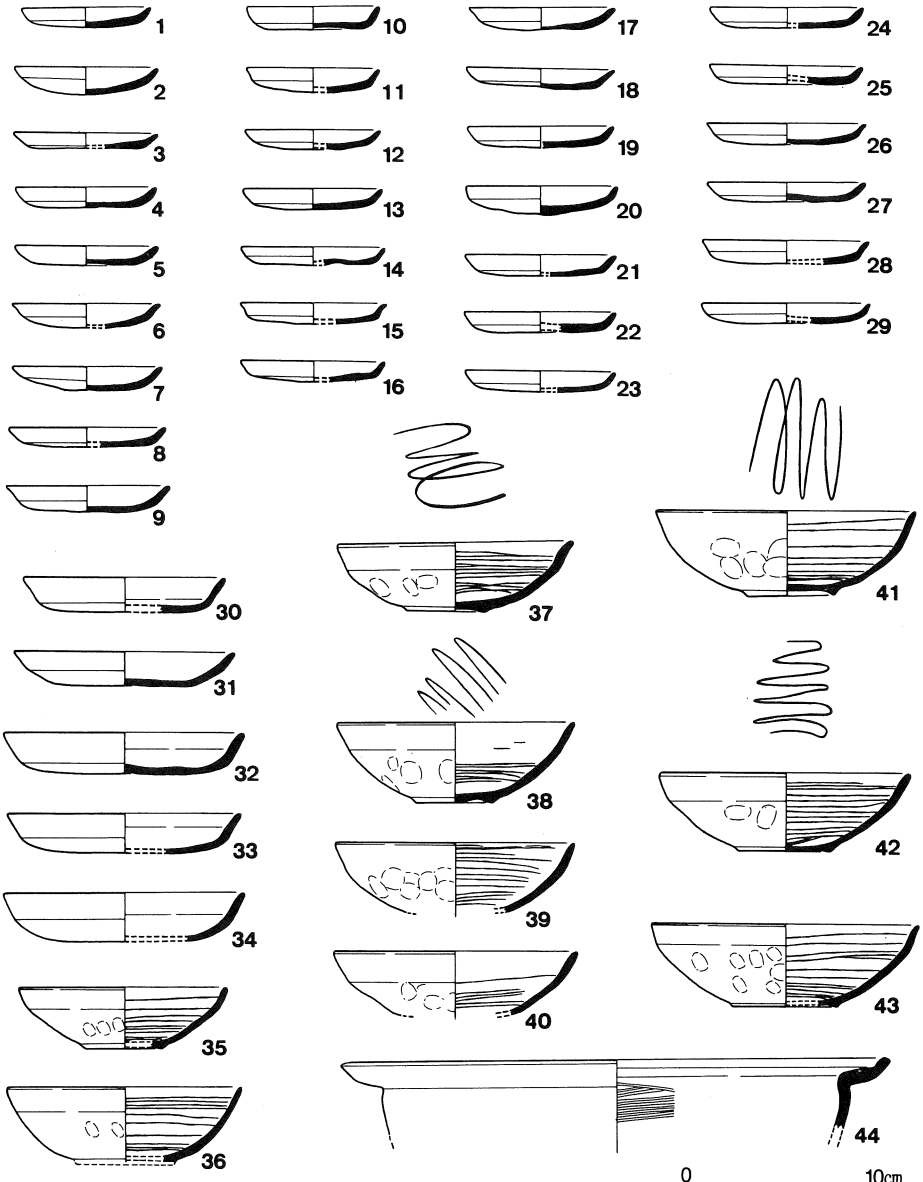
調査の結果，基本層位は南壁では，地表下約60cmまで表土，その下30cmまで黒色土，さらにその下は，褐色土となっている。一方，中央部北壁では，表土の下はすぐ褐色土となり，その下は地山の褐色礫層，黒灰色礫層，黄褐色砂層となっている。遺構は，褐色土を切り込んだピットなどが検出された。遺構の埋土は，黒色土である。遺物は，遺構の埋土および遺構検出面上層にある黒色土から多量の土師器・瓦器と須恵器の小片がわずかに出土した。



第75図　　第7706次調査地位置図

土師器は大半が皿で，わずかに甕がある。皿は法量により大小に区分され，さらに法量の小さいものは口縁部の調整方法により２種類に大別できる。Ⅰ類は口径6.7～8.7cm，器高0.8～1.5cmのもの（１～29），Ⅱ類は口径10.4～12.5cm，器高1.8～2.5cmのもの（30～34）である。さらにⅠ類は口縁部外面の横ナデの強弱によって，弱いもの（１～９）と強いもの（10～29）に分けられる。以上のⅠ・Ⅱ類は，いずれも内面ナデ，口縁部外面を横ナデ，底部外面を指オサエのみで調整するものである。焼成は良好で，淡赤褐色又は明褐色を呈する。なお，これらの土師器には，灯火器に使用したとみられる油煙の痕跡のあるものが１例ある。又，図示できなかった皿の破片に，口縁部端部を屈曲させた後内側に折りまげ肥厚させるものも数片出土している。甕は体部の小片が数片だけある。

瓦器は，埦（35～43）がほとんどで，鍋（44）・羽釜の小片が数片出土している。埦は口径10.8～14.0cm，器高3.2～4.3cmで，口径は12.5cm前後，器高は3.5cm前後のものが多い。器壁は一様に３mm程度の薄手で，いびつなつくりである。体部はやや内彎気味で，口縁はほぼまっすぐ斜上方にのびる。高台は低く粗末な断面三角形のものである。口縁部外面には横ナデ調整がよく認められ，沈線を施さない。外面の暗文は省略され，指圧痕を残す。内面見込み部の暗文は粗く，省略化のすすんだ時期のもので，鋸歯状（37・38・41・42）を示す。色調は濃灰色で，胎土は灰白色を呈す。



第76図　　第7706次調査出土遺物実測図

わずかに出土した須恵器は，壺の体部の小片などである。

以上のように，黒色土から出土した遺物は，ほとんどが中世の遺物である。年代的に検討すると，土師器では平安京左京内膳町ＳＫ241出土土器(注1)に比較的類似していることから，遺物の年代は概ね13世紀末から14世紀初頭に比定されると思われる。また，瓦器については，橋本氏の編年(注2)によるⅢ期―３にあたることから13世紀後半に比定されると思われる。

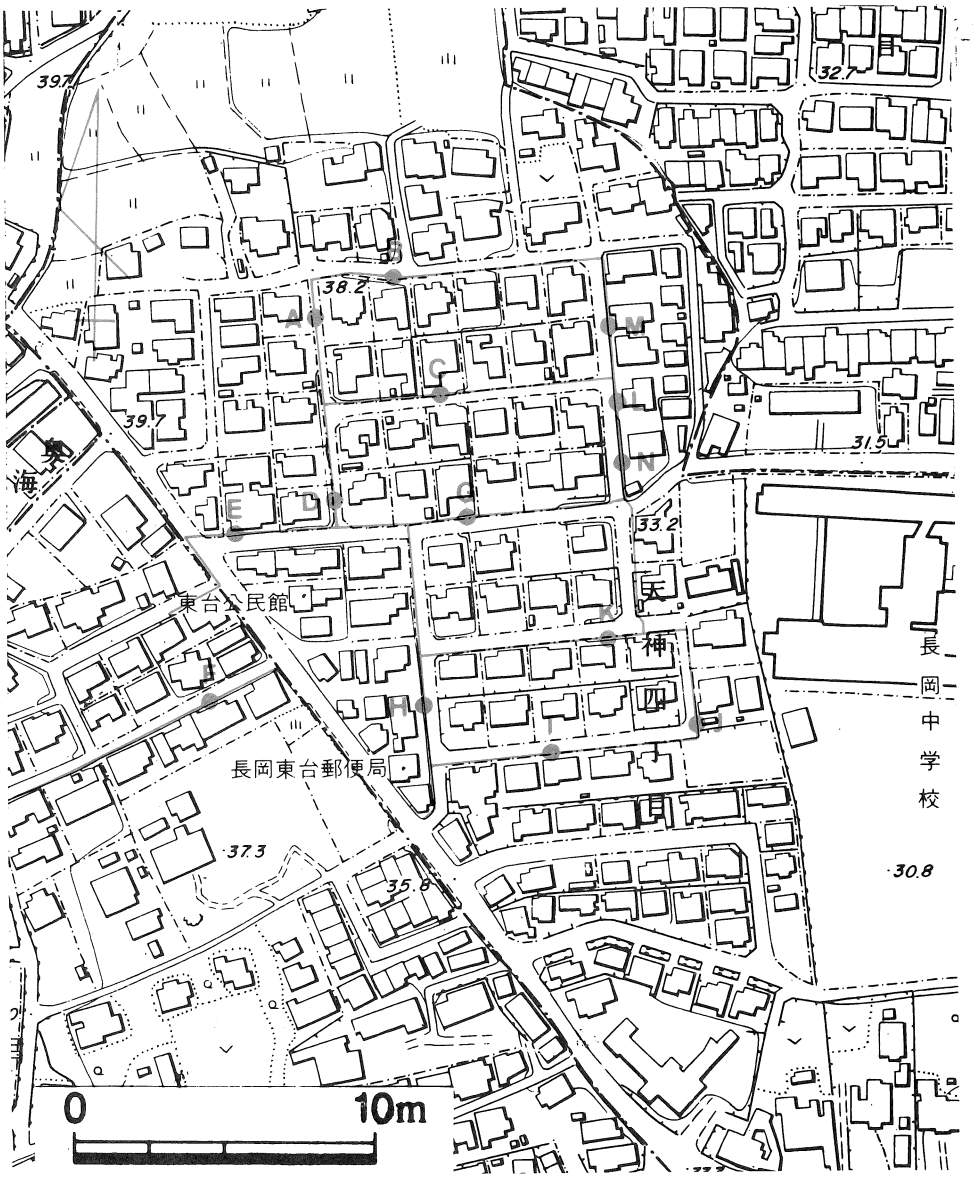
遺構の性格については，先にのべたとおり掘削断面という限られた条件のためわからない。ただ，当地の周辺については，西国街道が東に通っており，古くから京都と大阪を結ぶ交通の要衝にあることから，中世における沿道の状況を知る端緒となろう。

しかし，長岡京時代の遺構に関しては，当地の西側で西一坊大路が検出されているにもかかわらず，今回の調査では，何ら検出されなかった。　（中尾　秀正）

注1）平良泰久　伊野近富「平安京跡左京内膳町昭和54年度発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1980）』昭和55年３月）

2）橋本久和「上牧遺跡発掘調査報告書」（高槻市教育委員会『高槻市文化財調査報告書第13冊』1980年）

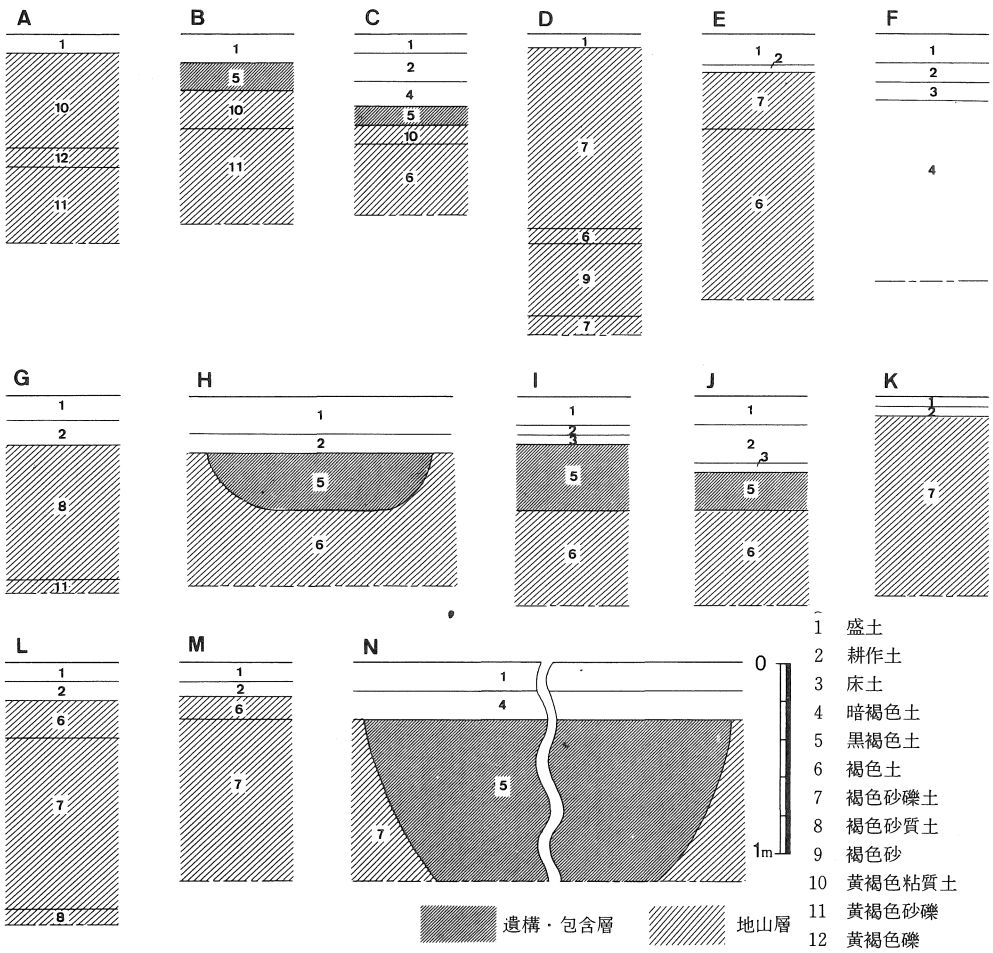
長岡京跡第7709次（７ANPHI地区）立会調査概要



第77図　　第7709次調査地位置図

調査は，天神四丁目（旧奥海印寺東代）地区内に水道管を埋設する工事に伴うものである。

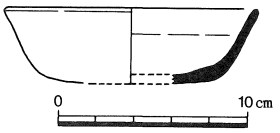
当地は，西山山麓にある北西から南東にゆるやかに低くなる洪積段丘下位面にある標高35m前後の台地上にある。今日静かな住宅街であるが，かつては水田であった。調査地は長岡京跡右京四条三・四坊および五条三・四坊にあたり，また弥生時代後期の遺跡である東代遺跡



第78図　　第7709次調査地土層図

にあたる。

水道管理設工事は，当地内を縦横に走る道路のほぼ全域で，地表下約1.2mの深さまで掘削するもので，調査は，掘削後の断面を観察する方法によった。調査地の基本層位は，表土，耕作土，暗褐色土，黒褐色土，その下褐色土の地山となっており，地山までの深さは，地表下７～60cmである。



第79図　第7709次出土遺物実測図

遺構は，Ｈ地点で土壙770901，Ｎ地点で溝状の落ち込みをそれぞれ検出した。土壙770901は褐色土の地山面に切り込んだもので，幅1.2m・深さ0.3mを計測した。埋土は黒褐色土で，中から土師器・須恵器・瓦が出土した。遺物からみて，長岡京時代前後の土壙だと思われる。また，溝状の落ち込みは，暗褐色土の下層にある褐色砂礫土の地山を切り込んだ幅約10m，深さ0.85m以上の南北方向のものである。埋土は黒褐色土であるが，中からは土師器（羽釜か）が出土した。この性格を把握するために付近でも断面観察を行ったが，何ら検出することはできなかった。

出土遺物は，土師器・須恵器・弥生土器・瓦器・瓦などがありコンテナ箱３分の１箱ほどである。遺物はいずれも，包含層と土壙ＳＫ770901の埋土である黒褐色土から出土している。土壙ＳＫ770901から出土した遺物は，土師器・須恵器・瓦で，須恵器の坏Ａ（第79図）以外はすべて小片である。土師器には，坏・高坏・甕があり，須恵器には坏Ａ・甕がある。平瓦も小片が１片出土している。これらの土器は長岡京時代前後の特徴をもつ。包含層から出土した遺物は，Ｃ地点から土師器（甕），Ｊ地点から土師器（高坏），Ｉ地点から土師器（皿・甕）・弥生土器，Ｎ地点から土師器（羽釜か）がある。

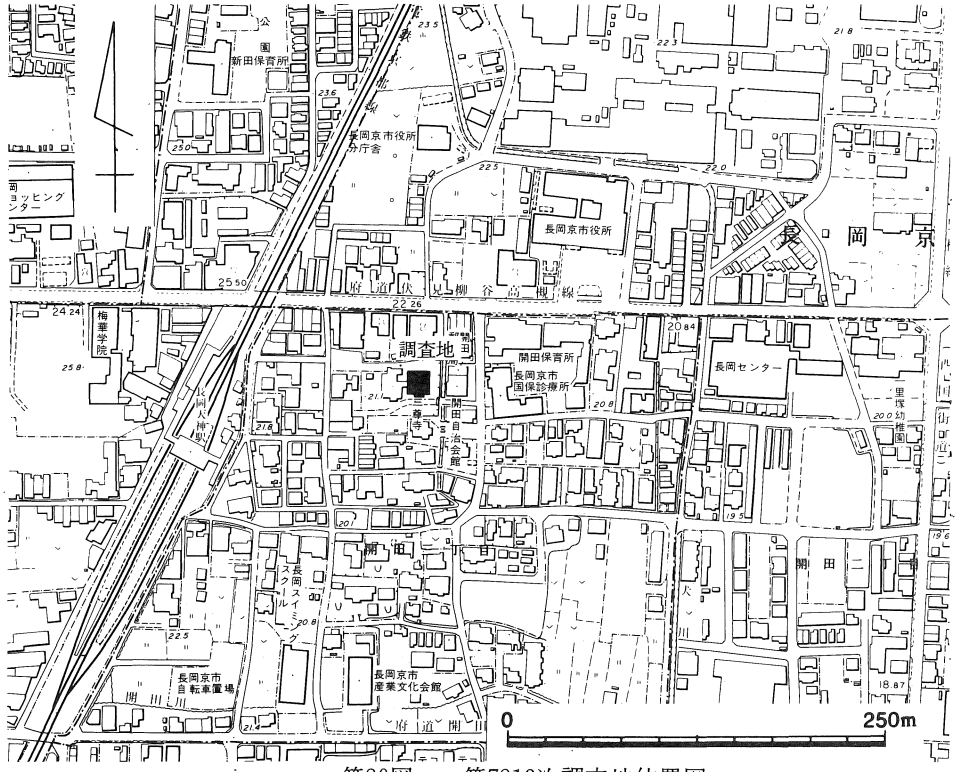
以上のように当地では，調査範囲が広かったにもかかわらず，あまり遺構を検出することはできなかった。ただ，長岡京時代前後の土壙や歴史時代の遺物，さらに弥生土器を検出したことは，今後付近で行われる調査の貴重な資料になるであろう。　（中尾　秀正）

長岡京跡第7813次（７ANKUT地区）立会調査概要

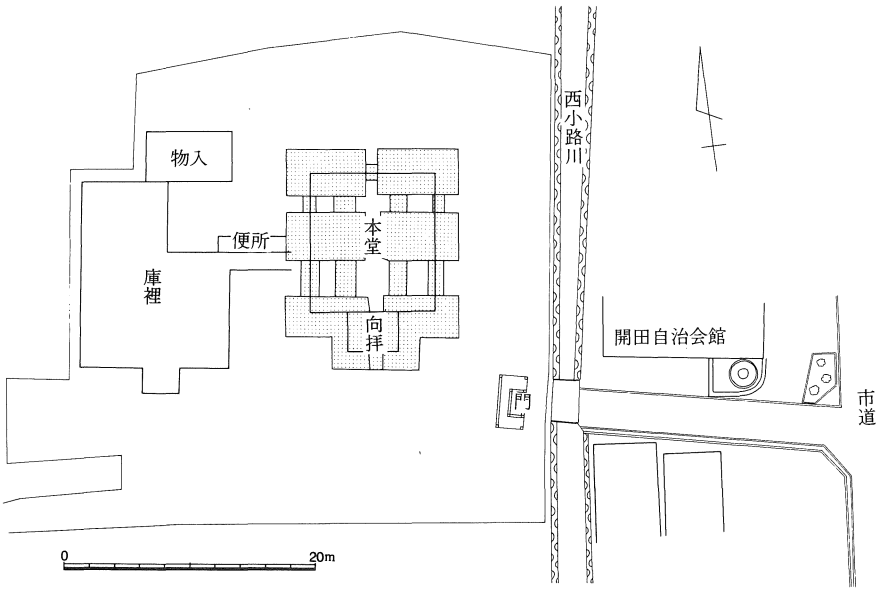
本調査は，三尊寺の建て替え工事に伴うものである。工事は，木造の本堂と庫裡を解体し，その敷地に鉄筋コンクリートの本堂と木造の庫裡を新築するものであった。

建設予定地は，阪急長岡天神駅の東約100mの地点にあり，長岡丘陵から東あるいは南東に向かってゆるやかに傾斜する洪積段丘上に位置し，標高約21mの平坦な地形を呈している。ところで，当地は，長岡京跡右京五条二坊十一町にあたるとともに，中世の城館として著名な開田城の東の一画の中央部にあたる。また，三尊寺の縁起については，次の二つの史料が残されている。一つは「山城名勝志」で，「縁起二云，開田御室戒壇院，当大寺者，桓武天皇勅願延暦三

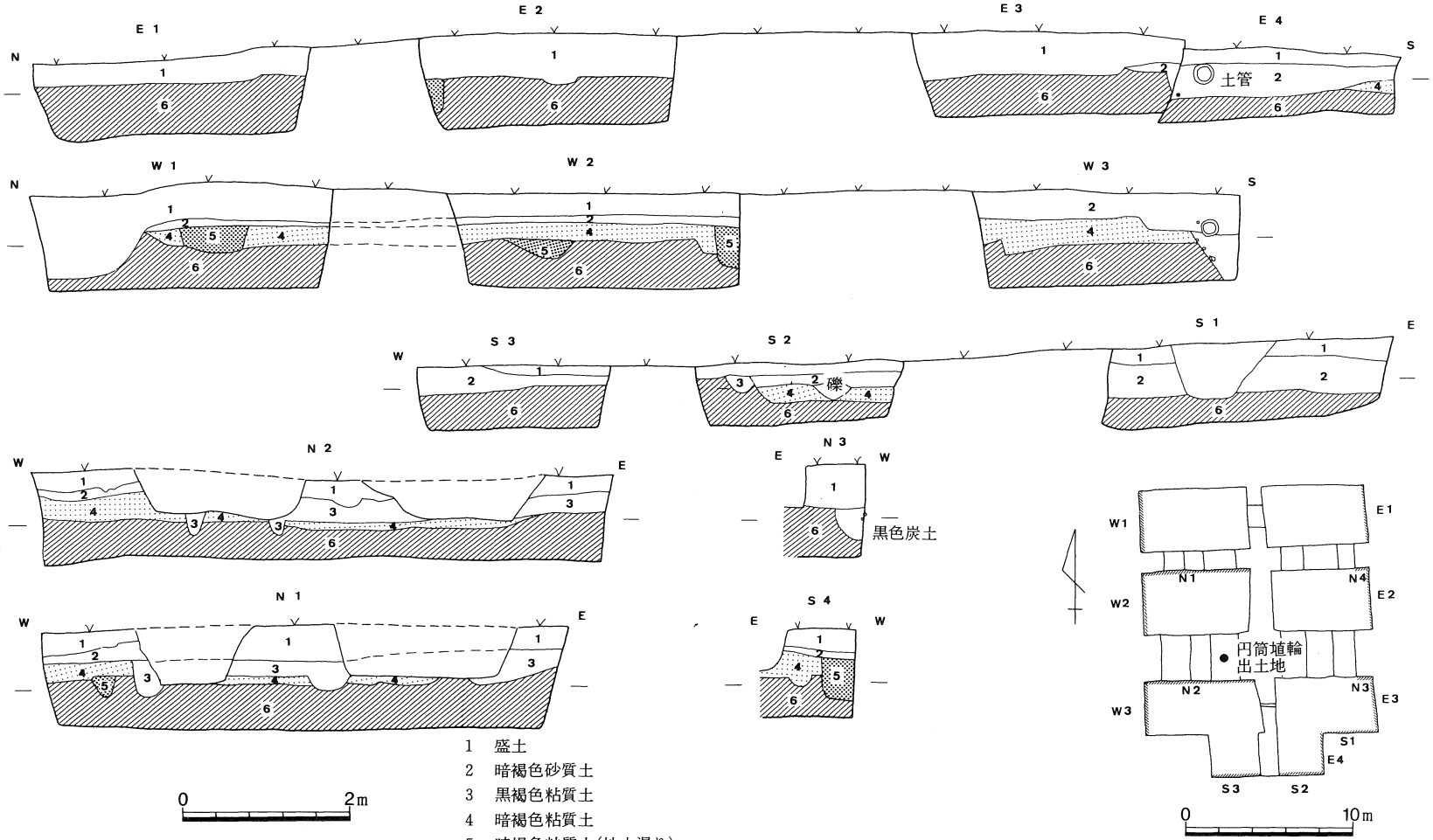
年草創云云，今改号＝仁和山小法院三尊寺＝」と記され，また別に，「京都府地誌」には，仁和年中（885～889年）に僧聖山が開基，天正年中（1573～1592年）に焼失，元和年中（1615～1624年）に僧観誉が再興したとあって，長岡京～平安時代に建立された古い寺であるとの伝えを持っている。



第80図　　第7813次調査地位置図

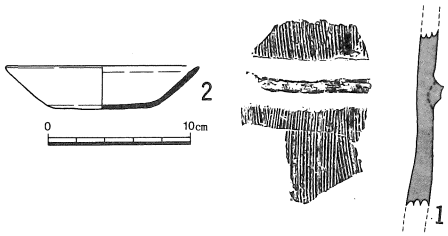


第81図　　第7813次調査地周辺図



1　盛土
2　暗褐色砂質土
3　黒褐色粘質土
4　暗褐色粘質土
5　暗褐色粘質土(地山混り)
6　黄褐色砂質土(地山)

第82図　第7813次調査地土層図



第83図　　第7813次出土遺物実測図

調査は，まず，当開発にともなう事前の発掘調査の必要の有無を確認するために本堂周辺でグリッド掘による試掘調査を行った。その結果，後世の攪乱により顕著な遺構は確認されなかったが，本堂南側のグリッドから，径50cmの円形の柱穴１基と土馬の脚部が検出された。ほかに本堂の東西両グリッドからも近世陶器，中世土師器（第83図）などが出土した。

次に立会調査は，地表下約1.3mまで掘削される本堂の建物基礎部分６ヶ所の断面精査・観察により行った。調査地の基本層位は，地表下約40cmまで，盛土，暗褐色砂質土が堆積し，その下に約20cmの黒褐色粘質土が，その下約10cmの暗褐色粘質土が，その下に黄褐色砂質土（地山）がそれぞれ堆積している。

検出した遺構は，暗褐色粘質土層を切り込んで黒褐色粘質土が埋土となっている小ピット群および，暗褐色粘質土層又は黄褐色砂質土（地山）を切り込んで暗褐色粘質土（地山混り）が埋土となっているピット群がある。しかし，出土遺物がなく，立会調査という限られた条件のために遺構の性格はわからない。

出土遺物は，本堂の南西部の地点で暗褐色粘質土から埴輪のタガ部分の小片が１点出土したのみである。埴輪は土師質で，破片の左上には透し孔の一部がうかがえる。タガの推定径は約26.6cmである。タガ部分はヨコナデで，外面は第一次調整の縦ハケのみ施してあり，内面はナデである。破片であるため，正確な時期は言えないが，おそらく川西宏幸氏の編年(注１)による第Ⅴ期に相当すると思われる。

以上のように，本調査は，埴輪と長岡京時代・中世～近世の土器が出土したが，遺構の性格・時期は明確に出来なかった。そのため，三尊寺の縁起，開田城との関係などについて，十分な考古学的資料が得られなかった。今後の調査に期待したい。なお，当地出土の埴輪の破片は，南東約200mのところにある塚本古墳のものと同時期のものであり，今後検討していく必要がある。

（中尾　秀正）

注１）川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌第64巻第２号』1979年）

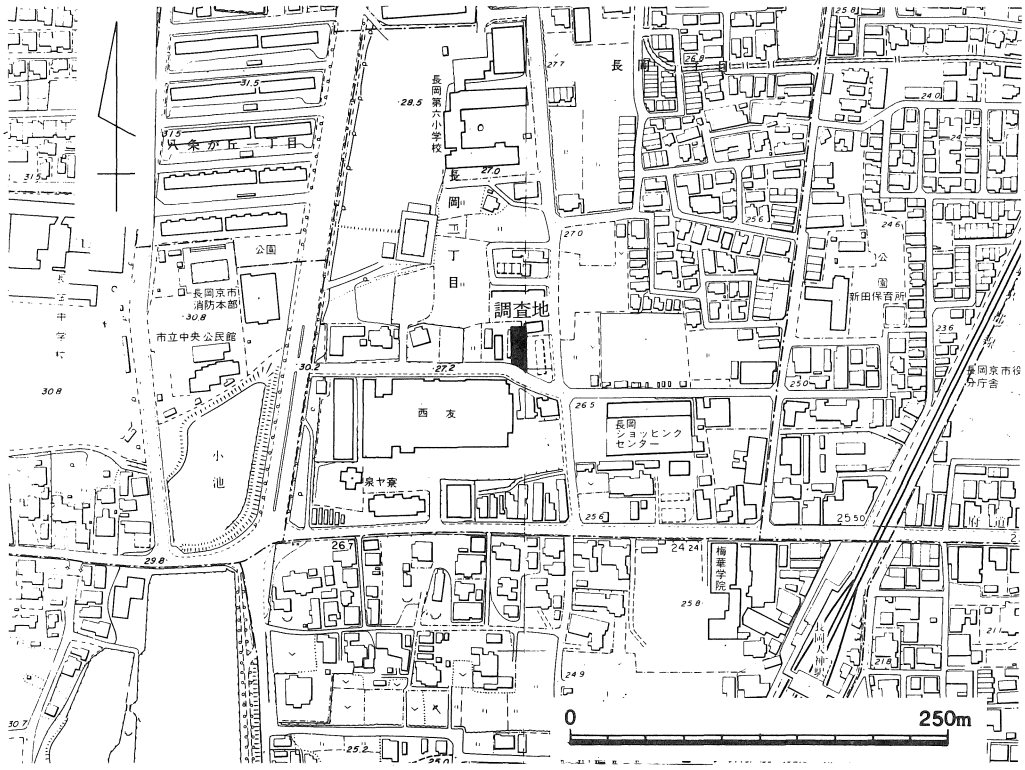
長岡京跡第7814次（７ANKKS地区）立会調査概要

本調査は，店舗建築にともなうものである。工事は，田んぼを造成し，鉄筋コンクリート３階建のビルを建築するものであった。

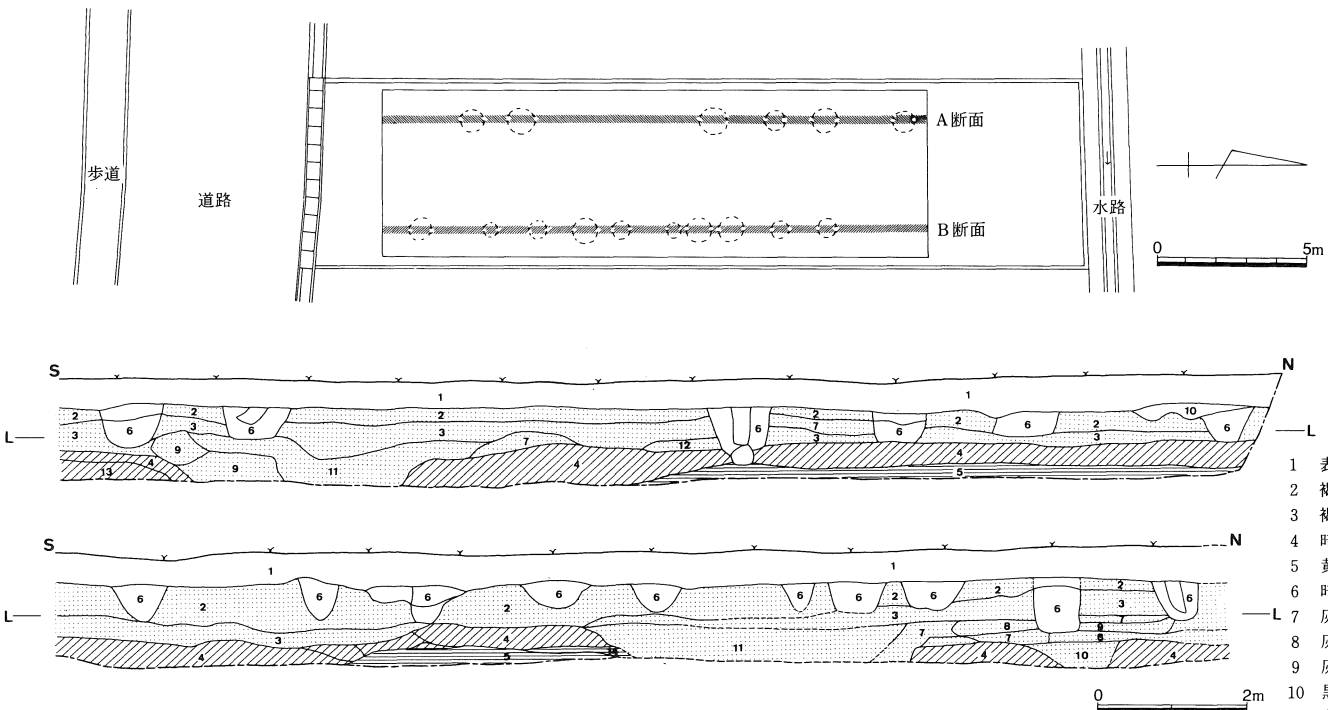
調査地は，阪急長岡天神駅の北西約250mの地点にあり，西約200mに長岡京市立中央公民館や八条が池などのため池が並んでいる。地形は，長岡丘陵から東または南東へゆるやかに傾斜する緩扇状地性低地の標高約27mの比較的平坦な地にある。ところで，当地は，長岡京跡右京五条三坊一町にあたる。

調査は，基礎掘削工事による地表下約1.5mまで南北方向の掘削溝のA・B断面の観察をすることによった。調査地の基本層位は，地表下約40cmまで表土，その下約20cmまで褐色斑入粘質土，その下約30cmまで褐色砂まじり粘質土，その下約30cmまで暗褐色粘質土，その下は黄褐色粘質礫層（地山）となっている。

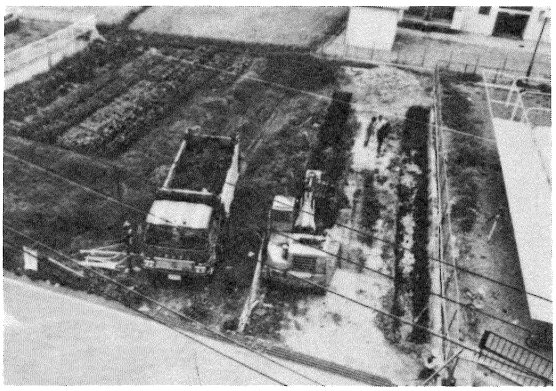
検出した遺構は，褐色斑入粘質土を切り込んだ柱穴群とさらにその下層で暗褐色粘質土を切り込んだ幅３～８mの旧河川などがある。上層で検出した柱穴群は，暗褐色粘質土が埋土となっている。柱穴のなかには，柱根の位置を残すものもある。その柱穴の掘方の大きさは，幅60～90cm，深さ40～80cmを計測し，かなり大きい柱掘方をしている。断面観察であるため，平面的に遺構が把握できないので，建物の方向，構造は不明である。遺物は埋土から少量の長岡京時代前後の須恵器片・土師器片が出土している。このことから，これらの遺構はこの時期のものと推定される。一方，下層で検出した旧河道は，南西から北東方向に流れていたもので，埋土は，



第84図　　第7814次調査地位置図



第85図　　第7814次検出遺構図・調査地土層図



第86図　第7814次調査地全景

第87図　第7814次検出柱穴土層

黄灰色砂まじり粘質土・灰褐色砂質土・灰褐色粘質土・灰色砂質土となっており，B断面では，黒褐色粘質土の堆積した幅1.2mの溝状遺構が旧河道の北側にある。これらの層からは出土遺物が全くないため，時期不明である。上層と下層の関係をみると，下層の旧河道が埋まったのち整地され，柱穴群が掘られたものと思われる。

このように大きく二時期に分けられるが，特に上層で多数検出された柱穴群は，東100m余のところで昭和57年度に発掘調査した右京第119次調査においても，奈良時代から平安時代にかけての建物群を検出していることと合わせて，当時は多数の住居跡が建っていたことを想起させる。

なお，今回の調査中に，当地の周辺の水田の表土からナイフ形石器を採集したため，先土器時代の遺跡として，旧小字名から「小池下遺跡」と命名した。

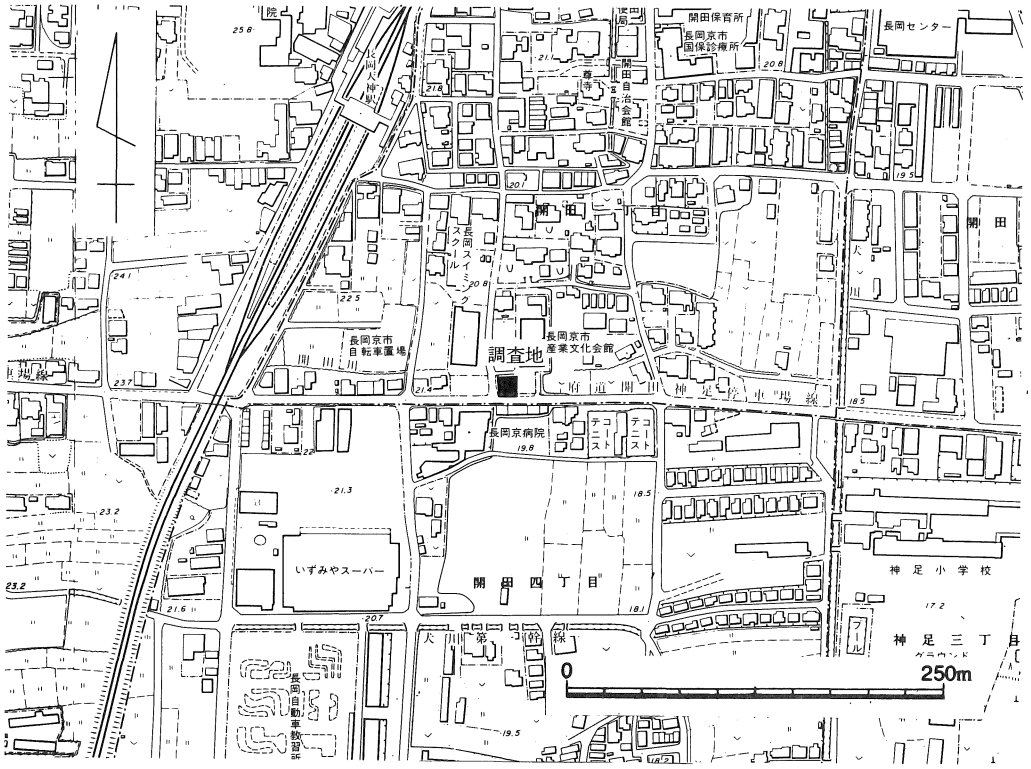
今後，付近での発掘調査に期待したい。　（中尾　秀正）

長岡京跡第7817次（7ANKNT地区）立会調査概要

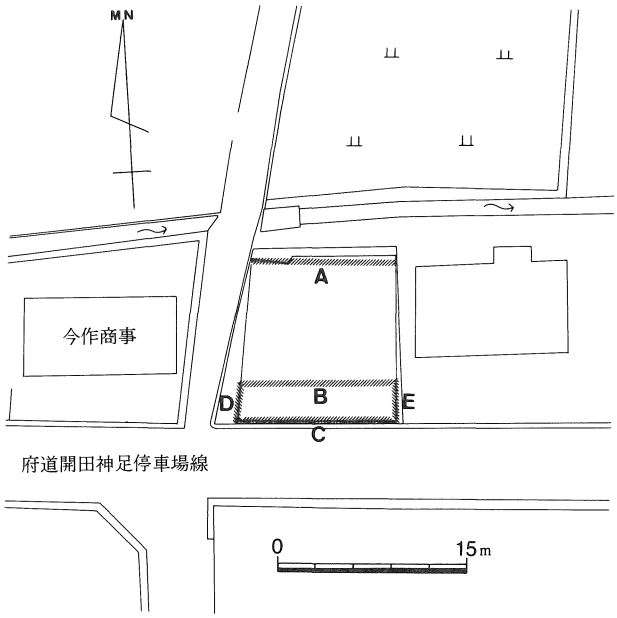
本調査は，医院建築工事に伴うものである。工事は，鉄筋コンクリート造りの二階建の建物を建築するものであった。

建設予定地は，阪急長岡天神駅の南東約100mのところにあり，長岡丘陵から南東方向に広がる緩扇状地性低地に位置し，標高約21mの平坦な地形を呈している。長岡京の条坊復原によると右京六条二坊十二町および五条大路と西二坊第二小路の交差点にあたるとともに，弥生時代前期・古墳時代前期の集落遺跡である開田遺跡にあたる。付近では，これまで数回の発掘調査において，長岡京五条大路の南北両側溝や掘立柱建物等が検出され，長岡京の条坊建設・宅地化がかなり進んでいる地域であることがわかってきた。

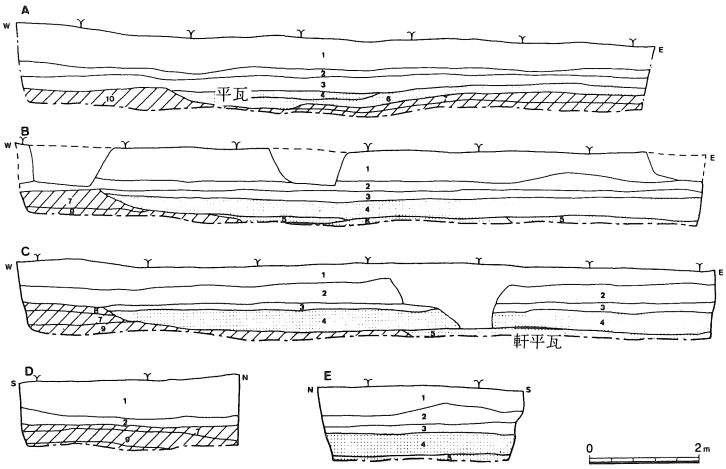
調査は，建物基礎の掘削工事後，掘削断面の精査・観察により行った。工事による掘削は，地表下約1.4mまで行われた。調査地の基本層位は，地表下約90cmまで表土，旧耕作土，床土



第88図　　第7817次調査地位置図



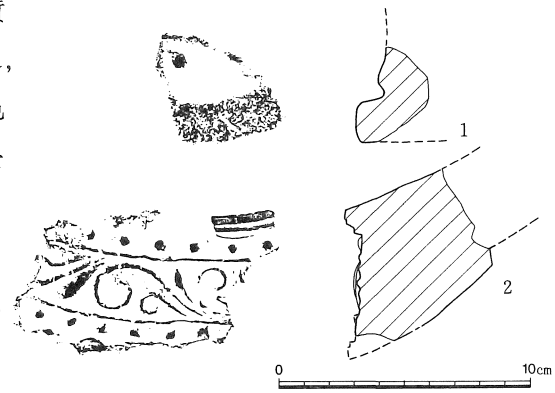
第89図　　第7817次調査地周辺図



1　表土
2　旧耕作土
3　床土
4　暗褐色粘質土
5　茶褐色粘質土
6　黄褐色粘質礫土
7　黄赤色鉄分混じり砂質土
8　黄褐色粘質土
9　黄灰色粘質土
10　黒色砂質土(一部粘質)

第90図　　第7817次調査地土層図

で，その下20～50cm以上の厚さで暗褐色粘質土・茶褐色粘質土・黄褐色粘質礫土が堆積し，その下が黄褐色粘質土・黄灰色粘質土・黒色砂質土の地山となっている。とくに特徴的な点は地山上層に堆積している暗褐色粘質土・茶褐色粘質土・黄褐色粘質礫土が地形に沿って北西から南東に向けて段状に下がっていることで，茶褐色粘質土から須恵器・土師器・軒平瓦・平瓦などが出土していることから，人工的に堆積した土層で落込み状の遺構と思われる。



第91図　　第7817次出土遺物実測図

遺物は，須恵器・土師器・瓦・近世陶器などが少量出土した。須恵器には，鉢（底部）・甕（体部）があり，土師器には甕（肩部）があり，すべて細片のため図化できないが，長岡京時代前後のものと思われる。瓦には，軒平瓦・軒丸瓦各１点と平瓦が数片ある。軒平瓦（２）は均整唐草文軒平瓦の小片である。段鍔をもつ。厚さは5.9cmと推定され，内区厚さ4.2cmを測る。胎土は密で石英粒・長石粒・黒色粒を含み，焼成は良好で，色調は表面灰色，断面灰白色を呈する。凹面は横方向のケズリ，凸面は横方向のケズリののちナデ調整を行っている。平城宮式6664型式である。軒丸瓦（1）は蓮華文軒丸瓦の上半部の破片である。外縁と珠文のみを残す。胎土は粗く，焼成はやや甘い。表面は黒灰色で，断面は灰色を呈する。型式は不明である。平瓦は，すべて凹面布目，凸面縄目である。

以上のことから，今回検出した落込み状の遺構は長岡京時代前後の時期のものと思われるが，

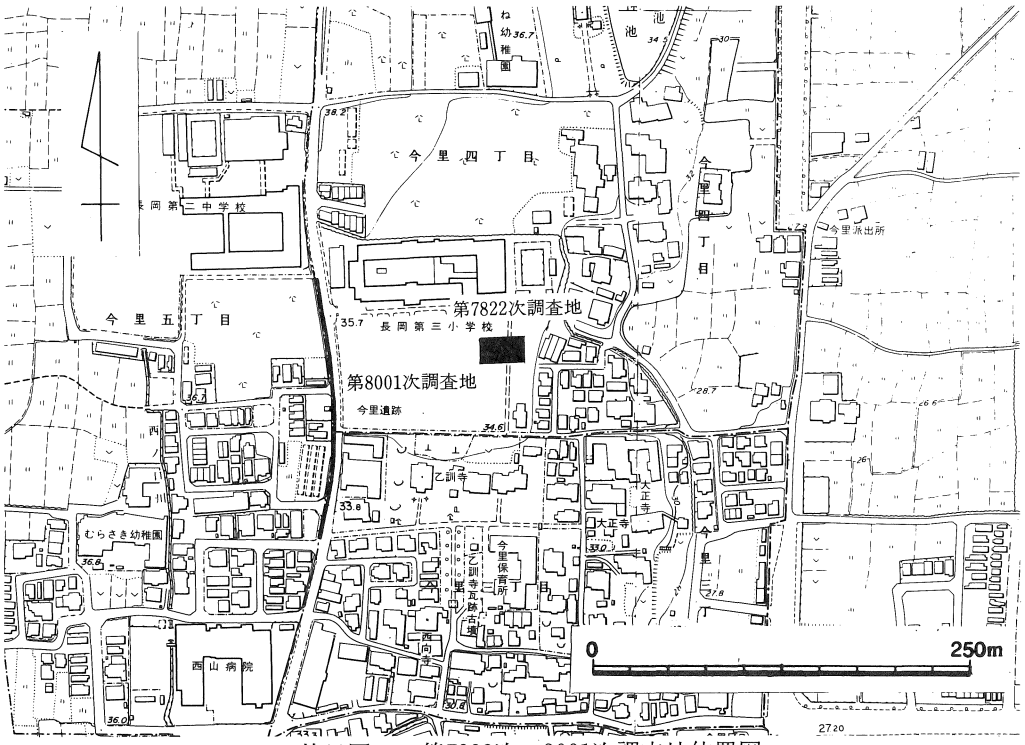
断面観察のみによるため遺構の性格については判断できない。ただ，指摘しなければならない問題は，当地の真東約80mで検出した長岡京五条大路との関連である。当地は先に述べたとおり，五条大路の推定地であるにもかかわらず，調査ではこれに該当するような遺構は検出されなかった。この点については，今後の周辺での発掘調査の進展に結論を待たざるを得ない。

（中尾　秀正）

長岡京跡第7822次（７ANIHR地区）立会調査概要

本調査は，長岡京市立長岡第三小学校仮設教室建設に伴うものである。工事は，小学校グランドの東の中央部に，軽量鉄骨平屋建の三教室分を建築するものであった。

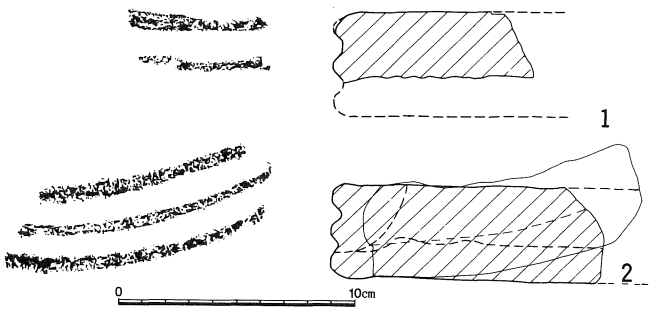
工事予定地は，長岡京市北部の今里地内にあり，乙訓寺のすぐ北側にある。地形は，長岡丘陵からゆるやかに西から東へ傾斜する洪積段丘上の標高約32mの平坦な地形にあり，東方約80mのところに小畑川の氾濫原と接する傾斜変換線がある。当地は，長岡京跡右京三条三坊七町にあたることはもとより，弥生時代から古墳時代の集落遺跡である今里遺跡の範囲内に含まれ，さらに奈良時代前期から平安時代の古瓦を出土する郡名寺院である乙訓寺の旧境内にあたる。とくに当地の南西約30mの所では，昭和41年の発掘調査によって乙訓寺の講堂と推定される東西９間南北４間の礎石建物の根石部分が検出されており，当地付近は乙訓寺の主要伽藍の後方に



第92図　　第7822次・8001次調査地位置図

あたり，僧房等があったと推定されている。また，当地のすぐ東方には，乙訓寺の平・丸瓦を焼いた乙訓寺窯跡１号がある。

調査は，すでに建物基礎部分の掘削工事が終了していたため，掘削地の脇に掘り上げられた土の中から遺物を採集するものであった。



第93図　　第7822次出土遺物実測図

採集した遺物は，須恵器，瓦，近世陶器の約30片である。須恵器は，坏・甕・壺の小片で，いずれも図化できないが，甕は外面がいずれも平行叩き目のもので，内面は，青海波の叩き目をもつものと，青海波の叩き後，すり消したものがある。瓦には，軒平瓦と平瓦がある。軒平瓦は２点あり，いずれも三重弧文軒平瓦で，二枚重ねによって深い段顎をつくり，整った三重弧文を配すものである（第93図１・２）。平瓦は，いずれも凹面布目であるが，凸面によって三分類できる。(1)すり消してあるが粗い平行叩目の痕跡を残すもの，(2)縄目叩目の痕跡を残すもの，(3)中央に一本沈線をもつ幅約4.5cmの板状圧痕を残すものである。

以上，今回の報告は遺構等の検出ができなかったため，あげ土からの遺物の紹介になったが，三重弧文軒平瓦は乙訓寺旧境内からも出土しており，今後セット関係などについて検討が必要となってくるであろう。

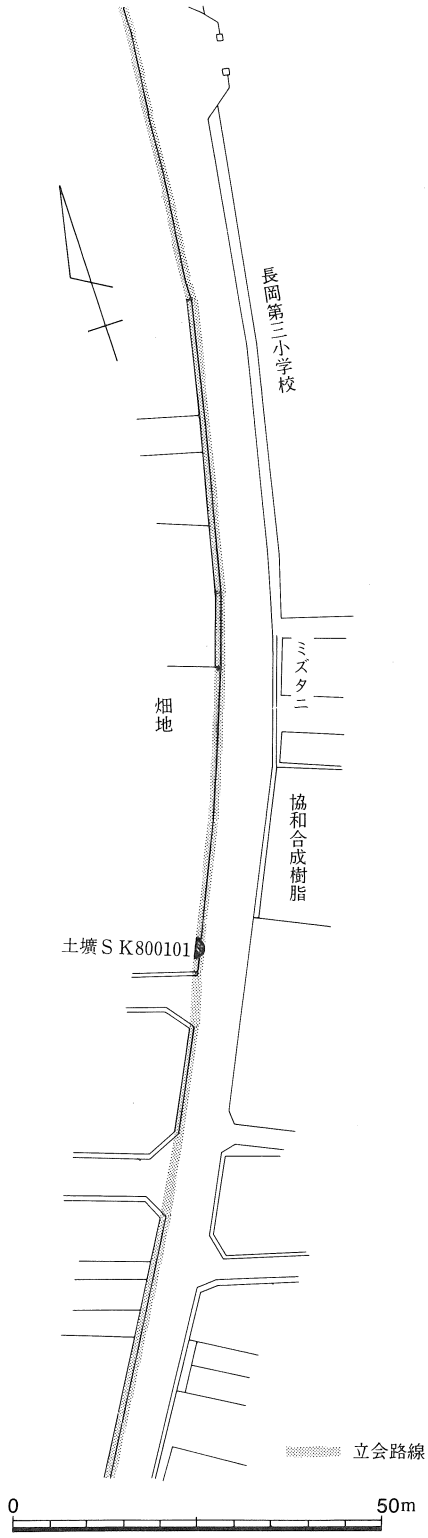
（中尾　秀正）

長岡京跡第8001次（７ANIKU地区）立会調査概要

１．は　じ　め　に

立会調査を実施した場所は，長岡京市今里五丁目で，長岡第三小学校の西側に隣接する府道大枝大山崎線内である。調査地は，この道路西肩部の全長200mで，標高34～33mと南へ徐々に低くなっている。当該地は，道路を拡幅して歩道を新設するために，幅２m，深さ0.3～１mの掘削工事が行われ，この範囲内で立会調査を実施した。掘削工事は，1980年４月と1981年１月の２回行われ，工事区間の重複したところもあった。

調査地は，長岡京跡右京三条三坊にあたり，乙訓寺の寺域の西部と推定されている。さらに弥生時代中期から古墳時代にかけての集落遺跡である今里遺跡にあたる。既往の周辺での調査は，長岡第三小学校校庭で，乙訓寺の講堂，僧房，回廊，古瓦窯等が検出されている。また今里地区の外環状線街路工事に伴う調査では，長岡京西二坊大路，三条条間小路や今里車塚古墳等が確認されている。以上のことから，本立会調査においては，これらに関連する遺構，遺物



第94図　　第8001次調査地周辺図

の確認に努めた。

2．検　出　遺　構

「協和合成樹脂」工場の玄関前の道を隔てた畑地の南東角で表土下0.3mの暗黄灰色粘質土層の下層，茶褐色粘砂質土層の上面から瓦溜りの土壙ＳＫ800101が検出された。茶褐色粘質土層は，厚さ0.2mで，ほぼ水平に堆積し，須恵器，土師器の小片が含まれている。この土層より下層は，褐灰色砂質土層（礫混入），青灰色砂質土層の順に堆積しており遺物は全く無かった。

瓦溜りＳＫ800101は，東西0.8m，南北2.2mを検出し，その東側の一部を確認したもので，さらに西の畑地に続くものと推察される。瓦溜りは，不整形な円形を呈し，壁面が椀状に立ち上がる。瓦の堆積状況は，瓦溜りの中央部では水平に，壁面付近では傾斜しており，瓦と瓦の間には茶褐色粘砂質土，赤褐色土が埋っている。瓦類は，平瓦・丸瓦がその大半を占め，顎に段のついた三重弧文軒平瓦が６点出土した。

3．出　土　遺　物

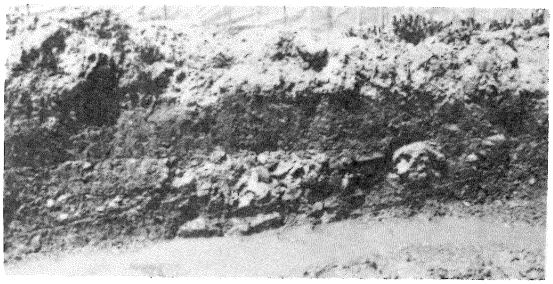
瓦溜りから出土した瓦類は，コンテナーパットで10箱分，総重量110kgであり，そのうち軒平瓦６点，他には平・丸瓦が大半を占める。この瓦類は，乙訓寺との関連性を考えることができ，また，桶巻づくりの造瓦技術を調べる上からも重要な資料である。整理が十分できなかったものの，その一部を紹介したい。記載にあたっては，軒平瓦をまず記述し，次に平瓦，丸瓦の順に説明する。

⑴　**軒平瓦**（第98図-1-2，第99図-5～8図版36～37）

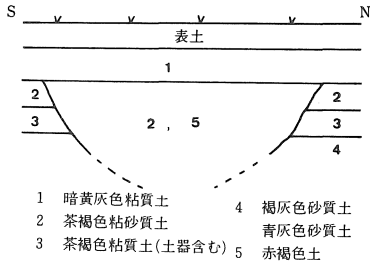
軒平瓦は，三重弧文が４点（１，２，５，６），顎部の欠落で三重弧文と決め難いものが２点（７，８）ある。

①　**三重弧文軒平瓦**（１）　瓦当の左側面と平瓦

第95図　　第8001次調査風景



第96図　　土壙ＳＫ800101検出状況

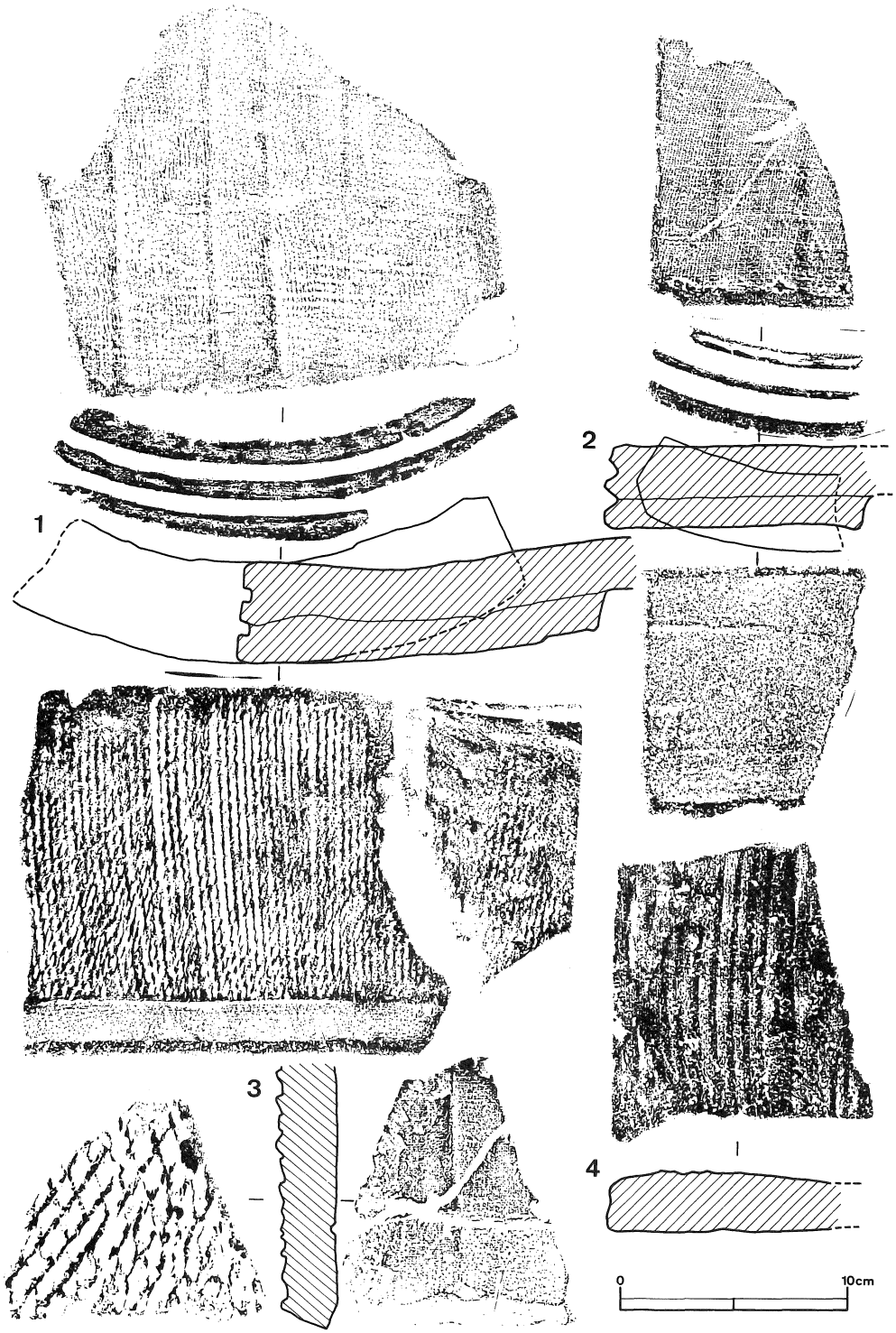


第97図　　土壙ＳＫ800101土層概念図

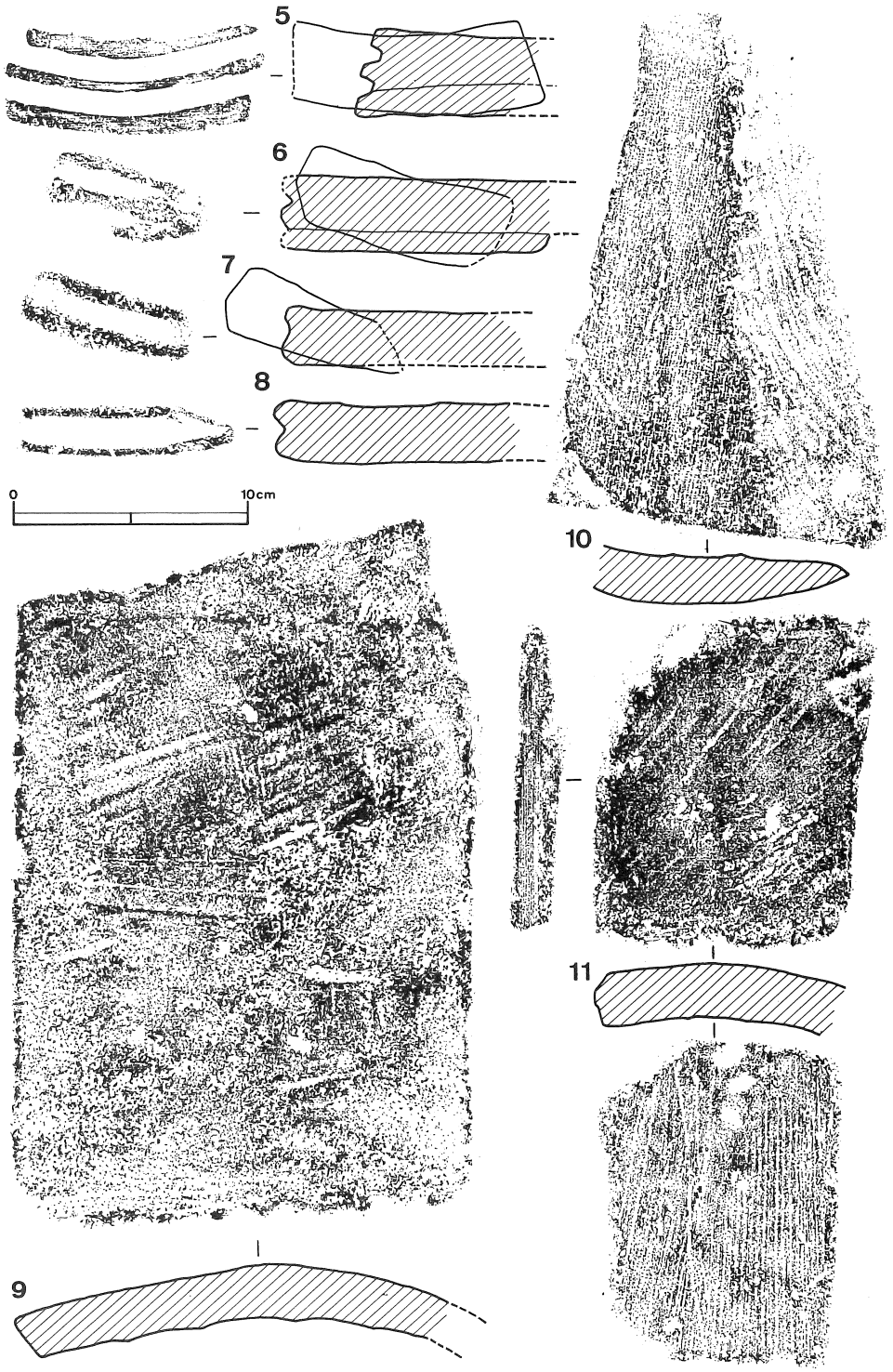
部が欠失し，顎の一部が欠落している。瓦当面を除いて表面の磨耗は少なく観察しやすい。顎部は，粘土板を貼り付けた有段顎であり，その長さ16cm，厚さ1.8～2.0cmを測る。瓦当の成形は，「押引き」で行われ，部分的にナデを施し調整している。文様は三重弧文で，各幅１cmと一定し，その断面は台形状を呈している。顎面は，縄目叩きが側面に平行して施され，段部付近とこれに続く段端部では幅２cmの強い横ナデによって叩目が消されている。顎部の剝離面（平瓦凸面）にも縄目叩目が見られ，接合面であることが解る。凹面は，枠板幅2.6～2.8cmを測る痕跡と細かい布目圧痕がある。側面は，篦削りによって一面を形成している。胎土は緻密で長石，石英が混り，やや軟かい焼成である。色調は，黒灰色を呈しているが，部分的に黄灰色もみられる。

②　**三重弧文軒平瓦（５）**　瓦当の左半分及び平瓦部を欠失し，表面の磨耗が著しい。顎部は厚さ1.3cmの粘土板を貼り付けた有段顎である。瓦当の文様は三重弧文で，各弧文の幅が６～９㎜と一定せず，やや乱れた弧線を描いている。その断面は台形状を呈し，中央の弧文が少し高い。弧文の溝部には粘土塊があり，「押引き」成形の際に残ったものであろう。顎面は，ナデ調整が施され，指押えの痕跡を多く残している。凹面は，割り合い細かな布目がみられる。側面は，篦削りによる平坦な一面の面取りが行われている。胎土は，砂粒の少ない緻密な粘土で，やや甘い焼成である。色調は，なま焼け特有の淡黄灰色である。

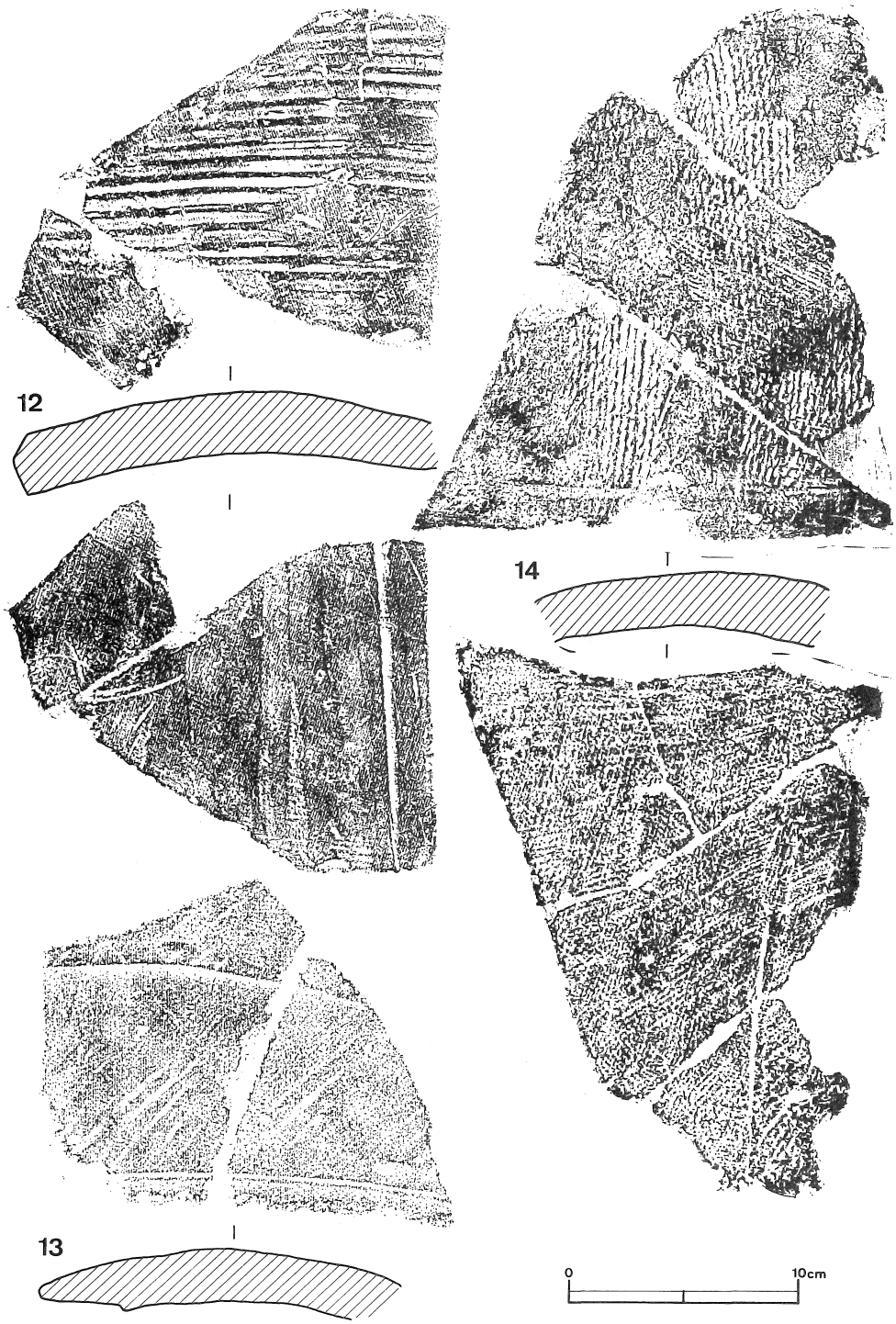
③　**三重弧文軒平瓦（２）**　瓦当の左側面から７cmを残し，段顎部をわずかに留める。焼成が硬質であるため磨耗は少なく，観察が容易である。顎部は，粘土板を貼り付けた有段顎である。顎の長さ11.5cm，厚さ1.3cmを測る。瓦当の文様は三重弧文で，各弧文の間隔は一定し，綺



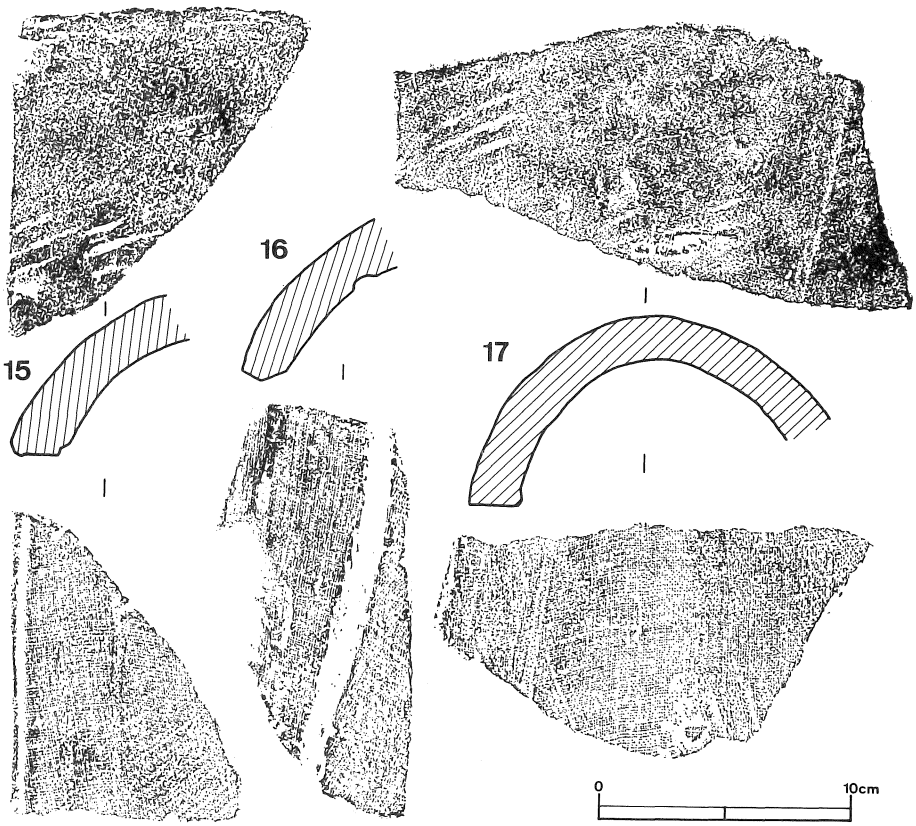
第98図　　土壙ＳＫ800101出土瓦拓影(1)



第99図　　土壙ＳＫ800101出土瓦拓影(2)



第100図　　土壙ＳＫ800101出土瓦拓影(3)



第101図　　土壙ＳＫ800101出土瓦拓影(4)

麗な曲線を描いている。中央の弧文の断面は，三角状を呈している。瓦当は，「押引き」成形であるが，瓦当面には弧線に沿ってナデとも削りとも判断し難い痕跡がみられる。顎面は，横方向の削りの後，段端部付近で横ナデが施され，叩目は完全に磨り消されている。凹面は，幅3.2cmの枠板の圧痕と非常に細かい布目を残している。瓦当面と接する先端部では幅５mmの篦削りを施し，上段の弧文を圧迫している。側面は，篦削りによる２面の面取りが行われている。この削りの方向は，上面では瓦当方向，下面では狭端部方向である。胎土は，長石，石英等の砂粒を多く含み，硬質の焼成である。色調は，表面が青灰色，内部が赤褐色を呈している。

④　**三重弧文軒平瓦（６）**　瓦当部の右側面から９cm，顎の段部を若干残している。顎部は，厚さ１cmの粘土板を貼り付けた有段顎で，その長さは11cmを測る。瓦当の文様は，三重弧文であるが，下段の弧文が著しく低い。中央の弧文の断面は，本来，三角形であったと思われ，（２）と類似している。凹面は，幅3.3cmの枠板圧痕が認められる。側面は，瓦当から後方向に篦削りを施し２面の面取りを行っている。胎土は，長石，石英，チャート等の砂粒が多く混じる。焼成は，やや甘いが須恵質系である。色調は白灰色である。

⑤　**重弧文軒平瓦（７）**　瓦当を僅かに残し，顎部が完全に欠落している。凸面（剝離面）は，平行叩きの後に横ナデ調整が見られ，粘土つぶが付着している。このことから二重弧文でなく，三重あるいは四重弧文に復原することができる。中段の弧文の断面は，丸味を帯びているが，三角形状のものと思われ，上段より高く，（６）と類似する。側面は，中段の弧文の下方より「く」の字形に屈曲するように２面に面取りしている。胎土は，長石，石英，クサリ礫等の砂粒を含む。焼成は軟質である。色調は赤褐色を呈している。

⑥　**重弧文軒平瓦（８）**　両側面および顎部・平瓦部が欠失しているため，重廓文の可能性も考えられるが，ここでは重弧文として扱った。また，（７）と同様に三重，四重弧文になることも考慮しておきたい。残存する瓦当面は，非常に丁寧な仕上げとなっており，（２）の中央の弧文と同様，三角形の断面を示し，上段より高い。顎部の剝離面（凸面）には，瓦当面に側して平行叩目が明瞭に残り，粘土塊が付着していることから接合面であることが解った。凹面には枠板圧痕が深く残り，布目圧痕がみられる。胎土は，長石，石英，チャート，金雲母が混じる。焼成は軟質である。色調は，外面が淡赤褐色，内部が淡茶灰色を呈している。

⑵　**平瓦**（第98図―３，４，第99図―９～11，第100図―12～14　図版37～38）

平瓦は，重量約98kg（総量比約90％）出土した。その大部分が小破片で，側面長および広・狭端部幅のわかる資料は，全く無かった。ここでは，平瓦凸面の叩目を３種類に分けて概略を述べる。叩目の種類は，㈠平行文痕跡，㈡平行叩目，㈢縄目叩目の３類に分けた。加えて，桶巻作りの造瓦技法の痕跡を留めるもの，その他特徴的なものを抽出し，紹介したい。

叩きの種類

㈠　**平行文痕跡**　平瓦凸面に残された平行叩きあるいは平行状叩きをナデや削りによって完全に消されていないことを示す。本例では，ほとんどの赤褐色を呈する平瓦に認められ，全体の割合ではおよそ65％に達する。平行文痕跡にみる平行叩きの方向は，凸面の部位によって異なり，狭端部では斜方向のもの（９，13），広端部側では水平方向のもの（４，９，12）がある。これらは，桶巻作りによる回転台を利用した横方向の広端部あるいは狭端部から連続的な叩きであると考えられる。叩きの後の磨消しにおいてナデ板を使用した平瓦（９，13）がある。この例は比較的多くみられる。ナデの幅は９㎝で，両側面間を一気に水平方向に仕上げている。ナデの順番は，広端部側からか，狭端部側からか不明であるが，広端部にはナデを施さない例が数点確認できた。

調整＼割合	平瓦 kg 重量	平瓦 % 総量比	平瓦 % 種別比	丸瓦 kg 重量	丸瓦 % 総量比	丸瓦 % 種別比
㈠平行文痕跡	56.3	51.3	65.0	1.5	1.4	14.9
㈡平行叩目	20.0	18.2	23.1	0	0	0
㈢縄目叩目	10.3	9.4	11.9	0.7	0.6	6.9
㈣完全磨消	0	0	0	7.9	7.2	78.2
不　明	11.7	10.7	—	1.3	1.2	—
合　計	98.3	89.6	100	11.4	10.4	100

付表５　第8001次出土平・丸瓦類凸面の叩目分類表
（種別比については不明分を除いて割合を求めた）

㈡　**平行叩目**　平行叩目が磨り消されていない状態を示す。全体の種別比は

23.1%と大きいが，小破片の中の多くは，上述の広端部側の一部である可能性もある。(4)は淡赤褐色を呈する平瓦で，凸面には幅8㎜の溝状が数条連接して一単位となっている。しかし，実際の叩き板の幅，長さは不明である。なお，(3)は，凸面の叩きは平行叩きを交又させ斜格子となっている平瓦である。全く磨り消されていないため，荒々しい表面を成している。端部の調整は，篦削りの後にナデを施しているため，格子目の一部がせり上がっている。この瓦は，多量の平瓦の中で1片だけ出土したものである。

(C)　**縄目叩目**　平瓦凸面に縄目の叩きを施しているものを示す。全体の1割強が出土しており，黒灰色，黄灰色を呈する硬質の平瓦がほとんどである。胎土は，大きな砂粒を含み緻密さに欠けている。(14)は，縄目叩き板によって施された叩目で，幅3.2cmを測り，9条の縄を数えた。この叩目は，凸面全体にあるものではなく，その方向は，主に縦方向に無造作に施されている。叩きの後は，部分的にハケ状のもので横方向に消されている。

造瓦技法

布目の磨消　赤褐色を呈する凸面が平行叩目（平行文痕跡を含む）の平瓦で，凹面の布目が磨り消されている例が全体の約2割ある。磨り消しの方法は，指ナデや(12)のように側面に平行して幅2cmの篦状のもので完全に磨り消している例もある。一方，縄目叩目の平瓦には，磨り消しがほとんど無かった。

分割界線と破面　桶巻作りの平瓦は，本来，両側面に分割突帯によってできる分割界面と分割される時点でできる破面とが残る。その後，篦削り調整によって，破面は削り取られてしまうのが大多数である。しかし，(11)のように分割界面と破面が良く残っている例は，赤褐色を呈する平行叩目（平行文痕跡を含む）の平瓦から数点見い出すことができた。一方，縄目叩目の平瓦には，全く無かった。(11)の側面は，凹面側に幅1cmの平坦な分割界面，凸面側には破面が認められた。この分割界面は，砂粒が狭端部から広端部へ移動していることから，削り調整（截断の時点か？）が行われた可能性をもつ。破面も不完全ながら削り調整を施し，部分的に平坦になっている。

粘土板合せ目面　粘土板を桶の周囲に巻きつける時，粘土板の両端を重ね合せなければならない。この重複した粘土板の接合面は，叩きやナデの影響を受けることがないため，糸切痕が残ることがある。(10)は，赤褐色を呈する平瓦で，接合部が剝離面となって表われた好資料である。剝離面は，幅3.5～5.5cmの扇状をなし，細い弧線を呈する糸切痕が残っている。

(3)　**丸瓦**（第101図―15～17　図版39）

総量の約一割余り出土した。平瓦と同様，赤褐色を呈する軟質のものが多く，青灰色，黒灰色の硬質のものは比較的少ない。いずれも小破片が圧倒的に多く，端部，側面の寸法など知り得ない。平瓦類では叩目を分類の目安としたが，丸瓦の凸面は，全体の約8割が完全に磨り消されているため，ここでは，3片の丸瓦を抽出し，その細部を説明したい。

凸面　大半がナデによって完全に消されているが，(15･17) は，平行叩目をわずかに残している(平行文痕跡)。この叩目は，側面に斜方向に施されている。ナデは，主に指ナデによるものと思われる。

凹面　細かい布目圧痕がある (15･16･17)。布の綴じ合せ目が側面に平行して溝状に残っている (16)。この溝を境にして左右の布目の方向が極端に違っている。(15) では，側面に近接する細い窪み状のものは，分割界線に沿ってうまく割れなかった例であろう。

側面　ナデとも削りとも判別しにくい調整が (13･14) に見られるが，分割界面そのものかもしれない。(15)では凸面側に 3 ㎜ほど違った面をもち，削られていることから破面部と推察できよう。(16) は側面に 2 面の篦削りによる面取り痕を残す。

4．ま　と　め

今回の調査では，前述の瓦溜りの一部を検出し，多量の瓦類を採集した。軒平瓦は白鳳時代のものと考えることができる。その中でも (1) と (5) は瓦当面の文様が台形の押引きによるもので，凸面の叩目が縄目叩目であることから，他のものに比べ，やや新しい白鳳時代末期のものと考えられる。また平瓦・丸瓦は，ほとんど桶巻き作りの技法による凸面が平行叩目であることから，やはり白鳳時代のものと推定される。一部に凸面に縄目叩目をもつものがあり，やや新しいものも含まれていると思われる。

今回の立会調査で検出された遺構は瓦溜りのみで，乙訓寺の西辺を知る直接的な資料を得ることはできなかったが，今回の調査地が乙訓寺西辺の一画を占める可能性を考えることができ，創建当初の乙訓寺の寺域を考えるうえで貴重な資料となるものである。　　(竹井　治雄)

長岡京跡第8017次 (7 ANMMB地区) 立会調査概要

本調査は，本市土木課による道路側溝及び歩道設置に伴う立会調査に関する概要である。調査は，重機による掘削の際に，1980年10月17日から18日まで行った。調査地は国鉄神足駅の南東にあり，村田機械所有空地と日本輸送機の間の南北道路東側溝部分である。

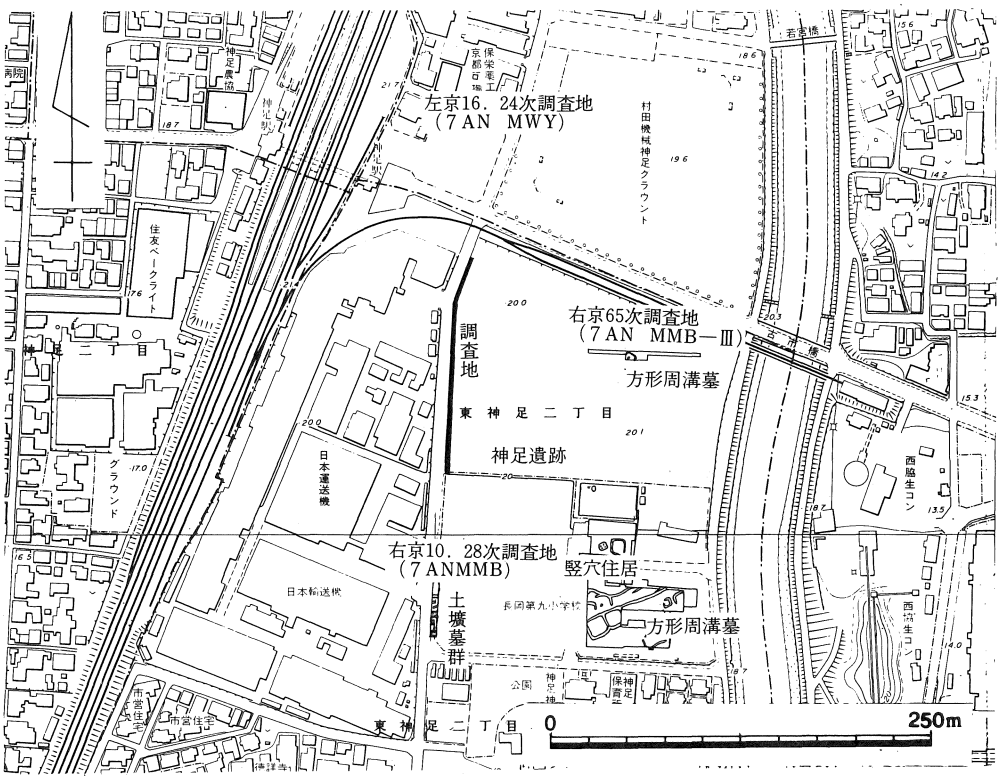
本調査地は，神足遺跡内にあり，当地周辺は昭和34年に三上貞二，坂下勝美両氏の遺跡発見以来 5 度にわたる遺跡調査が行われ，多くの成果が報じられている。特に，長岡第九小学校建設に伴う調査では，弥生時代中期の方形周溝墓群と土壙墓群などが発見され，当地方における弥生時代中期の集落構造を知る上で貴重な資料となった。土壙墓群の検出された北方にあたる今回の掘削は，幅 3 m，長さ120mの南北に長いものであり，南から 3 mおきに地区割りし，A，B，C……と称した。

本調査によって，多くの弥生土器片を採集することができ，また，サヌカイト製石鏃も一点

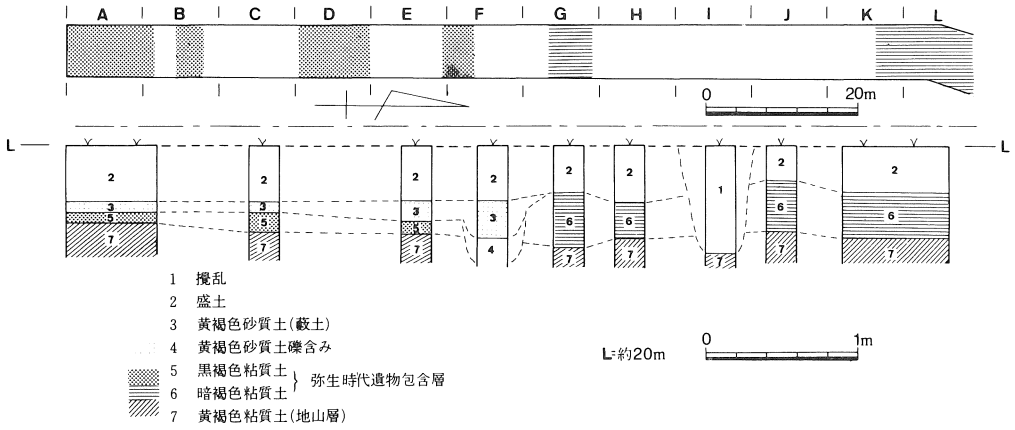
出土した。弥生土器は，全て中期の土器片で，壺，甕の破片がある。これらの土器類は，畿内第Ⅱ様式から第Ⅳ様式までのものである。文様には，櫛描きによる直線文・波状文・烈点文などがあり，壺の肩部や壺の口縁部，鉢の口縁端部などを飾っている。甕の体部は，刷毛目や平行叩き目などによる整形が多く，口縁端部に刻目文や凹線文を施すものがある。採集された土器は，全て破片であり，しかもそれぞれの出土位置が明確でないため，一括資料として取りあつかえず，また，Ⅲ様式新段階とⅣ様式の区別は困難である。サヌカイト製石鏃は，凹基式である。この石鏃も，どの様式に含まれるものか不明である。

遺物の出土する層は，黒褐色粘質土と暗褐色粘質土である。この二層の新旧関係は明らかでないが，両層とも弥生遺物包含層であり，北に向かって厚く堆積している。これらの下層には，黄褐色粘質土の無遺物層が認められる。この無遺物地山層の一部を掘り込んで，黒褐色粘質土又は，暗褐色粘質土があり，溝又は土壙の一部と思われる部分がA～B，D，F，G，K～L地区にあった。

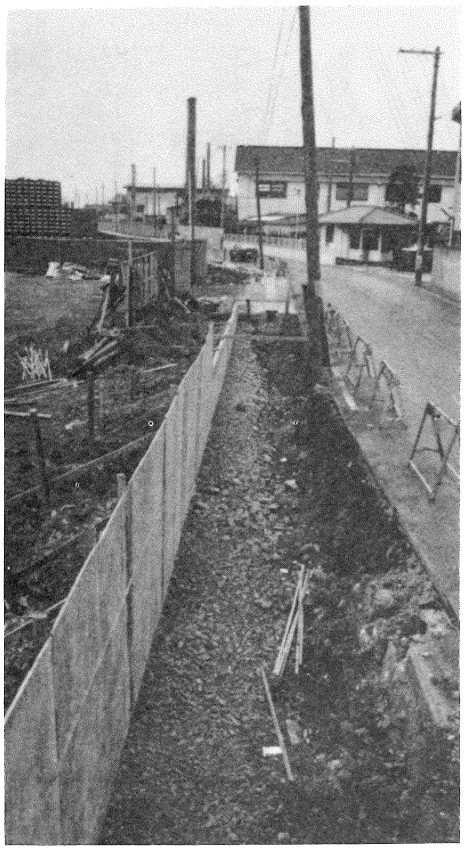
以上のことから，神足遺跡の一部であることは明確であり，しかも当立会箇所周辺では，遺跡の保存状況が良好であると思われる。　（岩崎　誠）



第102図　　第8017次調査地位置図



第103図　　第8017次調査平面図・柱状土層図



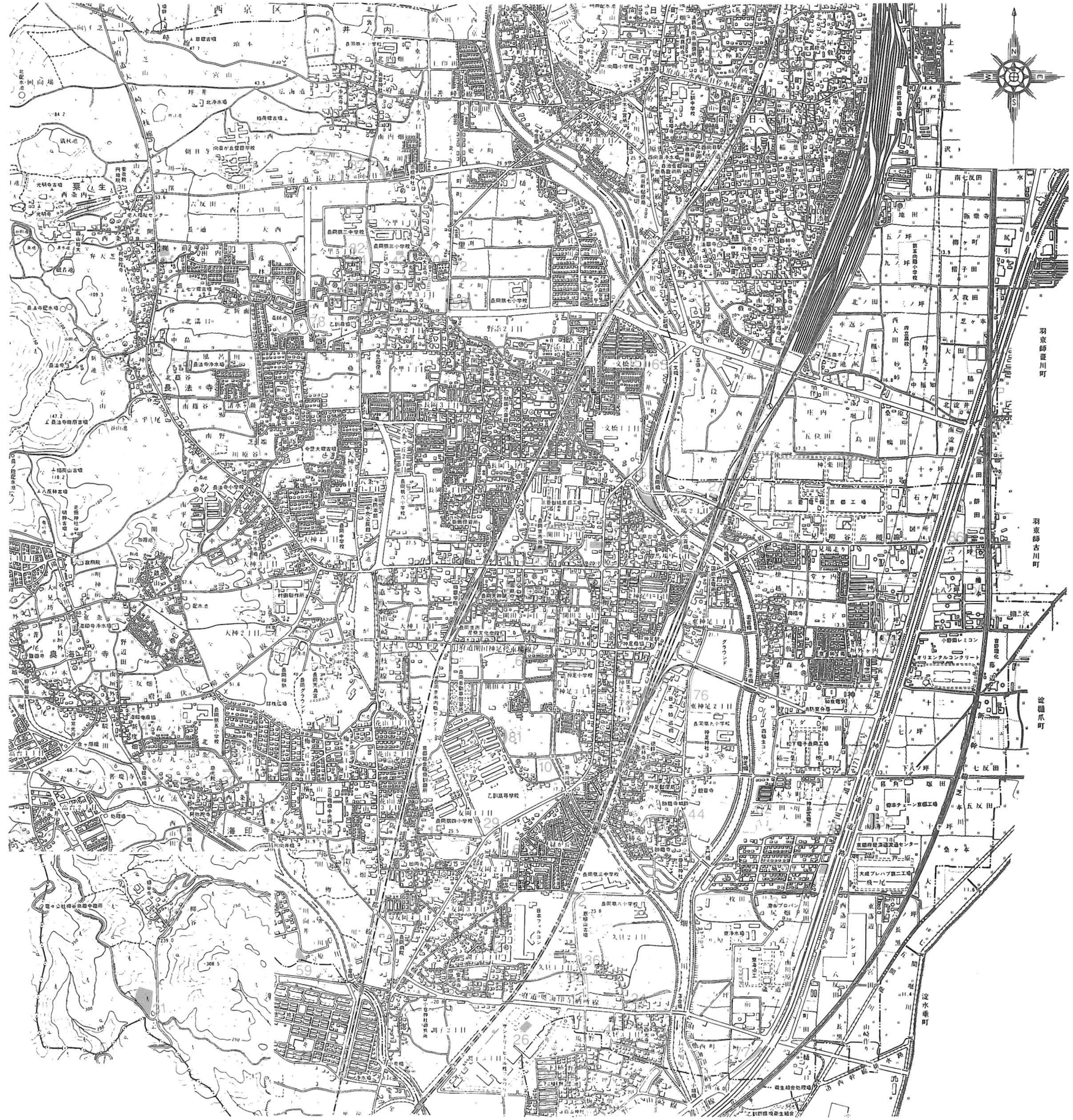
第104図　　第8017次調査風景（北から）

付表6　昭和52～55年度長岡京市内遺跡立会調査一覧表

番号	調査次数	地区名	所在地	所有者(原因者)	調査期間	工事内容	備考
1	7701	7ANINC	長岡京市今里西ノ口27	(財)療道協会	1977. 7. 7 ～1977.7.21	病棟改築	土師器片,瓦器片採集,右京第5次調査へ
2	02	ROW	調子一丁目27-3他	(株)住友ハウジング	1977. 8.20 ～1977.8.29	住宅建築	
3	03	QIR	城の里他	大阪ガス(株)	1977. 8.25 ～1977.8.30	ガス管埋設	
4	04	KKI	神足三丁目2	長岡京市	1977. 8.26 ～1977.8.30	校舎改築	※土師器,須恵器採集,柱掘方,溝検出
5	05	NUR	友岡一丁目108-6 753-1	安田経雄	1977. 9. 6 ～1977. 9.8	住宅建築	
6	06	KSM	神足二丁目17-9 17-12	山本粂治郎	1977. 9.19 ～1977.9.27	店舗建築	※ピット,溝検出,土師器片,瓦器片採集
7	07	OYM	下海印寺横山20-9	大阪ガス(株)	1977. 9.10	ガス管埋設	
8	08	KNA	長岡二丁目3	長岡京市	1977. 9.10	校舎増築	瓦器片採集
9	09	PHI	奥海印寺東代地内	長岡京市水道局	1977. 9.21 ～1977.10.31	水道管埋設	※土壙,溝状落ち込み検出,土師器,須恵器,弥生土器,瓦器,瓦採集
10	10	MMK	開田四丁目33-8	大阪ガス(株)	1977.10.14	ガス管埋設	
11	11	KMN	長岡一丁目26-27	長岡京市	1977.10.11 ～1977.10.17	児童館建築	
12	12	QOZ他	調子一丁目310-1 久貝一丁目301-2	長岡京市	1977.10.24 ～1977.10.28	歩道橋建築	近世井戸検出
13	13	QUT	久貝二丁目地内	長岡京市 (下水道)	1977.11.18 ～1977.12.15	下水道管埋設	瓦器片,土師器片,灯明皿片採集
14	14	GSW	井ノ内坂川8-3他	長岡京市	1977.12. 5 ～1977.12.21	坂川改修	土師器片,須恵器片採集
15	15	IKB	一文橋二丁目31他	長岡京市	1977.12. 5	今井川改修	
16	16	IMI	一文橋一丁目21-1	荒田建設(株)	1977.11.29 1978. 2. 6	住宅建築	
17	17	IMK	今里舞塚18	大阪ガス(株)	1977.12. 1 ～1978.1.30	ガス管埋設	
18	18	OHJ	下海印寺北条11-1	林健一	1978. 1.13	住宅建築	
19	19	KKC	開田一丁目地内	大阪ガス(株)	1978. 2. 8	ガス管埋設	
20	20	QSC	勝竜寺地内	長岡京市水道局	1978. 2. 2 ～1978.3.10	水道管埋設	堀跡
21	21	GNM	滝ノ町二丁目地先	大阪ガス(株)	1978. 3. 6	ガス管埋設	
22	7801	KSN	長岡二丁目1-1	(株)東本	1978. 4.22	住宅建築	
23	02	KKN	開田一丁目1-1	長岡京市	1978. 5.17	庁舎増築	
24	03	QUT	久貝二丁目11-1他	中山善一郎	1978. 6.12 ～1978.6.13	住宅建築	
25	04	IFD	野添二丁目101-1	横関保彦	1978. 6.12	医院建築	
26	05	RUI	調子三丁目1-1	サントリー(株) 桂ブルワリー	1978. 5.10	工場増築	土師器,須恵器採集,右京第14次調査へ
27	06	LHK	馬場二丁目214-1他	林勝巳	1978. 5.27	マンション建築	土師器片,須恵器片,凝灰岩採集
28	07	JYT	長法寺山ノ下29	長法寺自治会	1978. 8.25	自治会館建築	
29	08	NND	友岡一丁目他	日本電信電話公社	1978. 8.25 ～1978.8.31	電話地下線試験掘り	

番号	調査次数	地区名	所在地	所有者(原因者)	調査期間	工事内容	備考
30	09	7ANNMC	長岡京市友岡三丁目21-1 21-2	洛西工務店	1978. 5. 6	住宅建築	
31	10	————	浄土谷西山1他	楊谷寺	1978. 5.22	墓地造成	
32	11	OHJ	下海印寺北条26-1	中小路幸男	1978. 5.29	住宅建築	土師器片採集
33	12	MMI	神足暮角1-1	㈱椿本チェイン	1978. 6. 7	工場増築	
34	13	KUT	開田三丁目41 42	三尊寺	1978. 9.22 ～1978.11.23	本堂建築	※ピット検出,土師器,土馬,埴輪片採集
35	14	KKS	長岡二丁目117-3	吉本邦夫	1978.10.12 ～1978.10.17	店舗建築	※土師器片,須恵器片採集,溝,掘立柱建物検出
36	15	QMZ他	久貝一丁目地内	長岡京市 (下水道)	1978.10. 6 ～1978.10.18	下水道管埋設	
37	16	GSW	井ノ内坂川23-13他	長岡京市	1978.10.24 ～1978.10.30	坂川改修	壺L採集
38	17	KNT	開田三丁目8	疋田芳寛	1978.11.21 ～1978.11.25	医院建築	※軒丸瓦片,軒平瓦片,土師器片,須恵器片採集
39	18	MOT	神足太田28他	関西電力㈱	1978.12. 1 ～1978.12.4	鉄塔建築	
40	19	MNC	東神足二丁目地内	長岡京市水道局	1978.12.21	水道管埋設	
41	20	GSR	滝町一丁目103	㈱大八	1979. 3.14	住宅建築	
42	21	IMK他	今里七ノ坪 舞塚 地先	長岡京市水道局	1979. 3.29	水道管埋設	
43	22	IHR	今里四丁目5	長岡京市	1979. 3.20	仮設教室設置	※軒平瓦,平瓦,須恵器,近世陶器採集
44	7901	MKO	勝竜寺606-2	水谷忠誠	1979. 4.17	整骨院建築	
45	02	QIR	城の里14-1	興和産業㈱	1979. 5. 7	宅地造成	
46	03	QNM	久貝三丁目115	久野芳樹	1979. 7.16 ～1979.7.17	マンション建築	
47	04	PMT	下海印寺森ノ下1	中島正裕	1979. 8.24 ～1979.8.25	医院建築	
48	05	ISK	うぐいす台144	川瀬祐一	1979. 9.13	住宅建築	
49	06	KSM	開田二丁目2	一里塚幼稚園	1979.10.16	園舎増築	
50	07	IHR	今里三丁目14	乙訓寺	1979.10.27	供養塔建立	
51	08	KKC	開田一丁目20 20-10	吉田祝雄	1979.10.31	共同住宅建築	
52	09	MKH	緑が丘地先	長岡京市 (下水道)	1979.11.13 ～1980.3.31	下水道管埋設	
53	10	KJC	天神一丁目16-1	㈱三久ハウス	1979.11.16	住宅建築	
54	11	LMR	馬場見場走り1-6	松美㈱	1979.11.20	住宅建築	
55	12	KNZ	天神一丁目5	春陽堂	1979.12.10	店舗建築	
56	13	MHT	神足橋本1他	㈱小原産業	1979.12.18	工場建築	土師器片,須恵器片採集,左京第45次調査へ
57	14	GYT	井ノ内横ヶ端 11-4他	長岡京市	1979.12.19 ～1980.3.10	坂川改修	
58	15	IST	今里三丁目地先	大阪ガス㈱	1980. 1.22 ～1980.1.23	ガス管埋設	
59	16	OMN	下海印寺南谷44	㈱柳土木	1980. 1.22	住宅建築	
60	8001	7ANIKU	今里五丁目地内	長岡京市	1980. 4. 3 ～1980.4.4	道路拡張	軒丸瓦,軒平瓦,土師器片,須恵器片採集
61	02	KNT	開田四丁目9	中小路是輝	1980. 4. 7 ～1980.5.7	テニスコート建築	井戸状遺構検出
62	03	MKC	神足木寺町3他	洛西観光㈱	1980. 4. 9	マンション建築	旧河道の流路
63	04	NYK	友岡二丁目11-1 地先	大阪ガス㈱	1980. 4.12 ～1980.5.30	ガス管埋設	
64	05	NNZ	緑が丘地先	大阪ガス㈱	1980. 4.12 ～1980.8.20	ガス管埋設	
65	06	IKB	一文橋二丁目31他	せいわ工房	1980. 4.18	住宅建築	
66	07	KTR	開田二丁目117-3	㈱山中商事	1980. 6. 1	店舗付住宅建築	
67	08	KKC	開田一丁目17	㈱長岡開発	1980. 6. 1	マンション建築	

番号	調査次数	地区名	所在地	所有者(原因者)	調査期間	工事内容	備考
68	09	MMO	神足麦生地先	長岡京市水道局	1980. 6.10	水道管埋設	
69	10	IKB	一文橋二丁目3-1	金原達龍	1980. 6.23	住宅建築	
70	11	ITT	今里四丁目3	芦田木材㈱	1980. 7.16 ~1980.7.17	宅地造成	右京第45次調査へ
71	12	LTR	馬場一丁目15-2	奥田尚司	1980. 8.12	住宅建築	瓦器片,土師器片採集
72	13	ISF	今里庄ノ渕30	小山和男	1980. 8.22 ~1980.8.28	住宅建築	
73	14	KNC	天神一丁目43-2他	長岡京市(下水道)	1980. 9. 4	下水道管埋設	
74	15	NKG	友岡四丁目20	㈱坂口商店	1980. 9. 6	店舗建築	
75	16	LRB	馬場六ノ坪地内	長岡京市水道局	1980. 9.25 ~1980.11.10	水道管埋設	
76	17	MMB	東神足二丁目	長岡京市	1980.10.17 ~1980.10.18	交通安全施設等整備	※弥生土器片,石鏃採集
77	18	QMC他	勝竜寺町一他	日本電信電話公社	1980.10.21	電話地下線埋設工事	
78	19	IHY	今里彦林他	長岡京市水道局	1980.10.29 ~1980.11.30	水道管埋設	
79	20	MNM	神足二丁目	長岡京市(下水道)	1980.10. 6 ~1980.10.30	下水道管埋設	
80	21	LID	馬場二丁目他	長岡京市水道局	1980.11.25 ~1981.2.15	水道管埋設	
81	22	MSI	開田四丁目432-2	㈲鷹野商事	1980.11.26 ~1980.11.27	宅地造成	右京第56次調査へ
82	23	IKU	今里地内	長岡京市	1980.12.16	歩道整備	
83	24	OIR	下海印寺伊賀寺35-1	日本電信電話公社	1980.12.24 ~1980.12.25	電報電話局建築	右京第70次調査へ
84	25	IKU	今里五丁目地内	長岡京市	1981. 1. 9	歩道整備	軒丸瓦,軒平瓦,土師器片,須恵器片採集
85	26	KSM	開田二丁目32-2	日本専売公社	1981. 1.21 ~1981.1.23	バスターミナル建築	土師器壺採集
86	27	LMD	馬場餅田	長岡京市	1981. 1.23	餅田川改修	
87	28	MKH	神足二丁目	長岡京市(下水道)	1981. 1.23 ~1981.2.20	マンホール埋設	
88	29	QMZ	久貝一丁目地内	大阪ガス㈱	1981. 2.10 ~1981.3.5	ガス管埋設	
89	30	LMD	馬場餅田1-1	高岡明	1981. 2.25	作業場建築	
90	31	LMR	馬場一丁目113他	明和開発㈱	1981. 2.27	住宅建築	
91	32	HKE	粟生梶ヶ前9-1	山中商事㈱	1981. 3. 2	宅地造成	
92	33	MBB	神足一丁目19	㈱長岡開発	1981. 3.30	店舗建築	土壙状遺構検出



第105図　昭和52～55年度長岡京市内立会調査位置図

0　1000m

16. ま　と　め

1. はじめに

本冊には長岡京市今里・勝竜寺・奥海印寺・調子の各地区で実施した調査の概要報告を収めた。これらは長岡京に関する遺構・遺物の検出を主な目的として実施されたものであるが，右京第47次調査では弥生時代の溝が，右京第62次調査では古墳時代の竪穴住居址と平安時代の土壙が検出され，あらたに「東代遺跡」「大縄遺跡」とそれぞれ遺跡地図に登録された。この他「久我畷」に関して，右京第40次，左京第72・73次調査が実施されたが明確な遺構は検出されなかった。

本冊では特に今里地区において実施した調査概要を中心に収録した。これらは主に長岡京跡・乙訓寺・今里遺跡に関するものである。右京域において最も調査が進められている地域である（第107図，付表13）。調査は，多年次にわたって複数の機関によって行われていて，小規模な調査が多く遺構の性格を把握しにくいこと，調査された地域に片寄りがあり，遺構の残存状況も一定していないことなど，一律的な比較検討の可能な資料的段階に至っているとはいい難いが，これまでの調査成果を整理し，まとめにかえたい。（百瀬ちどり）

2. 今里地区における弥生～奈良時代の集落遺構の分布

(1) 今里地区の地形と遺跡の分布（第106・107図）

今里地区は，西方の標高約40～200mの京都西山山地および丘陵地の東部にあたり，北西から南東へゆるやかに傾斜する標高約40～30mの洪積層によって形成された低位段丘上，北西から南東に向けて流れる小畑川によって西岸に形成された標高30m～20mの氾濫原上（氾濫低地）に位置する。この低位段丘面と氾濫原面との間には，比高数mの段丘崖がほぼ南北にのび，傾斜変換線が形成され，湧水地となっている。この付近には，乙訓寺・今里車塚古墳・今里遺跡・陶器町遺跡などの遺跡が集中しており，今日も，今里地区の中心をなす今里集落，その南に陶器町，北開田の集落があり，古くから生活に適した所であった。

また，北部の低位段丘上には，ほぼ北西から南東に向って流れる3条の小河川があり，東方の氾濫原へそそいでいる。北から，井ノ内地区と今里地区の境を流れる坂川，乙訓寺の北方にある大正川，さらにその南に風呂川があり，低位段丘崖下にそれぞれ小さな扇状地を形成している。

この他，地図上で観察できるものとして長法寺山ノ下付近から南東へ流れる旧河道がある。この旧河道は今里大塚古墳の東方で，奥海印寺谷田付近から東北東にのびる開析谷と合流し開

田地区に至っている。(注1)

(2)　今里地区における集落の分布（第108図・付表7）

当地区内では，弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡として，今里遺跡と陶器町遺跡が確認されている。また，当地区の東部にある長岡第七小学校周辺の標高約25mの水田地帯の氾濫低地では旧河道・旧流路も数条確認され，これらの遺跡は今里遺跡群と総称されている。(注2)

この今里遺跡群は氾濫低地の旧河道・旧流路を除くと，西山丘陵から緩やかに東へ傾斜する低位段丘上の東端部およびその東側の段丘崖下の扇状地に立地しており，ここは標高約30m以上の高燥地にあたる。

これらは小畑川以西の坂川・大正川・風呂川の小河川の周辺に分布しており，北方の坂川と風呂川の間に立地する今里遺跡と，風呂川以南の陶器町遺跡に大きくわけられている。

今里遺跡は，東西400m南北300mの範囲と推定されている。これまでの調査によって居住域と墓域が確認されているが，それによると，これは弥生時代中期（畿内第II様式）に形成され，平安時代まで継続して営まれた大規模な集落であり，周辺の集落遺跡の中でも，拠点的な性格をもっていたと考えられている。

陶器町遺跡は，弥生時代中期（畿内第IV様式）に形成された集落で，弥生時代後期の土壙1基，古墳時代後期の竪穴住居址2基などが検出されている。

以下，これまでの調査成果に基づき，時期別に整理を行いたい。

①　弥生時代

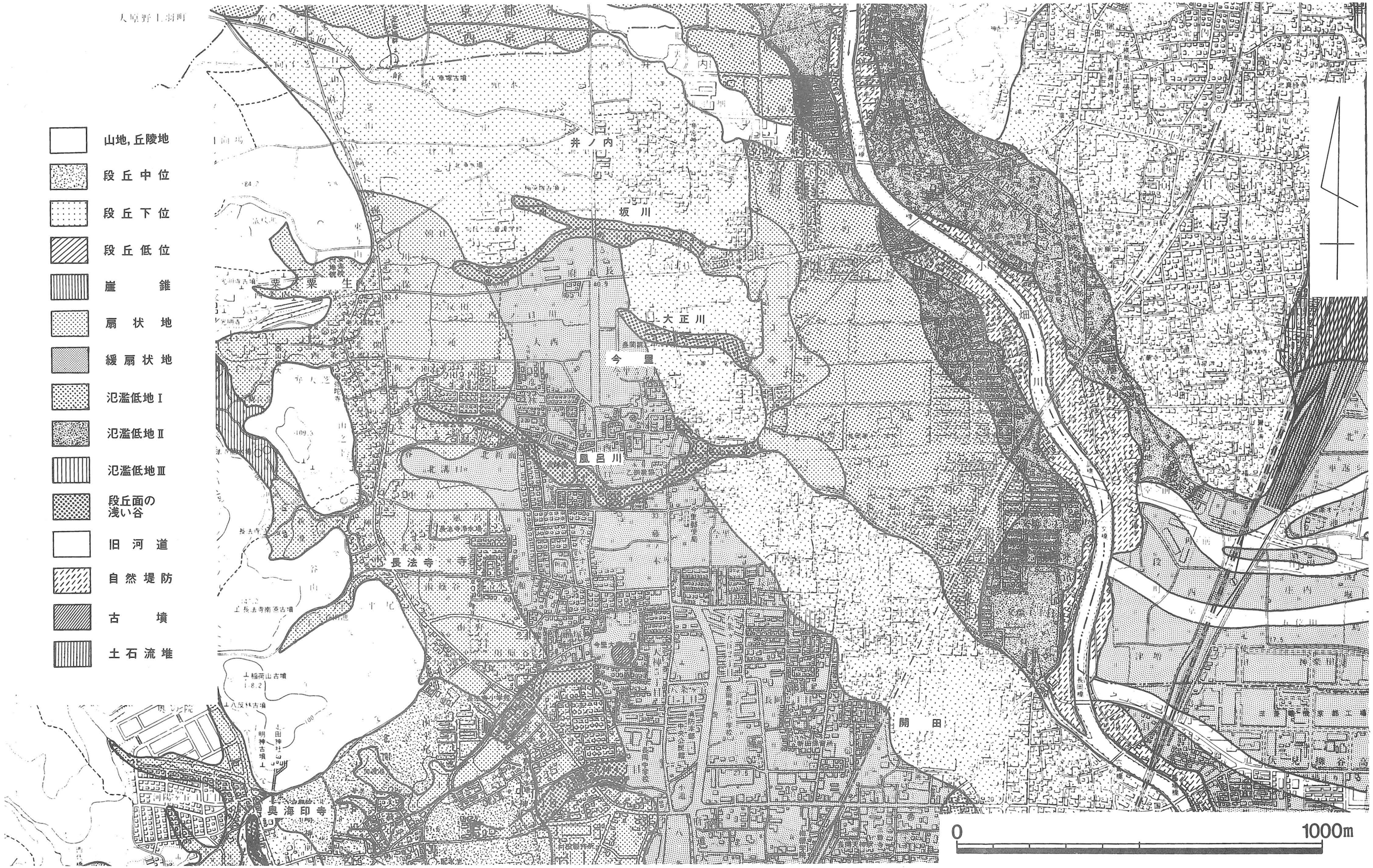
前期・中期・後期の三時期に区分して検討したい。

前期　この時期の資料としては，右京第117次調査において検出された旧河道において弥生時代前期（新段階）の壺の破片1点が確認されている。この土器は磨耗が著しいことから，上流にある遺跡から流れ込んだものと考えられる。この旧河道は北西から南東方向に流れているもので，小畑川の支流である坂川の旧流路と思われる。

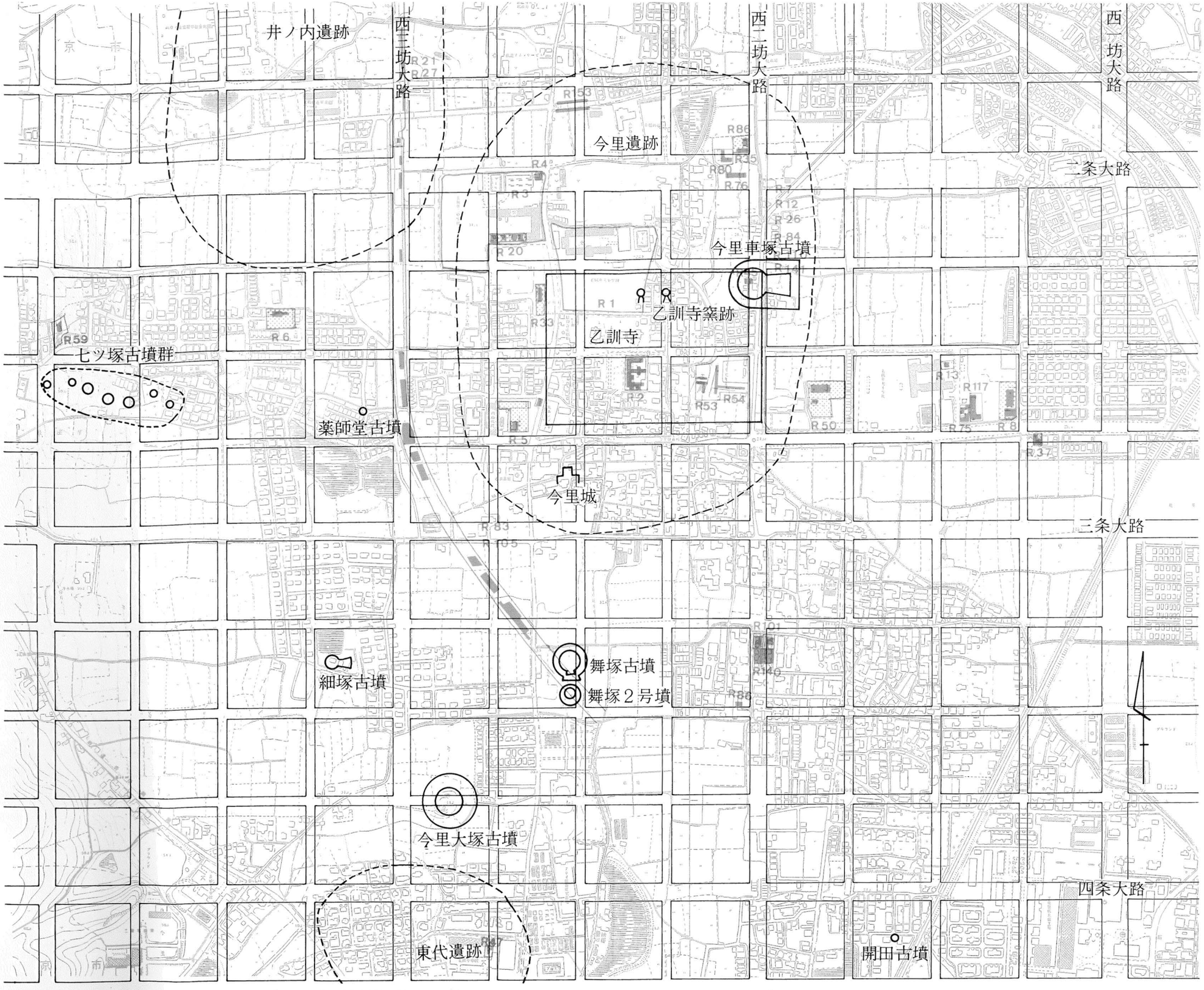
中期　この時期になると遺構が急激に増加する。検出された遺構は，乙訓寺周辺の低位段丘上で，風呂川周辺に集中している。低位段丘上で行われた右京第2次調査では方形周溝墓，右京第5次調査では土壙（畿内第IV様式）がそれぞれ1基ずつ確認されている。

扇状地および氾濫低地で行われた右京第7・26・50・54・75・117次調査では，それぞれ溝5条が確認されている。これらの溝は風呂川の旧河道として，第63図のとおり復元されている。遺構はこの他に，坂川の扇状地で行われた右京第12次調査において，中期（畿内第III様式）の遺物のみを出土する土壙が検出されている。また，風呂川以南の台地上で行われた右京第85・101次調査において土器・石鏃が出土している。

このようにして，中期になると，今里遺跡，陶器町遺跡が形成されてくる。とくに今里遺跡では乙訓寺周辺の低位段丘上に集落の中心部が形成され，乙訓寺の南部に墓域があり，その近



第106図　今里地区の地形（日下雅義氏原図）



第107図　今里地区における遺跡の分布と調査位置（付表13参照）

付表7　検出遺溝一覧表（弥生～奈良時代）

弥生時代

時期	立地	調査次数（右京）	検出遺構（遺構番号） 竪穴住居 SB(SH)	掘立柱建物 SB	溝 SD	土壙 SK	その他	遺物	備考
前期	氾濫低地	117						○	
中期	低位段丘上	2次			方形周溝墓1				
		5次				05011			
		83次						○	
		85次						○	
		101次						○	
	扇状地	7次			0732*				*旧河道
		12次					P4*	○	*弥生土器（中期）一括遺物
		26次			2615				
		54次			5403*				*旧河道SD0732へ続くと思われる。…風呂川の旧河道
	氾濫低地	50次			5001*				*旧河道
		75次			7501*				*旧河道
		117次						○	
後期	低位段丘上	1次						○	
		3次						○	
		5次						○	
		33次						○	
		101次						○	
		105次			溝6				
	扇状地	7次			0729				
		12次	1223*			1221			*住居址　隅丸方形プラン
		〃				1222			
		〃				1224			
		〃				1274*			*右京45次調査でも検出
		〃				1284			
		26次			2612				
		〃			2614				
		76次				7610			
		80次	8006						
		140次						○	
	氾濫低地	75次			7501*				*自然流路（弥生中期～後期の遺物）
		117次			11712* 11713			○	*右京75次調査で一部確認

古墳時代

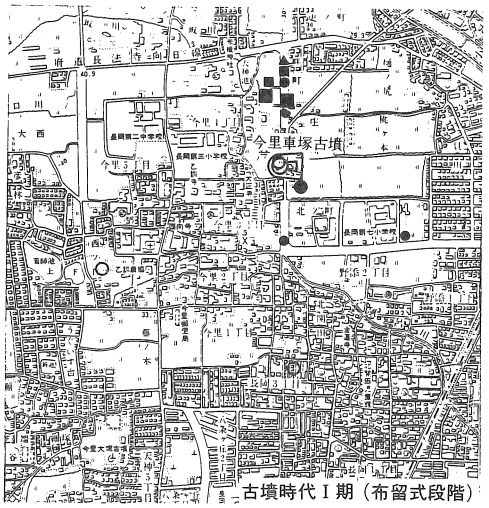
時期	立地	調査次数（右京）	検出遺構（遺構番号） 竪穴住居 SB(SH)	掘立柱建物 SB	溝 SD	土壙 SK	その他	遺物	備考
I期（布留式段階）	低位段丘上	83次						○	
		101次						○	
	扇状地	7次			0729				
		12次	1207			1225			
		〃	1250		1269				
		〃	1251						
		〃						○*	*今里車塚古墳造営前に集落のあった可能性がある
		26次			2610				
		80次	8008						
			8009						
		86次	SA8615						
	氾濫低地	75次			7502*				*木製農具出土（ナスビ形他）

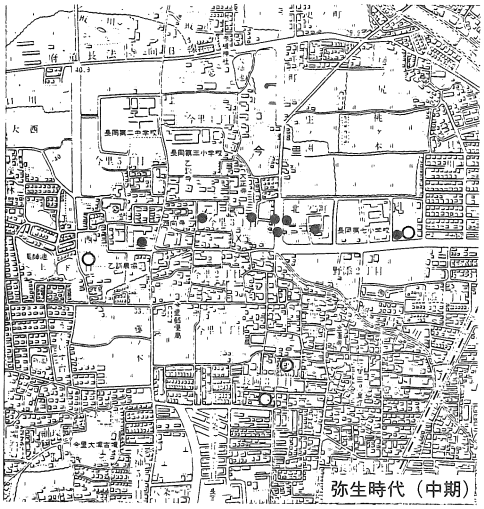
時期	立地	調査次数（右京）	検出遺構（遺構番号） 竪穴住居 SB(SH)	掘立柱建物 SB	溝 SD	土壙 SK	その他	遺物	備考
II期（陶邑I～II初）	低位段丘上	5次	0502						
		101次				10101			
		105次	竪穴住居A		10565*				*舞塚古墳の周濠
		〃	〃 B		10570*				*舞塚2号墳の周濠
	扇状地	7次	0726*		0728	0721			*住居北の一辺にカマドをもつ。支脚―土師器・高坏
		〃				0722			
		12次	1204*						*カマドあり　支脚―須恵器・高坏
		〃	1217*						*カマドあり
		〃	1254		1243	1248	焼土塊 SX1247		
		〃	1257		1252	1253			
		〃	1258		1262	1261			
		〃	1259		1270	1264			
		〃	1263			1265			
		〃				1267			
		86次	8611						
III期（陶邑II）	低位段丘上	5次							
		83次				8318			
		85次	8504						
		〃	SX8505*						*焼土遺構SX8505はカマドの可能性があるため住居として扱う
	扇状地	7次	0727*						*カマドあり 支脚―土師器・高坏
		12次	1205*			1208			*建て替えが行われている
		〃	1206*			(1219)			*須恵器・すり鉢
		〃	1209						
		〃	1249						
		〃	1255						
		〃	1256*						*鉄製紡錘車―最も古い例
		〃	1260						
		35次	3512			3514*			*住居址？
		76次	7608						
		〃	7609						
		80次	8005						
		86次	8613						
IV期（陶邑II末～III初）	低位段丘上	5次	0502						
		83次			8317				
	扇状地	12次	1202						
		〃	1203						
		〃	1210						
		〃	1214						
		〃	1216						
		26次	2654						
		76次							
		〃							
		140次				14014			
V期（陶邑III）	低位段丘上	83次				8320			
	扇状地	12次		1201					
				1213					
				1220					

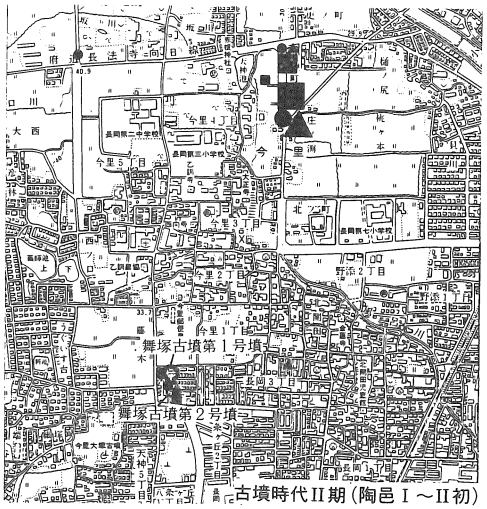
奈良時代

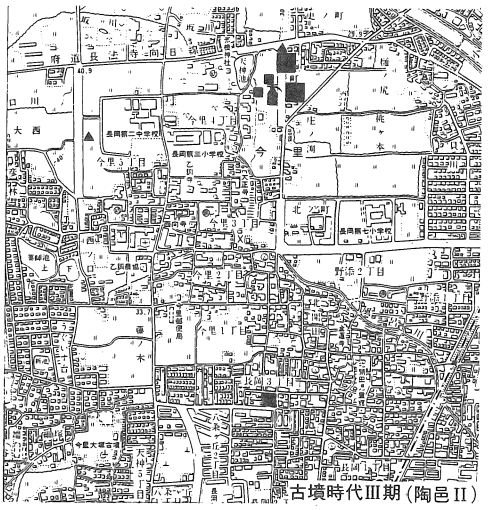
時期	立地	調査次数(右京)	検出遺構(遺構番号) 竪穴住居 SB(SH)	掘立柱建物 SB	溝 SD	土壙 SK	その他	遺物	備考
	低位段丘上	1次		A*			瓦窯2基		*乙訓寺の講堂と推定
		〃		B*					*(B～F)乙訓寺の僧坊と推定
		〃		C					
		〃		D					
		〃		E					
		〃		F					
		2次			東西溝*				*乙訓寺の南辺を画する溝と推定
		5次				0503		○	
		6次						○	
		83次			8301	8305*			*埋土がSD8301と同じため
		〃		8319	8315		SX8314*		*溝状遺構
		〃			8316				
		〃		8321					
		〃		8322					
		〃		8323					
		〃		8324					
		〃		8325					
		〃		8326					
		〃		8328	8333		井戸 SE8332		
		〃		8329	8334				
		〃		8330					
		〃		8339					
		〃		8357	8362				
		〃		8358	8363				
	低位段丘上	83次		SA8359					
		〃		8360	8364				
		〃			自然流路*				*出土遺物(古墳時代～奈良時代)
		105次			10550				
	扇状地	53次					礫敷遺構 SX5301		
		76次						○	
		8001次				800101*			*瓦溜り
	氾濫低地	117次	11704*						*竪穴住居址？

〔なお、竪穴住居又は掘立柱建物の欄内にあるSA○○は柵列遺構を示す。〕

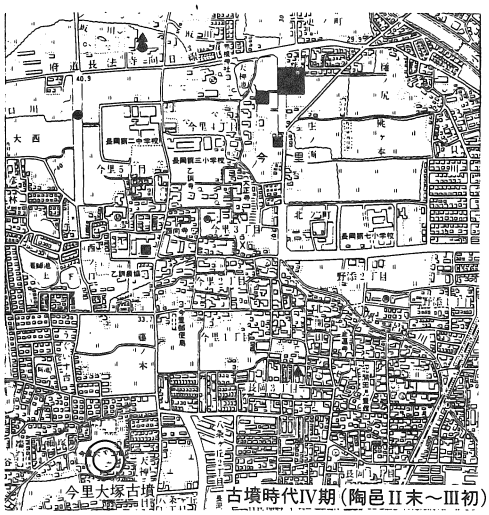


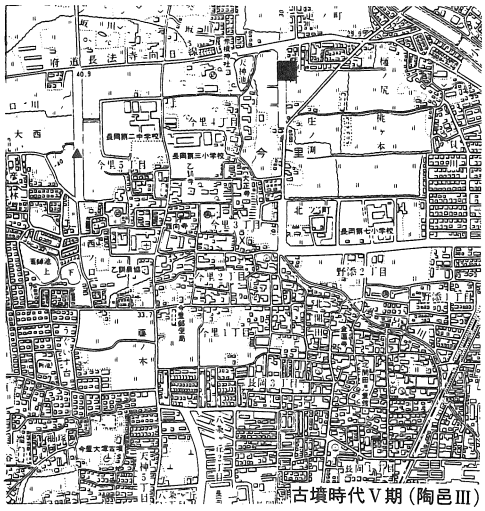


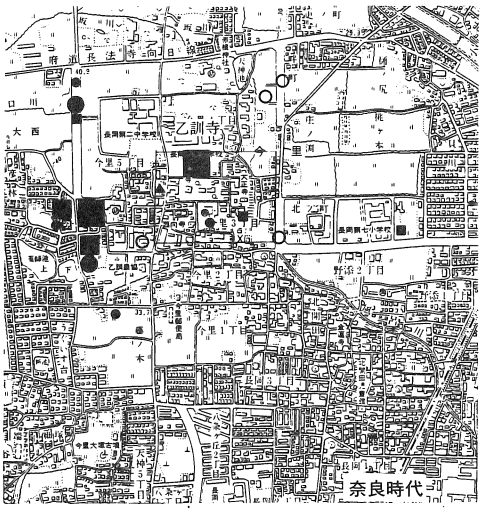




第108図　　検出遺構一覧図(1)（１：20,000）







辺に居住域が存在していたことがうかがえる。

後期　中期の遺跡分布範囲に加え，さらに遺跡が拡大する傾向にある。扇状地で行われた右京第７・12・45・76・80次調査では，竪穴住居址２基・土壙６基・溝４条などが検出されている。また，乙訓寺北方の坂川周辺の低位段丘上で行われた右京第27・98・112次調査では，竪穴住居址・溝・旧河道などが確認されている。

一方，風呂川の南方部の低位段丘上では，右京第105次調査において溝１条を確認している。

以上のことから，今里遺跡では集落の中心部が北方部の低位段丘および坂川の扇状地に移行していることがうかがわれる。また，陶器町遺跡がさらに西部にも拡大され，そして今里遺跡の北方の坂川周辺の低位段丘上にも新たに集落が形成されるようになる。(井ノ内遺跡)。

ところで，坂川の周辺に立地している井ノ内遺跡との関係について検討を加えてみると，まず竪穴住居址の構造について相違がみとめ

■	建物	1
■	〃	2
■	〃	3～4
■	〃	5～6
▲	土壙、その他	1
▲	〃	2
▲	〃	3～4
▲	〃	5～6
●	溝	1
●	〃	2
●	〃	3
□	井戸	
○	遺物	

第109図　検出遺構一覧図(2)　(１：20,000)

られる。

今里遺跡で行われた右京第12・80次調査で検出された竪穴住居址２基はいずれも隅丸方形のものであるのに対して，井ノ内遺跡で行われた右京第112次調査で検出された竪穴住居址１基は円形のものである。両者は同水系上で近距離にある集落でありながら，隅丸方形・円形のものが共存していることは，両者の集落の位置を考える上で重要である。

また，井ノ内遺跡で行われた右京第27次調査(注４)において２条の溝を検出している。うちの１条（SD2710）は幅2.9m，深さ0.8mを測る大規模な断面逆台形を呈する溝で，防御的な性格をもった居住域を画する環濠になる可能性をもっている。ところで，これらの２条の溝内から出土した土器と，今里遺跡（右京７・12・26次）から出土したものを比較すると，井ノ内遺跡のものが若干新しい様相を示すが，いずれも弥生時代後期である。しかし今里遺跡のものが，より近江・鴨川東岸地域の影響を強く受けている傾向にあることが指摘されている。このことは他地域との交流を知る上で注目される資料である。いずれにしても，今里遺跡と井ノ内遺跡は坂川の周辺に立地した集落であり，密接な関係にあったと思われるにもかかわらず，両者にはいくつかの相違点がみられることは今後，両者の集落の関係，つまり，母村と分村関係などを検討していく上で重要な資料となる。

このように弥生時代においては，中期になると低位段丘上に本格的に集落が営まれるようになり，しだいに台地周辺に集落が拡大されていく。なかでも今里遺跡は，中期には墓域と住居区域をもつ集落として発達し，その後も継続して集落が営まれている。このことは今里遺跡群の中でも，拠点的な集落としての位置を占めていたことを示している。ただ，いずれの遺跡も調査区域が狭いため，その集落構造の分析については，今後の調査の進展にまたざるを得ない。

②　古墳時代

この時代については，土器型式の分類から次の５期に別けて検討していきたい。(注５)

Ⅰ期は須恵器が出現するまでの布留式段階（四世紀末～五世紀前半），Ⅱ期は陶邑編年のⅠ期からⅡ期初で，いわゆる古式須恵器の段階（五世紀後半～六世紀前半），Ⅲ期は陶邑編年のⅡ期の段階（六世紀中葉），Ⅳ期は陶邑編年のⅡ期末～Ⅲ期初の段階（六世紀後半～七世紀初），Ⅴ期は陶邑編年のⅢ期段階（七世紀前半）である。

Ⅰ期　当地区においては弥生時代後期の次の段階，いわゆる庄内式段階（四世紀初～四世紀中葉）の遺構・遺物については，現在のところほとんど確認されていないため，Ⅰ期を布留式段階とした。乙訓地域では，庄内式土器の出土は，東土川遺跡・太田遺跡・鴫田遺跡・西山田遺跡・馬場遺跡などで近年徐々に確認されつつあるがあまり多くはない。このことは，弥生時代後期の土器の様相が布留式段階まで継承され，庄内式土器を指標にした段階を設定できないのか，まだ当地区において庄内式土器が出土していないだけなのか，いずれにしてもその結論は今後の調査にまたざるを得ない。

集落の分布範囲は，弥生時代後期のあり方と大きな変化がみられない。ただ，弥生時代後期に遺構が確認された井ノ内遺跡では一部庄内式土器が見られるものの，その後の古墳時代後期まで遺構・遺物は検出されていないことから，この間，集落が廃絶していたものと推測される。

今里遺跡において検出された遺構は，おもに今里車塚古墳の北方の坂川扇状地の扇央から扇端にかけて，北西から南東にゆるやかに傾斜する平地で，竪穴住居址５基・柵列１列・溝２条・土壙１基がある。出土した遺物は，いずれも土師器で布留式新段階のものである。この区域での住居群のあり方は，弥生時代後期に比べ南方にさらに拡がってきていることが指摘できる。

また，南方の今里車塚古墳墳丘下層から布留式土器が出土しており，古墳築造前にも付近に集落が存在していたものと思われる。

一方，東部の氾濫低地では旧河道（SD7502）が検出され，その中からナスビ形着柄木製品などの木製農具が出土している。これらは，この一帯が水田，つまり生産の場として利用されていたことを物語るものである。

この時期に，今里遺跡では，大きな画期を迎えている。それは，今里車塚古墳の築造である。

今里車塚古墳は，乙訓寺の東北約150mに位置し，標高26～29m，北西から南東へゆるやかに傾斜する平坦地上に立地している。この古墳は西側にある比高差４～５mの低位段丘面を西から東へ流れる大正川が開析し，形成された小扇状地の扇央部分に位置している。古墳は，西方の台地を背後にして，前方部を東に向けた前方後円墳である。墳丘の周囲には，盾型周濠をめぐらせており，古墳時代中期の整った墳形を呈している。昭和54年に行われた周濠部の調査（右京26次調査）により円筒・朝顔形・形象埴輪・仿製方格規矩獣文倭鏡の破片・木製蓋（笠形木製品）などが出土している。この古墳は，墳形・出土遺物の特徴から五世紀前半に築造されたとみられる。

ところで，乙訓地域における古墳は，地域的な分布のあり方から，樫原グループ・向日町グループ・長岡グループの３グループに大別されている。これまでの研究から，この古墳は長法寺グループに含まれ，この古墳の被葬者は同時期に他に前方後円墳が築かれていないことから，古墳時代前期の長法寺南原古墳，鳥居前古墳と続いた長岡グループ内の首長から，乙訓地方全体を統治する首長として台頭していたと考えられている。

このように乙訓地域全体を統治する首長の存在を背景に，乙訓地域の中で，もっとも有力な集落として形成されていたと考えられる。

II期　坂川扇状地上で，竪穴住居址９基・土壙８基・焼土塊１基・溝５条が検出されている。これらの遺構からは，陶邑編年Ｉ型式前半の土器の出土した竪穴住居址SB8611を除いて，陶邑編年Ｉ型式後半からII型式初の土器が出土している。これらの遺構はＩ期の住居の周辺にまで分布し，多くの住居が営まれている。住居構造においては，この時期から住居址の一辺にかまどがつくりつけられるようになる（SB0726・SB1204・SB1217）。

一方，南方の陶器町遺跡においては，竪穴住居址２・土壙１基が検出されている。(注７)住居址にはカマドらしきものが確認されている。これらの北側には舞塚古墳および舞塚第２号墳の一部が確認されている。舞塚古墳は帆立貝式の古墳で，墳丘は全長約50mと推定される。墳丘の周囲には，幅５～８mの周濠をもち，その後円部の東南に陸橋をもっている。周濠内から多くの円筒埴輪・人物埴輪と須恵器片が出土している。葺石はなかったものと思われる。築造年代は，埴輪の特徴から六世紀前半のものと推定される。

第２号墳は舞塚古墳のすぐ南にある円墳で，周濠の一部が確認されている。周濠の幅は約５mで墳丘の直径は約13mと復原できる。

以上のように，この時期の集落の分布範囲は，Ⅰ期の集落が引きつがれ，さらにその周辺に広がる傾向を示している。また，舞塚古墳の被葬者は，今里車塚古墳・恵解山古墳の被葬者に続く長岡グループ内の首長の墓としての性格を有していたと推測される。ただ，この古墳の築造時期は恵解山古墳と約半世紀の間があり，その間に当地を統治した首長が１代もしくは２代存在していたと思われるが，まだ解明されていない。

Ⅲ期　集落の分布範囲は，Ⅱ期とほぼ同じであるが，新たに井ノ内遺跡の南部において，土壙１基が確認されている。

坂川扇状地では，竪穴住居址13基・土壙３基が検出され，この集落が当地において，もっとも繁栄した時期であったことを語っている。ただ，東南部においては，Ⅱ期にくらべ住居址・土壙などの遺構や遺物が少なくなる傾向を示し，Ⅱ期にその画期を求めることができる。とくに竪穴住居址SB1256から出土した鉄製紡錘車は生活の一端を知る資料であるとともに，この時期の鉄製紡錘車は他では出土例があまりなく，最も古い資料として注目される。

陶器町遺跡では，住居址２基が確認されている。

一方，西部の低位段丘上においては，井ノ内遺跡南部で，新たに径約250cmの円形の土壙が１基検出されている。この中からは須恵器片が比較的多く出土している。このことは，遺構が検出されていなかった当地周辺まで，集落が広がってきたことを示すものである。

ところで住居址の構造をみると，平面プランが全体的に小型化し，長方形・台形を呈するもの（SB1205・1209・1249・1255・1256等）や壁構がないもの（SB1256・8504・8613・8005等）が増え，変化が認められる。

Ⅳ期　検出された遺構の分布は，Ⅲ期と大きな変化はみられない。

坂川の扇状地では，北部で竪穴住居址５基を確認されたのみで，南部では，これまで続いた集落が営まれなくなり，集落が縮少してきている。

この点について，調査報告(注８)では，住居址群の存在のメドとなる暗褐色粘質土が，南部からさらに南に，または東へ行けば，しだいに少なくなっているから，当地が古墳時代後期のまとまりのある住居址群の東南隅にあたり，集落の中心は，北または西にあると推定されている。ま

た大正川扇状地にある今里車塚古墳のすぐ北側でも，竪穴住居址１基を新たに確認している。

一方，井ノ内遺跡では，弥生時代後期の円形の竪穴住居址を確認した右京第112次においても溝２条・土壙１基が検出されている。このことは，集落がふたたび西部に広がったことを推測させる。

この時期に注目すべきことは，今里大塚古墳の築造である。この古墳は，標高35m前後の低位段丘上に築造された古墳で，径45m，高さ5.5mの円墳である。墳丘の周囲の水田の畦畔などから幅18m前後の周濠を伴う可能性がある。主体部は巨石を用いて構築された両袖式の横穴式石室で，桂川右岸流域では最も規模の大きい巨石古墳である。この古墳の被葬者は乙訓地域を統治する首長と考えられている(注９)。このことは，今里地区周辺に中期以降もひきつづいて有力な集落が形成されていたことを示している。ただ，この古墳は構造などからこの時期のものと推定されているが，発掘調査が実施されていないため，築造時期は明らかにされていない。

Ｖ期　現在まで検出された遺構は，坂川扇状地北部で掘立柱建物３棟と井ノ内遺跡南方で溝１条があるにすぎない。

とくに，掘立柱建物の出現は，今里遺跡において竪穴式住居から移行した時期を示すものである。それらの掘立柱建物の柱穴内から出土した土器は，須恵器の杯蓋・杯身・土師器片がわずかであったため，建物の時期決定は困難であるが，陶邑編年II期後半からIII期前半に掘立柱建物に移行したものと考えられている。この移行時期は京都盆地周辺と同じ傾向を示している。長岡京市内では，今里遺跡に先行するものとして神足遺跡があり，六世紀前半を下らない竪穴住居址と併存していたことが考えられている(注10)。また，下海印寺の伊賀寺遺跡では陶邑編年III期まで竪穴住居が造られている(注11)。

③　奈良時代

坂川扇状地では，わずかに土器の出土が認められるのみで，弥生時代後期から営々と続いてきた住居址の分布はみられない。おそらく，この時代になると集落は廃絶したと思われる。

現今里集落の西方の水田地帯においては，南北に縦断する形で右京第83次・第105次調査が行われ，多くの遺構が検出されている。北方部では掘立柱建物１棟・土壙１基・溝４条（溝状遺構を含む），中央部では掘立柱建物13棟・柵列１列・井戸１基・溝４条，南部では溝１条・流路１条がそれぞれ確認されている。掘立柱建物はほぼ真南北方向のものと，北西から南東の地形に沿って大きく西に振れるものがある。これらの建物の時期は出土遺物から八世紀半ばから八世紀末ごろのものがあるが，柱穴の重複関係，建物の方向などからいくつかのグループに区分できるものがあり，今後，建物の時期・性格を検討していく上で留意される。現地点では全体的にみて建物の時期については，新しくなるにつれて南北方向に変わってきていることは指摘することができる。ところがこれらの建物群は，南部で検出した幅約12.3mの自然流路を境にして，以南では検出されていない。このことから，この流路が集落の南限となっていたものと

考えられている。(注12)

次に今里集落内の乙訓寺周辺では，乙訓寺に関すると思われる遺構が検出されている。まず，現乙訓寺境内の北で行なわれた右京１次調査で，奈良時代末から平安時代初期にかけての講堂跡のほか，雑舎的な小規模の掘立柱建物５棟が検出されている。また，寺の西では七世紀末の瓦を多数出土した土壙１基（立会調査8001次），現南門の東では溝１条（右京２次調査），さらに東方の段丘崖下では築地塀の基底部と思われる礫敷遺構が検出されている。

東部の氾濫低地では，右京第75次調査において，ほぼ南北方向の掘立柱建物１棟検出されている。

このように奈良時代になると，古墳時代まで遺構がほとんど確認できなかった現今里集落の西方の水田地帯で多数の建物跡が検出され，いままでの集落分布のあり方とは異なった傾向を示している。このことは，古墳時代まで集落の中心を占めてきた区域に乙訓寺が創建され，そのため集落の中心が寺域の西方に移ったものと思われる。

ところで，乙訓寺は寺伝で聖徳太子の創建と伝えられている。しかし，乙訓寺の境内周辺から多数出土する瓦などをみると，早くとも奈良時代前期(白鳳時代)ごろに創建されたと考えられる。また，この寺は乙訓郡の郡名を冠し，乙訓郡のほぼ中央に位置していることから，郡司クラスの豪族が創建したものと考えられている。今後の調査において，この地における奈良時代の遺構群の分析をすすめることによって，今里大塚古墳の被葬者に代表されるような在地豪族層がどのように古代国家の地域支配の中に組み込まれていたのか，具体的に検討することができよう。（中尾秀正）

３．乙訓寺とその周辺における奈良～平安時代の検出遺構

(1)　遺構の検出状況（付表８　第110図）

乙訓寺は，乙訓郡域で白鳳時代に建立された寺院のうち，現在まで唯一存続しており，発掘調査も進められていることから，創建から今日までの変遷過程を実証的に追究し得る数少い寺院である。乙訓寺とその周辺において行なわれた調査は第107図に示されているとおりである。全体的にみれば，現在庫裡などが建てられている主要伽藍の内部や，その周辺の集落に調査が及んでいないこと，乙訓寺の西方における遺構の残存状況が良くないことなど，一律的な比較検討のできる資料的な段階に至っているとはいい難いが，本冊に収録した乙訓寺に関する調査結果と，これまでの調査成果を整理し，今後の研究課題を明らかにしておきたい。

これまで報告されている乙訓寺とその周辺における検出遺構は第110図　付表８のとおりである。また今回の作業にあたって現存する南門と東門の位置を測量し確認した。検出された遺構の時期については，溝・土壙がその出土遺物から一定の年代を推定できるのに対し，建物・柵等は伴出遺物が少なく層位的な検討から推定が行われている。また乙訓地域においては奈

良～平安時代の土器の編年作業にまとまったものが呈示されている状況になく，細かな時期区分は困難である。したがって本稿はとりあえず，創建期～奈良時代，長岡京期，平安時代と大きく三つに区分して遺構の整理を行いたい。

①　創建期～奈良時代

乙訓寺の創建時期については，付近で採集された瓦の検討から，梅原末治氏(注13)，田中重久氏(注14)，高橋美久二氏(注15)等によって考察が行なわれている。このうち高橋美久二氏は乙訓寺の創建瓦を670年代に比定されている。

創建時に該当する明確な遺構は現在まで確認されていない。土壙800101から出土した瓦は創建期よりやや新しい8世紀代のものを含む。この他ＳＤ0731（長岡京西二坊大路東側溝）では平行叩きや格子叩きのある平瓦と和銅開珎・万年通宝が，土壙SK0736では平行叩きのある平瓦や万年通宝等奈良時代の特徴を示す遺物が長岡京時代の土器と共に出土している。右京1次調査で検出された礎石建物Aは乙訓寺の講堂と推定されており，根石の間から出土した軒平瓦からその年代の上限を奈良末―平安時代初期におかれている。調査は工事と併行して行なわれなければならない困難な状況下にあったため，現在建物Aおよびその北西部において検出された建物群やピット群の正確な位置関係や，時期をつかむことができない。したがって第110図には残された図面や写真等から建物Aのおよその位置を示した。

②　長岡京期（第111図）

長岡京期の遺構として明確なものはＳＤ0731（西二坊大路東側溝），ＳＤ1231Ａ・Ｂ（西二坊大路東側溝），ＳＤ2601（西二坊大路西側溝），ＳＤ7606（西二坊大路西側溝），ＳＤ0738（三条条間小路南測溝），ＳＤ2649（三条条間小路北側溝）ＳＤ11001（三条条間小路北側溝），土壙ＳＫ0736である。これら長岡京期の遺構は，乙訓寺東方における条坊に関する遺構が主なものであり，長岡京条坊の研究に次のような問題を投げかけている。

その一つは，検出された三条条間小路の路面巾が25mと大路級の路面巾を有することである。この点と二条大路に相当する明確な遺構が検出されなかったこと，三条大路の路面巾が12.4mと小路クラスの巾しかなかったことを合わせて，高橋美久二氏はこの三条条間小路が長岡京条坊の中において二条大路の役割を有したとする見解を提起されている(注16)。また吉本氏は三条条間小路を二条大路そのものだとして，長岡京域を全体に2町南へ拡大する見解を提起された(注17)。その後の調査においても，やはり復原図において大路とされている道路よりも条間小路とされている道路の方が路面巾が広いこと，また大路の巾は25m前後と一定した傾向が示されている。検出されたこの三条条間小路を長岡京条坊の中でどのように性格づけるかは，宮および京の四至が確認される中で明確となってこよう。さらに西二坊大路の路面巾が17mしかなかったことも特筆すべきことである。

二点目は，三条条間小路が二条大路そのものであったか，または二条大路の機能を有してい

付表8　検出遺構一覧表（乙訓寺とその周辺）

		遺構名	調査次数	方向	概　　要	主な伴出遺物
溝	1		右京1次	南北	溝状の遺構が2条南北にはしり北端で合流して更に北にのびる	
	2		右京2次	東西	現存する南門のほぼ東延長上	
	3	SD0731	右京7次	南北	西二坊大路東側溝，奈良時代の特徴を示す遺物もある。下限は長岡京時代	長岡京期の土器，和銅開珎，神功開宝，平行・格子叩きの平瓦
	4	SD1231A SD1231B	右京12次	南北	西二坊大路東側溝	長岡京期の土器・瓦
	5	SD1232	右京12次	南北	SD1231A，SD1231Bに沿って検出される。SD1231A，SD1231Bよりも新しい。	
	6	SD2601	右京26次	南北	西二坊大路西側溝	長岡京期土器，軒丸瓦・軒平瓦
	7	SD0707	右京7・12次	東西	性格・時代不明，わだちがまたがって検出されている。	
	8	SD2655	右京26次	東西	杭列を伴う。東端部は南へ折れ曲がる。長岡京時代前後か。	
	9	SD0738	右京7次	東西	三条条間小路南側溝	
	10	SD2649	右京26次	東西	三条条間小路北側溝	
	11	SD11001	右京110次	東西	三条条間小路北側溝	長岡京期土器，土馬
	12	SD11002	右京110次		L字状の流路か	
	13	SD7606	右京76次	南北	西二坊大路西側溝	長岡京期の土器，円面硯・軒平瓦
	14	SD3502	右京35次	南北	層位から平安時代と推定される	平瓦・須恵器壺
	15	SD8606	右京86次	南北	〃	
土壙	16	SK1241	右京12次		1.7m×2.5m以上惰円形	平安時代中期の一括遺物
	17	SK0736	右京7・12次		2.5m×3.1m	長岡京時代土器，平行叩きの平瓦，万年通宝
	18	SK0503	右京5次		3m×1.4m不定形	8C前葉の須恵器片
	19	SK800101	立会8001次		(0.8m)×2.2m	7C末～8Cの軒平瓦，丸瓦，平瓦
建物	20	建物　A	右京1次	東西 東西	桁行9間梁間4間の礎石建物・推定講堂 講堂にとりつく掘立柱回廊3間×(3間)	軒平瓦
	21	建物　B	右京1次	南北	(1間×9間)の掘立柱跡	
	22	建物　C	右京1次	東西	桁行3間梁間2間の掘立柱建物	
	23	建物　D	右京1次	東西	桁行(4間)梁間2間の掘立柱建物，中間にも柱穴のあるベタ柱の建物	
	24	建物　E	右京1次	東西	桁行(1間)梁間2間の掘立柱建物	
	25	建物　F	右京1次	東西	桁行(3間)梁間2間の掘立柱建物	
	26	SB1234	右京12次	南北	桁行3間梁間2間，中間にも柱穴のあるベタ柱の掘立柱建物 層位から平安時代と推定	
	27	SB7602	右京76次		東西方向に掘立柱跡2間分を検出，層位から平安時代と推定	
	28	SB7603	右京76次		掘立柱柱穴3個を検出，層位から平安時代と推定	
	29	SB7604	右京76次		東西方向に掘立柱跡3間分を検出，層位から平安時代と推定	
	30	SB8002	右京80次	東西	東西・南北とも1間以上と推定される掘立柱建物 層位から平安時代と推定	須恵器，土師器片
	31	SB8608	右京86次	南北	桁行3間梁間2間と推定される掘立柱建物 層位から平安時代と推定	
柵	32	SA0739A SA0739B	右京7次		2時期の一本柱例と考えられるが，先後関係は明らかでない 南部で東西の柵列に交わるが，どちらに対応するものであるか明らかでない。	
	33	SA1233	右京12次		層位から平安時代と推定	
	34	SA1235	右京12次		層位から平安時代と推定　直角にまがる	
	35	SA8001A SA8001B	右京80次		層位から平安時代と推定される2列の柱列 2°40′東で南にふれる	平瓦，須恵器，土師器の破片
	36	SA8609	右京80次		層位から平安時代と推定　4°北で西にふれる	
	37	SX5301	右京53次		土塁ないし築地の基底部と推定	
	38	瓦　窯	右京1次			

たとしても，右京三条二坊においてはその路面上に乙訓寺が位置し，大路として貫通していなかったことである。同様に西二坊大路の路面上に今里車塚古墳が位置し，この今里車塚古墳は，長岡京建設にさいして一部同濠が埋められたものの，墳丘は削平されなかったとされている。長岡宮の造営に伴って向日丘陵上の古墳が破壊されたのに対し，条坊制の施行にあたって，京域内の寺院や古墳等が，そのプランの中にどのように組み込まれたのかを知る具体的な資料となるものである。

三点目は，検出された西二坊大路と三条条間小路が，いずれも乙訓寺周辺に遺存する条里地割と一致することが確認されたことである。特に西二坊大路の東側溝は，乙訓郡条里八里を東西に２分する畦畔の下から検出されている。また三条条間小路の両側溝は，八条八里を南北に２分する坪界線をはさむように検出された。この坪界線は，現存する南門と東門および建物Ａに画された乙訓寺主要伽藍の東西の中軸線にあたると考えられる。これまで乙訓寺の主要伽藍は条里に規制されたもので，条坊プランの中に位置づけることはできないとされている。しかし，乙訓寺に面する大路として西二坊大路を考えることができ，したがって西二坊大路に東面するという観点を重視すれば，主要伽藍の東西の中軸は，条里を媒介として条坊プランの中に位置づけることができる。

③　平安時代

平安時代の遺構としては平安時代中期の一括遺物を出土した土壙ＳＫ1241，層位から平安時代と推定される溝ＳＤ1232・ＳＤ3502，建物ＳＢ1234・ＳＢ7602・ＳＢ7603・ＳＢ7604・ＳＢ8002・ＳＢ8608，柵列ＳＡ1233・ＳＡ1235Ａ・Ｂ・ＳＡ8001Ａ・Ｂ・ＳＡ8609等があげられる。

これらの遺構群の特徴をまとめると

１）乙訓寺東北方に集中して検出されていること

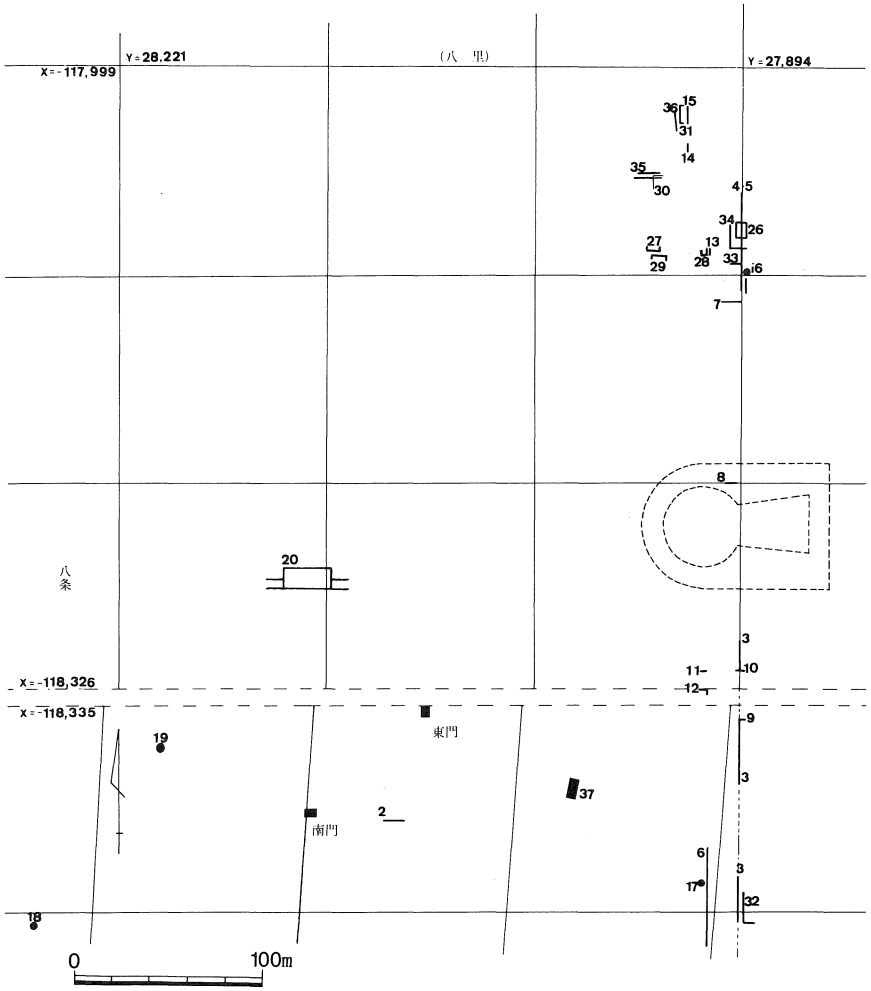
２）建物・柵等の方向は必ずしも一定していないが，この中に正方位をとる一群があること。特にＳＢ1234の南北方向の中軸は，条里の坪界線と一致する。

３）遺構，および包含層から大量に出土する遺物は９世紀～11世紀のものがあるが，その大部分は10世紀代に比定できるものであり，それらの遺物は施釉陶器を多量に含んでいることなどから，乙訓寺と関連する施設と推定されている。

以上の特徴から想起されるのは，「閼伽井　在乙訓寺艮一町計田間　是則古乙訓寺界内ニシテ修法所汲水ナリ　當寺ハ推古天皇勅願聖徳太子開基也。其後弘法大師来真言修ス。寛平法皇住玉ヘリ故號法皇寺……」（『山州名跡志』巻之十）という記述である。同じような記事は『山城名勝志』『山城名跡巡行志』にも記されている。寛平法皇とは，寛平九年（897年）に退位し，その二年後落飾して仁和寺に入り，承平元年（931）年に没するまで上皇として大きな政治力を発揮した宇多天皇である。譲位後の諸居所については『日本紀略』『扶桑略記』『貞信公記』等の記事から考察(注18)が行われているが，これらには上皇が乙訓寺に行幸したという記事もなく，

また仁和寺門跡の歴代記である『御室相承記』(注19)・『仁和寺御傳』(注20)にも『山州名跡志』等の信憑性を裏づけるような記述はない。しかし「法皇寺如元可為當寺末寺事，嘉禄元年九月廿五日，見代々官符同牒状目六」として山城法皇寺が仁和寺直末寺であることが記されている資料がある（『仁和寺諸院家記（顕證本）』(注21)）。この山城法皇寺＝乙訓寺とする直接的な資料は得られないが，次の諸点から乙訓寺が「法皇寺」として仁和寺直末寺であった可能性を考えることができる。

1）安元二年（1176），法皇寺政所から牟佐田里三十三坪一段余が充行われている（『平安遺文』No.4879）。牟佐田里が乙訓郡条里の里名であることは，建保四年（1216）「主殿寮要劇田坪付注進状」（『鎌倉遺文』No.2237）によって確認することができる。この坪付の記載方法は，五条神足里～九条弓絃羽里まで条の順に坪付が記されており，牟佐田里のみ条が記されてないが，八条榎小田里と九条弓絃羽里の間に記されているので牟佐田里は八条にあったとすることができる。そして乙訓郡八条の里名については，すでに十里以東は判明しており，記載さ



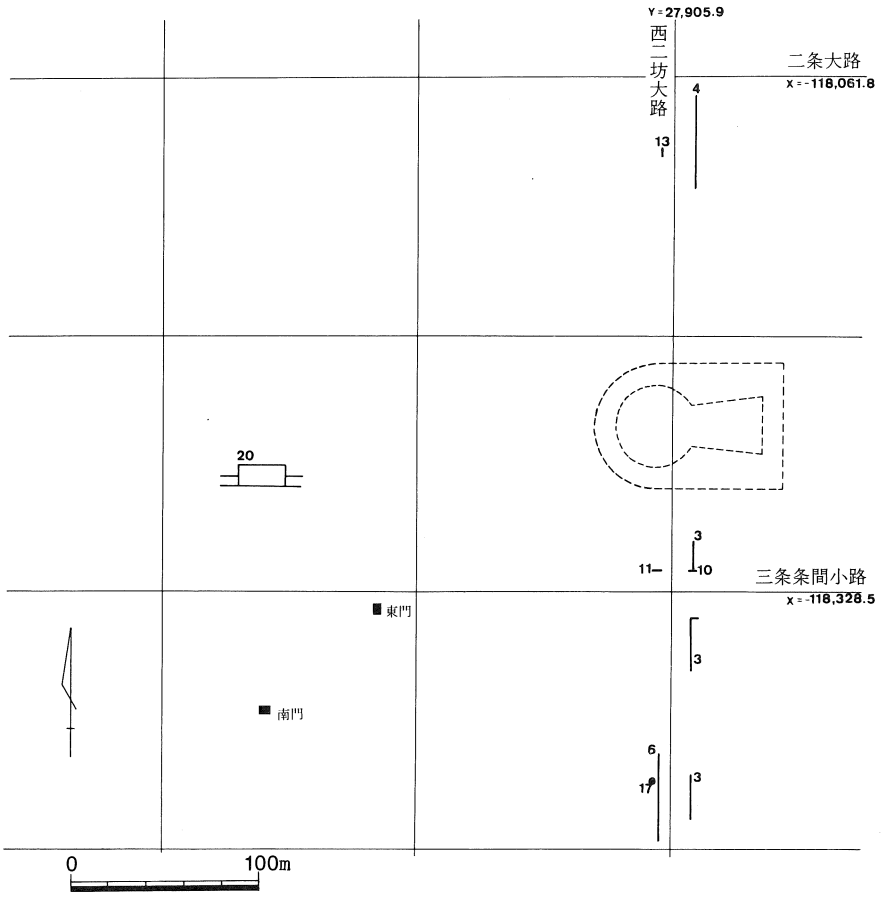
第110図　　検出遺構と条里概念図（番号は付表８と対応する）

れている耕地の分布状況から，牟佐田里を八条七里，もしくは八条八里に比定することができる。乙訓寺は八条八里に位置するのだから，法皇寺政所から充行われた一段余はいずれにしても乙訓寺に近接していたことになる。

2）この他に法皇寺田が乙訓寺周辺にあったことは寛正三年(1462)「堀内為頼田地名主職売券」に,「……在山城国乙訓郡今里庄八幡領之内也字ハ塚下　四至限東道　限南法皇寺田　限西宝覚寺田　限北塚……」(『革嶋家文書』No.70)(注22)という記載から知ることができる。

3）第十代仁和寺門跡開田准后は開田庄を所領とし，この開田庄には遠所別院として，乙訓寺と同じく寛平法皇御在所とする伝承をもつ「開田院」が営まれていた。この開田庄が，乙訓寺周辺の田地を含んでいたことは，仁和寺の寺領関係文書から明らかであり(注23)，乙訓寺と仁和寺との関連性を類推することができる。

乙訓寺が「法皇寺」として仁和寺の直末寺となったとしても，現段階ではその時期や経過に



第111図　　検出遺構（長岡京時代）と条坊概念図

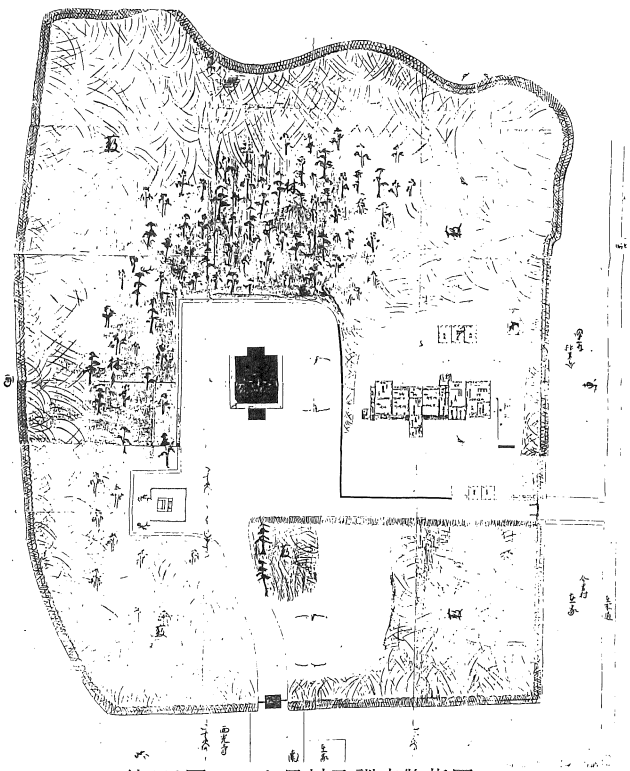
ついて明らかにすることができない。したがって乙訓寺東北方に集中して検出される平安時代中期の遺構群を「寛平法皇御在所」という記述に直接結びつけることはできないが，空海が行った修造の実態も含めて，平安時代において乙訓寺がどのように変貌したのか，重要な調査課題の一つとなろう。

(3)　乙訓寺の占地と周辺の条里

乙訓寺の伽藍配置について手がかりが得られるような文献史料はなく，延暦四年造長岡宮使藤原種継の暗殺事件にまき込まれた早良親王が幽閉された記事，あるいは弘仁二年空海が乙訓寺別当に任ぜられ，乙訓寺の修造を命ぜられたとする記録から，当時の状況を想像できるのみである。

現在の建物は本堂・毘沙門堂・鐘楼・薬医門（南門）・高麗門（東門）等からなる。元禄年間に将軍綱吉母桂昌院によって再興され，その後享保年間に修理されたさいの資料が，江戸幕府京都御大工頭であった中井家に伝えられていて，その中の一つ「今里村乙訓寺惣指図」(注24)で現存する南門と東門の位置を確認することができる。

現存する南門と東門の位置が講堂跡とされる建物Ａと同時期の主要伽藍の位置を踏襲したものであるかどうか，調査によって確認されてはいないし，またさきにも述べたように建物Ａの位置を現在正確に把握することが困難な状況である。しかし，建物Ａと南門・東門によって画される一画がほぼ条里の一町を占めることから，これらを奈良末～平安時代初期における主要伽藍の位置・規模を示すものとして考えられている。本稿では一応このような立場に立って，これらの主要伽藍の占地について再度整理を行っておきたい。



第112図　　今里村乙訓寺惣指図
（京都府立総合資料館提供）

さきに，乙訓寺主要伽藍の東西方向の中軸は条里を媒介として長岡京条坊のプランの中に位置づけられることは述べた。乙訓寺の占地が条里に規制されていることはすでに指摘されているところであるが，周辺の条里地割については，長岡京遷都以前に施行された条里プランを踏襲したものであるとす

る見解（注25）と，長岡京廃都後に施行されたとする見解（注26）があり，その評価は一定していない。

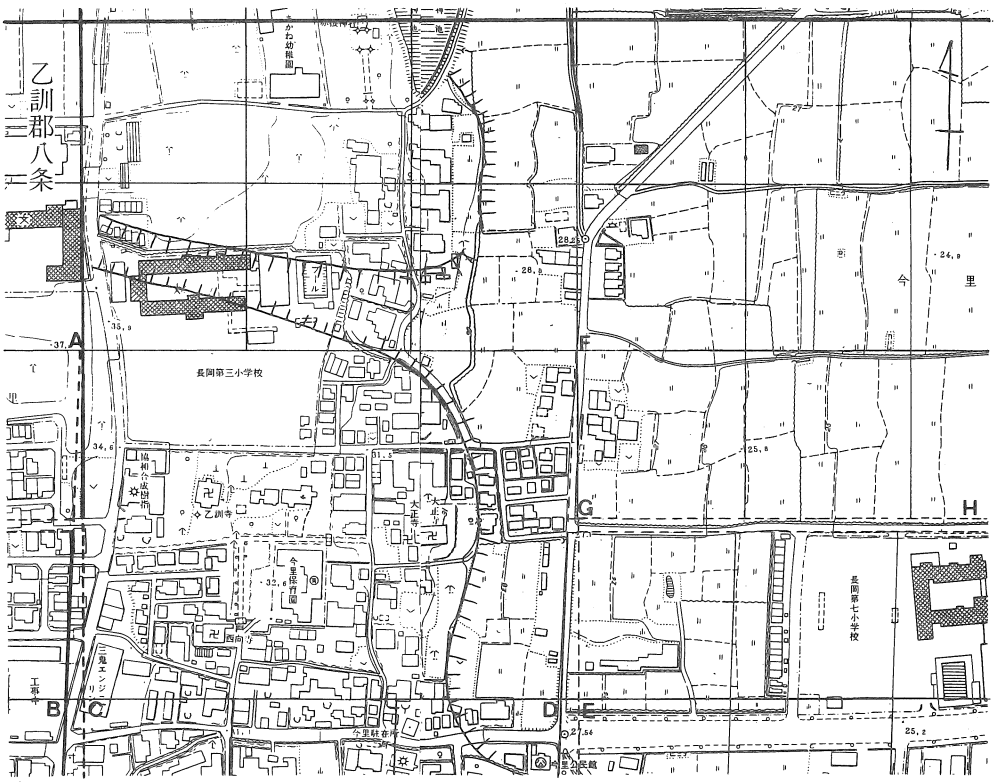
乙訓郡西部の条里については，地割の遺存状況・地名資料・文献史料とも東部のそれに比べて希薄であることから，これまで十分に研究が行われてきたとはいい難い。しかし，乙訓郡の中心的な位置を占めていたこれらの地域の条里地割のあり方を的確につかむことは，乙訓郡条里の成立と改編を考えるために欠くことのできないものであり，別稿において検討を試みた。

その中から乙訓寺周辺の条里については次のように整理を行うことができる。

1）条（坪）界線は，真東西で，大山崎町及び長岡京市開田から連続する1町＝109mのプランである。これらは乙訓郡東部における条界線のプランとは不整合である。

2）開田・山崎から1町＝109mで復原プランを延長した場合，G－H以北において坪界線が連続しなくなる。建物Aと南門はそれぞれほぼ1町を2分する位置にあり，この距離が120mとされていることや，G－Hが長岡京三条条間小路と一致することに留意して，便宜的に9mの余剰巾を図上に設定して復原図を作成した。（ただし，二千五百分ノ一地図あるいは京都府が昭和45年に作成した千分ノ一地図では余剰幅の存在を明確に認めることはできない）

3）里界線は，乙訓寺の北方では正方位であるが，南方では開田地区において北にむかって東にふれる。この2つの里界線の接点について，地図から読みとることは困難であり，G－Hよりも一本北の坪界線ともみえるが，一応先に述べた点を考慮してG－Hに求め作図した。



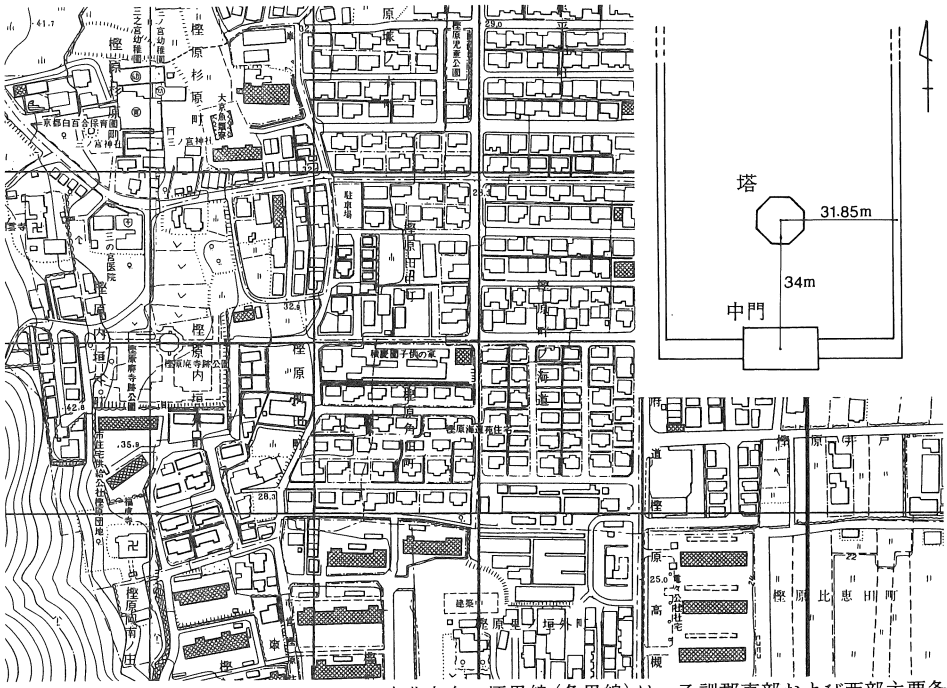
第113図　乙訓寺と周辺条里（1：5,000）

南門とそこから南下する道路は，東偏する里（坪）界線のプランに一致する。建物Aの中軸は残された資料から判断するかぎり，正方位の里界線よりやや西に寄るが，中心の位置を正確に求められない現段階においては，東偏する里界線のプランに位置するとも速断できない。しかし大局的にみれば，乙訓寺の主要伽藍が，条里のプランに規制されており，しかも周辺の西部主要条里と開田今里地区東偏菱形条里の接点となっている様相を認めることができる。

主要伽藍の中軸を条里の坪界線にとる例として，近辺では樫原廃寺の主要伽藍が調査で明らかになっているので，葛野郡条里との関連性を追求することができる。樫原廃寺は京都市西京区樫原内垣外町に位置し，葛野郡条里では三条（里名不詳，植槻里に西接する）の一画を占める。昭和42年に実施された発掘調査(注27)で八角形という特異な形態を有する塔や中門，それにとりつく回廊が検出された。出土瓦よりその創建は７世紀中葉に求められ，九世紀には廃絶したと考えられている。これらの遺構は現在「樫原史跡公園」として整備保存されている。主要伽藍の中心をなす塔の中軸は，周辺に遺存する東西方向の坪界線と一致する。南北方向の坪界線とは一致しないが，別稿で述べたように桂川右岸の連続する大規模条里の中で，京都市西京区桂・京都市南区久世・久我地区において，南北方向の坪界線は全体的に東へ14mずれる１町＝109mのプランであり，そのプランを延長して復原すると塔の中軸と一致する。

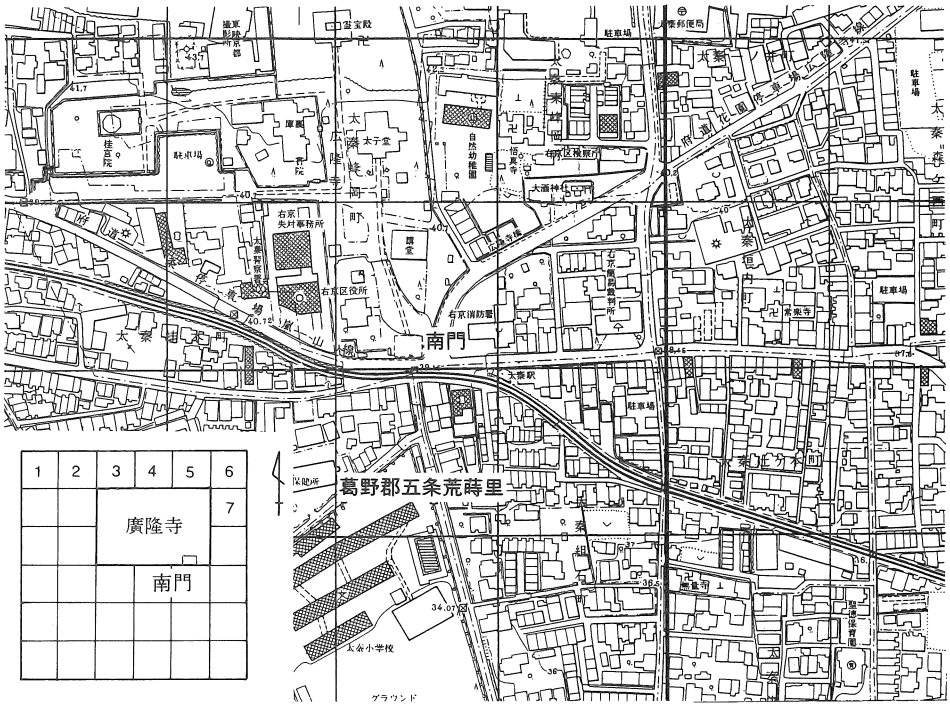
このように樫原廃寺の主要伽藍において中心的な位置を占める塔と，周辺の条里地割との間に相関関係を認めることができるのであるが，主要伽藍の規模は東西64mと条里に規制されているわけではなく，また周辺の条里は東西109m，南北約111mと南北にやや細長い。近年の研究において大和盆地に遺存する１町＝109mの条里地割の成立時期を８世紀以降に求めることが提起されている中にあって，創建時期を７Ｃ中葉に求められる樫原廃寺のこのようなあり方は留意される。

さて築地や柵・土塁等で主要施設を画する乙訓寺の寺域の北辺は，基本的には主要伽藍の北方～北東にかけて走る谷によって画されていたと考えることができる。「今里村乙訓寺惣指図」においても寺域の北辺としてこの谷が描かれている。東辺については，右京53次調査で土塁または築地の基底部と推定される礫敷遺構ＳＸ5301が地形に沿うように検出されている。しかし寺地と寺域が必ずしも一致しない例があり，ＳＫ0736，SD0731で長岡京期の土器とともに奈良時代の特徴を有する遺物も検出されていることから，少なくとも長岡京期における乙訓寺の東辺は西二坊大路であったと考えられる。奈良時代の乙訓寺の規模について知る直接的な手がかりはなく，もとから東辺がＦ－ＤもしくはＦ－Ｅであったのか，長岡京期に東部分が拡張されたのが現時点においては速断できない。しかし，かりに前者と仮定し，また西辺はＡ－ＢもしくはＡ－Ｃと考えれば，乙訓寺の規模は東西３町となり，また西二坊大路は条里の坪界線と一致するのだから，主要伽藍の場合と同じく，条里を媒介として条坊制の中に組み込まれたといえよう。



第114図　橿原廃寺と周辺の条里
（1：5,000）

南北方向の坪界線（条界線）は，乙訓郡東部および西部主要条里のプランを延長して復原した。東西方向の坪界線（里界線）は，月読神社の参道を基点として1町＝111mで復原した。



第115図　広隆寺と周辺の条里
（1：5,000）

南北方向の坪界線（条界線）は，乙訓郡東部および西部主要条里のプランを延長して復原した。東西方向の坪界線（里界線）は，廣隆寺南門前の道路と南方に現存する坪界線を基準として1町＝109mで復原した。

東西3町の規模を有する寺院としては，奈良県「額安寺」や近辺では京都市右京区太泰に所在する「広隆寺」にその例をみることができる。

「額安寺」は，「額安寺班田図」によって八世紀におけるその構造を知ることができる。寺地は東西3町・南北2町の6町を占め，築垣は坪境よりも内側へめぐらせて寺域とし，主要伽藍の中軸は西三分ノ一の坪界線にとる。(注28)

「広隆寺」は「廣隆寺資材交替実録帳」(『平安遺文』No.175）等によって九世紀末の構造を想定することができる。寺地は葛野郡五条荒蒔里八・九・十・十五・十六・十七の6町を占め，築地で囲まれた寺域には，金堂・講法堂・鐘楼・歩廊・中門からなる主要伽藍と，食堂・僧房・客房・宝蔵・蔵・厨屋・炊屋・湯屋等の諸施設が設けられていた。これまで2回の発掘調査が行われているが，主要伽藍等は確認されていない。

このように，乙訓寺の構造は，東西3町の規模を有し，西三分ノ一を主要伽藍の中軸にとるパターンを基本としていると考えられる。この中で最も重要なことは，建物Aおよび現存する南門・東門で画される一画が，奈良末～平安時代初期における乙訓寺の主要伽藍の位置を踏襲していると仮定すれば，乙訓寺の主要伽藍や寺域の規模は，周辺の条里地割とほぼ一致し，しかも条里を媒介として長岡京条坊の中にも位置付けられることである。しかし現段階では，南門と東門の位置が建物Aと同時期の主要伽藍の位置を踏襲しているかどうかについて，実証性を欠き，南門と建物Aの中心の距離が120mともいわれていることは(注29)，400尺という定数値を持つプランであった可能性も想定できるのである(注30)。したがって「西部主要条里」・「開田今里地区東偏菱形条里」を長岡京条坊に先行すると考える明確な根拠を得ることができない。

そこで付近の条里地割のプランや施行時期について，考古学的な成果の中で検証を行っておこう。

周辺の調査で条里またはそれに関する遺構として報告されているものはないが，性格が不明とされている溝の中で，その占める位置が周辺のプランに合致するものがあるのでそれらをあげておきたい。

溝ＳＤ1232は，長岡京西二坊大路東側溝ＳＤ1231Ａ・ＳＤ1231Ｂの上層でそれに沿うように検出され，ＳＢ1234の柱掘方に切られているのでその時期は長岡京廃都後～平安時代中期の間に求められる。幅0.4～0.6m，深さ0.05mの浅いもので遺物はほとんど出土しなかった。八里の西から3番目の坪界線に一致する。

溝ＳＤ2655は今里車塚古墳の北側周溝が埋められたあと掘削されたもので，杭列の外側に自然木が横たえられていた。東端部は今里車塚古墳のくびれ部に沿って南へ折れまがる。すぐ東で実施された右京84次調査ではこの溝の延長部は確認されていない。時期は長岡京時代頃とされているが出土遺物は少なく性格は不明とされている。八条の南から四番目の坪界線のプランに一致する。

ＳＤ11002は三条間小路北側溝の南10ｍをＬ字状に走る溝で，時期不詳の流路とされている。八条の南より三番目の坪界線にほぼ一致する。

これらを条里に関連する遺構とするのはなお検討を要するが，溝ＳＤ1232については遺存する畦畔に沿うように検出されていることからその可能性は高いといえる。さらに溝ＳＤ1232の年代を長岡京廃都後から平安時代中期に求められることは大きな意義を有する。それでは乙訓寺周辺の正方位の里（坪）界線は長岡京廃都後にあらたに設定されたものであろうか。ここで注目されなければならないのは溝ＳＤ1231Ａである。ＳＤ1231ＡはＳＤ1231Ｂよりも古く，ＳＤ1231ＢはＳＤ1231Ａを切って東側に掘りなおされている。どちらも長岡京西二坊大路の東側溝と報告されているが，長岡京時代の遺物はＳＤ1231Ｂより出土したもので，ＳＤ1231Ａの時期を長岡京期とする根拠は薄い(注31)。長岡京期に溝が作り替えられる例は指摘されているものの，この場合にはＳＤ1231Ａを西二坊大路東側溝が検出される以前の条里溝と解釈する余地は残されている。この正方位の里（坪）界線は，乙訓郡条里の条（坪）界線が東部と西部で不整合であったり，東へむかって南へふれる傾向が強いのに対して，乙訓郡の広い地域を貫徹する精度の高いプランである。それだけに開田・今里地区にみられる北にむかって東偏する里（坪）界線のあり方は留意される。

寺院の構造が条里地割に規制されるという側面を持つことは，それらの実証的な研究が条里地割の成立時期を求める有効な方法の一つとなるものである。また乙訓郡条里の成立と改編の過程を追究する中にあって，長岡京条坊の建設と廃棄のプロセスを考古学的に確認していくことは重要な作業であり，乙訓寺とその周辺の調査はこれらの点においても注目される事例を提示しているのである。

「乙訓寺初ハ境方大ニシテ　仏閣備レリ　今東門ノ東ニ彌勒堂　字スル所アリ　是則古伽藍所也」（『山州名跡志』）と記されているように，創建～今日までの変遷の過程については，現在確認できる資料の中においても必ずしも十分に研究が尽くされているとはいい難い。本稿では，乙訓寺の構造は，東西３町の規模を有し，西三分ノ一に主要伽藍の中軸をとるパターンを基本とした時期があったことと，平安時代に「法皇寺」として仁和寺末寺となった可能性をあらためて提起(注32)したが，今後乙訓寺に関する資料類の分析と，綿密な調査の中でさらに検証されることを期待したい。　（百瀬ちどり）

（注１）　この項を書くにあたり立命館大学教授日下雅義氏のご教示をうけ，同氏作成の地質図を掲載させていただいた。この図は，現在の地形について成因・形態・構成物質などに基づいて分類されたものである。なお，この項で記述した「低位段丘」は，第106図において「段丘下位」「緩扇状地」とさらに細かく分類されている。これは，段丘層からなる基盤が，西方の山地・丘陵地から運ばれた新しい堆積物によってカバーされているため，「段丘下位」「緩扇状地」「扇状地」と分類されるのである。また，この図の「段丘低位」は，「段丘下位」面を

さらに切り込んだものとして分類され，小泉川に沿って小規模なものが分布するものをさし，この項で記述している「低位段丘」とは異なる。

2）　都出比呂志「第二章弥生時代」（向日市史編さん委員会『向日市史』上巻昭和58年３月）

3）　奥村清一郎他「長岡京跡右京第27次発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』1980―２昭和55年３月）

4）　高橋美久二・吉岡博之他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』1980―２　昭和55年）

5）　田辺昭三『陶邑古窯趾群Ⅰ』（平安学園考古学クラブ，1966）による編年

6）　田辺昭三・加藤修・上田正昭「古墳と県主」（『京都の歴史』１　平安の新京　1970）。

7）　京都府埋蔵文化財調査研究センター調査員山口博氏のご教示による。

8）　（注３）に同じ。

9）　都出比呂志「第三章　古墳時代」（向日市史編さん委員会『向日市史』上巻　昭和58年３月）

10）　山本輝雄・久保哲正「長岡第九小学校建設にともなう発掘調査概要」（長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第５冊昭和55年３月）

11）　高橋美久二他「長岡京跡右京第70次（７ ANOIR 地区）調査概要」（長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第９冊昭和57年３月）

12）　山口博「長岡京跡右京第83次発掘調査概要」（京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第３冊昭和57年３月）

13）　梅原末治「乙訓寺礎石及古瓦」（京都府『京都府史蹟勝地調査会報告』１，大正８年）

14）　田中重久「山城国の郡名寺院」（史跡美術同攷会『史迹と美術』11―６昭和15年）

15）　高橋美久二「山城国葛野・乙訓両郡の古瓦の様相」（京都教育大学考古学研究会『史想』15　昭和45年）

16）　高橋美久二他「長岡京跡右京26次発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』1980―２昭和55年）

17）　吉本昌弘「長岡京条坊に関する一試論」（長岡京跡発掘調査研究所『長岡京』20昭和56年）

18）　目崎徳衛「宇多上皇の院と国政」（古代学協会『延喜天暦時代の研究』）

19）　奈良国立文化財研究所『仁和寺史料寺誌編』一昭和39年３月

20）　奈良国立文化財研究所『仁和寺史料寺誌編』二昭和42年８月

21）　（注19）に同じ

22）　京都府立総合資料館『研究紀要』５，昭和52年

23）　奈良国立文化財研究所所蔵の「仁和寺寺領関係文書」影写資料を閲覧させていただいた。閲覧にあたっては奈良国立文化財研究所史料調査室室長鬼頭清明氏から御高配をいただいた。記して御礼を申し上げたい。

24) 中井家文書No.262—(1)（京都府立総合資料館『研究紀要』10昭和56年８月）

25) 中尾秀正・山本輝雄・谷本進「長岡京右京第53・54次（７ ANIST—２・３地区）調査概要（長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』９昭和57年）

26) 小林清「乙訓郡の条里と長岡京の条坊（『長岡京の新研究』４昭和44年）

27) 佐藤興治「樫原廃寺発掘調査概要」（京都府教育委員会『京都府埋蔵文化財発掘調査概報』1967）

28) 鈴木嘉吉「寺院—伽藍の構成と配置」（講談社『古代史発掘』９昭和49年）

29) 現地説明会資料では建物Ａと南門の距離は120ｍとなっている。

30) 平川廃寺における寺域の規模は，東西600尺，南北200尺で，西三分ノ一に主要伽藍の中軸をとり，主要伽藍は東西300尺，南北250尺とする復原案が示されている。また平川廃寺と赤塚古墳との関係は，乙訓寺と今里車塚古墳の関係を示唆するものとして留意される。平良泰久「平川廃寺の伽藍計画について」（京都考古刊行会『京都考古』13号昭和50年）

31) 遺物の出土状況については高橋美久二氏から御教示いただいた。また資料をまとめるにあたっても御指導をいただいた。記して御礼を申し上げたい。

32) この他に法皇寺に関する資料として調子文書至徳三年「法皇寺知事本役請文」（『大山崎町史』史料編）がある。

付載—1　今里地区の略史

中山修一

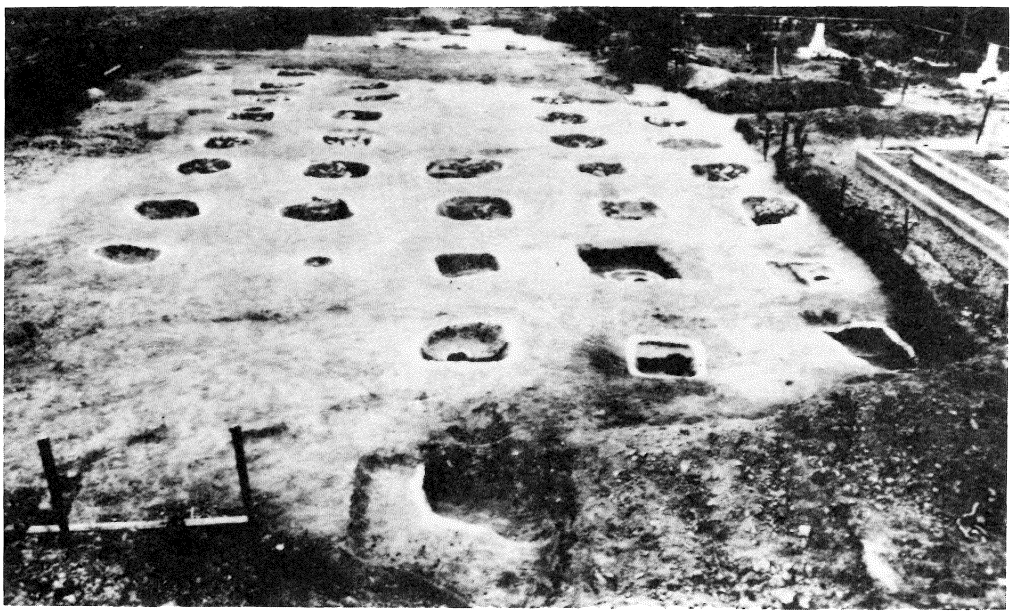
飛鳥～長岡京時代

ある程度伝承の信用できる応神天皇（5世紀）以後に，政治の中心である宮または都が，2度以上さだめられた所は，奈良県の旧磯城郡・高市郡とその周辺，大阪府大阪市と京都府乙訓郡だけである。乙訓郡の中でも旧乙訓村の井ノ内·今里地区だけがその候補地にのぼりうるであろう。ところが518年～526年（継体天皇12年～20年，日本書紀による）にわたって所在したと思われる弟国宮も，8世紀末につくられた長岡京も残された文献史料はきわめて少なく，ただ発掘調査のみがその正しい姿を復元するのに，役立つだけである。

昭和41年（1966）以降の発掘によって，500年代（6世紀）の建築遺構や古墳及び遺物が，少なからず発見されて弟国宮の雰囲気が次第に現実性をおびてきた。また長岡京の姿も道路・建築などの遺構やおびただしい遺物の発見によって次第に明るくなりつつある。

寺伝によれば乙訓寺の創建は7世紀はじめの飛鳥時代であると伝えられている。多量に出土している瓦は白鳳時代（7世紀末～8世紀初め）以前に遡るものはないが，昭和41年長岡第三小学校の建設の事前発掘の際に現われた旧講堂下のおびただしい柱穴をみると，瓦を使わない草庵式の寺があったとしても決して不都合ではない。

乙訓坐火雷神社（おとくにいますほのいかずち）（今の井ノ宮の角宮（すみのみや）はそのあとで，もとは井ノ内の西の小字宮山の竹林中にあったという）の創建の年代はわからないが，恐らく乙訓寺より古くから祭られていたのであ



第116図　　右京第1次調査検出講堂跡

付表9　年表

518～526	継体天皇　弟国に宮をつくる
600頃	乙訓寺創建という
702	乙訓坐火雷神社　祈雨に霊験多し
773	乙訓社に狼・鹿・野狐多し
785	乙訓寺へ早良皇太子を幽閉
811～812	弘法大師乙訓寺別当在任
859	乙訓神社を従4位下に叙す
900頃	長法寺はじまる
1175	法然上人粟生の光明寺に住む
1198	熊谷直実粟生に念仏三昧寺をたてる
1227	今里に西向寺を建てる
1228	法然上人の遺骨を光明寺でダビにふす
1344	海印寺寂照院仁王の体内の文書おさめられる
1469	野田泰忠軍忠状できる
1484	乙訓寺を再興
1493	乙訓寺狛犬を修理
1522	小塩荘帳に井の内村・野村・いまさと・あわうの地名あり
1563	光明寺再興

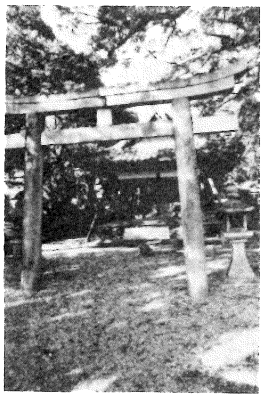
ろう。もともと弟国というのは小盆地という意味で，西山山地と向日町丘陵に囲まれた，大枝から今里に至る地は，昔の人が好んで住んだ地形であり，要害の地であった。のち奈良時代になって弟国は乙訓と字を改めることになる。

昔は郡のことを評と書き，ともに発音は「こうり」と読んだ。それが大宝律令の施行(大宝元年＝701)以後は郡の字に定められた。先年藤原京の発掘現場から「弟国評鞆岡三」と書いた木簡が出土した。これによって弟国という「こうり」が701年よりも前からあったことが明かになった（前には弟国のこうりが葛野のこうりから分れたのは，大宝律令制定の時だと考えられていた)。大宝2年（702）7月4日の条に「山背国乙訓郡にある火雷神(ほのいかずちのかみ)，日照りごとに雨を祈るに，しきりに徴験あり，宜しく大幣及び月次の幣の例に入るべし」（『日本書紀』）という命令が出されている。これも『書紀』に載せられた記事であるが，宝亀5年（774）正月25日の条に「山背(しろ)国申す，去年12月管内乙訓郡乙訓社において，狼及び鹿多く，野狐100ばかり，毎夜吠え鳴き7日にしてすなわち止む」と見え，これは凶兆であるというので，5月には奉幣が行われた。何しろこの火雷神(ほのいかずちのかみ)は下賀茂神社の祭神の夫，上賀茂神社の祭神の父であるので都が山背に移されてからは朝廷においても大変重視された。

延暦3年（784）6月10日天皇は造長岡宮使を発令し，藤原種継を長官とした。そうして大路小路の予定地にくいを打ち綱を張って都造りを始めた。また11月11日に都が奈良の平城京から長岡京へ移ると，天皇の信任のあつい近衛(このえ)中将紀船守を遣わして，賀茂下上の社を従2位に叙すると共に，造宮職の3等官大中臣諸魚(おおなかとみのもろな)を遣わして，葛野(かどの)郡で秦氏の祭る松尾の神と都の中にはいった乙訓の神に従5位下を贈った。当時まだ全国では神階を持つ神は大変少なかった。次いで11月28日には賀茂下上社と松尾・乙訓の二社を修理せしめた。昭和20年の終戦の頃には京都府には，官幣大・中社が多くあったが，当時の乙訓神社は松尾神社（旧官幣大社で今は松尾大社といっている）と同格で，山城一宮の賀茂下上大社に次ぐ社格の高い神社であった。

大路小路の側溝は東西のものは東の方から，南北のものは南の方からと，低い方から高い方に向って掘り進められた。当時のくわやすきと人々の熟練度をもってすれば，普通の固さの土

なら巾５尺（約1.5メートル）深さ2.5尺（約75センチメートル）の溝であると１日に約10尺（３メートル）を掘り進むことができた。これを都全体の道路の側溝の長さで割ると約20数万人の力で掘り終ることができる計算になる。土地をならしたり，上げた土を拡げたりする仕事量を考えても，割合い早い時期に大路小路はでき上ったと推定できる。



第117図　　角宮神社

都は北は北京極から南は九条大路の南京極まであるが，北京極大路は石見上里付近を，二条大路は長岡第二中学校の北側を，三条大路は一文橋の付近を，五条大路は長岡天神の石段から神足駅に向って，六条大路は立石電機の下海印寺の研究所の北の道を東西に通っていた。

南北の道では西一坊大路は神足小学校の体育館の付近を，西二坊大路は，今里の外環状線の南北の部分を，西三坊大路は井ノ内の西から南へ新たに新設または拡張されている市道を通り，西京極大路は今の粟生から長法寺へ南北に通る道のやや東を南北の方向に走っていた。

都は中央を南北に通る朱雀（すじゃく）大路によって左京と右京に分けられていた。天子は北極星にたとえられて北から南面して政治をするので，西の京はまた右京，東の京は左京とも呼ばれた。今井ノ内に西の京の地名があるのは昔のなごりである。上里の南部の住宅地を「右京の里」と呼ぶのは京都市の右京区（今分れて西（にし）京区）にある里という意味でつけられた名であるが偶然長岡京の右京にすっぽりはいっている。

三条大路から北には平安京でも，奈良の平城京でも高位高官の人々の邸宅が造られた。今井ノ内の長岡第十小学校の東北部で発見された建物の柱跡は，現在出土している邸宅の中で１番大きいものである。天皇の内裏や諸官庁を含む長岡宮の外の京域内で，１番大きい建物は乙訓寺であった。乙訓寺の名は延暦４年９月28日に皇弟で皇太子である早良（さわら）親王を，造宮使長官藤原種継暗殺の黒幕として，幽閉した場所としてはじめて現われる。昭和41年の発掘によって世に知られた講堂は，難波宮の内裏正殿と同じ大きさで，東西９間南北５間の礎石のある建物で柱間はいずれも10尺（３メートル）であった。その他の所でも井ノ内や今里の区域内から一般の邸宅や民家の跡もたくさん発掘されている。

平安時代

長岡京は都を襲った大洪水の被害が大変大きかったこと，急いで実用本位に建てられた建物の建て直しの面倒さ，早良皇太子の怨霊の恐怖などのために，わずか10年余りで平安京へ移されてしまった。廃都後も，長岡京に残る人は若干はあったけれども，大部分の建物は壊されて新京に移され東西市（いち）の人々なども早目に平安京へ去ってしまった。乙訓寺も荒れがひどかった。

弘仁２年（811）10月に乙訓寺別当に補せられた空海（のちの弘法大師）は翌年の10月までこ

の地にあって，寺の再興と真言の教義の研究に時を過した。彼がこの寺を辞そうとする少し前の９月27日，頭陀(ずだ)の途中に最澄（のちの伝教大師）がこの寺に寄り，１泊して密教について語りあった。渡唐したとはいっても，揚子江の北へも渡らず短期の滞在で帰朝した最澄は，長安まで行って高僧から深い教えを受けてきた空海に対して，年長ながら，色々と教えを乞うた。10月29日空海は高尾山寺に移り，永住を決心した。その直後最澄は再び高弟を連れて，高尾山寺に空海を訪ねまた教えを乞うた。その後両高僧の間に経義の解釈の違いや，弟子泰範が最澄の許を去って空海の方へ走ったことなどが，原因となって両者の間は円満を欠くようになる。歴史に名を残す高僧のうちで最も名高い最澄・空海が，円満に交際していたのは空海の乙訓寺時代とその前後合せて数年のことであった。恐らく最澄・空海が共に語ったと思われる講堂や僧坊の跡が発掘されている。

弘仁10年（819）空海の弟子筋にあたる道雄は海印寺を建てた。またそれぞれの寺伝によれば，馬場の卒台寺は延暦21年（802）に，勝竜寺の前身青竜寺は延暦23年に，楊谷寺（柳谷観音）も大同元年（806）に建立されたと伝えられている。その中で海印寺は山城国中でも最も多くの定額稲を施入される寺となり，七家八宗の業道を習学した。

その後乙訓神社は神階も進んで貞観元年（859）従４位下まで昇叙されたが，その後平安京内へはいった神社や，梅宮・松尾神社の興隆するのに引き替え，乙訓神社も乙訓寺も花々しい正史からは，次第に姿を消し，一地方の社寺に成り下ることになる。

900年代（10世紀）のはじめ，園城寺（三井寺）で修行したと伝える千観は諸国修業の途次，のちの長法寺の地に立ちより夢告によって一堂を建て，さらに祈雨の霊験によって造営を加えたという。この寺には平安時代の仏画として大変有名な釈迦金棺出現図（国宝）を蔵していたが，敗戦後の不安定な時代に安い値段で手放してしまった。この寺は長岡京の三条通りの延長の山の麓にあり，この仏画を持っていたことによって，立派な寺であったことがわかる。

また927年に完成された延喜式の神名帳や，ほぼ同じ頃に作られたという倭名抄の郷名などをみると，平安京の周囲にある愛宕(おたぎ)郡，葛野郡や紀伊郡を差しおいて，乙訓郡が常に600郡近い諸郡のトップに書かれている。これは当時乙訓郡に山城国府が置かれていたということよりも前の都長岡京の跡がある郡という意味で一番首位に置かれるようになったようである。

永承７年（1052）を以て世は末法にはいると言われていた。「末法の世になると，四方に戦乱は起り，天災・飢饉は続き，骨肉は相争うことになる」と仏教では教えていた。そこで人人は何とかして，この災いから逃れたいものだと救い主を求めた。その願いに答えて，「殺生をする武士や猟師も，安く買った商品に口銭をとってもうける商人も，文字を知らず経文を読むことも知らない無学文盲の人も，ただ一心に南無阿弥陀仏と称えれば極楽浄土に生れ変ることができる」という易行道(いぎょうどう)を説いたのが源空（法然上人）であった。

鎌倉・室町時代

源空が最初にその教えを説いたのが今の光明寺付近の広谷においてであるという。一の谷合戦で勇名は挙げたが，長子を負傷させ，また子息と同年の平敦盛を斬って人生の無常を感じていた熊谷次郎直実は，鎌倉で領地争いの訴訟に敗れて，ついに出家し法然の弟子となった。法然の勧めもあり，一の谷合戦で知り合った高橋茂右衛門をたよって今の光明寺の地に来り，草庵をつくり念仏三昧にふけったという。のちこの地で法然上人の遺骨を荼毘に付した。直実がこの地に住みついたのは鎌倉開府（1192年）ののち6年の建久9年（1198）だと伝えられている。

法然の遺骨を荼毘に付す1年前の安貞元年（1227）に，建てられたのが今里の乙訓寺の南にある西向寺で，乙訓寺に比べると大変新しいが，浄土宗の寺としては古い寺である。

元弘元年（1331）鎌倉幕府を滅ぼそうとした企てが未然に漏れ，世はまた戦国に入った。その後朝廷は南北に分れ，乙訓郡は北朝方の第1線となり，南朝方の河内の楠木氏などと争うこととなる。北朝の年号の康永3年（南朝年号興国5年1344）に海印寺の塔頭寂照院の仁王が作られた。そのための募金に応じた人の交名が，仁王の足の中からでてきた。それには今里・野村・井内の人々の名がでている。野村というのは今の赤根の天神のすぐ西にあった村で，今里には源・藤原・紀氏を名乗る人があり，野村と井内には，林・辻・橘・近藤などの名を名乗る人がある。林・辻という家が大変古いことがわかる。今里の源頼泰は能勢氏の，源政賢は井内の石田氏の先祖ではなかろうか。

次に郷土の人々の活躍が記録に残るのは，応仁文明の乱の時である。郡内の村々ではある部落は東軍（将軍方）・西軍（弟の義視方）に分れて戦った。乙訓郡では上久世・石見上里・井内・馬場・開田・古市・勝竜寺・海印寺が西軍に属し，上植野・山崎・今里・寺戸・物集女・鶏冠井などが東軍に味方して争った。上久世の1部の人は東軍側に立って争っている。この頃になると今里の能勢・井内の石田の名がすでに表面にでてくる。この乱で乙訓郡内が多く焼かれた。

文明16年（1484）乙訓寺が早くも再興されはじめた。明応2年（1493）乙訓寺の狛犬の修理の書き入れがあるのを見ると徐々に復興が進められていったことが考えられる。

大永2年（1522）の小塩荘帳には，井の内村やいまさと・野村・あわう（粟生）の名が見えている。いまさとの小字にかめい・にしてらのまへ・三のつほ・とうゆ・石かまち，井の内村の小字に大ふちがある。

いまさとの人名に，のせひこ五郎・や四郎・まこ四郎・や九郎（九郎三郎の子）のせのひこ二郎・のせの三郎左衛門があり，井の内村の人名に，や二郎（かわむらたうゆうの子）野村の人名に蔵三郎がある。

江戸時代以後のことは，今里・井内・粟生・長法寺の各村々の旧家や社寺に伝わる多くの文書があるが、いちいち取上げると繁多になるのでこれを略しておく。

付載－２　乙訓郡条里についての一考察

－乙訓郡西部の条里をめぐって－

１．はじめに

１．本報告は，乙訓郡条里復原図の作成に関する概要報告である。このうち本冊では主に乙訓郡西部の条里について行った検討結果を中心に収録した。

２．長岡京の条坊名は山中章他「第126図長岡京条坊図」（向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第８集昭和57年）にしたがった。また長岡京の条坊復原は，１尺＝29.6cmで東西道路は大極殿心を，南北道路は小安殿心を基準として平城京型で割りつけた復原案にしたがった（京都府向日市『向日市史』上巻　昭和58年）。

３．本報告の執筆にあたっては，高橋美久二氏（京都府立山城郷土資料館資料課長）・吉本昌弘氏（立命館大学文学部大学院生）から御指導と御教示をいただいた。また「開田古図」の閲覧については西小路展弘氏及び長岡京市教育委員会から，「鶏冠井古図」「寺戸古図」の資料については向日市教育委員会から御協力をいただいた。記して感謝したい。

４．本報告の執筆・編集は中山修一所長，藤田さかえ氏の協力のもとに，百瀬ちどりが行った。図面のトレースについては，西村益子・丸山美子・西川裕子の各氏に御協力いただいた。

２．作業の目的と方法

乙訓地方では，近年の長岡京を中心とする発掘調査によって，条里遺構の検出例が漸次追加されている。また条里遺構そのものに限らず，各時代の水田跡・集落跡・寺院・国府・流路等の遺構が検出されることにより，それぞれの地域で具体的に条里地割の成立や改編の過程を検討する作業が可能になりつつある。しかしそれらの調査結果を集約し，有効に活用していくためには，現存する条里地割とそのプランの正確な把握がまずもって必要である。

長岡京跡発掘調査研究所では，このような情勢に対処するため，乙訓・紀伊・葛野郡を中心とする条里資料の収集，および条里地割の計測作業と復原図の作成を行った。乙訓地方でも道路・学校・工場・住宅等の建設によって条里地割は漸次消失している。特に長岡京市では，昭和47年より大字・小字を廃止する地番変更が進められていて，条里資料の消失は著しいものがある。このような状況に対して必要な資料を収集し，今後活用を図るべき状況を整備しておくこと，そして大縮尺の地図で条里地割を抽出し，それに基づいた条里プランの復原を行っておくことは，発掘調査で得られた成果を検討していくために急務な作業である。

以下作業の方法を記す。

①　京都市都市計画局発行の二千五百分ノ一地図を使用して条里地割の抽出を行う。これらを

大正11年測図京都市土木局都市計画課の三千分ノ一地図で確認する。

② それら抽出した条里地割の全体的なプランを検討し，復原図を作成する。長い距離を測るのに便利であること，発掘調査で得られた結果と検証するのに便利なことから，地図に記されている国土座標の数値を活用し復原プランを示した。二千五百分ノ一地図に記載されている国土座標値を使用して復原を行う方法には，地図の精度の問題，あるいは計測のさいの誤差が含まれる。したがって本稿に記載した数値も絶対性においては限界を有するものであり，調査で検出された遺構や周辺の地割の測量によって検証されることを希望する。

③ 条里に関連する地名・文献史料・古図等で復原図の検証を行う。

本冊の報告で中心となった今里地区を含む乙訓郡西部には，東部に広がる大規模条里に不整合な条里地割がブロック状に散在している。また条里に関連する地名や文献史料も乏しいため，これまで十分な検討が行われてきたとはいい難い。この地域は前節で述べられているとおり，古墳～奈良時代を通して乙訓郡において中心的な政治的位置を占めていて，乙訓郡西部の条里のあり方を的確に把握することは，乙訓郡条里の成立とその歴史的性格を考察するために重要な課題の一つである。本稿では特に乙訓郡西部に現存する条里地割の状況を把握し，問題点の整理を行いたい。

3．乙訓郡条里をめぐる研究動向

乙訓郡における桂川右岸一帯は，山城盆地の中でも条里地割，あるいは条里地名が良好に遺存しており，葛野・紀伊両郡と合わせて古くより研究が進められてきた(注1)。

吉田敬市氏は，地名・地割・文献史料の全体的な検討の中で，乙訓郡条里の全貌を明らかにされた(注2)。この中で坪並は西南隅からはじまり東南隅でおわる千鳥式であること，条は山崎の離宮八幡宮付近を起点として，東部では北へ13条すすんで葛野郡と接し，向日丘陵をはさんで西部では北へ15条以上すすむことを提起された。その見解の妥当性は今日までうけつがれている。また吉田氏が困難とされた里名の比定については，『久我家文書』に収められている絵図と現地比定の報告が，東大資料編纂所によって発表されて，乙訓郡東北部における里名とその位置関係が明らかになり(注3)，乙訓郡の条里制研究を大きく推し進めた。

その後中山修一氏は，条里地名の収集と里名比定の追加を行い(注4)，小林清氏はこれらの研究成果をふまえて，東西14里（吉田氏復原では東西12里）・南北15条の条里復原図を発表された(注5)。小林清氏の研究の中で最も注目すべきことは，乙訓郡の条里プランが地形条件によって異なることに着目され，西部の今里地区を中心に現存する条里地割は，長岡京廃都後に施行された新条里であること，乙訓郡東部に広がる大規模条里は，長岡京廃都後もとのプランを踏襲して復原されたものだと主張されたことである。そして吉本昌弘氏はさらに乙訓郡条里のプランを主要条里とその他５つのブロックに区分し(注6)，乙訓郡東部の大規模条里は平安京建設の中で葛野郡も

含めて改編されたものであり，それと不整合な乙訓郡西部の条里は，東部の条里に先行するものであるとされた。

このように乙訓郡の条里については，その施行年代・施行方法等について不明確な点が多く，いまだ一定の共通した見解は得られていない。特に乙訓郡条里の考察にあたっては長岡京条坊の施行と廃棄の問題が大きな位置を占めており，長岡京条坊の研究の進展は乙訓郡の条里制の研究に大きな影響を及ぼしてきた。今日では少なくとも長岡京域内に現存する条里地割は，長岡京廃都後に遷都以前のプランを踏襲するか，もしくは新たに設定されたプランのもとに，条坊から条里へ転換されたものと考えられており，この転換のされ方や改編の行われた範囲をめぐって意見が分かれているのである。転換された時期についても，弘仁九年（818）年以降とする見解と(注7)，長岡京廃都直後を考える見解がある(注8)。この他に長岡宮の地割方式に条里制一町を単位とした地割が多用されているという研究もある(注9)。もちろん長岡京との関連性を探るという方法が，乙訓郡条里の歴史的な性格を考察するうえで最も有効であるということはいうまでもない。しかし条里制研究固有の立場からみればそれは一つの側面であり，乙訓郡条里の成立，条里呼称法の整備，そして現在にいたるまでの実態と変容の過程を追求するための基礎的な作業が，他の諸分野の研究水準と照らし合わせて不十分であることは否めない。

現在条里制の研究は大きな転機をむかえている。歴史地理学の分野では，航空写真と大縮尺の地図の整備によって条里地割の細かな計測作業が行われるようになり，これまでの小縮尺の地図による条里復原の再検討が求められている。また各地で条里遺構の検出例が漸次増加しており，条里地割の施行年代や現存地割との関連について考古学的な検証が可能になっている。条里地割の重層性，あるいは段階的施行に対して，各地域における個別研究の深化が求められているのである(注10)。乙訓郡条里と長岡京条坊との関連性をめぐって論議の高まる中で，乙訓郡条里そのものの問題点を山城盆地の全体的な見地から明確にし，基礎資料の集約と研究を深めることが肝要であると考える。

4　乙訓郡条里の概要

条里地割の分布と形態

乙訓郡は山城盆地の西南部に位置し，西北は老ノ坂・西南は天王山・西は西山山地・東および東南は桂川と淀川によって画される。乙訓郡は西北から舌状にのびる向日丘陵を中心として大きく東部と西部に分けることができる。東部は桂川の氾濫原と後背湿地からなり，その中を小河川が乱流していた。西部は西山山地から流れ出す小畑川・善峰川・犬川・小泉川等によって形成された河岸段丘や谷底平野・扇状地が入り組み複雑な地形となっている。このような地形条件の相違はそのまま条里地割の遺存状況に反映されている。つまり乙訓郡東部――桂川右岸一帯は，地割系統の連続する正方位条里地割が良好に遺存しているのに対し，乙訓郡西部で

は，北から京都市西京区大原野灰方・上里・石見地区，長岡京市今里・開田地区と井ノ内地区の一部，乙訓郡大山崎町円明寺・大山崎地区においてブロック状に条里地割を確認できるのみである。また遺存状況が異なるだけでなく，東部は正方位のほぼ単一企画に基づく精巧なプランであると考えられるのに対し，西部においては方向が異なっていたり，一町の形態が菱形を呈する条里地割が分布する。このように乙訓郡の条里において最も大きな特徴は，東部と西部で条里地割の遺存状況やプランのあり方に相違が認められることである。

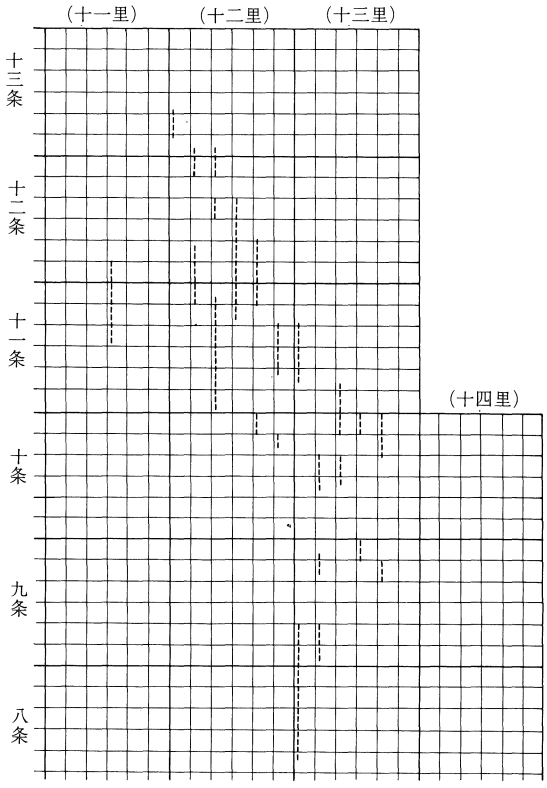
本稿では，乙訓郡東部に現存している正方位の条里地割を「東部主要条里」とし，西部に現存している正方位の条里地割を「西部主要条里」として考察(注11)をすすめたい。この他に長岡京市開田・今里地区に現存し，里（坪）界線が約Ｎ１°38′Ｅのふれを持つ条里地割を「開田・今里地区東偏菱形条里」と設定した。乙訓郡に現存する条里地割は，大きくこの３つに区分することができる。これらの条里プランはそれぞれが全く別個のプランとしてあるのではなく，条界線，あるいは里界線のどちらか一方のプランを共有する点で相互に関連性を有している。つまり東部主要条里と西部主要条里は条界線は不整合であるが里界線のプランを共有し，また乙訓郡西部における「西部主要条里」と「開田・今里地区東偏菱形条里」は，里界線は不整合であるが条界線のプランは連続するとみなすことができる。

東部主要条里と西部主要条里の条界線のプランは十三条付近で一致するものの，南へいくにしたがってずれてくる。向日丘陵以南の小畑川東岸では，これら不整合な条（坪）界線を結ぶように，条（坪）界線が東へむかって南にふれている様相を認めることができる。しかし現段階ではこれらの地割のあり方や分布の範囲の検討だけで，計画的に施行されたものかどうかについて判断を下すに至らず，条里復原図では便宜的に九里と十里の里界線で，東部と西部の条（坪）界線の不整合を示した。

乙訓郡に現存する条里プランは大きく上記の３つに区分することができるが，部分的にこれらのプランに不整合な条里地割がまとまって分布している地域がある。先に述べた向日丘陵以南の小畑川沿岸にみられる条里地割もその一つであるが，この他一定の傾向を把握できるものには次のようなものがある。

京都市南区久我・久世地区は東部主要条里が良好に遺存しており，久我家文書や東寺文書等による文献史料も豊富で，乙訓郡において条里制の実態を最もよく知ることのできる地域である。ところがこの地区の条里地割のうち，里（坪）界線は東部主要条里のプランよりも全体的に東へずれる傾向を認めることができる。そこであらためて里界線のプランについて検討を行った結果，これら久我・久世地区に現存する条里地割のうち里（坪）界線は，東部主要条里の里界線のプランより東へ14mずれながらも１町＝109mの正確なプランであること，京都市西京区川嶋地区では東部主要条里の里界線のプランに合致する地割と，それよりも東へ14mずれるプランに合致する地割が混在していることがわかった。久我・久世地区の西方および南方にあ

たる向日市鶏冠井町・上植野町，京都市伏見区羽束師などではこのような傾向は認められない。この東部主要条里の里界線より全体的に東へ14mずれるプランは，延長すると葛野郡三条の西界線（葛野郡においては南北方向のラインは条界線となる）とされている広沢池西岸に(注12)一致し，京都市西京区桂地区において確認できるように，葛野郡の条（坪）界線のプランと考えられるものである。このことから久我・久世地区に顕著にみられる里（坪）界線のずれが，小規模な開発や自然的な変容によるものでないことが判断できる。わずか14mのプランのずれに大きな意味を持たせるのは危険であるかもしれないが，葛野・乙訓両郡にまたがる条里地割の重層性については大いに検討の余地があると考える。



第119図　京都市南区久世・久我地区の里（坪）界線分布状況

また乙訓郡西部においてはすでに指摘されているように，京都市西京区大原野灰方地区と石見地区に，それぞれ異方向の条里地割が分布する（第123図）。灰方地区の条（坪）界線の方向はW 7°4′Sで，里界線もそれに対応して北にむかって東にふれているようであるが明らかではない。石見地区の条（坪）界線の方向は六里と七里ではE 2°15′S，八里ではE 5°20′Sである。里（坪）界線は西部主要条里の里界線のプランと正確に一致するが六里と七里の里界線以西は18m西にずれる。(注13)

乙訓郡に現存する条里地割のあり方は，これまで述べてきたように複雑で，地割は概念図に図示した他に条界線は東にむかって南に，里界線は北にむかって東にふれる傾向が認められる。しかし東部主要条里・西部主要条里は，基本的に二千五百分ノ一地図における座標値の方眼上において正方位であるとみなすことができる。プランを全体的にみれば里（坪）界線は，「開田・今里地区東偏菱形条里」を除いて，精巧な正方位をとっているのに対して，条（坪）界線が，東にむかって南にふれる傾向が強いといえる。

条里地割の計測作業にあたって最も苦慮するところは，現存する条里地割のあり方をできるだけ客観的に把握することである。それぞれ個々の条里地割は諸々の自然的・あるいは人為的な要因の中でくり返し施行され直し，その過程の中で何らかの変容をうけている可能性はいつ

も頭においておかねばならない。現存する条里地割が設定当初の原位置を保っているかどうかについては，あらゆる資料の中で検討されることが必要で，特に近年においては考古学的な検証が大いに求められているところである。しかし広い歴史的な空間の中で現存する条里地割の相互の位置関係を的確に把握することは，それらの地割の歴史的性格を追求する第一歩であり，本稿では多くの問題点を含みながらも基本的には乙訓郡域に現存する条里地割の分布と形態を以上のように整理し，検討をすすめていきたい。

1町の長さと「余剰帯」の問題

乙訓郡条里の1町の長さは，基本的には1町＝109mのプランとして把握することができ，今回の計測作業においても，里（坪）界線のプランと，「西部主要条里」・「開田・今里地区東偏菱形条里」の条（坪）界線のプランはほぼ1町＝109mであることを確認することができた。

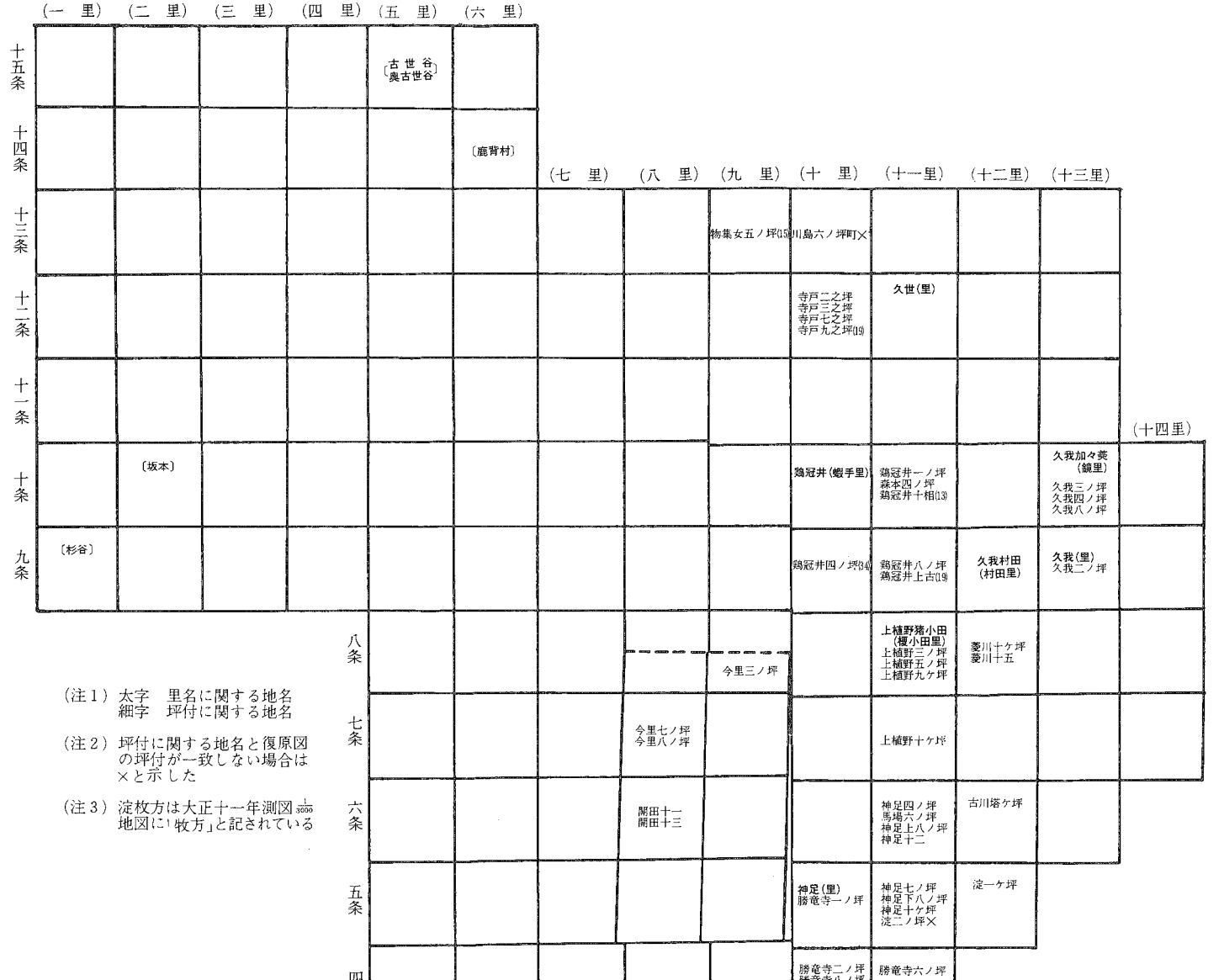
東部主要条里の条（坪）界線を1町＝109mで復原した場合に，何ヶ所か余剰帯を設定しなければならないことはすでに前稿で述べた(注14)。乙訓郡条里における余剰帯の問題をはじめて提起されたのは吉本昌弘氏で，長岡京北京極との関連性の中で指摘し，注目されている(注15)。ところが今回葛野郡条里を検討する中で，葛野郡月読神社参道を起点として条(坪)界線のプランを1町＝110～111mで復原しなおすと，余剰帯を設定することなく桂川右岸一帯の現存条里地割を復原できることが判明した。しかし里（坪界線）のプランは1町＝110～111mとはならない。したがって1町の形態は南北にやや長い長方形となる。今回の作業で行った方法では，余剰帯の有無や，1町の長さをこれ以上追究することができず，より精度の高い計測作業や，条里地割の施行技術に対する研究の進展の中で，さらに検証される必要のあることを提起しておくにとどめたい。

付表10　乙訓郡条里関係資料〈絵図・古図〉

	絵図・古図名	成立年代	出　典	所　蔵	参考文献
1	山城国乙訓郡条里指図写（サシツ次第）	不詳（室町時代）	久我家文書(二)	国学院大学図書館	○東大史料編纂所「山城国葛野乙訓両郡条里補考」（『史林』32－2） ○西岡虎之助編『日本荘園絵図集成』（上）
2	白井承仕給指図	不詳	久我家文書(一)№358 №360	国学院大学図書館	○西岡虎之助編『日本荘園絵図集成』（上）
3	乙訓郡条里坪付写	不詳（室町時代以降）	九条家文書五№1592	宮内庁書陵部	○中山修一「室町時代の地名図の発見」（『乙訓文化』31） ○西岡虎之助編『日本荘園絵図集成』（　）
4	革嶋南庄指図	嘉暦元年二月（ママ）	革嶋家文書(二)№200（資料館紀要6）	京都府立総合資料館	○東大史料編纂所「山城国葛野乙訓両郡条里補考」（『史林』32－2） ○宝月圭吾・杉山博・永原慶二・稲垣泰彦「中世土豪の土地所有形態に関する一資料―嘉暦二年近衛家領革嶋南庄図について―」（『歴史学研究』138）
5	鶏冠井村古図	明治6年二月		鶏冠井公民館	○中山修一「向日町大字単位の古図」(一)（『乙訓文化遺産』5）
6	寺戸村古図	（明治6年ヵ）		岡崎享氏	○中山修一「向日町大字単位の古図」(二)（『乙訓文化遺産』7）
7	上植野村古図	明治6年九月			
8	開田村古図	（明治6年ヵ）		西小路展弘氏	○古文書研究会「開田村の古図」（『乙訓文化遺産』6）

条里の呼称法に関連する地名

乙訓郡の条里地名はすでに吉田敬市氏，中山修一氏，小林清氏によって言及されているが，今回復原した条里プランを検証するために，あらためて条里地名の整理を行った。付表11は大正11年測図三千分ノ一地図から条里に関する大字・小字名を抽



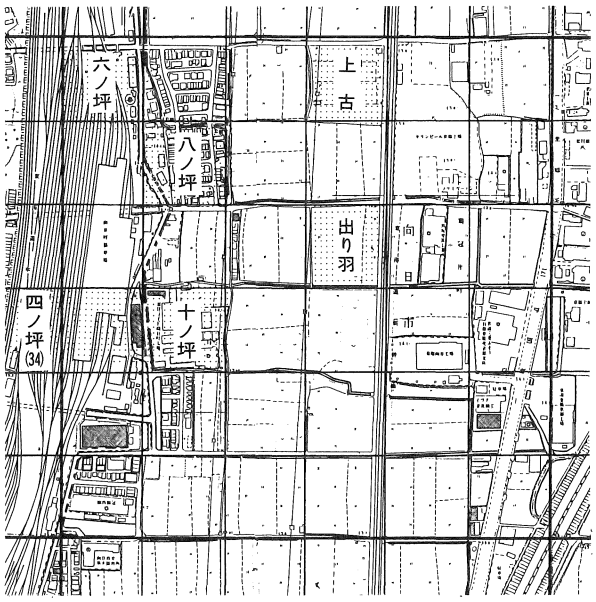
(注1) 太字　里名に関する地名
細字　坪付に関する地名

(注2) 坪付に関する地名と復原図の坪付が一致しない場合は×と示した

(注3) 淀枚方は大正十一年測図 1/3600 地図に「牧方」と記されている

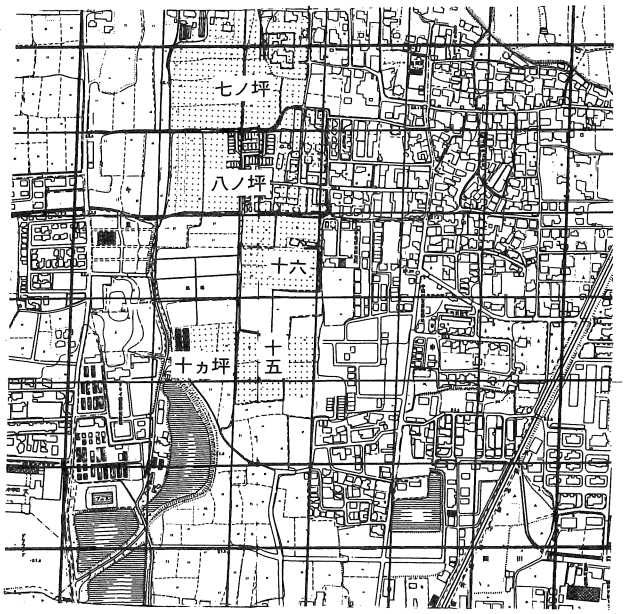
出したものである。この地図に記されている小字名は，明治10年前後に小字の統廃合が行われた後のものであり[注16]，小字は２～５町の単位となっていて，２～４里にまたがっている場合もあるが，妥当と考えられる里の位置に記した。また，三千分ノ一地図の記載範囲に含まれない乙訓郡西北部については，これまで条里地名として紹介されているもの[注17]を〔　〕で記した。

里名に関するものについては，大字として「久世」「久我」「鶏冠井（蝦手里）」「神足」を，小字として「加々美（鏡里）」「村田」「猪小田（榎小田里）」「枚方（平方里）」「古世谷・奥古世谷・鹿背村（巨勢里・巨勢本里）」が抽出できる。坪付については「一ノ坪」～「十ヵ坪」まで点在しており，十八ノ坪が「八ノ坪」十九ノ坪が「九ノ坪」，「三十四ノ坪」が「四ノ坪」と，また，十一ノ坪が「十一」，十三ノ坪が「十三」，十五ノ坪が「十五」と省略されて現存している。この他に十ヵ坪が「斗加坪」，十三ノ坪が「十相」[注18]，十九ノ坪が「上古」[注19]，として遺存している場合もある[注20]。



第120図　(1)小字統廃合以前の条里地名の残存状況（九条弓絃羽里）

この他に，小字統廃合以前の状況を知るために，付表10に掲げた絵図・古図を参考として検討を行った。第120図(1)は「鶏冠井村古図」[注21]から九条弓絃羽（ツルハ）里における条里に関する小字名を抽出したものである。三千分ノ一地図から抽出できる「八ノ坪」「上古」の他に，里名が遺存したとみられる「出り羽（いずは）」，や「六ノ坪」「十ノ坪」などが１町ごとに記載されている。また第120図(2)は，「開田村古図」[注22]から七条（八里）における条里に関する小字名を抽出したものである。三千分ノ一から抽出できる七ノ坪・八ノ坪の他に，「十ヵ坪」「十五」「十六」の小字名が記されている。



第120図　(2)小字統廃合以前の条里地名の残存状況（七条八里）

鶏冠井村古図と異なり１町ごとに１つの小字名が記されているわけではないが，小字名の範囲と付近に現存する条里地割から復原したプランを照合することによって，これまで明確にされなかった乙訓郡西部条里の条界線・里界線を確認することができた。坪並みは，すでに指摘されているように(注23)，東部主要条里と同じ西南隅からはじまり東南隅でおわる千鳥式であり，東部主要条里と連続することが確認できる。五条（八里）には「十八」という小字名もあり，これらは九条（九里）の「三ノ坪」も含めて，連続した坪付である。このことは，従来，開田地区と今里地区の条里の成立過程が別個のものとして考えられてきたのに対し，今回行った条里地割の計測結果とともに，これらを一連の同一プランとみなす一つの根拠となるものである。今里地区における小字統廃合以前の小字名については，小川貫一家に所蔵されている江戸～明治の古文書によって，さらに知ることができ，その中の一つ「禁裏御料山城国乙訓郡今里村耕地巨細仕訳絵図」には，「二ノ坪」が記されている。

また，壬生文書に収められている建保４年（1216）「主殿寮要劇田坪付注進状」に「五條神足里」と記されていて，この里は従来五条（九里）にあたる位置に比定されていた(注24)。ところが九条家文書に収められている「乙訓郡条里坪付写」には，五条神足里・五条（十一里）・五条津田里・七条（十里）・七条（十一里）・七条水将里の６里にわたって，１町ごとに字名が記されており，この絵図の五条（十里）にあたる四坪には「神たり」，五坪には「こうたにしろ」と記されているため，今回の復原図においては（十里）にあたる位置を「神足里(注25)」とした。また五条（十里）・六条（十里）の西辺１町分は小畑川を越えて段丘上に位置するが，さきの開田地区における坪付の検討結果と合わせて，乙訓郡の東部と西部の坪付が連続することを，この絵図からも確認することができる。

この他小字統廃合以前の状況については，上島有氏によって上久世庄の庄域および庄内の耕地の存在形態を考察するために現地の聞き取り調査が行われ，その結果が報告されている(注26)。それによれば，通称の地名として，宗広里三十坪にあたる部分に「三十」が，仮称上久世里一坪・十四坪・十五坪にあたる部分に「井ノ坪」「四ノ坪」「五ノ坪」が残存している(注27)。しかもこれらの字名は元享４年（1324）の目安帳に記載されており(注28)，また至徳４年（1387）「僧中璩山城久世荘内哀勝庵名主識請文(注29)」にも田地の所在が「字卅里坪」「字井坪」と記されていて，中世～近世にかけて使用されていたことを確認できる。

以上のように乙訓郡東部は条里の呼称法に関連する地名が良好に遺存しており，久我家文書の「サシツ次第」に記載されている里名の検証や坪付の把握を容易に行うことができる。乙訓郡西部では東部にくらべて遺存状況は良くないが，小字統廃合前の状況を記している資料を合わせて検討すると，東部と同じ坪付が行われており，しかも東部の坪付と連続することを確認できる。全体的にみれば条里地割の分布形態が複雑であるにもかかわらず，その呼称法は乙訓郡全域に統一的に付加され，長岡京内と京外で坪付に変化が認められないことから，長岡京

廃都後に条坊制から条里制へ転換された時点でも，それがそのまま継承されたと考えることができよう。

文献史料

付表12は，管見を得た乙訓郡条里に関する文献史料から里名を抽出したものである。文献史料でみられる乙訓郡の里名はすべて固有名詞であり，数詞の冠せられている例は一例も検出できない。このことは山城盆地全体の傾向としてみることができ，周辺の近江・大和・摂津等と異なった様相を呈している。今回の条里復原にあたっては，里名の明らかでない里の位置を示すのに不便なため，一般にいわれている坪並のすすむ方向——乙訓郡の場合は西から東——で便宜的にNo.を付した。里の規模については中山修一・小林清両氏の東西14里とする見解にしたがった。しかし両氏の比定にしたがって「榲谷里」を九条一里とした場合，その西に位置すると考えられる『榲谷西里』のとりあつかいに問題が生じる。また摂津のように里の起点が条によって異なる場合もあり，その実態は明らかではない。

里名に条が冠せられているのは「四条川合里」「五条神足里」「七条苗生里」「七条石域（城）道里」「八条榎小田里」「九条弓絃羽里」「拾壹条楢本里」の7例である。その他には郷名の冠せられているものとして「土師郷下村里」「大江郷巨勢本里」の2例，村名が冠せられているものとして「羽束師下村川合里」「下久世村内久世里・河依里」の2例，字名が冠せられているものとして「字長畠ツキカ本」「字越来唐津加里」の2例等がある。また里名が字名として「字久世里」と記されている例もある。

表に掲げた他に，明應4年（1495）「久我庄名田・散田等帳幷文書案」（『久我家文書』No.438）[注30]に，未次名の田地として「高椋里」五坪四段半と十五坪大卅六歩が記されているが，応永3年（1396）「久我荘検注帳案」に未次名として「高橋里」に同じ田数が記されているので「高椋里」は「高橋里」の誤記と判断した。また「衾手里」と「倉手里」，「牛甘里」と「牛耳里」は同じ里と考えられる。

ところで天平13年「山背国司移」（『寧樂遺文』）には，奴婢が山城諸国の賤主より大養徳國添上郡志茂郷の戸主少初位上大宅賀麻呂の戸に編附せられた記事があり，その中に「乙訓郡山埼里戸主間人造東人」の戸口である奴が記されている。さらに天平勝寶元年の大宅可是麻呂によって奴婢あわせて61人が東大寺に貢進せられたが（「大宅可是麻呂解」『寧樂遺文』），この中に「山背国乙訓郡山埼里戸主間人造東人」戸口の六人と，「山城国羽束里戸主長罡坂本国麻呂」戸口の奴一人が記されている。これらの史料に記されている里名を条里名と考える見解[注31]もあるが，本稿では，天平11年から天平12年にかけて郷里制の廃止されたあと，しばらく里と郷の混用された時期があるという見解[注32]にしたがって条里名として表に掲げなかった。

条里呼称法の導入された時期は，8世紀中頃と考えられているが[注33]，乙訓郡における初見史料は，貞観4年（862）の太政官符案（『平安遺文』No.134）であり，奈良時代および平安初期の実

付表12　乙訓郡条里名一覧表

	里　名	比定			主な文献史料
		久我家文書サシツ次第	地名	その他	
1	阿刀里	○			久我家文書(一)No.142，No.143，No.148
2	生　里				平安遺文No.1801
3	石域（城）道里				平安遺文No.134
4	石田里				平安遺文No.1801
5	石作里	○			久我家文書(一)No.322
6	猪鹿里	○			久我家文書(一)No.143
7	牛甘里				平安遺文No.1801，教王護國寺文書(一)No.475
	牛牧里	○			
8	牛耳里				教王護国寺文書No.1520
9	駅屋里		△		平安遺文No.1997
10	榎小田里	○	○		九条家文書No.905，平安遺文No.134，鎌倉遺文No.2234，No.2237
11	榎本里				平安遺文No.1801
12	小切里	○			九条家文書No.905，No.1537
13	椋下里	○			久我家文書(一)No.142，No.143，No.148，No.247，No.358
14	母（オモ）底里				平安遺文No.618，No.1801，No.1997
15	蝦手里	○	○		久我家文書(一)No.142，No.359，No.360，三鈷寺文書（年未未詳）
16	鏡　里	○			久我家文書(一)No.125，No.143，No.359，No.438
17	笠鹿里	○			久我家文書(一)No.125，No.322
	笠甘里				大日本古文書(十ノ二)東寺百合文書へ－103，教王護國寺文書(一)No.475
18	鎌田里	○			久我家文書(一)No.322
19	川依里	○			
	河依里				鎌倉遺文No.8958，久我家文書(一)No.322
	河寄里				大日本古文書(十ノ二)東寺百合文書へ－103，教王護國寺文書(一)No.475，No.1520
20	唐津里			○	大山崎町史史料編元暦元年(平安遺文No.4217)，弘長元年，元徳三年，建武二年
21	雁間（カリハ）治田里				平安遺文No.1801
22	河原田里	○			
	川原田里				九条家文書No.890，No.905，平安遺文No.1801
23	川合里			○	平安遺文No.514
24	神饗里				平安遺文No.1801，鎌倉遺文No.323
25	木備田里（吉備田里）	○			久我家文書(一)No.143，No.341，No.358，No.438
26	久我里	○	○		久我家文書(一)No.125，No.142，No.143，No.148，No.358，No.438
27	崩　里	○			
28	久世里	○	○		大日本古文書(十ノ二)東寺百合文書へ－103，教王護國寺文書(一)No.475，No.1520，平安遺文No.3986，No.8958
29	倉手里				平安遺文No.3776
30	衾手里	○			久我家文書(一)No.142，No.148，平安遺文No.134

	里　名	比定			主な文献史料
		久我家文書サシツ次第	地名	その他	
31	神足里		○	○	鎌倉遺文No.2237
32	巨勢里		△		平安遺文No.1997
33	巨勢本里		△		平安遺文No.3275
34	坂本里		○		平安遺文No.1801
35	下村里				平安遺文No.1801
36	榲谷里		△		平安遺文No.1801
37	榲谷西里				平安遺文No.1801
38	高庭里				平安遺文No.618，No.1997
39	高橋里	○			久我家文書(一)No.143，No.358，No.359，No.438
40	田辺里				平安遺文No.618，No.1997，鎌倉遺文No.323
41	槻本里				大山崎町史史料編，正嘉二年，元徳二年
42	津田里	○			久我家文書(一)No.142
43	苗生里	○			久我家文書(一)No.142，鎌倉遺文No.2237
44	楢本里			△	平安遺文No.1997
45	西　里				平安遺文No.1801
46	西外里	○			
47	羽水志里	○			
48	姫野里	○			
49	平方里		○		大山崎町史史料編，正嘉二年
50	船木里	○			平安遺文No.1801
51	奉(マツリ)田里				
52	水将里	○			
53	室町里	○			久我家文書(一)No.142，No.143，No.148，No.438
54	牟佐田里				平安遺文No.4879，鎌倉遺文No.2237
55	匍廣里				鎌倉遺文No.3482
	宗弘里			○	革嶋家文書No.40，No.41，No.62
	胸広里				革嶋家文書No.199，拾遺No.1
56	村田里	○	○		久我家文書(一)No.17(鎌倉遺文No.6775)，No.19，No.26，No.142，No.143，No.147，No.218 No.358，No.431，No.573
57	弓絃羽(ツルハ)里	○	○		久我家文書(一)No.142，平安遺文No.1801，鎌倉遺文No.323，No.2237
	弓弦羽里				久我家文書(一)No.148
58	我(ワカ)妻里				平安遺文No.1801

（注１）　比定の欄は第117図乙訓郡条里復原図に記載したところの里名比定の根拠を示したものである。付表11乙訓郡条里地名一覧表を合わせて参照されたい。

（注２）　東寺旧蔵の文書については『大日本古文書』『教王護国寺文書』に収録されているもののみを記載した。また久我家文書については『久我家文書(一)』(昭和57年刊)に収録されているもののみを記載した。

（注３）　小林清「乙訓郡の条里と長岡京の条坊」ではこの表に掲げた里名の他に「手甘里」「六条匣里」「神応里」「内生里」を挙げているが、その出典を知ることができなかった。但し三鈷寺文書には「六條匣地参戸主」と記されており、同じく三鈷寺文書に「玖條西洞院貳戸主」とあることから「六條匣地」とは平安京における所在地を示していると考えられる。

態は明らかでない。しかし，平安中期以降，鎌倉・室町時代の史料は比較的豊富であり，今後それぞれの時代において，条里呼称法の実態とその果たした役割について，十分に検討されることが必要であろう。また豊富な近世資料の活用も今後の作業として残されている。

5．乙訓郡西部の条里

乙訓郡西部では条坊地割が卓越しており，ブロック状に抽出できる条里地割も方位等が異なるため，東部の大規模な正方位の条里とは歴史的な性格が異なるものと考えられている。すでに吉本昌弘氏によって乙訓郡の条里について整理・区分が行われているが，今回条里復原図の作成にあたり，あらためて検討を行った。以下その概要を述べたい。

乙訓郡大山崎町大山崎・円明寺地区の条里（第121図）

乙訓郡大山崎町大山崎・円明寺地区に現存している条里地割については，前稿(注34)で簡単に紹介を行ったが，今回あらためて検討しなおした。前稿ではこの地区に現存している条里地割を東部主要条里に連続するものと考えて，北から復原してきた東部主要条里のプランとつきあわせると，G—Hにおいて南北の長さが短い坪を設定しなければならなかった。そこでその短い長さを「マイナスの余剰帯」としてとらえたのであったが，今回乙訓郡西部の条里プランが明らかになる中で，この大山崎・円明寺地区に現存している条里地割は，北へ「開田・今里地区東偏菱形条里」へ連続すると考える方が妥当であることが判明した。したがって前稿で「1坪＝109mとして坪の長さが29m短い」と錯覚したのは，乙訓郡西部の条里と東部主要条里の条(坪)界線のプランにおける不整合の幅だったのである。この地区の条里地割を「西部主要条里」と把握することにして，ここで前稿の訂正を行いたい。

この地区の条（坪）界線は，長岡京南京極の推定中軸線とも一致するE—F(注35)をはさんで，1町＝109mのプランで連続している。また三条（九里）に現存している里（坪）界線は，東部主要条里及び西部主要条里の里界線を延長したプランと正確に一致する。二条（八里）には「斗加坪」（十坪），また二条（九里）には「上古」（十九坪）の小字名がある。

久我畷の南方から一条にかけて条里地割は現存していない。「大山崎荘絵図」によればこの付近に大きな沼が描かれており(注36)（永荒沼），条里地割が遺存していない理由の一つと考えられる。しかし中山修一氏の比定にしたがって，「唐津里」の位置を一条（七里）とすれば(注37)，一条にも条里地割が施行されていたことが，宝積寺文書(注38)の史料から想定できる。宝積寺文書に収められている「唐津里」に関する史料は，いずれも十三坪に存在した田地の売券類で，元暦元年（1184）弘長元年（1261）・元徳3年（1331）・建武2年（1335）の4通である。このうち元暦元年「源末友田地売券」に記されている田210歩と，弘長元年「尼清阿弥陀仏田地売券」に記されている田1段小は，「限東御供田　限南溝　限北縄手　限西仲興寺」と四至が明記されている。この東を限るとされている御供田とは石清水八幡宮御供田で，脇田晴子氏によれば(注39)約2町半の御供田

が山崎に存在したとされており，この唐津里十三坪の東部分，もしくは二十四坪にかけて，その一部分が存在したことが推定されるのである。したがって図に示されるように唐津里十三坪，そしてその東は現在淀川の河原となっているが，これらの史料から当時の耕地が現在より東に広がっていて，条里地割が施行されていたことを想定できるのである。

さてここで問題となるのは一条の南辺――乙訓郡条里の起点の問題である。前稿で述べたように二条・三条に現存している条里地割から復原を行うと，C－Dの位置となり，小林清氏によって(注40)乙訓郡条里の起点とされている関大明神の北A地点と合致しない。ところが西部主要条里より南に位置する東部主要条里の条（坪）界線のプランを延長して復原すると，乙訓郡条里の起点はA－Bの位置となる。条里呼称の起点が必ずしも条里地割の施行にさいして基準点とならない(注41)例はあるが，山崎の歴史地理的位置を考えると，乙訓郡条里における基準点の一つとなった可能性は十分に想起される。この問題は西部主要条里と東部主要条里の条界線のプランにおける不整合の意味を考える上で留意されよう。

長岡京市開田・今里・神足地区の条里（第122図）

これらの地域では，長岡京市域において最も急速に市街化がすすんでおり，道路建設や溜池の埋立等によって景観の変化は著しいものがある。

今回今里および開田地区に散在している条里地割を検討した結果，条（坪）界線は真東西でありながら，里（坪）界線は約N 1°38′ Eのふれをもち，1町の形態が菱形を呈する条里プランであることを確認することができた。乙訓郡の里（坪）界線のプランは東部・西部とも広い範囲にわたって正方位の精巧なプランが現存しているのに対し，このような里（坪）界線のありかたは特異な様相を呈しているといえる。したがってこの里界線におけるふれが自然的な変容によって生じたものではないと考えて「開田・今里地区東偏菱形条里」として把握することにした。この条里プランの分布する範囲は，現存地割から明確につかむことは困難であるが，復原図の作成にあたっては一応南北は3.5条，東西は2里を想定した。北限は八条を南北に二分する坪界線（C－D）か，もしくはそれより一本北の坪界線かはっきりしないが，乙訓寺主要伽藍の東西の中軸となること，長岡京三条条間小路に重なるという点を配慮に入れて便宜的にC－Dとして作図した。条（坪）界線のプランは，1町＝109mで，西部主要条里に連続すると考えられるが，南から復原図を作成した場合，C－D以北の条（坪）界線と約9mの余剰幅が生じる。この現象も1町の長さの問題に起因するとも考えられるが，今後の検討を要請する意味でC－D上に余剰帯として示した。

これらの地域における地名資料や文献史料は乏しく，特に開田地区は水田耕作に不適当な段丘上にあり，条坊地割が卓越していることから，開田地区の条里地割の施行を中～近世の小規模な開発に求める見解が大勢を占めていた。(注42)しかし前述したように現在西小路家に所蔵されている古図と，三千分一地図に記されている小字名を合わせて検討を行うと，坪付を確認するこ

とができ，坪付は今里地区や大山崎町のそれと連続し，しかも東部主要条里の坪付とも連続することは明らかである。条界線のプランの検討結果からも，これを中～近世にかけて独自に開発されたものとする根拠は得られない。

この「開田・今里地区東偏菱形条里」の歴史的性格を明らかにしていく作業の一つとして，乙訓寺との関連性について別稿で検討を行った(注43)。現存する南門の位置は，東偏する里界線に合致するが乙訓寺の構造や主要伽藍の位置関係が明確となっていない現段階では結論を下すことは困難である。

またA－Bの西国街道は，周知のとおり延暦16年に葛野郡から移された第三次山城国府の南北の中軸線とされているところである(注44)。この道路は図に示されているとおり「開田・今里地区東偏菱形条里」の里界線のプランには合致しない。条里の方向と国府の中軸線が必ずしも一致するわけではないが(注45)，この西国街道は，平安京と山崎を結ぶ要路として設置されたと考えられていることもあり，この1,060mに及ぶ直線道路のあり方にはなお注意が喚起される。

ところでさきにも述べたように，向日丘陵以南の現小畑川両岸では，現存する東西方向の坪界線が西部主要条里と東部主要条里の条（坪）界線をむすぶように東へむかって南にふれている様相を認めることができる。乙訓郡の条（坪）界線は東へむかって南へふれる傾向が強いが，地形に制約されずに正方位の条（坪）界線が分布している地域もあり，今後地形条件と条里地割の関連性について分析する作業が要請される。

京都市西京区大原野灰方・石見・上里地区の条里（第123図）

京都市西京区大原野灰方・石見・上里地区では，小畑川と善峰川の形成する河岸段丘上に，異方向の条里地割をブロック状に認めることができる。

大原野灰方地区に現存する条里地割は，条（坪）界線を4町分確認することができ，その方向はW7°4′Sである。里（坪）界線は明確ではないが，条（坪）界線に直交すると推定される（吉本氏区分Vにあたる）。

善峰川をはさんで対岸の大原野石見地区では，条（坪）界線が東にむかって南にふれる条里地割を南北6町，東西3里にわたって確認することができる（吉本氏区分のIVにあたる）。条（坪）界線は（七里）と（八里）の里界線付近で一度断絶し，方向に若干変化がみられる。（七里）における条（坪）界線の方向はE2°15′S，八里ではE5°20′Sである。地割が断絶するとみられる付近では，東南方にむかって流れていた善峰川の旧河道を示す地割が認められる。右京22次・25次調査では，古墳時代の善峰川の旧河道が検出されて，その旧河道が埋没した後，平安時代前期と推定される水田の用排水・及び区画のための杭列溝が設置されたことが確認されている(注46)。検出された杭列溝は，明確な規則性を認めるに至らずそれぞれ不定形の面を形成しているが，大局的にみれば，同時に検出された平安時代前期と推定される掘立柱建物や柵列も含めて，全体的に現存する条（坪）界線と同じ方向をとるようである。一方，里（坪）界線は正方位で西

部主要条里の里界線のプランに正確に一致する。したがってこの地区では一町の形態が菱形となっている。（六里）と（七里）の里界線以西の３町分は18m西にずれる。(注47)

また南を善峰川，北と東を小畑川にはさまれた河岸段丘上に位置する大原野上里では，集落の中の道路として条（坪）界線を半町単位で南北２町分確認することができる。里（坪）界線は明らかでない。地割の現存状況からして，これらを条里地割とするのはやや無理があるとも考えられるが，次の二点から今回の復原図の作成にあたっては条里地割として抽出することにした。その第一は，これらの地割が，大原野石見地区に現存する東にむかって南にふれる条(坪)界線に関係なく，西部主要条里の条界線を北に延長したプランと正確に一致することである。その第二は，向日市寺戸から小畑川をわたって大原野上里の集落に入る坂道が，土地の人々に「富坂」と呼ばれており(注48)，この付近一帯が「富坂庄」の一部に比定されていること(注49)である。保安四年（1123）の「富坂庄預解」（『平安遺文』No.1997）には，富坂庄の坪付として高庭里・田辺里・巨勢里・母底里・楢本里・驛屋里の６里にわたって散在する７町１段230歩の田畑が記されていて，条里制の施行を想起することができるのである。この他付近には，田辺里･高庭里･母底里の３里にわたって長岡庄の田畠５町５段70歩も散在していた（長久五年「山城国乙訓郡司解」『平安遺文』No.618)。これらの坪付資料から想起される庄園のあり方と，大原野灰方･石見・上里に散在する条里地割のあり方は，必ずしもストレートに結びつかず，また里名の比定についてもなお問題が残されており，現存する異方向の小規模な条里地割の成立過程については，今後の研究課題の一つとなっている。

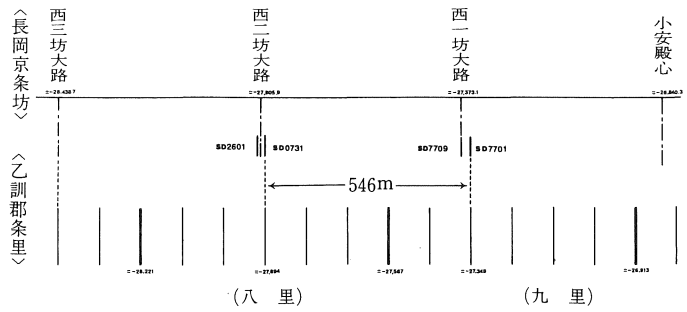
６．ま　と　め

以上乙訓郡西部の条里地割について検討を行ってきた。この他海印寺地区においては西部主要条里のプランに合致する地割が散見できるものの，明確な判断を示すには至らなかった。なお海印寺地区には北条・西条・条下などの小字名がある。また乙訓郡西北部の大原野石作・春日・南春日・大枝西長・東長・中山・塚原・沓掛の各地区では条里地割を抽出することができなかった。

今回の作業の中で得られた成果をまとめると次の２点である。

その第一は，乙訓郡西部の各地区にブロック状に現存する条里地割は，条界線あるいは里界線の一方のプランを共有し，全体として関連した大規模な条里プランとして把握することができることである。複雑な地形条件にありながら，そのプランの精巧さは東部主要条里のそれに匹敵するものである。

第二は，これまで乙訓郡西部と東部の条里は成立過程が異なるものとする見解が大勢を占めてきたが，里界線のプランを共有しているという点において両者の関連性を把握することができた。このことは乙訓郡条里の成立と改編の過程を考察していくために重要な意義を有するもの



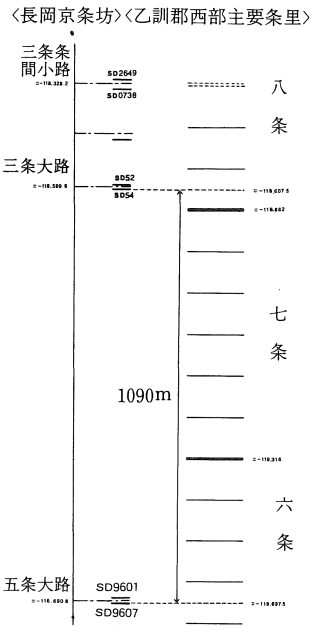
第124図　　乙訓郡西部主要条里と長岡京条坊(1)

SD7701　X＝－119,769.6
　　Y＝－27,348.8
SD0731　X＝－118,346.54
　　Y＝－27,895.29
SD54　X＝－118,607.72
　　Y＝－26,220.70
SD9607　X＝－119,698
　　Y＝－27,668

である。

以上の二点については開田地区と今里地区の坪付が連続すること，また東部主要条里の坪付とも連続することが明らかになり，条里地名の検討結果からも傍証することができた。

この他乙訓郡西部における条里の歴史的性格を考えていくうえで注目される事項として，長岡京条坊とのあいだに関連性を有していることがあげられる。発掘調査の結果と現存地割との関係が明らかな事例をあげてみると，発掘調査で検出された西一坊大路と西二坊大路の占める位置は注目すべきものがある。昭和56年長岡京市神足三丁目で行われた右京77次調査で西一坊大路の両側溝が検出された。この調査では平城京型で割り付けた西一坊大路の計画中心線が，大路の中心ではなく西側溝と一致することが報告されている。(注50) 長岡京の条坊プランが基本的には平城京をモデルとされたものでありながら，個々の条坊の設定のされ方に一部不規則な要素があることはこれまでの調査の事例から指摘されているところである。この検出された西一坊大路の占める位置と，西部主要条里の里界線のプランを比較・検討すると，東側溝が（九里）の西から2番目の坪界線のプランに一致する。また右京7次・26次調査で検出された西二坊大路の東側溝が（八里）を東西に2分する坪界線のプランと一致し，このことは発掘調査によって確認されている。つまり西一坊大路の東側溝と西二坊大路の東側溝の距離は条里の約5町分にあたり，しかもこれらは西部主要条里のプランに合致している。



第124図　乙訓郡西部主要条里と長岡京条坊(2)

これと同じ傾向は，三条大路の南側溝と五条大路の南側溝とのあいだにも見出すことができる。長岡京四条大路以南の条坊地割が全体に南へずれることはすでに指摘されていたが，昭和57年に行われた右京96次調査では五条大路の両側溝が検出されて，これらの地割が条坊を反映したものであることがあらためて確認された。(注51) 四条大路以南が南にずれる理由として造営尺の問題に起因するもの，あるいは四条大路の道路巾が広くとられたためだとする見解があるが，

いまだ結論は出されていない。調査で検出された三条大路の南側溝と五条大路の南側溝の距離は1090.6mとなり条里の約10町分である。検出された五条大路の南側溝は，付近に現存している条里地割と条坊地割から，「開田・今里地区東偏菱形条里」において六条の南から3番目の坪を2分する位置にあることを認めることができる。三条大路の南側溝を示す条坊地割も現存していて，「開田・今里地区東偏菱形条里」において，八条の南から1番目の坪を2分する位置にあることが示されている。つまり三条大路の南側溝と五条大路の南側溝の距離は条里の10町分であり，しかも「開田・今里地区東偏菱形条里」の条界線のプランに合致している。

このように条坊の側溝の占める位置に一部不規則な要素が認められるのに対し，乙訓郡西部の条里がプランとして貫徹しており，条坊の不規則性が条里プランに規制されている傾向を示している。これまで長岡京条坊と乙訓郡条里との関連性については，主として東部主要条里との検討の中で行われている。(注52) この東部主要条里と長岡京条坊とのあいだにも相関関係が認められるのは調査によって確認されており，たとえば1例をあげると，大量の木簡を出土しているSD1301（左京二条二坊六町の町割溝）とSD801801（二条第二小路北側溝）の距離は55mと半町であり，しかもこれらは東部主要条里のプランに合致している。今後さらに発掘調査の中で綿密な検討が行われなければならないが，それぞれの条里地割と長岡京条坊の相関関係を具体的に明らかにすることができれば，その歴史的性格を究明する一つの手がかりとなるだろう。

乙訓郡西部の条里資料は現存地割・文献史料・条里地名とも東部のそれに比較して豊かなものではない。しかし山城盆地の中にあって乙訓郡東部における遺存状況の良好さが問題とされるべきであり，葛野郡における状況等をみても，資料の残存が希薄であるという理由だけで，乙訓郡西部における条里制の施行に対して消極的な評価を下すことはできないと考える。

特に開田地区にまとまって現存している条里地割については，水田耕作に不適当な地理的条件にあるという理由でその施行の起源を中～近世の小規模な開発に伴うものとする見解が大勢を占めてきた。右京114次調査で，現在この地域の用水路として使用されている西小路川の旧水路が検出されて，この地域の開発時期を13世紀とする見解も提起されている。(注53) しかしこの地区の条里地割は，里界線が北にむかって東偏するという特異な形態をとるものの，乙訓郡全体の大規模な条里プランの一環として位置づけられることは，条（坪）界線のプランや坪付のあり方から把握することが可能である。また山城国においては天平元年（729）阿波国とともに陸田が収公され(『続日本紀』)，その後山城国において陸田が班田収授の対象となったことは，延喜民部式に「凡山城・阿波両国班田者，陸田水田相交授之」と規程されていることや，元慶四年（880）「班山城国田使解」(『三代実録』）の記載，あるいは「嵯峨庄図」からその状況の一端を知ることができる。(注54) 秋山國三氏は平安遷都後，都に隣接する山城国の諸郡では，水田の不足を陸田で補いながら班田が行われ，京戸・土戸の口分田が錯綜していたと考察されている。(注55) し

たがって水田耕作に不適当であることのみを，条里地割が施行されなかった理由とすることはできず，この地区の条里制の施行起源を中～近世の小規模なものとする根拠は現時点では得られない。

本稿では主に乙訓郡西部に現存する条里地割の再評価に焦点をあてて，検討を行ってきた。現時点でそれぞれの歴史的性格について，あるいは変容の過程について結論を下すことは本稿の及ぶところではないが，少なくとも乙訓郡西部における条里地割の基本的プランは，乙訓郡全体の条里制の施行，あるいは再編成の中で成立した可能性を提示しておきたい。

今後乙訓郡の条里について研究を進展させていくためには，考古学や歴史学等のそれぞれの分野で，目的意識的な調査とそれらに基づいた実証的な研究が要請されるが，「条里制」という広大なテーマを追求するためには，地理学・測量学の立場から，現存する地割に対する科学的なデータが提示される必要のあることを付記し，各方面の御批判，御検証をお願いしたい。

（注１）　喜田貞吉「山城北部の条里を調査して太秦広隆寺の旧地に及ぶ(上)(下)」（日本歴史地理学会『歴史地理』25(1)(2)昭和４年１・２月）
須磨千頴「山城国紀伊郡の条里について」（史学会『史学雑誌』65(4)　昭和31年４月）
米倉二郎「山城条里と平安京」（史学研究会『史林』39(3)　昭和31年５月）
林紀昭「条里制再編成の時期―山城盆地に於ける条里制の一考察―」（京都大学考古学研究会『嵯峨野の古墳時代』昭和46年３月）

２）　吉田敬市「山城乙訓郡の条里」（京都大学文学部『紀元二千六百年記念史学論文集』昭和15年11月）

３）　東大資料編纂所「山城葛野乙訓両郡条里補考」（史学研究会『史林』32―２　昭和24年10月）
のち杉山博氏が「乙訓郡の条里について」と改題して『庄園解体過程の研究』（昭和34年）に収録している。

４）　中山修一「乙訓郡内里名追加」（小林清『長岡京の新研究』４　昭和44年４月）
中山修一「条里の考察」（京都市都市開発局洛西開発室『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査」昭和47年３月

５）　小林清「乙訓郡の条里と長岡京の条坊」（『長岡京の新研究』４　昭和44年４月）この論文の中で小林清氏は，乙訓郡西部は南北15条以上と把握されている。

６）　吉本昌弘「長岡京城の条里地割について」（長岡京跡発掘調査研究所『長岡京』14　昭和54年11月）

７）　奈良国立文化財研究所『条里制の諸問題―条里制研究会記録１―』昭和57年９月25日における中山修一氏の発言
中山修一「桂川右岸の条里」（野外歴史地理学研究所『琵琶湖・淀川・大和川―その流域の過

去と現在一』昭和58年４月２日）

８）　吉本昌弘（注６）前掲書

金田章裕「乙訓郡の条里プランの完成と維持」（向日市史編さん委員会『向日市史上巻』昭和58年３月31日

９）　稲田孝司「古代都宮における地割の性格」（考古学研究会『考古学研究』19―４　昭和48年４月）

藤田さかえ「長岡宮内地割について」（長岡京跡発掘調査研究所『長岡京』12　昭和54年７月）

10）　服部昌之「条里制研究の課題と方法（人文地理学会『人文地理』25―２　昭和48年）

服部昌之「埋没条里研究ノート」（大阪市立大学文学部『人文研究』27―１　昭和50年10月）

11）　「主要条里」という用語は，吉本昌弘氏が（注６）前掲書において，桂川右岸の条里に対して使用されたものである。今回乙訓郡西部においても正方位の条里地割が抽出されたのでこのように呼びわけることにした。

12）　金田章裕「奈良・平安期の村落形態について」（史学研究会『史林』54―３　昭和56年５月）

「平安初期における嵯峨野の開発と条里プラン」(『追手門学院大学文学部紀要』12　昭和53年)

13）　この他に吉本昌弘（注６）前掲書では，向日市寺戸地区（吉本氏区分の１）において，東部主要条里と不整合な条里地割を抽出している。

14）　百瀬ちどり「乙訓郡域について」（長岡京跡発掘調査研究所『長岡京』25　昭和57年９月１日）

15）　吉本昌弘（注６前掲書）

16）　中山修一「向日町大字単位の古図」(1)(2)（乙訓の文化遺産を守る会『乙訓文化遺産』５・７　昭和45年９月・47年11月）

17）　小林清（注５）前掲書

宮田栄次郎『大枝・大原野里』昭和51年10月１日

18）　喜田貞吉（注１）前掲書

19）　足利健亮『上古と甚八」（古今寺院『地理』1982―７月号　昭和57年３月）

20）　吉田敬市（注２）前掲書ではこの他に「畑ケ坪」「畑ケ壺」「澤ノ坪」「奥ノ坪」「堂ノ坪」を条里地名として挙げられている。

21）　「鶏冠井古図」の写真資料については向日市教育委員会より便宜をはかっていただいた。

22）　「開田村古図」の閲覧については西小路展弘氏，および長岡京市教育委員会より便宜をはかっていただいた。

23）　古文書研究会「開田村の古地図」（乙訓の文化遺産を守る会『乙訓文化遺産』６　昭和46年11月29日）

24）　中山修一（注４）前掲書

25）　中山修一「遷都以前の長岡京域」（日本資料刊行会・乙訓書房『長岡京・内と外』昭和53年10

月）において訂正されている。

26） 上島有「上久世庄の歴史地理的考察」（塙書房『京郊庄園村落の研究』昭和45年８月）

27） 上島有（注26）前掲書では，上久世庄の庄域の中心部分となる十三条（十里）を「上久世里」と仮称している。

28） 上島有（注26）前掲書

29） 『大日本古文書家わけ十ノ三東寺百合文書』へ―103

30） 国学院大学久我家文書編纂委員会『久我家文書』第一巻　昭和57年11月

31） 谷岡武雄「山城盆地南部における平野の歴史的景観と開発景観の進化」（古今書院『平野の開発―近畿を中心として―』昭和39年５月）

32） 岸俊男「郷里制廃止の前後（上・下）」（日本歴史学会『日本歴史』106・107昭和32年４・５月）

33） 金田章裕「条里プランと小字地名」（人文地理学会『人文地理』34―３　昭和

34） 百瀬ちどり（注12）前掲書

35） 右京96次調査で検出された２本の側溝を五条大路南北両側溝とし,1尺＝0.296m・正方位として五条大路以南を復原すると，南京極大路心の推定座標はｘ＝－121,822となり，坪界線Ｅ－Ｆとほぼ一致する。

36） 吉川一郎「大山崎荘絵図について」（乙訓の文化遺産を守る会『乙訓文化遺産』７　昭和47年11月）

37） 中山修一（注４）前掲書

38） 大山崎町史編纂委員会『大山崎町史史料編』昭和56年３月

39） 脇田晴子「自治都市の成立とその構造―大山崎を中心に―」（東京大学出版会『日本中世都市論』昭和56年６月）

40） 小林清（注５）前掲書

41） 藤井直正，竹下賢，荻田昭次『池島町の条里遺構―調査概報―』（東大阪市遺跡保護調査会，昭和52年11月１日）

42） 小林清（注５）前掲書

金田章裕「乙訓郡の条里プランの完成と維持」（向日市史編さん委員会『向日市史』上　昭和58年３月）

43） 百瀬ちどり「乙訓寺とその周辺における奈良～平安時代の検出遺構」（本冊所収）

44） 木下良「古代集落と交通路――律令都市・特に国府の形態について」（同志社大学人文科学研究所『社会科学』１―１　昭和40年３月）

45） 木下良「国府と条里の関係について」（史学研究会『史林』50―５　昭和42年９月）

46） 長岡第十小学校発掘調査委員会『長岡京跡右京25次発掘調査（７ANGTE地区）現地説明会資料』昭和54年８月，この調査の結果については，長岡京市埋蔵文化財センター山本輝雄，岩崎

誠両氏から御教示をいただいた。

47) 吉本昌弘氏はこれを幅4丈の道路状地条とされている。吉本昌弘・東井克司「長岡京条坊と乙訓郡条里の再検討」(長岡宮跡発掘調査団『長岡京』3　昭和52年6月)

48) 中山修一氏の御教示による。

49) 中山修一「条里の考察」木下良・水田義一「富坂庄について」(いずれも京都市都市開発局洛西開発室『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査』昭和47年3月)
両論文においては富坂庄の坪付としてあげられている里名の比定に,異った見解が出されている。

50) 山本輝雄・木村泰彦「長岡京右京第77次(7ANKSM地区)調査概要(長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』9　昭和57年3月)

51) 木村泰彦「右京96次(7NAKUT－4地区)調査略報」(㈶長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和57年度　昭和58年3月)

52) 藤田さかえ「長岡京の条坊と条里」(長岡京跡発掘調査研究所『長岡京』28号　昭和58年3月)

53) 木村泰彦「右京第114次(7ANKTR地区)調査略報」(㈶長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和57年度　昭和58年3月)

54) 泉谷康夫「奈良・平安時代の畠制度」(史学研究会『史林』45－5　昭和37年9月)

55) 秋山國三「平安京における宅地配分と班田制」(同志社大学人文科学研究所『社会科学』III 2・3　昭和43年9月)

56) 第121, 122, 123図は,京都市長の承認を得て同市発行の「都市計画基本図」を複製して調整したものである。

付表13　今里地区調査一覧表（107図参照）

調査次数	地区名	調査期間	調査機関	主な報告
右京第 1次	7ANIHR-1	1966. 4.12 ～1966. 7.30	京都府教育委員会	京都府埋蔵文化財発掘調査概報(1967)
2	IHR-2	1969.11.20 ～1969.12.14	中山修一・小林清・浪貝毅	日本考古学年報21・22・23 1968～70年度版
3	IAE-1	1972. 3. 5 ～1972. 3.12	中山修一・小林清	京都考古　第5号
4	IAE-2	1972. 4.29 ～1972. 5. 1	中山修一・小林清	京都考古　第5号
5	INC	1977. 8. 1 ～1977. 8. 7	長岡京跡発掘調査団	長岡京市文化財調査報告書第12冊
6	IHY	1977. 9.17 ～1977. 9.23	長岡京跡発掘調査団	長岡京市文化財調査報告書第12冊
7	ITT-1 IST-1	1977.12. 6 ～1978. 3.31	京都府教育委員会	京都府埋蔵文化財発掘調査概報(1978)
8	ISB	1977.12.21 ～1978. 1.12	長岡京跡発掘調査団	長岡京市文化財調査報告書第12冊
12	ITT-1 IST-1	1978. 6. 1 ～1979. 3.31	京都府教育委員会	京都府埋蔵文化財発掘調査概報(1979)
13	IKC-1	1978. 6.24 ～1978. 7. 6	長岡京市教育委員会	長岡京市文化財調査報告書第5冊
20	IKU-1	1979. 1.15 ～1979. 1.19	長岡京跡発掘調査研究所	長岡京市文化財調査報告書第12冊
21	IHJ 他	1978.11.20 ～1978.12.27	京都府教育委員会	京都府埋蔵文化財発掘調査概報(1979)
26	ITT-1 IST-1	1979. 6.20 ～1979.10.31	京都府教育委員会	京都府埋蔵文化財発掘調査概報(1980-2)
27	IHJ 他	1979. 6.18 ～1979. 8.31	京都府教育委員会	京都府埋蔵文化財発掘調査概報(1980-2)
33	IKU-2	1980. 2.25 ～1980. 2.29	長岡京跡発掘調査研究所	長岡京市文化財調査報告書第12冊
35	ITT-2	1980. 2.26 ～1980. 3.26	長岡京跡発掘調査研究所	長岡京市文化財調査報告書第12冊
37	INE	1980. 4.28 ～1980. 5.28	長岡京跡発掘調査研究所	長岡京市文化財調査報告書第12冊
45	ITT-3	1980. 8.21 ～1980. 9. 3	長岡京市教育委員会	長岡京市文化財調査報告書第8冊
47	IUS	1980. 8.26 ～1980. 9. 5	長岡京市教育委員会	長岡京市文化財調査報告書第12冊
50	IKC-2	1980.10. 8 ～1980.11.22	長岡京跡発掘調査研究所	長岡京市文化財調査報告書第12冊
53	IST-2	1980.11.26 ～1980.12.26	長岡京跡発掘調査研究所	長岡京市文化財調査報告書第9冊
54	IST-3	1980.11.26 ～1980.12.15	長岡京跡発掘調査研究所	長岡京市文化財調査報告書第9冊
74	IKB	1981. 5.19 ～1981. 5.21	長岡京跡発掘調査研究所	長岡京市文化財調査報告書第9冊
75	IKC-3	1981. 5.21 ～1981. 7.16	長岡京市教育委員会	長岡京市文化財調査報告書第9冊
76	ITT-4	1981. 6. 5 ～1981. 7.25	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	京都府遺跡調査概報　第3冊
80	ITT-5	1981. 9.17 ～1981.10.24	長岡京市教育委員会	長岡京市文化財調査報告書第9冊

83	ＩＮＣ 他	1981.10.26 ～1982. 3.25	㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター	京都府遺跡調査概報　第３冊
84	ＩＴＴ-６	1981.11.11 ～1981.12.26	㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター	京都府遺跡調査概報　第３冊
85	ＩＨＢ	1981.11. 7 ～1981.11.21	長岡京市教育委員会	長岡京市文化財調査報告書第９冊
86	ＩＴＴ-７	1981.11.27 ～1981.12.29	長岡京市教育委員会	長岡京市文化財調査報告書第９冊
101	ＩＫＥ	1982. 6.15 ～1982. 7.12	長岡京市教育委員会	長岡京市埋蔵文化財センター年報　昭和57年度
105	ＩＮＣ-２ ＩＭＫ	1982. 7.12 ～1983. 1.26	㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター	京都府埋蔵文化財情報　第７号
110	ＩＳＴ-４	1982. 8. 4 ～1982. 9.16	㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター	京都府埋蔵文化財情報　第６号
117	ＩＳＢ-２	1982.11.15 ～1983. 1. 7	㈶長岡京市埋蔵文化財センター	長岡京市埋蔵文化財センター年報　昭和57年度
131	ＩＨＹ-２	1983. 5.26 ～1983. 6. 7	㈶長岡京市埋蔵文化財センター	長岡京市埋蔵文化財センター年報　昭和58年度
140	ＩＫＥ-２	1983. 8. 1 ～1983. 9.10	㈶長岡京市埋蔵文化財センター	長岡京市埋蔵文化財センター年報　昭和58年度
141	ＩＳＴ-５	1983. 8.11 ～1983.10.24	㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター	京埋セ中間報告資料No.83—13
144	ＩＭＯ	1983.10. 6 ～1983.11. 8	㈶長岡京市埋蔵文化財センター	長岡京市埋蔵文化財センター年報　昭和58年度
153	ＩＡＥ-３	1983.12. 9 ～1984. 2. 2	㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター	京埋セ中間報告資料No.84—01
157	ＩＴＴ-８	1984. 3.15 ～1984. 3.30	㈶長岡京市埋蔵文化財センター	長岡京市埋蔵文化財センター年報　昭和58年度

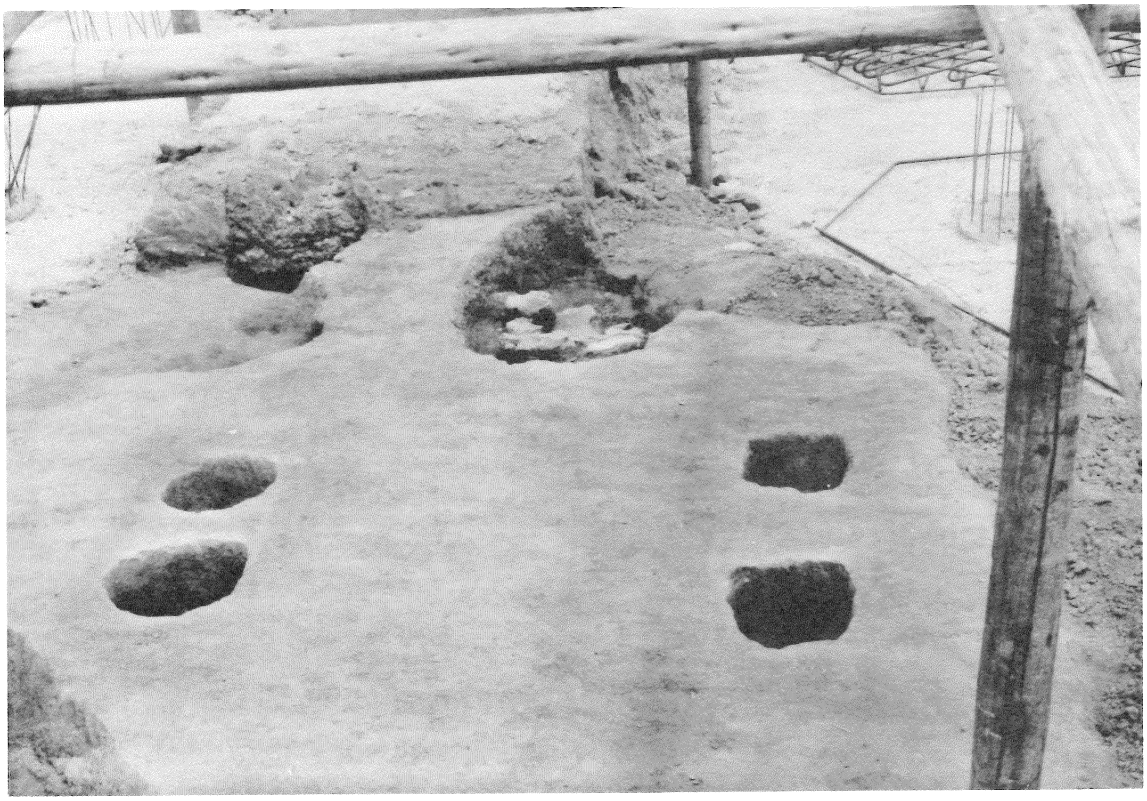
（右京３・４・20・33・47次調査の地区名については，㈶京都府埋蔵文化財調査研究センターと協議のうえ，ニュース『長岡京』23号で掲載したものを訂正した。）

図　版

(1)　1トレンチ全景（東から）

(2)　2トレンチ全景（西から）

(1)　竪穴住居址ＳＨ0502（南から）



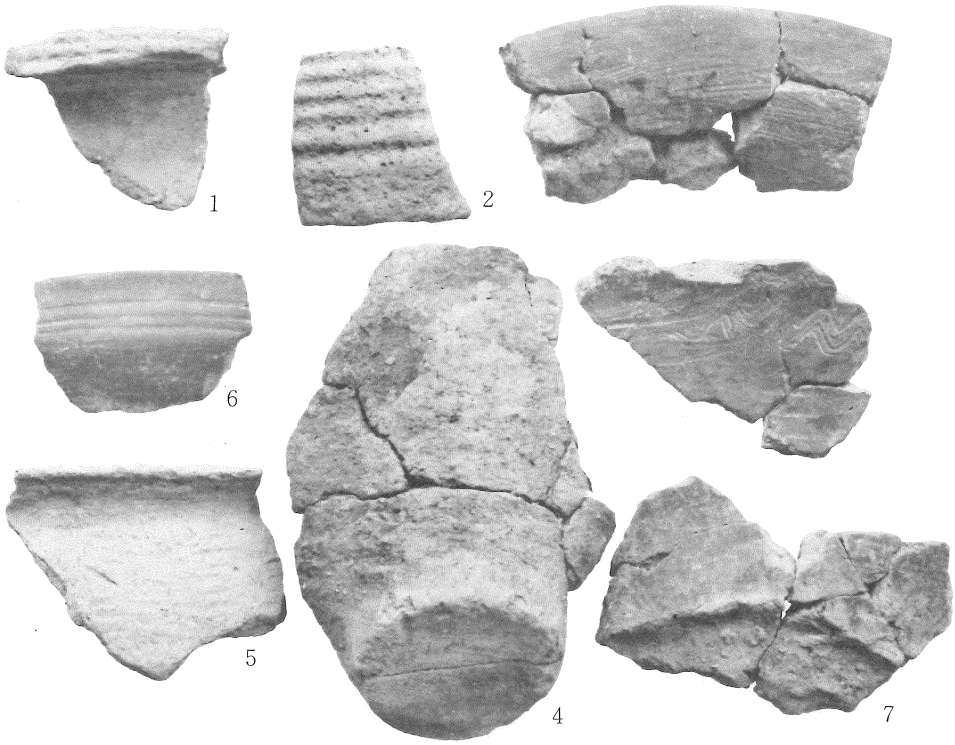
(2)　柱穴群と土壙ＳＫ0501（北から）

(1)　土壙ＳＫ0501（東から）

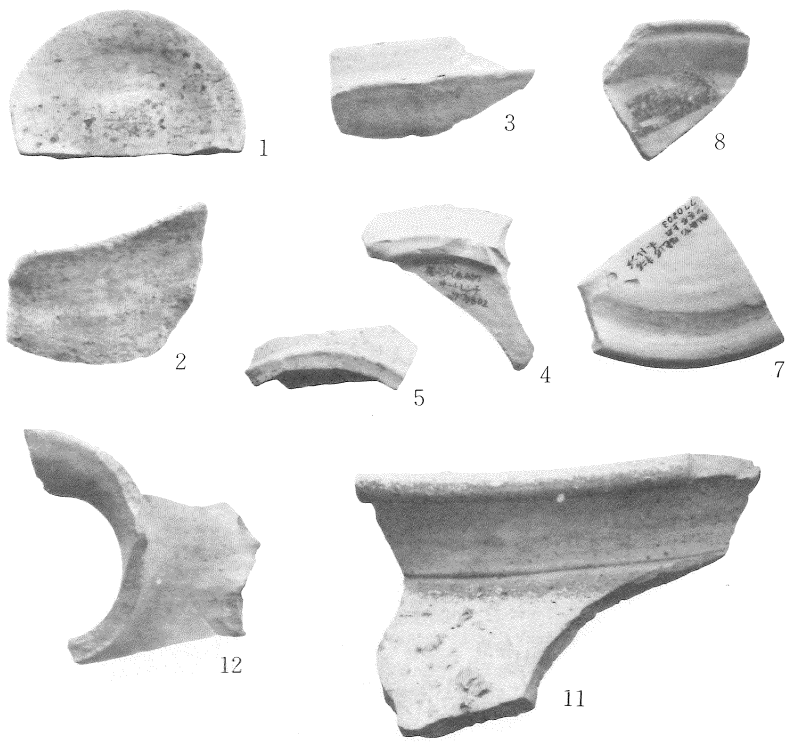
(2)　柱穴群と土壙ＳＫ0503（北から）

(3)　土壙ＳＫ0503（南から）

(4)　土壙ＳＫ0503土器出土状況



(1) 弥生土器

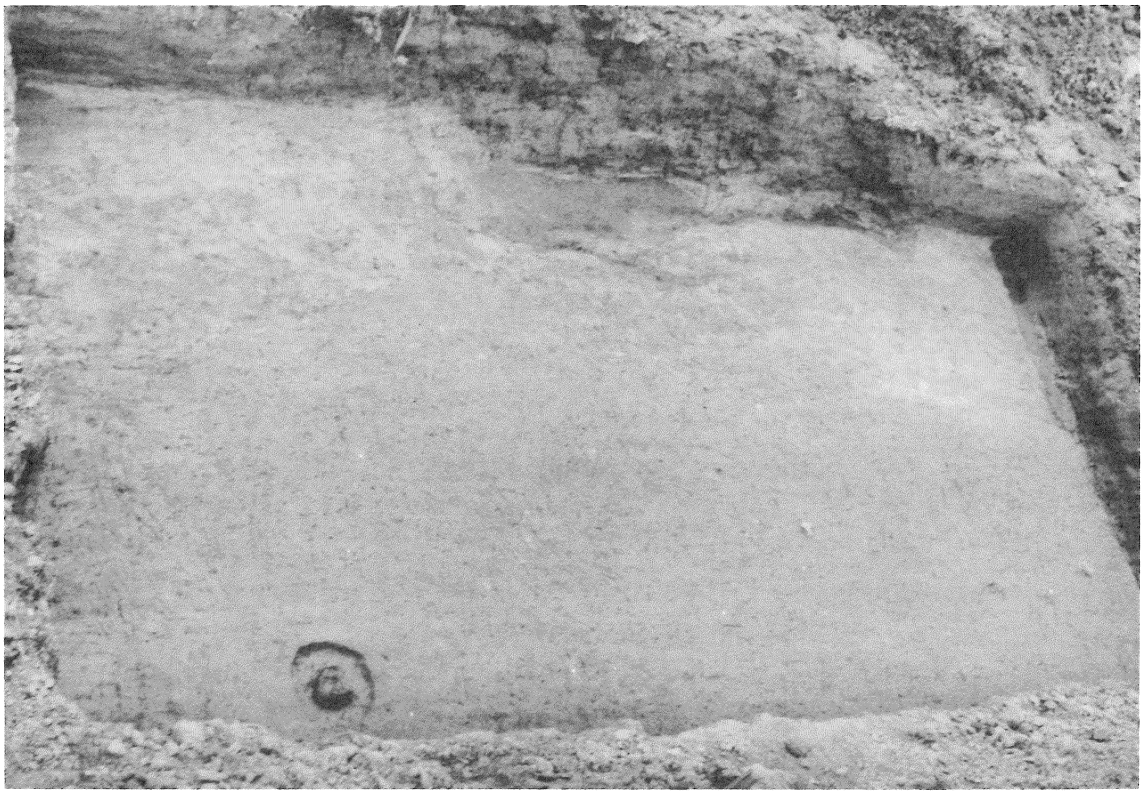


(2) 古墳時代以降の土器

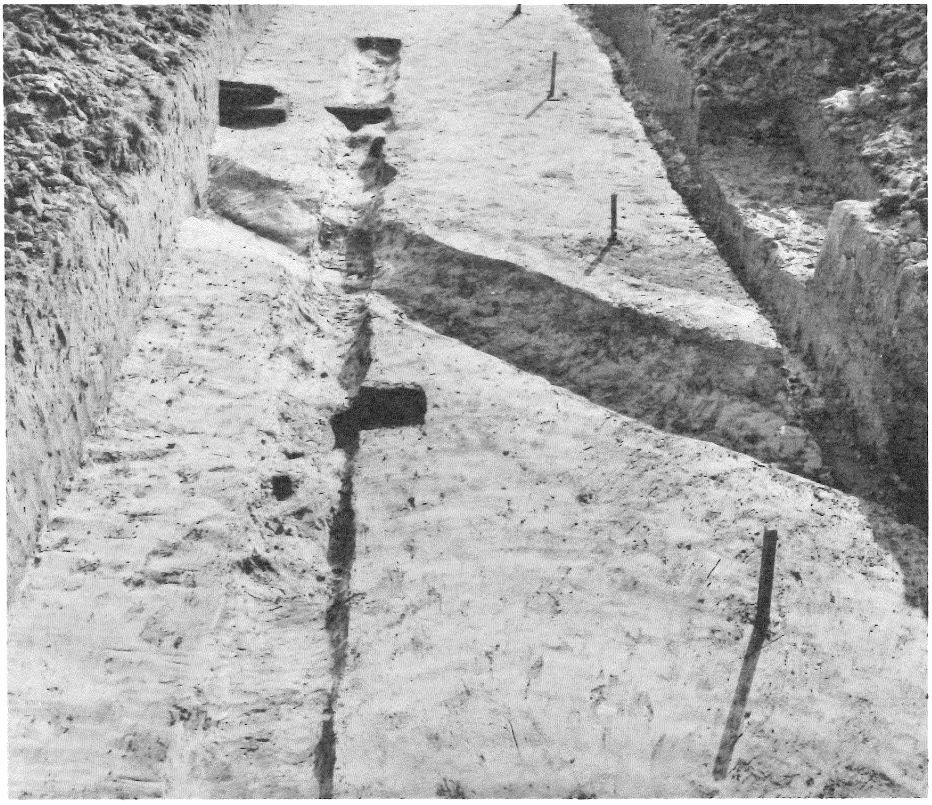
(1)　調査地遠景（西から）

(2)　調査地全景（南から）

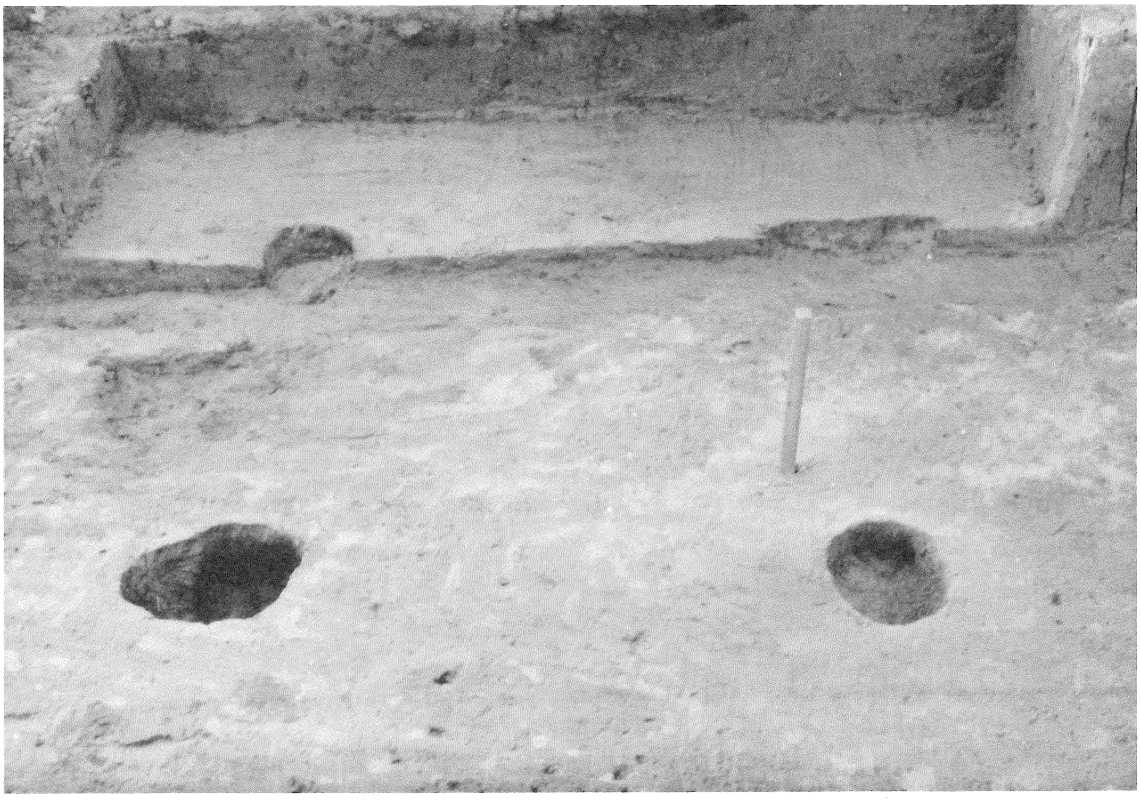
(1)　Aトレンチ全景（南から）



(2)　Bトレンチ全景（北から）

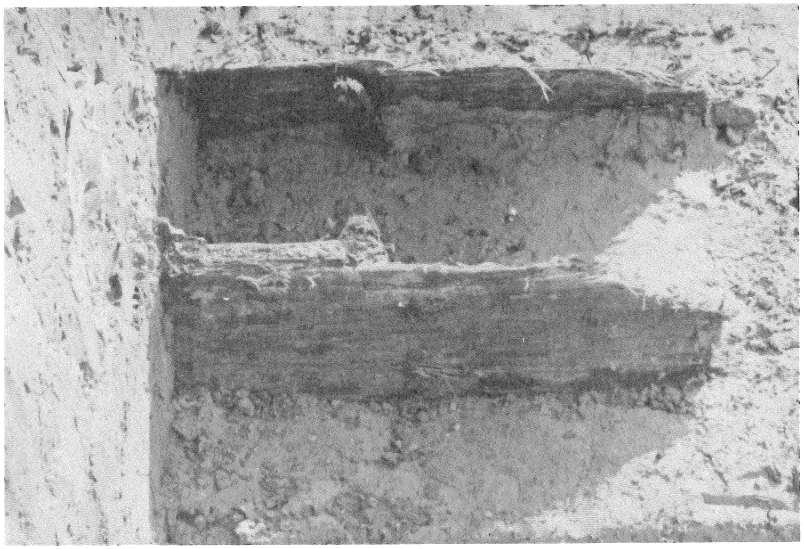


(1)　溝ＳＤ0803とＳＤ0804（北から）

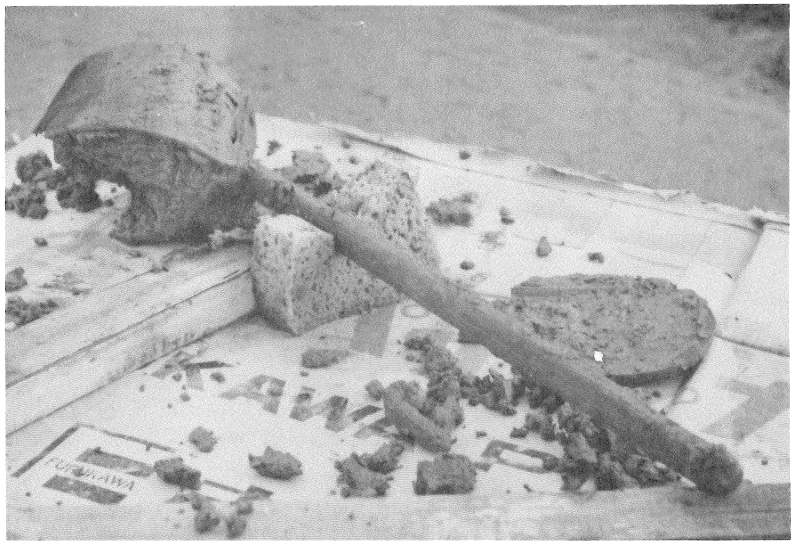


(2)　掘立柱建物ＳＢ0802（東から）

(3)　溝ＳＤ0804土器出土状況

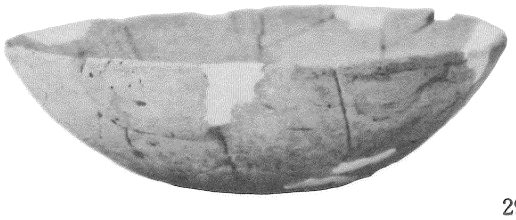


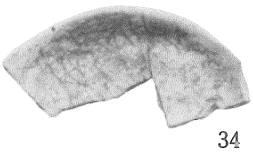
(1)　Ａトレンチ樋検出状況

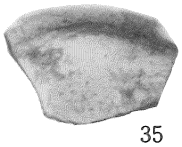


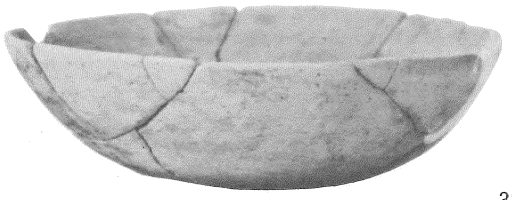
(4)　溝状落ち込みＳＸ0801柄杓取り上げ状況

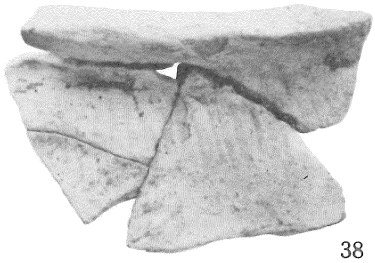
(2)　Ｂトレンチ柱根検出状況

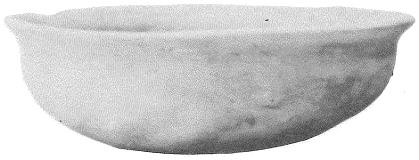

29

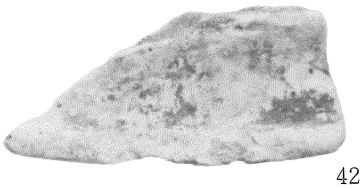

34

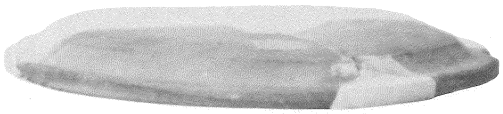

35


33

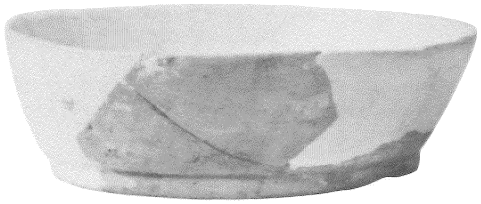

38

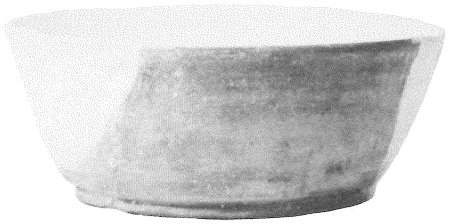

36

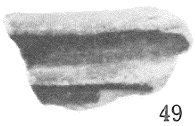

42


2

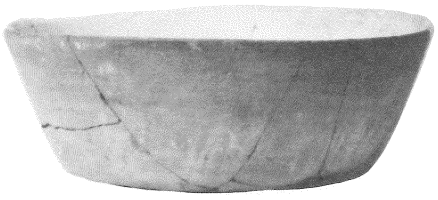
14

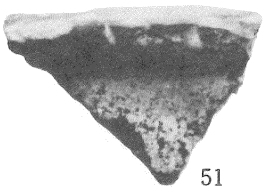

7

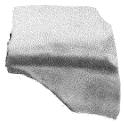

8


49

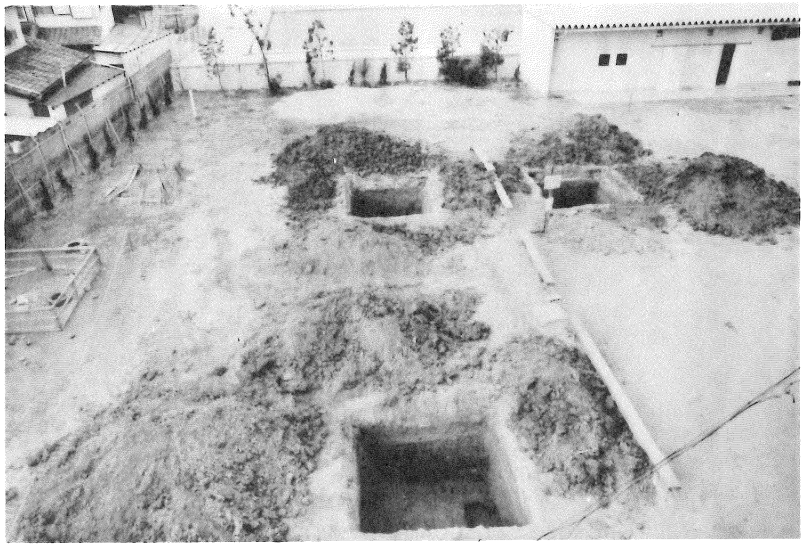
52


12

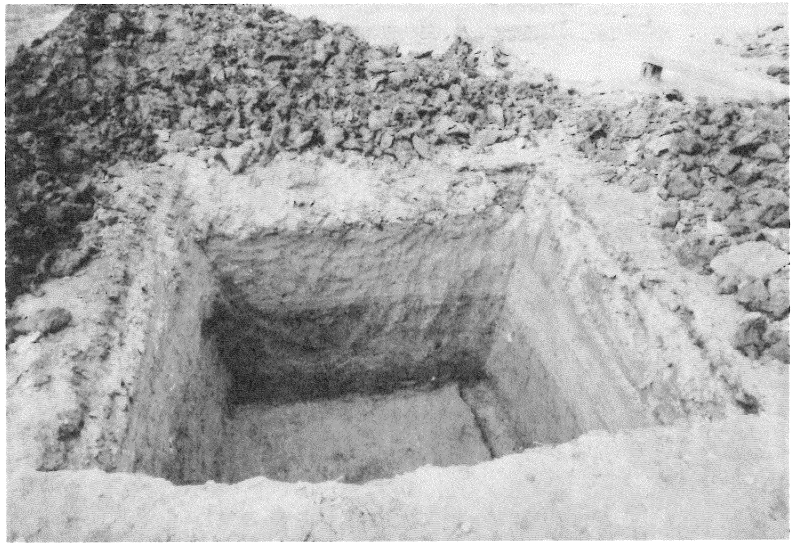

51


53

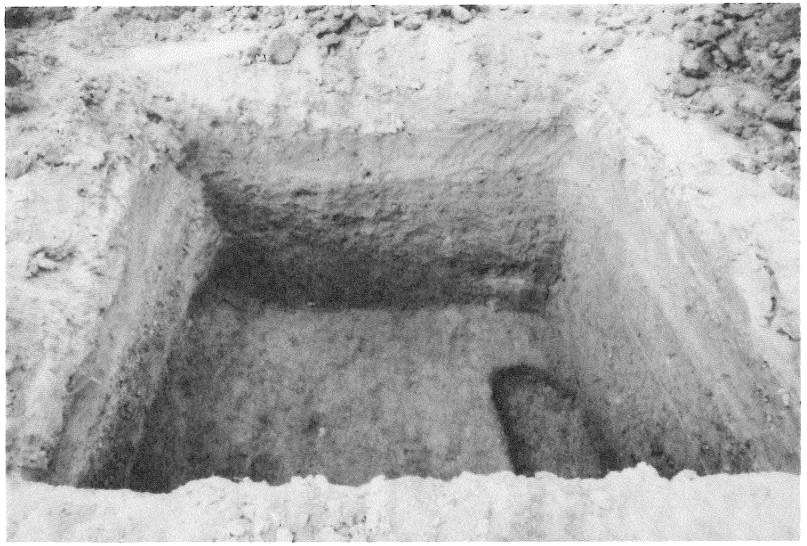
出土遺物（土師器：29・33・34・35・36・38，無釉陶器：42
須恵器：2・7・8・12・14，瓦器：49・51，磁器：52・53）



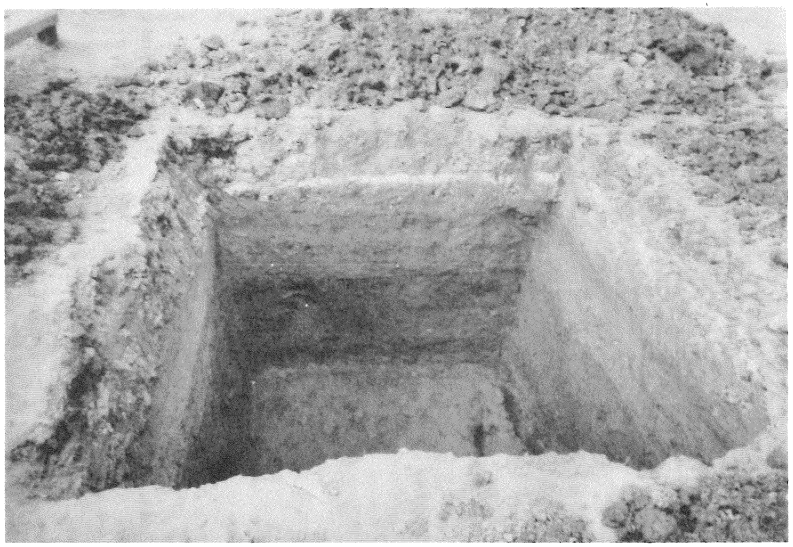
(1) 調査地全景（東から）



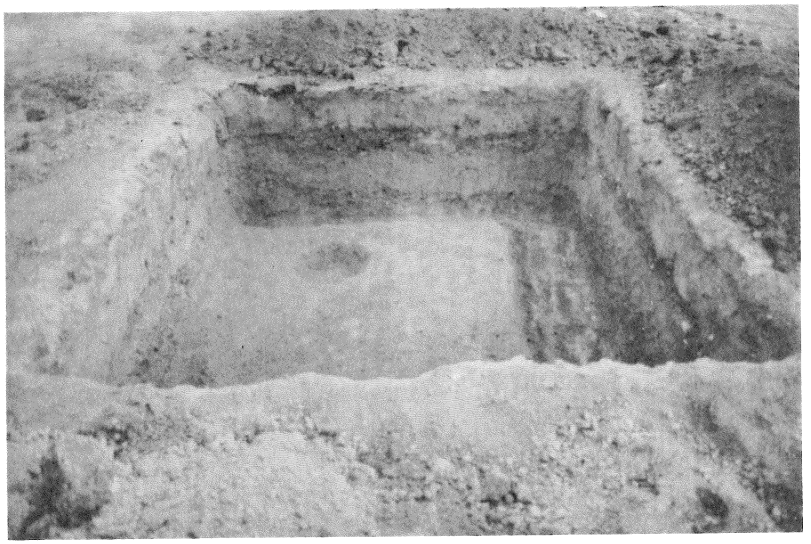
(3) 第２グリッド（Ｇ２・東から）



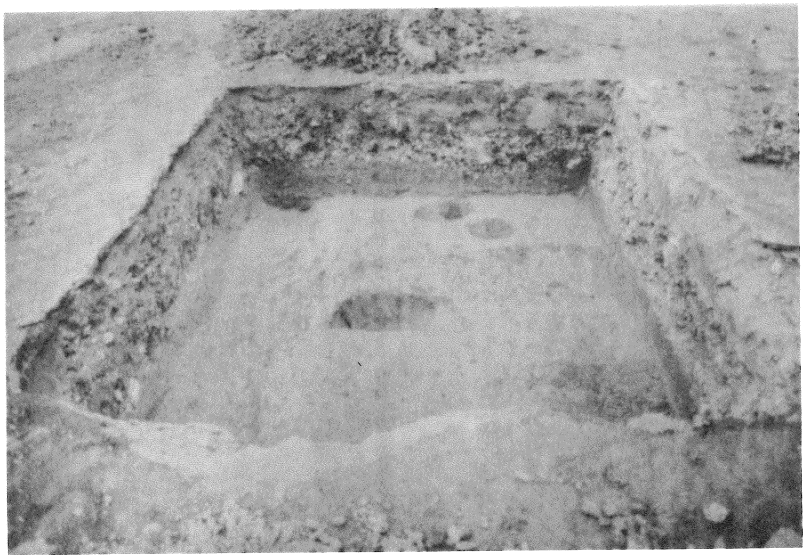
(2) 第１グリッド（Ｇ１・東から）



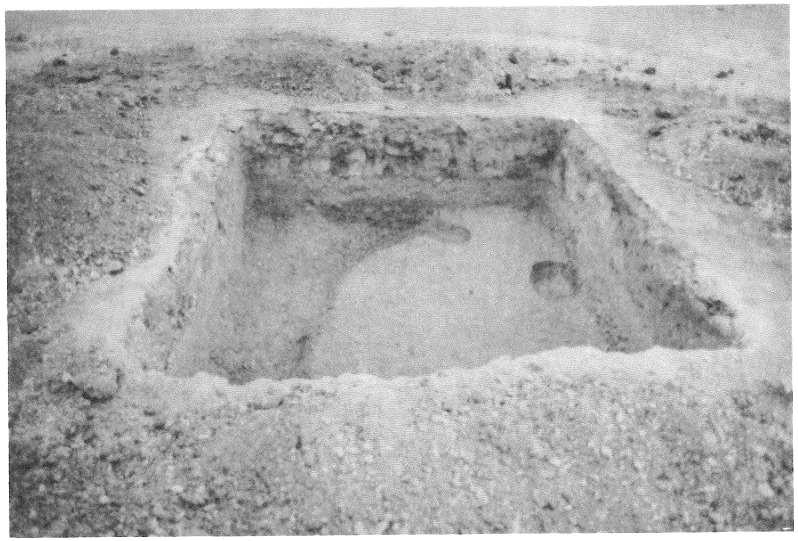
(4) 第３グリッド（Ｇ３・東から）



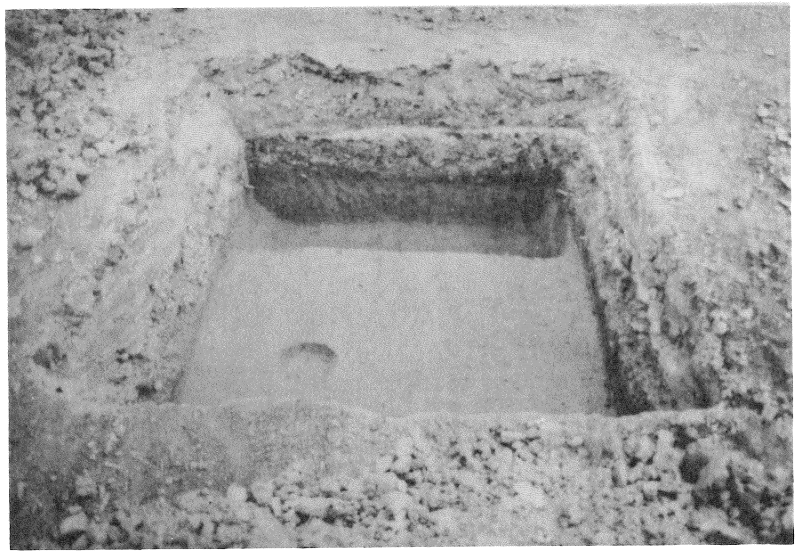
(1) 第1グリッド（G1・西から）



(2) 第2グリッド（G2・東から）

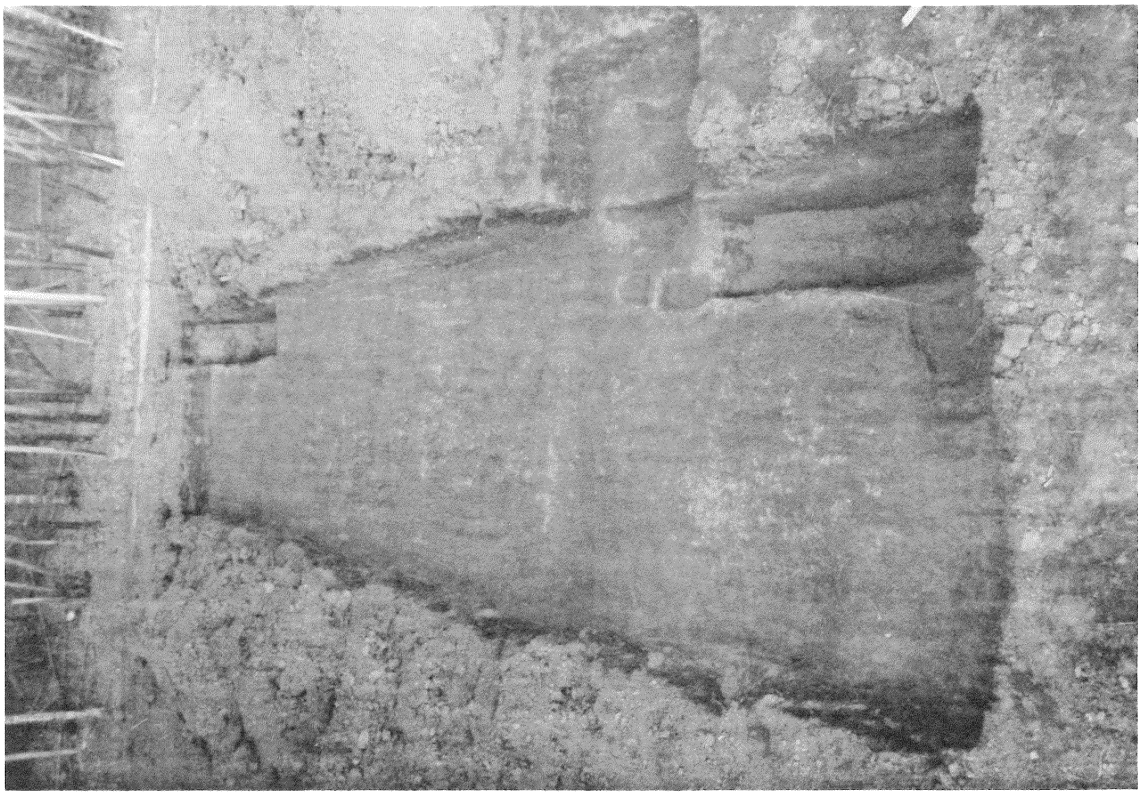


(3) 第3グリッド（G3・北から）



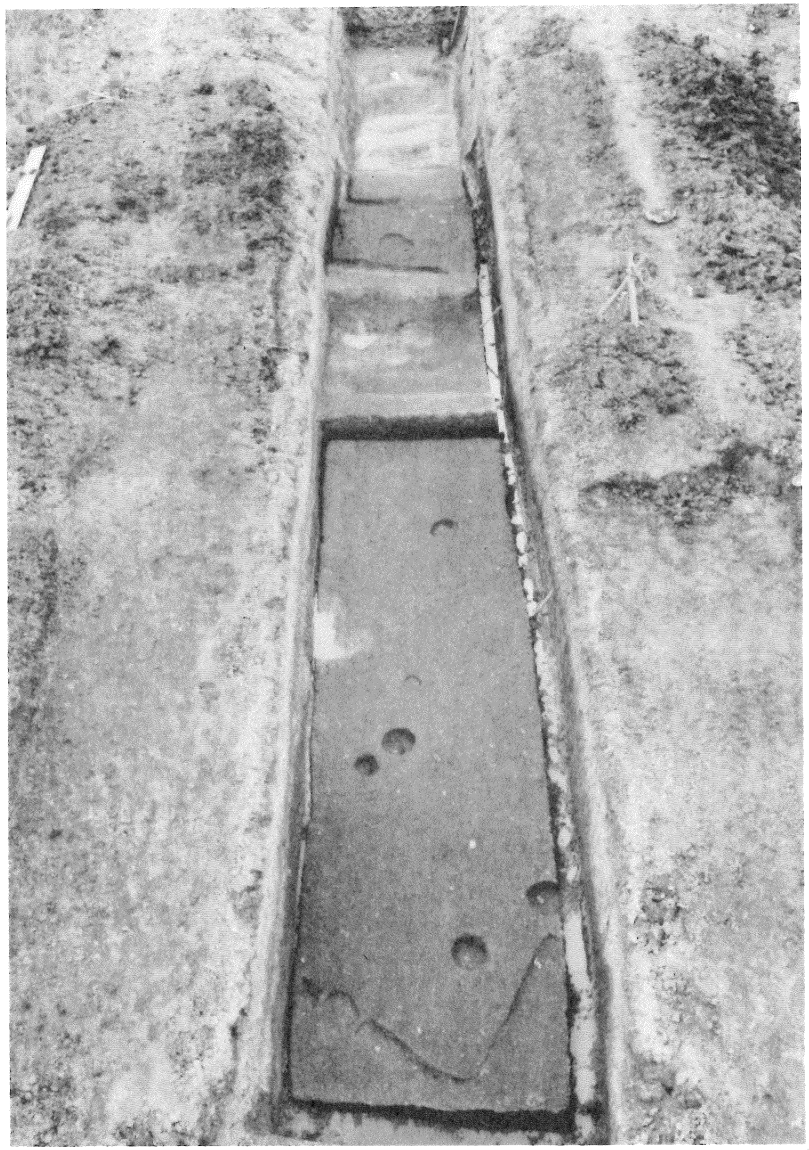
(4) 第4グリッド（G4・東から）

(1) 調査風景（東から）



(2) 調査地全景（南から）

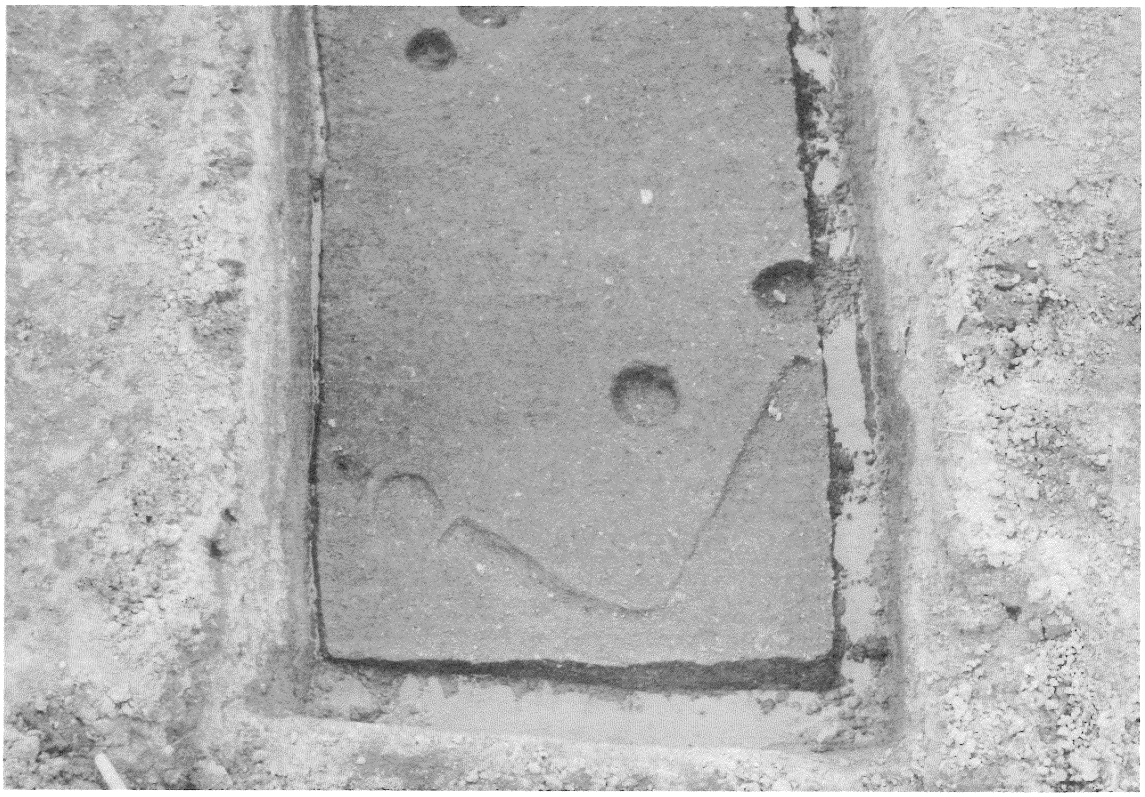
図版 三



(1) 調査地全景（西から）

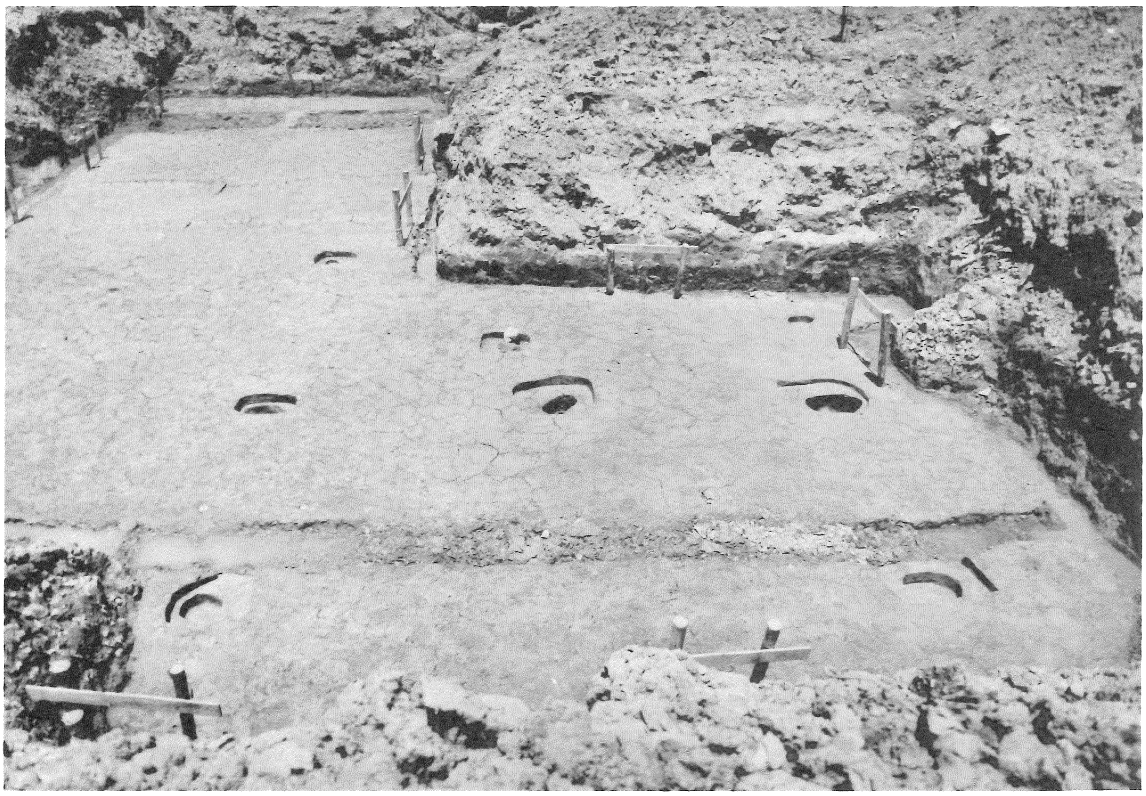
(2) 調査地全景（東から）

(1)　土壙ＳＫ3514（北から）

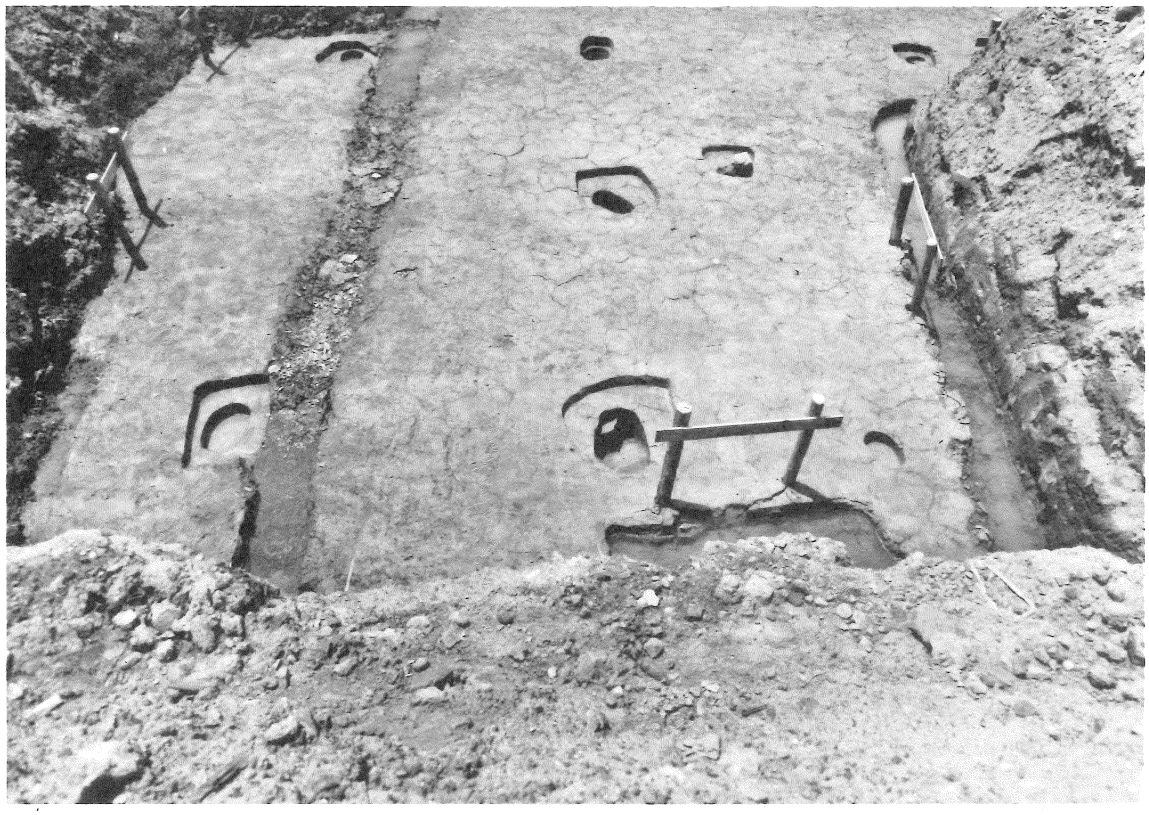


(2)　竪穴住居址ＳＨ3512（西から）

(1) 調査風景（南から）



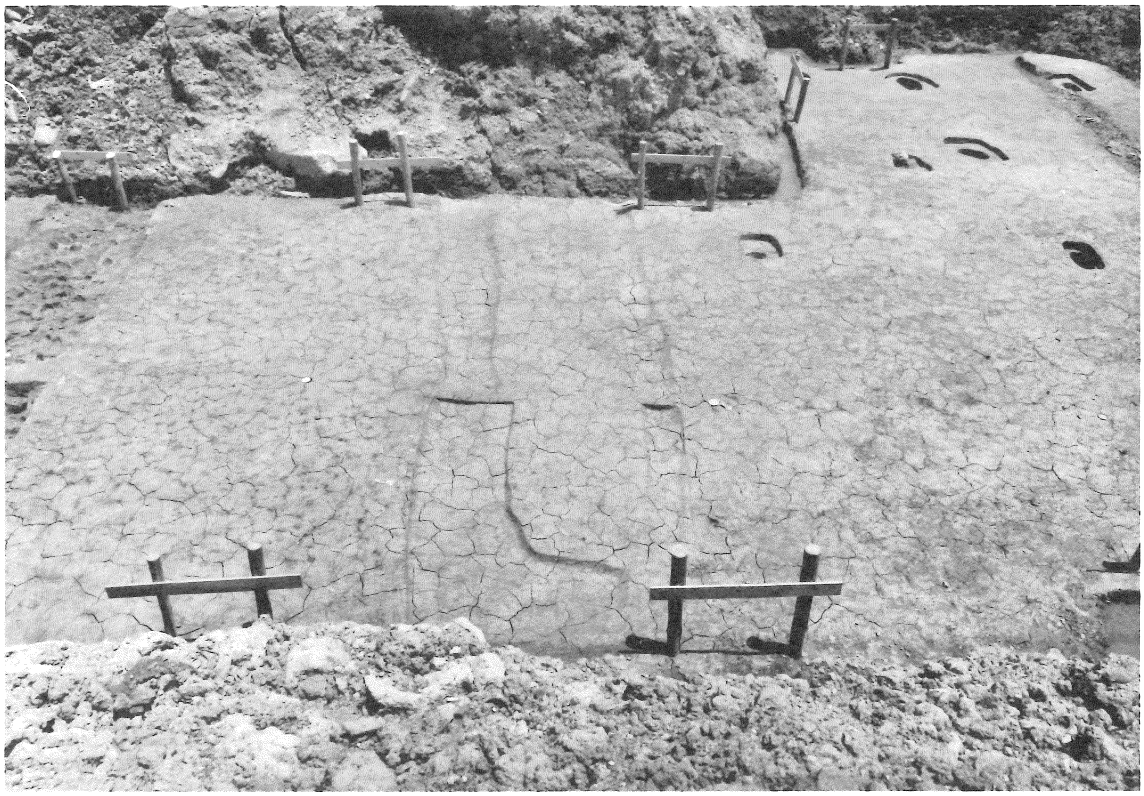
(2) 調査地全景（南から）



(1)　掘立柱建物ＳＢ3702（東から）

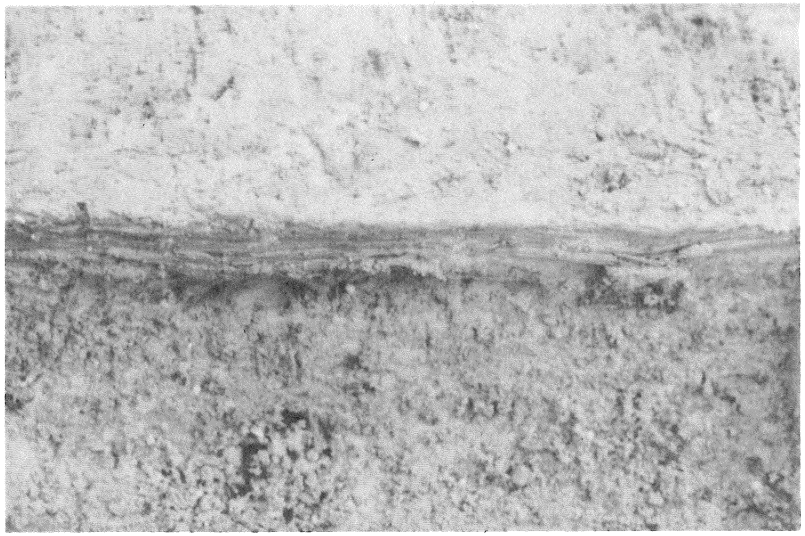
(2)　掘立柱建物ＳＢ3702（西から）

(1)　溝ＳＤ3703（西から）

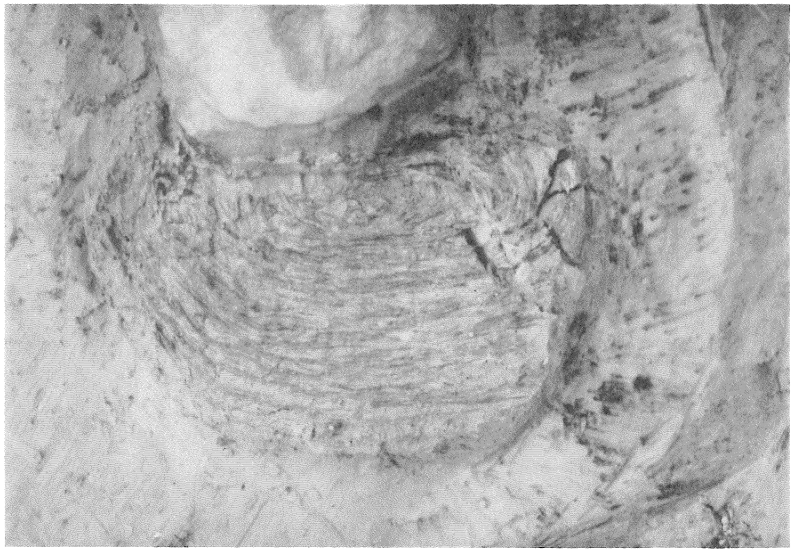


(2)　溝ＳＤ3704・溝ＳＤ3705（西から）

(3)　ピットＰ3706（西から）

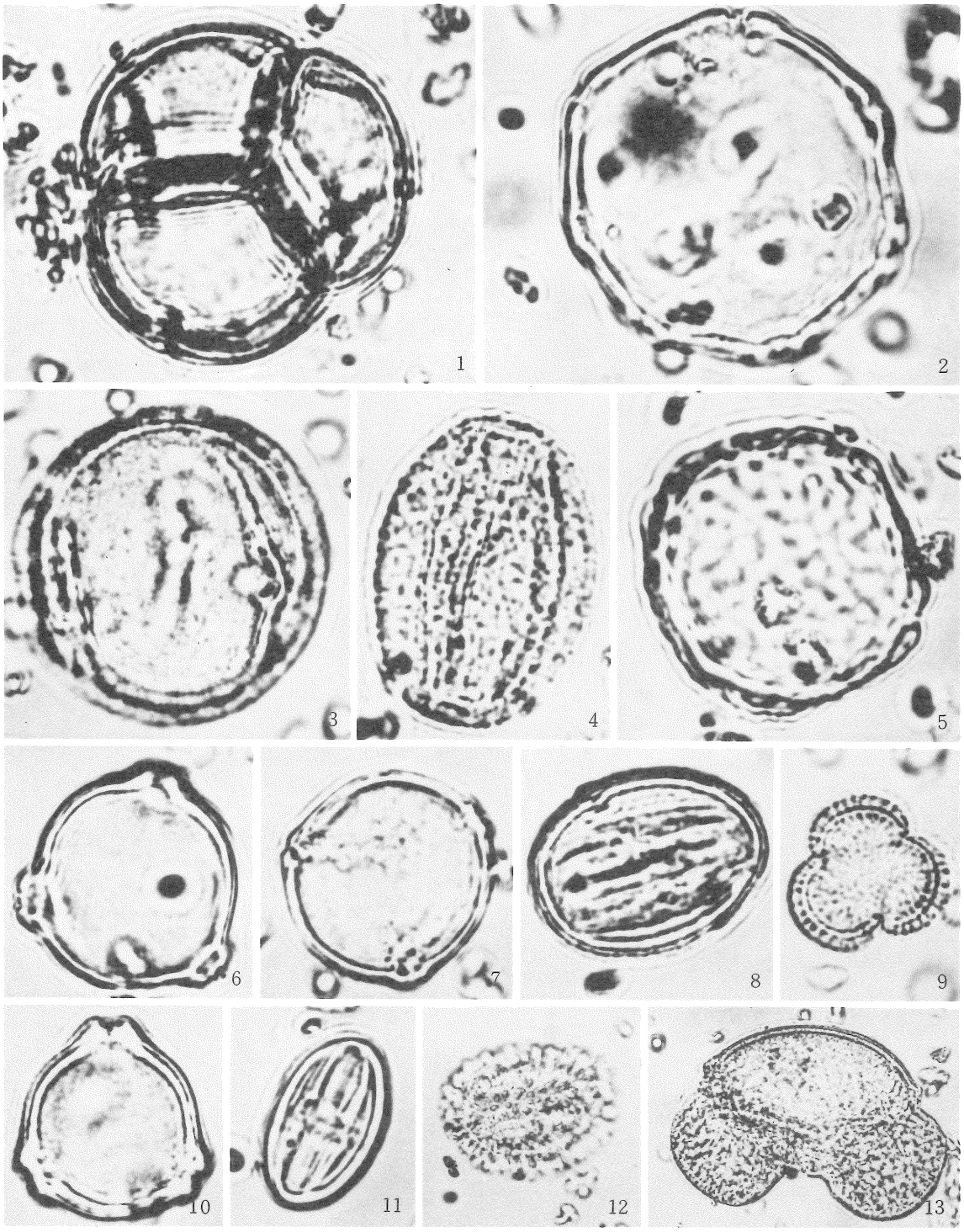


(1)　溝ＳＤ3703の側板検出状況（北から）



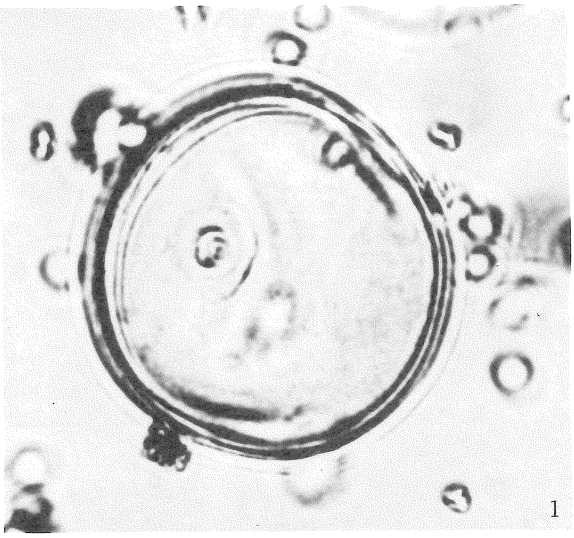
(4)　ピットＰ3706円座出土状況（南から）

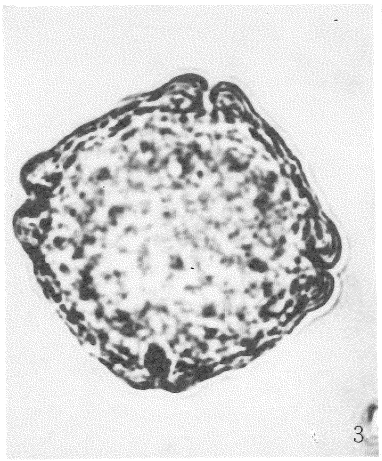
(2)　溝ＳＤ3703側板残欠出土状況

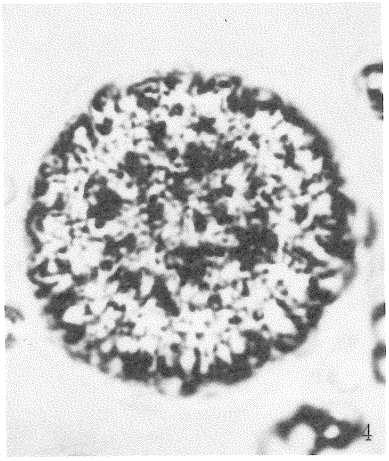


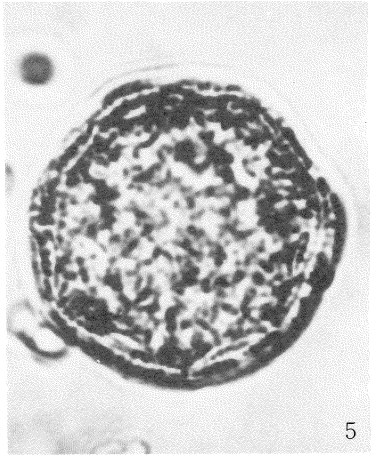
花粉の顕微鏡写真(1)　(×1000)

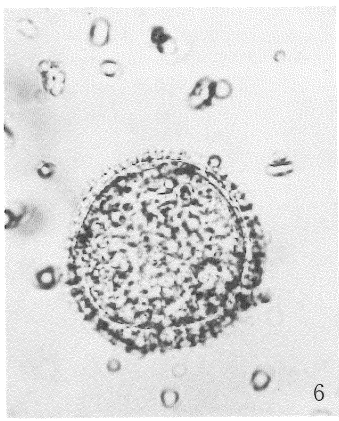
1．Ericaceae(ツツジ科)，2．Juglans(オニグルミ属)，3．Fagus(ブナ属)，4．Lepidobalanus(コナラ亜属)，5．Zelkova(ケヤキ属)，6．Betula(シラカンバ属)，7．Corylus(ハシバミ属)，8．Cyclobalanopsis(アカガシ亜属)，9．Salix(ヤナギ属)，10．Myrica(ヤマモモ属)，11．Castanopsis(シイノキ属)，12．Ilex(モチノキ属)，13．Pinus Diploxylon(二葉マツ亜属)

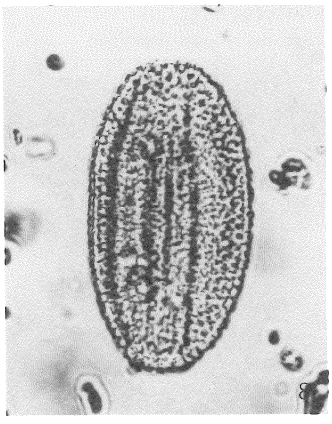






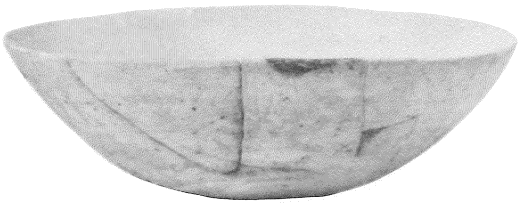






花粉の顕微鏡写真(2)

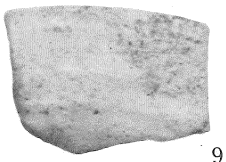
1・2．Gramineae(イネ)，3．Haloragis(アリノトウグサ属)，4．Carduoideae(キク亜科)，
5．Caryophyllaceae(ナデシコ科)，6．Sagittaria(オモダカ属)，7．Lonicera(スイカズラ属)，
8．Fagopyrum(ソバ)



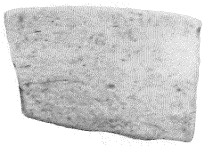
36

42

1

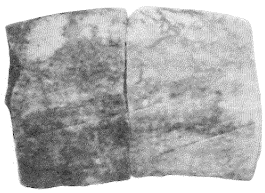


9

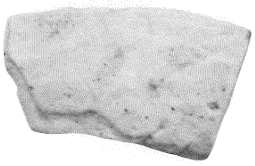


43

3

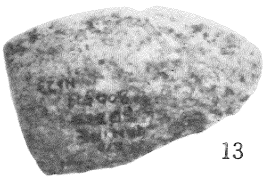


8



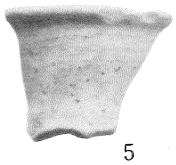
10

2

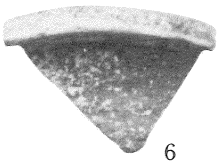


13

14

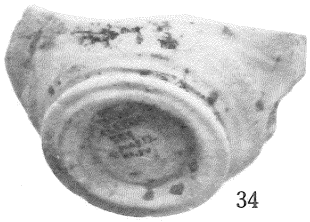


5

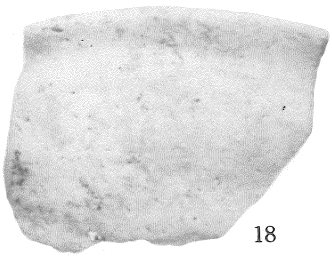


6

40

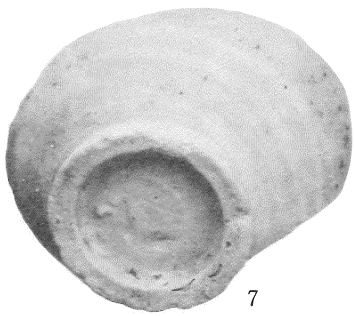


34



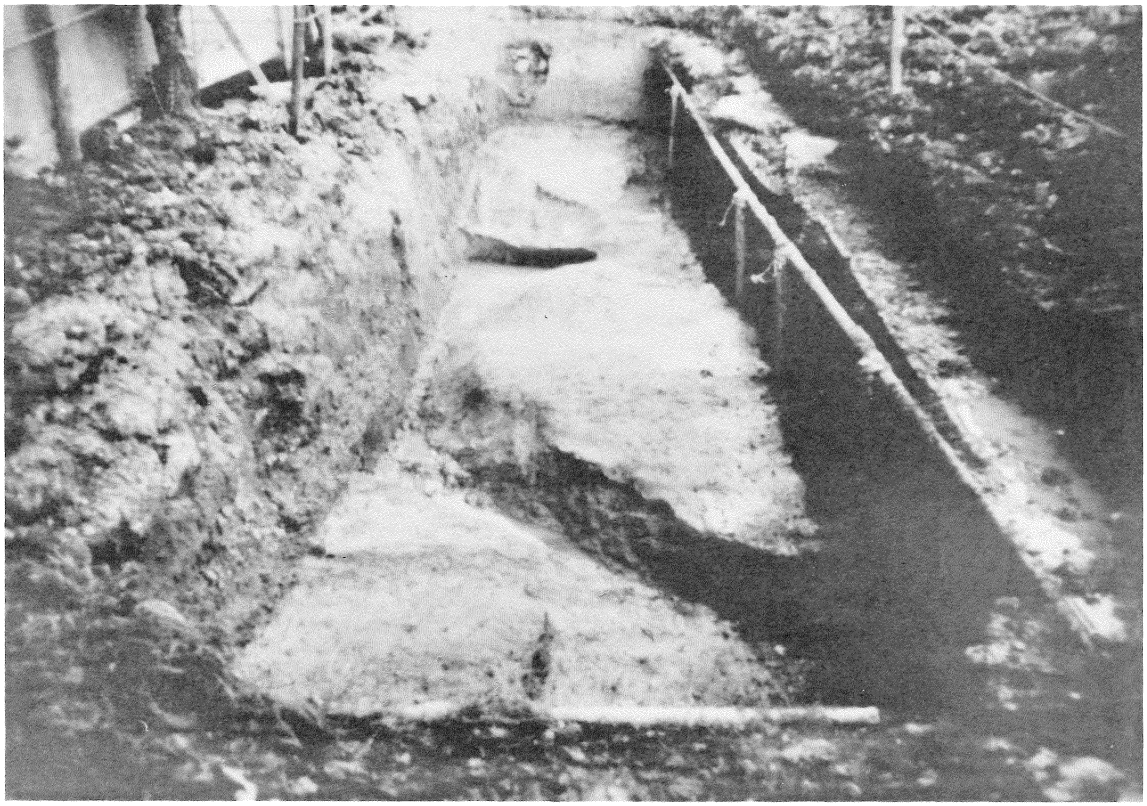
18

23

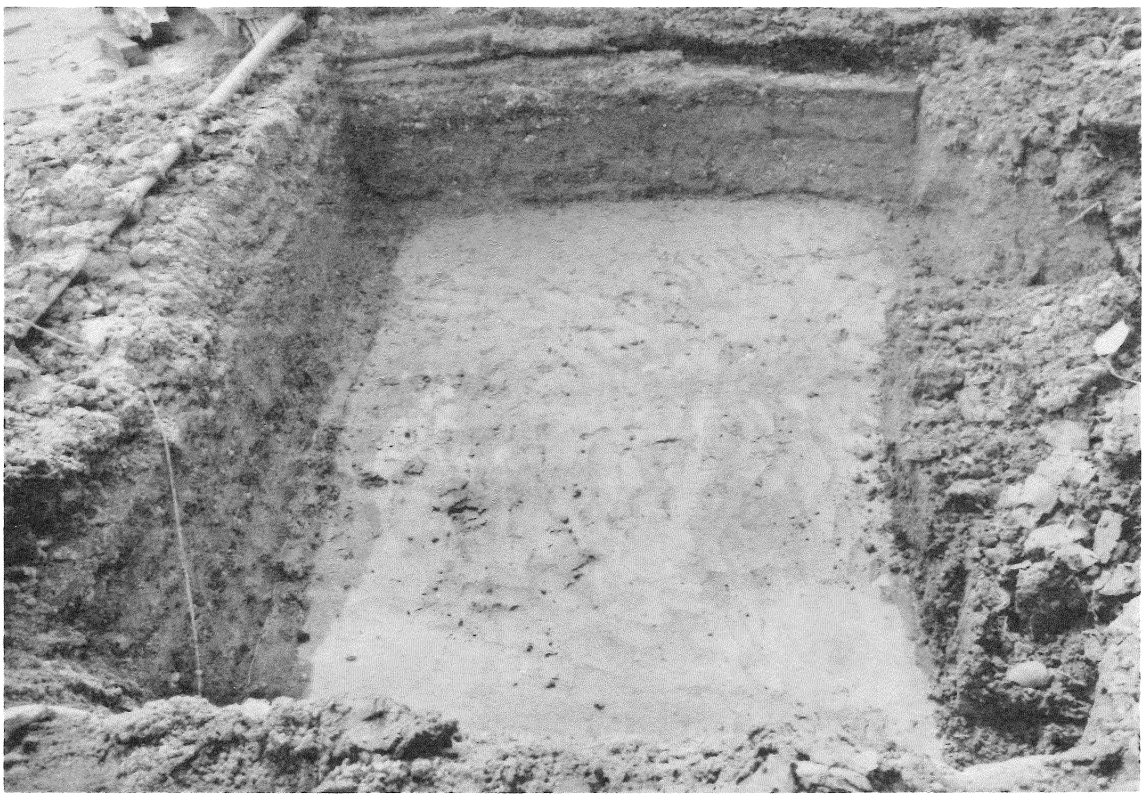


7

出土遺物



(1)　1トレンチ全景（西から）



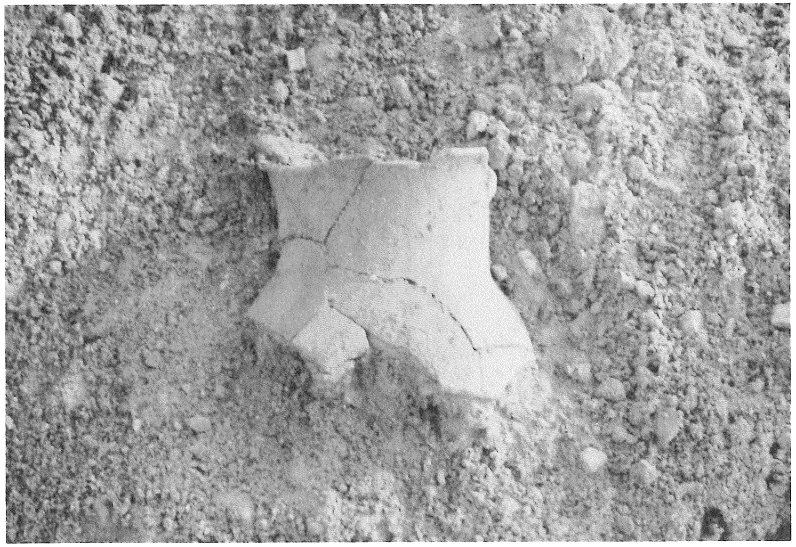
(2)　2トレンチ全景（東から）

(1) 調査地全景（東から）

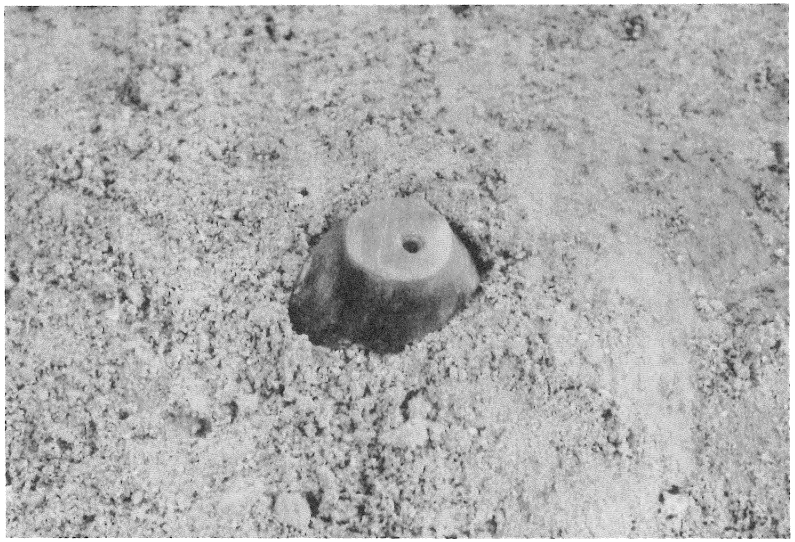
(2) 調査地全景（西から）

(1)　弥生土器出土状況

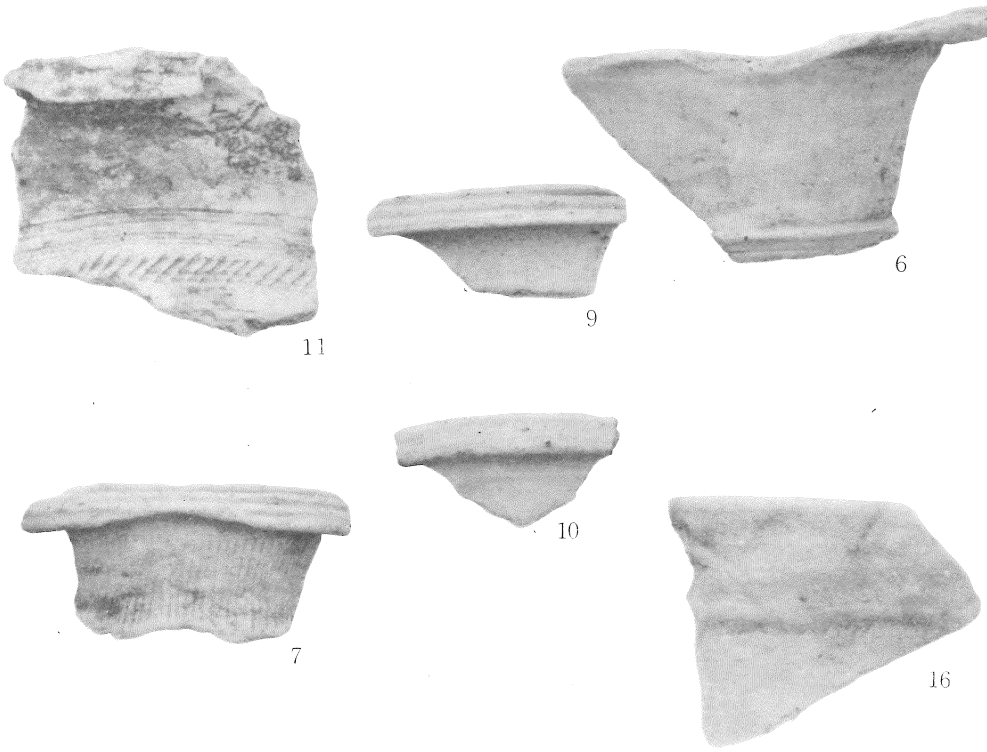
(2)　弥生土器出土状況



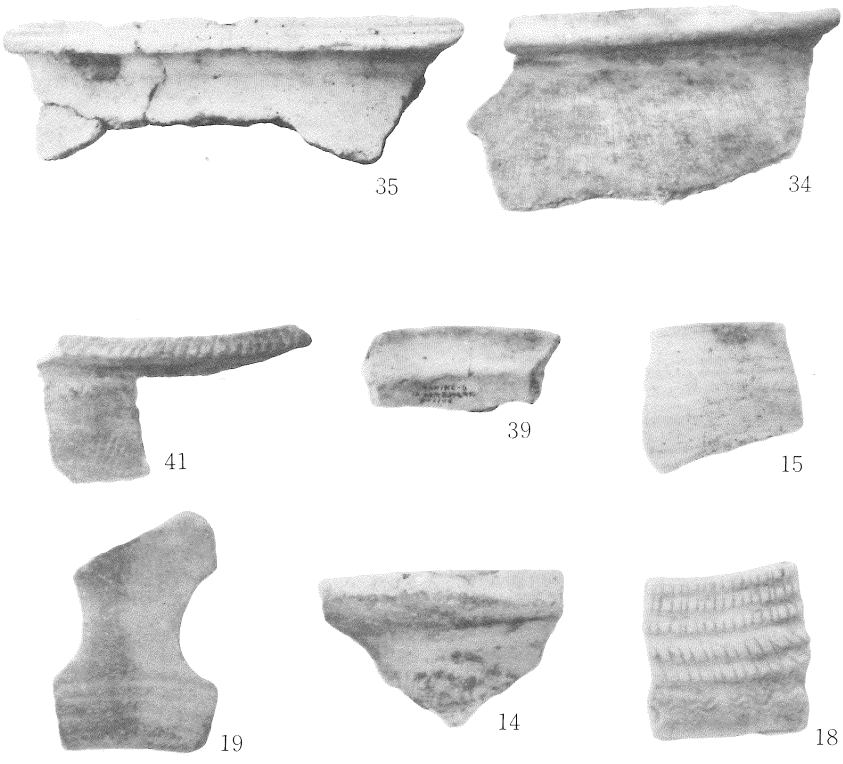
(3)　弥生土器出土状況



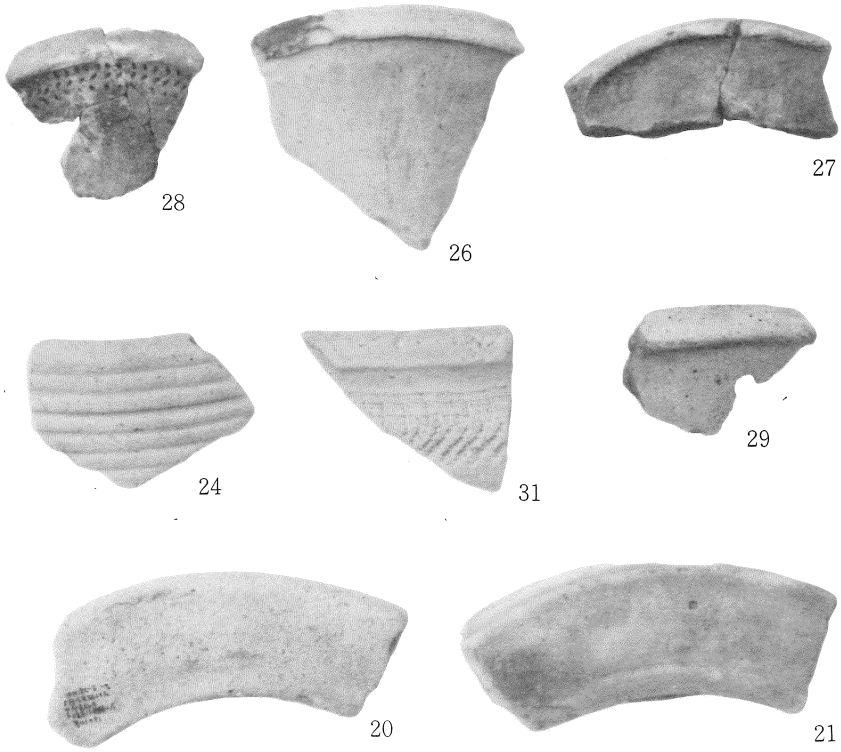
(4)　弥生土器出土状況



(1) 旧河道ＳＤ5001出土弥生土器1



(2) 旧河道ＳＤ5001出土弥生土器2

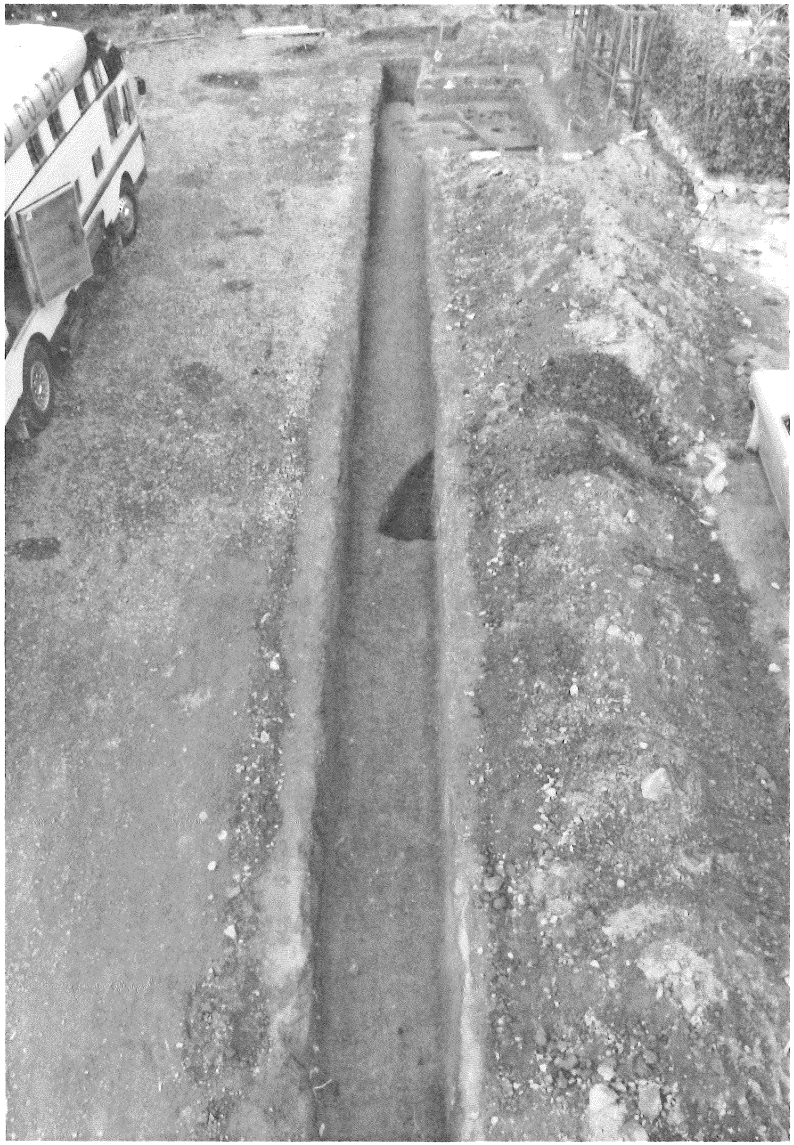


(1)　旧河道ＳＤ5001出土弥生土器３

(2)　旧河道ＳＤ5001出土弥生土器４

図版一一七

(1) 調査地全景（北から）



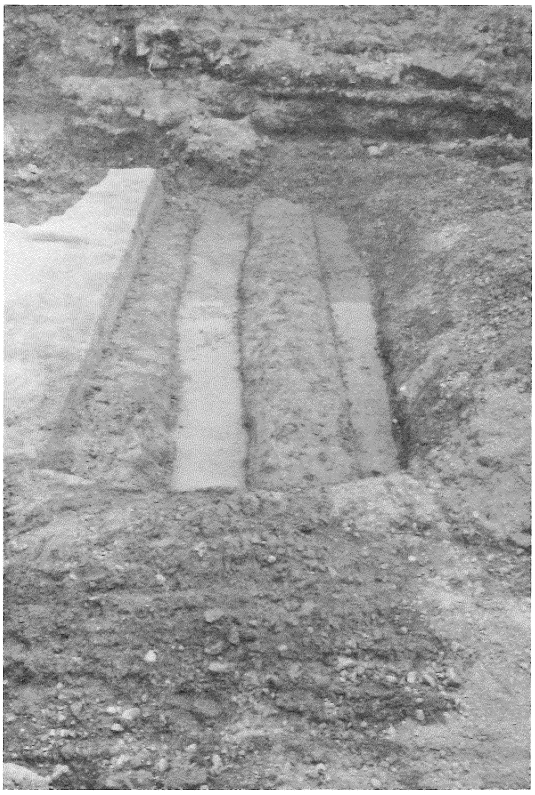
(2) 調査地全景（南から）

(1)　竪穴住居址ＳＨ6201（西から）

(2)　竪穴住居址ＳＨ6201かまど（南から）

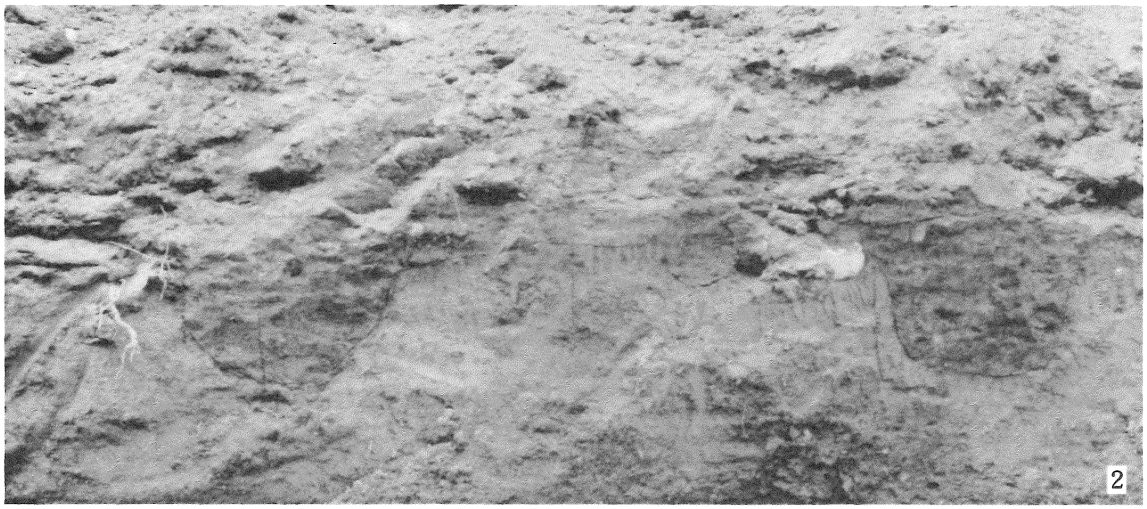
(1) トレンチ全景（東から）

(2) トレンチ全景（北から）



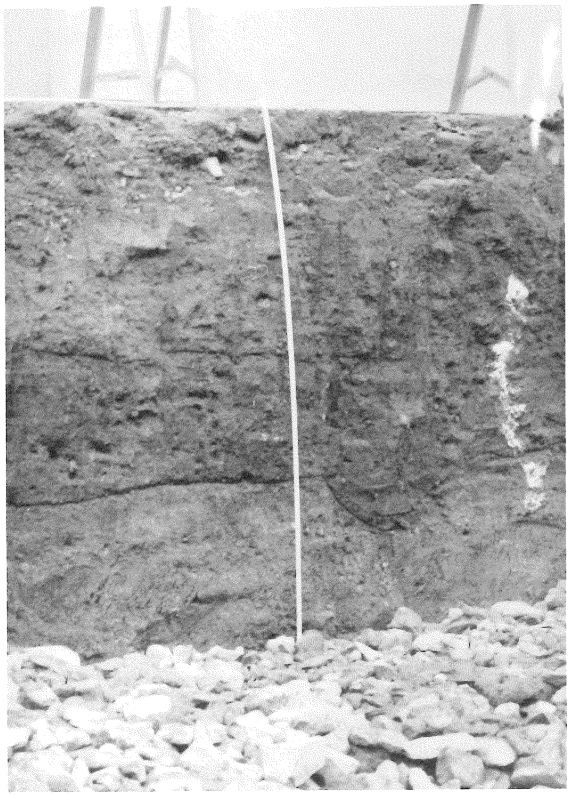
(3) トレンチ全景（北から）

(4) 調査地土層

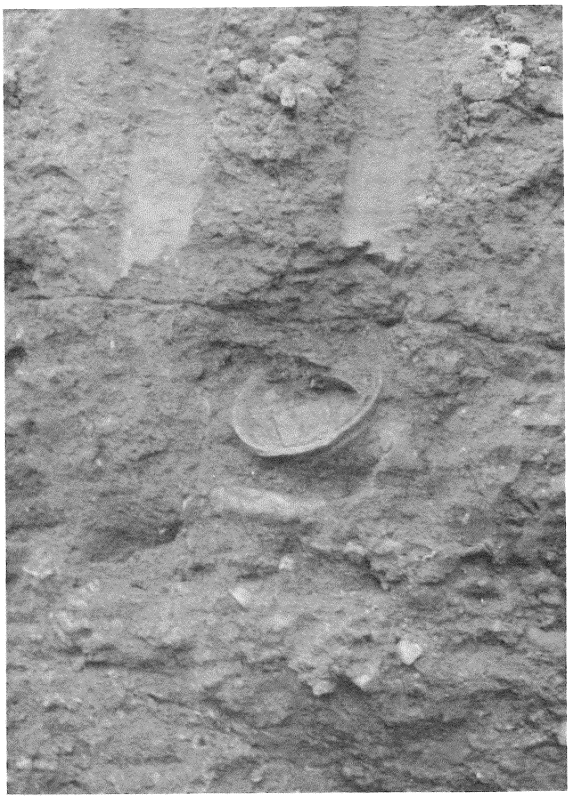


(1) 調査地全景（南西から） (2) J断面（右：土壙SK770401） (3) F断面（溝SD770402）

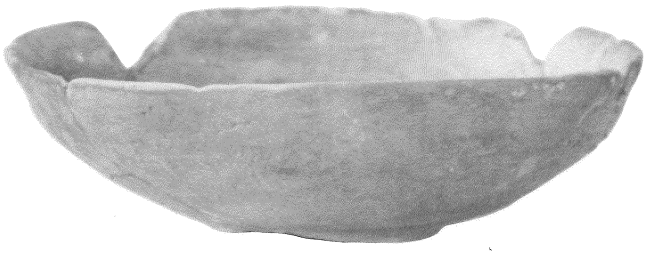
(1)　調査地全景



(2)　調査地土層

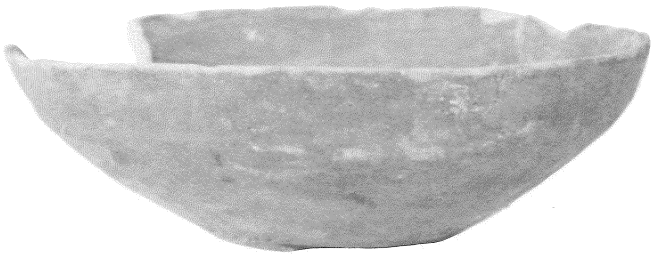


(3)　遺物出土状況



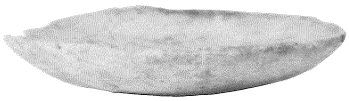
37

41



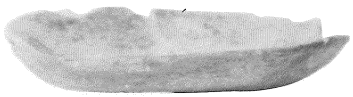
42

32

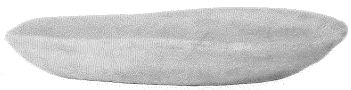


2

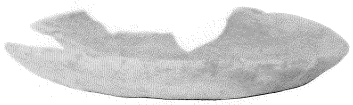
7



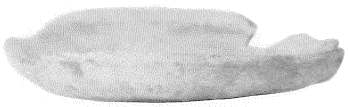
9



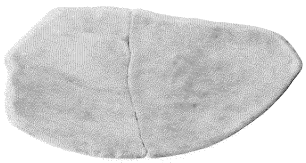
17



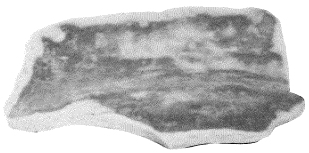
18



20



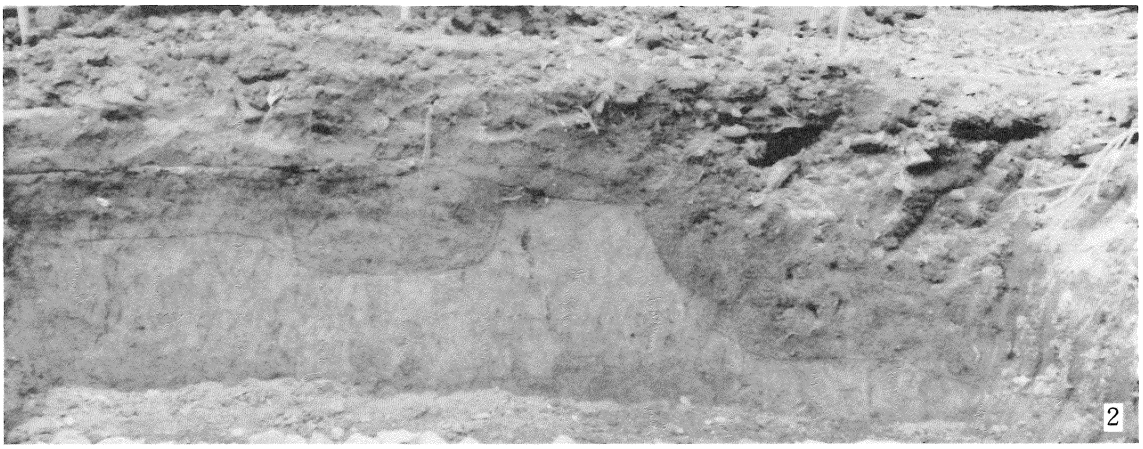
30



44

出土遺物（土師器：2・7・9・17・18・20・30・32
瓦器：37・41・42・44）

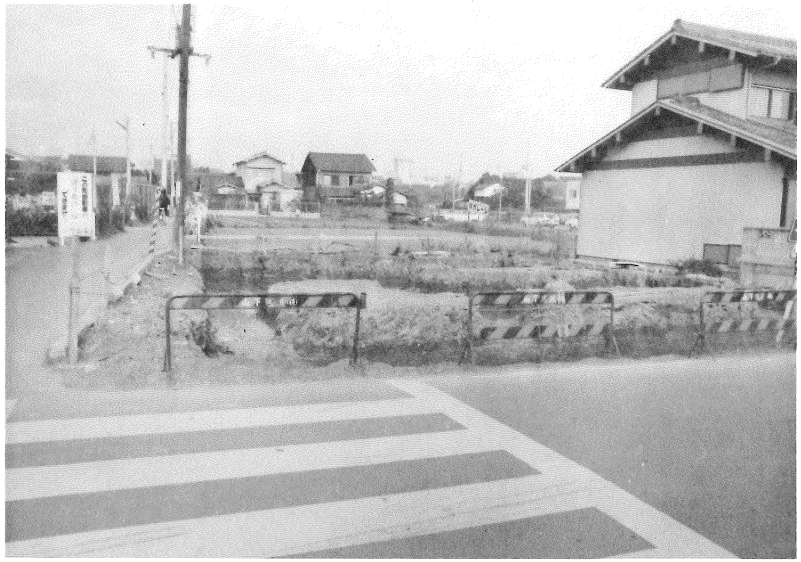
(1)　調査地全景（南東から）



(2)　調査地土層（W１・東から）　(3)　調査地土層（N１・南から）

長岡京跡第7817次立会調査

(1) 調査地遠景（南から）



(2) 調査地全景（南から）

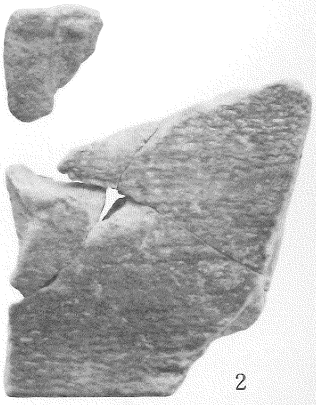
(3) 調査地全景（西から）

(4) 調査地土層

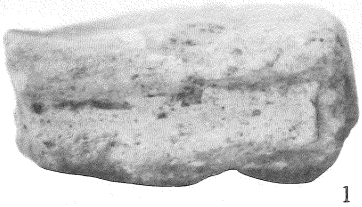
1

2

1



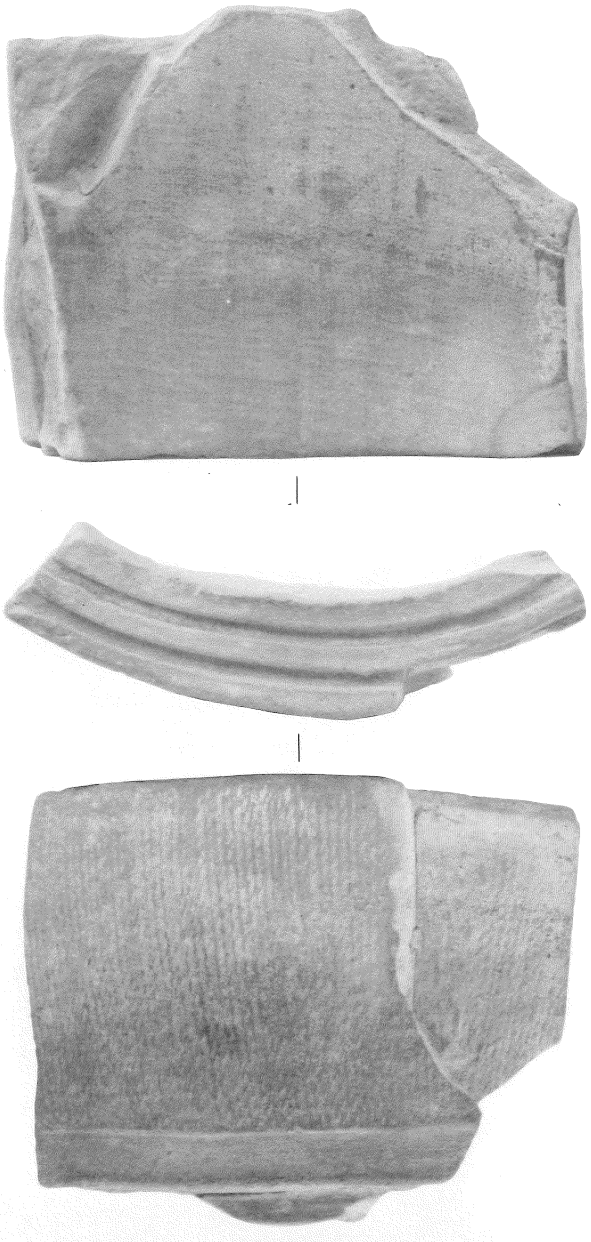
2



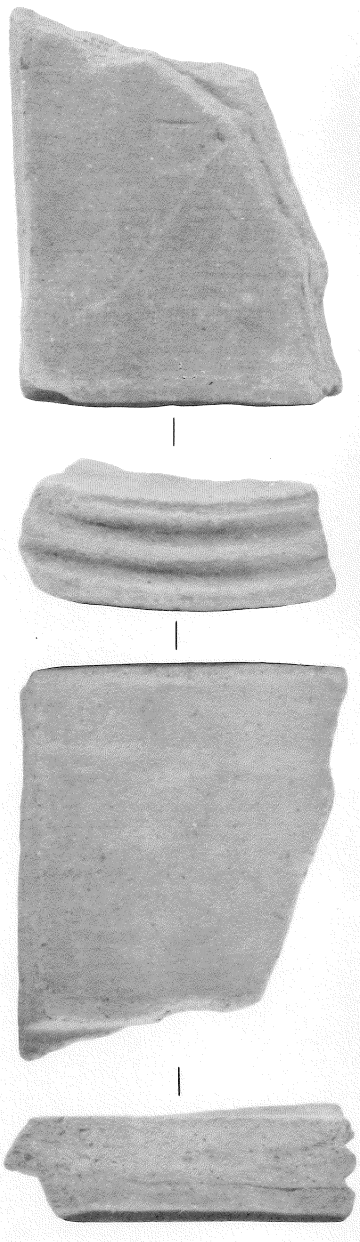
1

2

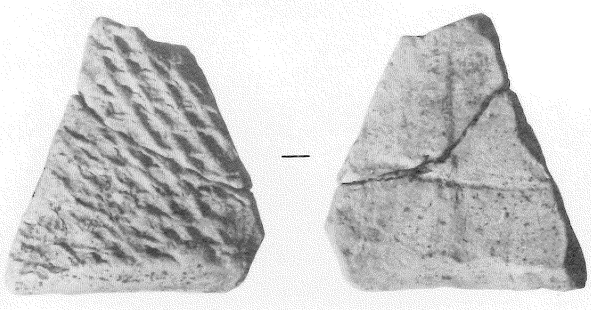
出土遺物（上：第7813次調査　中：第7817次調査　下：第7822次調査）



1



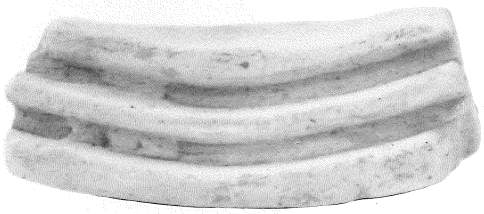
2



3

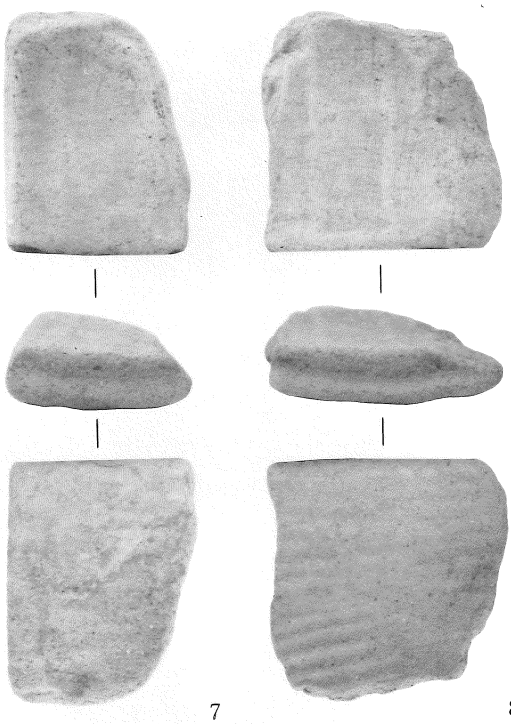
4

出土遺物(1)　軒平瓦(1・2)，平瓦(3・4)



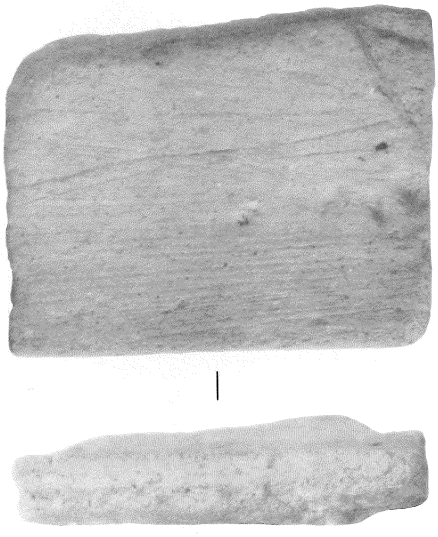
5

6



7 8

9

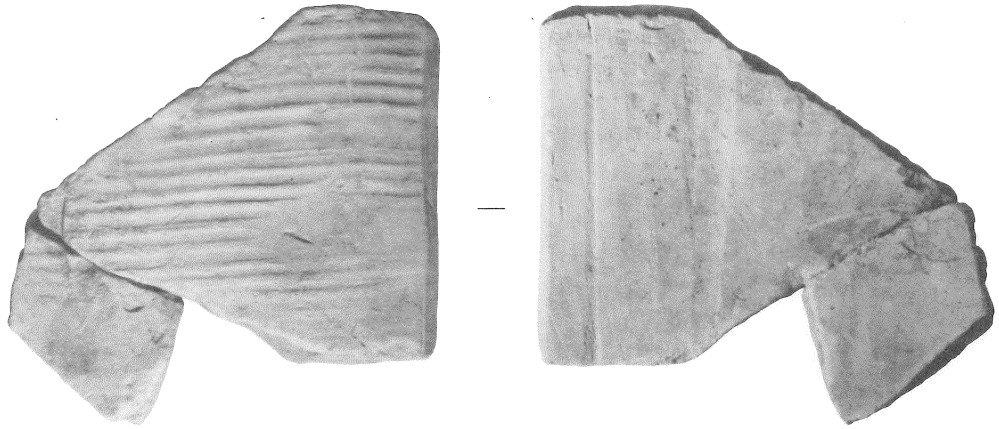


11

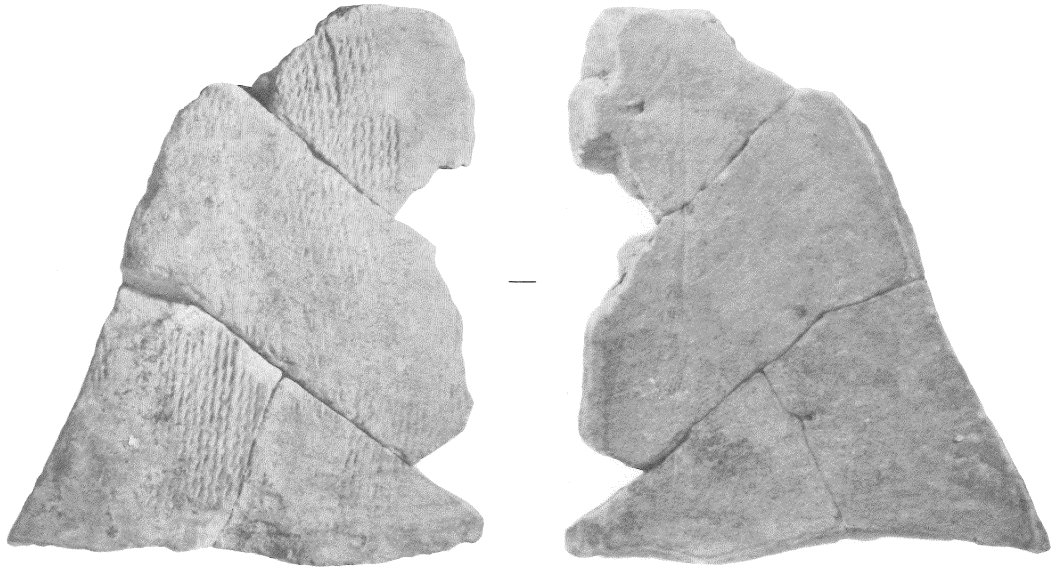
10

出土遺物(2)　軒平瓦(5～8)，平瓦(9～11)

13

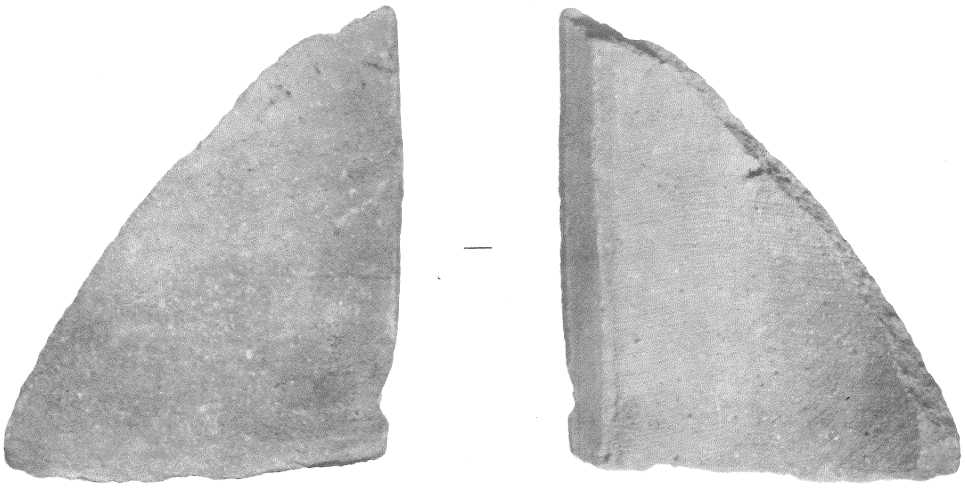


12

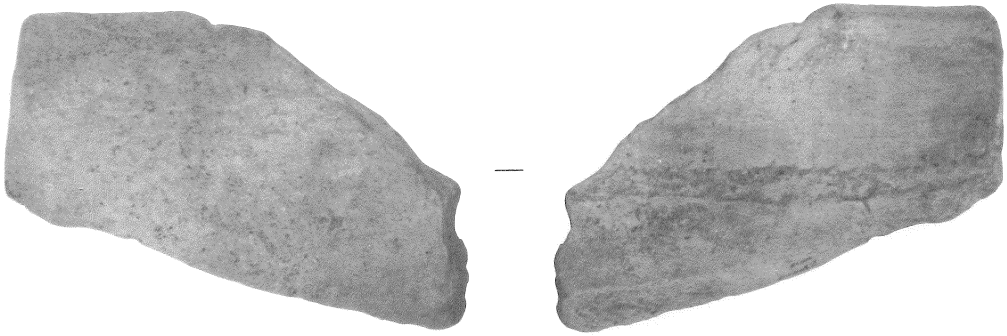


14

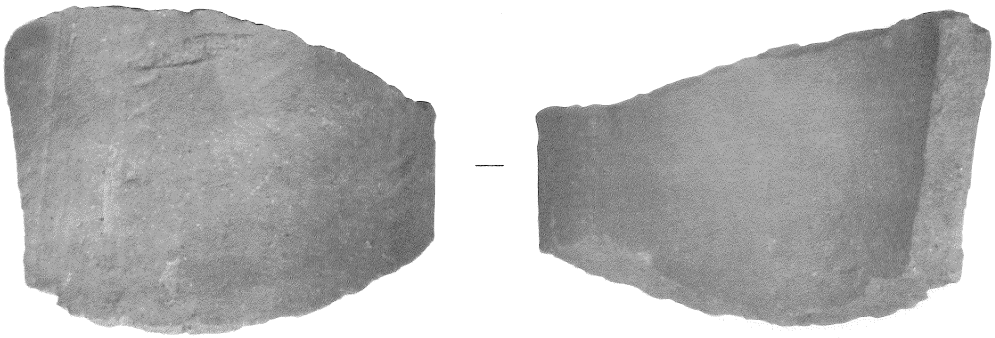
出土遺物(3)　平瓦



15



16



17

出土遺物(4)　丸瓦

図版四〇　今里地区航空写真

長岡京市文化財調査報告書　第12冊

発　行　日　昭和59年３月31日

編集
発行　長岡京市教育委員会
〒617 長岡京市開田一丁目１番１号

長岡京跡発掘調査研究所
〒617 長岡京市久貝三丁目3番3号
中山修一方

印　刷　有限会社　真陽社
〒600 京都市下京区油小路仏光寺上ル